



* 0032513000 *

0032513-000

780-328

名古屋市勢要覽

名古屋市・編

名古屋市

昭14

AFB

名古屋市勢要覽

市制施行五十周年記念

名古屋市役所編



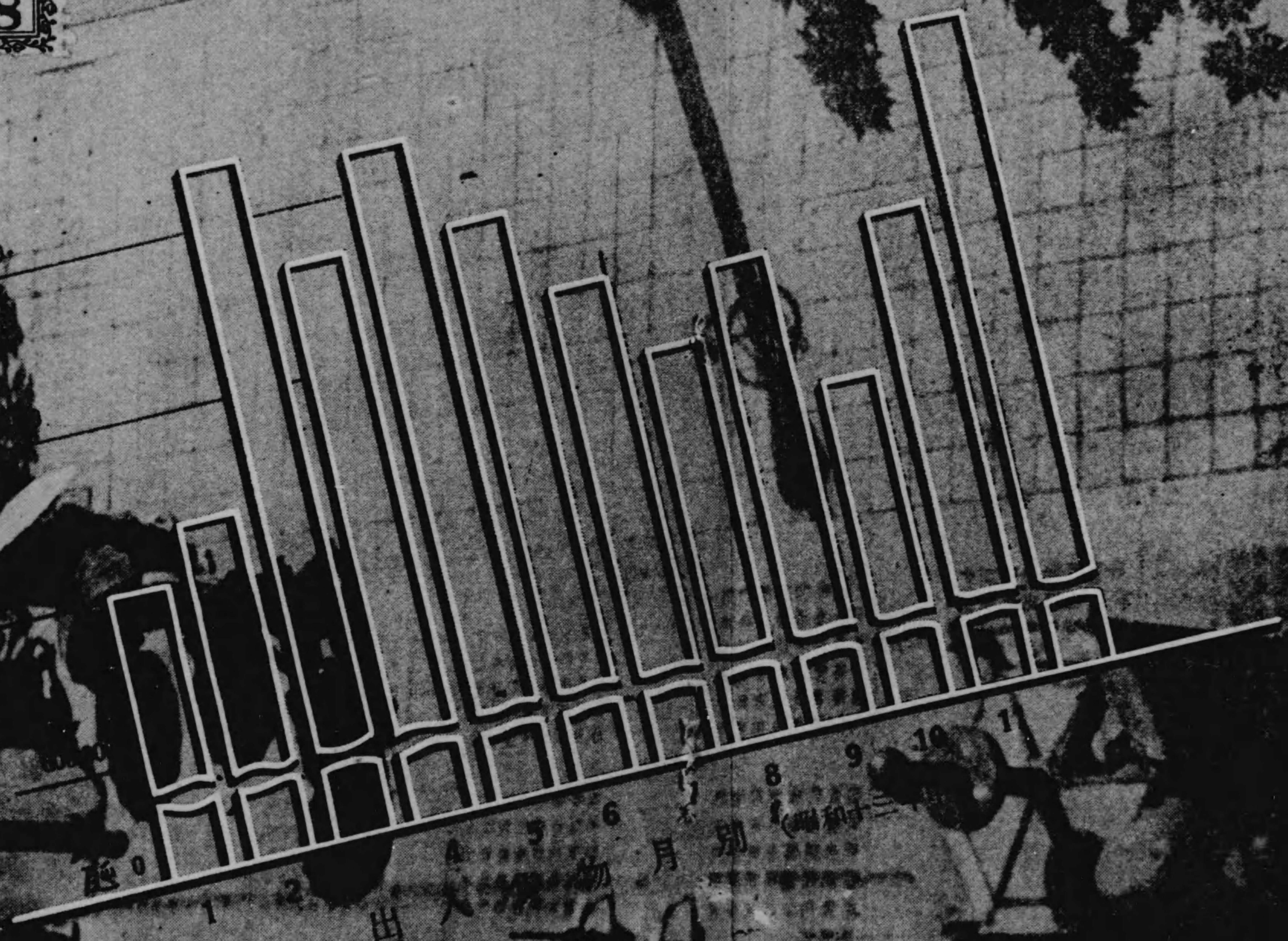
卷之二

名古屋

市勢要覽

市制施行五十周年記念

780
328



出 入 物 月 別 表
0 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11

780
328

1,400,000

1,200,000

800,000

800,000

0

1

2

3

4

5

6

8

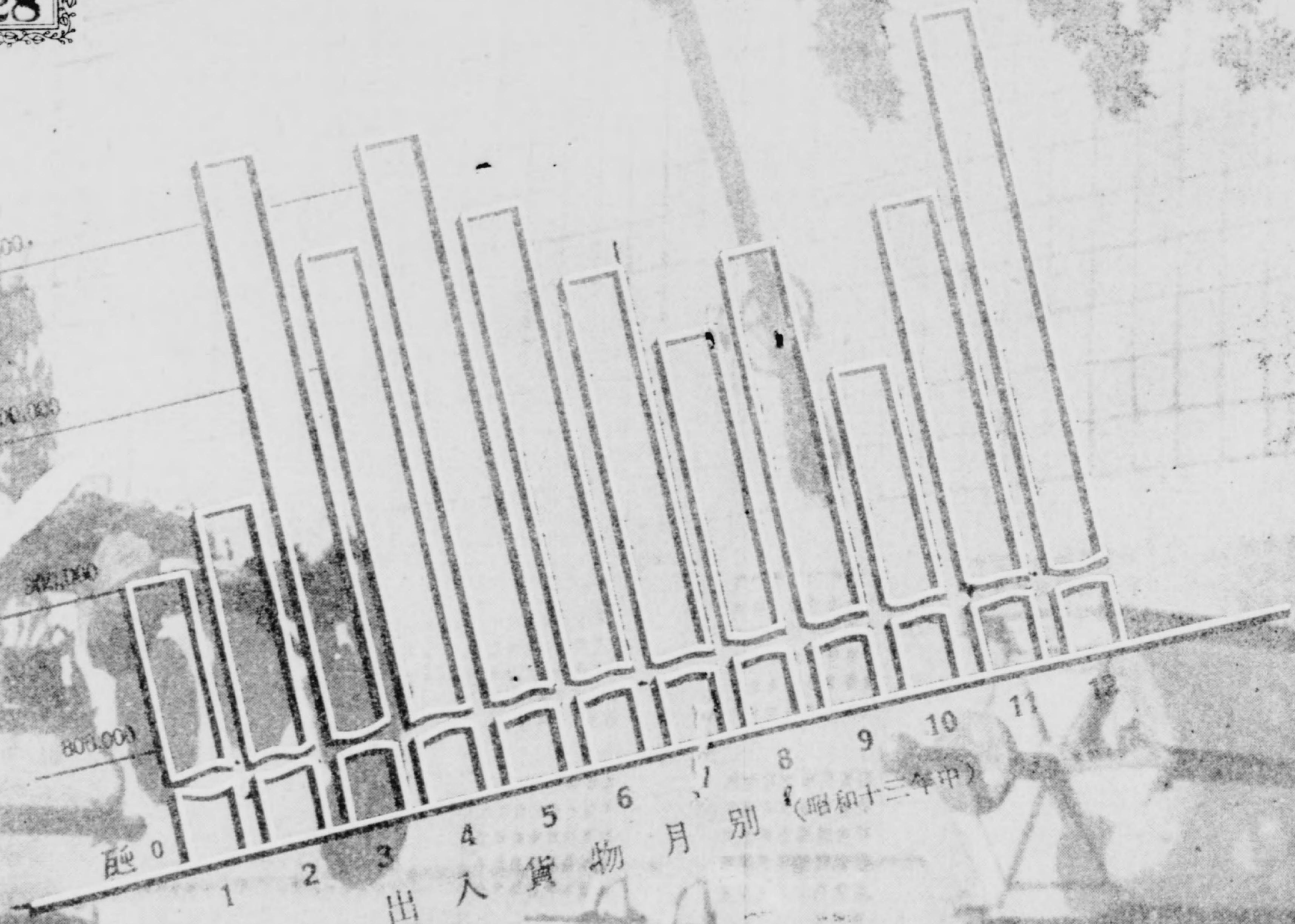
9

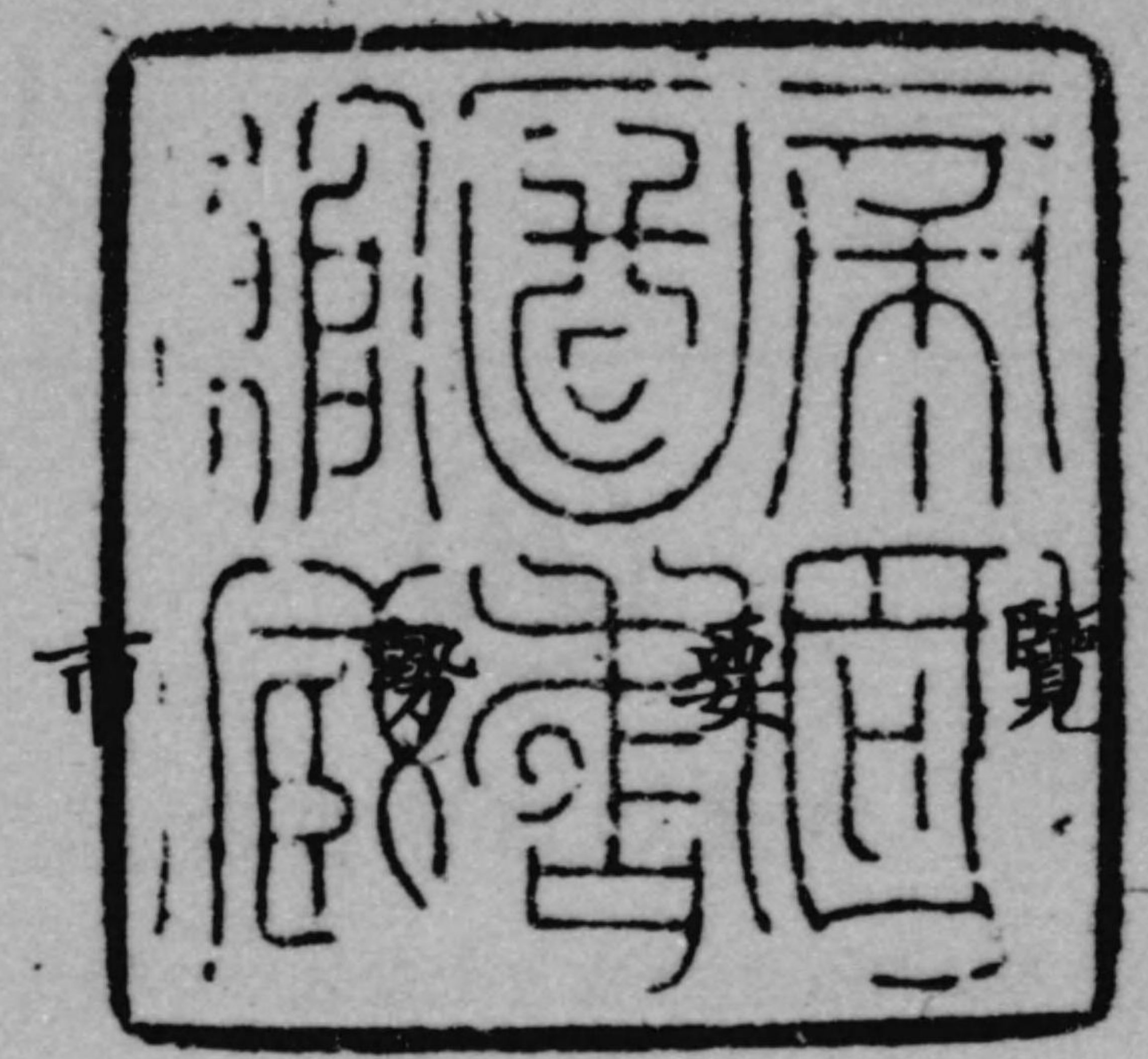
10

11

12

出入貨物月別 (昭和十三年中)





780

328



名古屋市の徽章

名古屋市を表象する徽章は尾州八郡の八又はオハリのハの字に因んだものだとも云ひ、又一説には腰物奉行安部八兵衛と云ふ者、自分の名の八の字を以て提灯の相印とし、江戸下町などでは之を認めて尾張の八と呼んだのが次第に瀰つて、いつとはなしに尾州でも之を相印とする様になつたとも云ふ。明治四十年四月本市の徽章を定めんとして、各方面に之が意匠を求めたけれども適當と認められるものがなく、同十月市會に於て丸八印を用ふることに決議し、爾來之を本市の徽章として使用するに至つたのである。

例 言

1. 本書は市制施行以來五十年間に於ける本市發展の概要と現況を統計を通じて示さんとしたものであつて、統計表は出來得る限り既往に遡り、比例數とし比較對照を試み、本市の變遷消長を知るの便に供した。
2. 表中「年」とあるは曆年、「年度」とあるは會計若くは學年度、年月日を記せるは當該日現在の事實を示したものである。
3. 數量及價格等の單位以下の端數は、四捨五入の法を用ひた。
4. 尙卷末に附録として列國竝に本邦大都市との比較を掲げ参考に資した。

目 次

名古屋市の沿革

土地及建物

| | |
|---------------|--------|
| 位置及地勢 | 頁 4 |
| 廣 表 面 積 | 4 |
| 土 地 類 別 | 5 |
| 公 園 | 7 |
| 建物棟數及坪數 | 8 |

人 口

| | |
|---------------|----|
| 人口増加 | 9 |
| 男女別人口 | 11 |
| 人口密度 | 11 |
| 區別人口 | 12 |
| 年齡別人口 | 13 |
| 職業別人口 | 15 |
| 配偶關係別人口 | 15 |
| 人口動態總覽 | 16 |
| 婚 姻 離 婚 | 17 |
| 出 産 | 18 |
| 死 亡 | 19 |
| 自然増加 | 20 |
| 死亡原因別 | 21 |
| 在留外國人 | 24 |

教 育

| | |
|-----------------|---------|
| 校園教育概観 | 頁 26 |
| 幼 稚 園 | 26 |
| 小 學 校 | 26 |
| 特 殊 學 校 | 31 |
| 中 等 學 校 | 31 |
| 高等專門學校及大學 | 32 |
| 公 學 費 | 33 |
| 社會教育概観 | 33 |
| 圖 書 館 | 34 |
| 青 年 團 | 34 |
| 運 動 場 | 35 |
| 植 物 園 | 36 |
| 動 物 園 | 36 |
| 國民精神總動員運動 | 36 |
| 社會教育委員 | 38 |
| 史蹟天然記念物 | 38 |
| 神社宗教 | |
| 神社及神職 | 39 |
| 寺院及教會 | 39 |
| 社會事業 | |
| 社會事業概観 | 39 |
| 母子救護事業 | 40 |

| | | | |
|-----------------|----|-------------------|----|
| 幼児保護事業 | 40 | 養 鷄 | 71 |
| 東 山 寮 | 41 | 水 産 業 | 71 |
| 經濟保護事業 | 42 | 取 引 所 | 72 |
| 職業保護事業 | 43 | 物 價 指 數 | 73 |
| 軍事援護事業 | 45 | 卸 賣 市 場 | 75 |
| 授 産 事 業 | 46 | 食 品 小 賣 市 場 | 75 |
| 醫療保護事業 | 46 | 倉 庫 | 76 |
| 方 面 事 業 | 46 | 貨 物 の 出 入 | 77 |
| 社會教化事業 | 47 | 工 業 概 況 | 78 |
| カ ー ド 階 級 | 48 | 工 場 及 生 産 額 | 80 |
| 衛 生 | | 事 業 別 工 場 | 81 |
| 上 水 道 | 49 | 規 模 別 工 場 及 職 工 數 | 83 |
| 下 水 道 | 52 | 工 産 額 | 84 |
| 尿 尿 處 分 | 55 | 工 場 動 力 | 85 |
| 塵 芥 及 汚 泥 | 56 | 會 社 資 本 金 | 85 |
| 醫 療 機 關 | 59 | 會 社 營 業 別 | 87 |
| 結 核 療 養 施 設 | 62 | 會 社 資 本 階 級 別 | 87 |
| 市 立 八 事 療 養 所 | 62 | 會 社 營 業 成 績 | 88 |
| 診 療 所 | 64 | 銀 行 預 金 | 89 |
| 委 託 診 療 | 65 | 銀 行 貸 付 金 | 90 |
| 傳 染 病 | 65 | 銀 行 金 利 | 91 |
| ト ラ ホ ー ム 治 療 所 | 67 | 手 形 交 換 高 | 91 |
| 衛 生 組 合 | 68 | 郵 便 貯 金 | 92 |
| 産 業 | | 貿 易 | |
| 農 業 | 70 | 海 陸 出 入 貨 物 | 94 |

| | | | |
|-------------------------|-----|------------------------|-----|
| 汽船及帆船貿易別 | 95 | 市稅收入の趨勢 | 133 |
| 内 國 貿 易 | 95 | 市 稅 の 種 類 | 134 |
| 外 國 貿 易 | 97 | 市 稅 賦 課 率 | 135 |
| 出 入 貨 物 主 要 品 別 | 100 | 市 稅 徵 集 成 績 | 135 |
| 輸 入 貨 物 國 別 | 102 | 市 有 財 産 | 137 |
| 市 設 貿 易 助 長 機 關 | 102 | 市 債 | 138 |
| 名 古 屋 商 品 紹 介 所 | 103 | 公 議 會、市 區 職 員 | |
| 貿 易 斡 旋 所 | 103 | 市 會 | 141 |
| 交 通 | | 市 會 議 員 | 142 |
| 街 路 | 104 | 選 舉 | 142 |
| 街 路 鋪 裝 | 106 | 市 參 事 會 | 145 |
| 橋 梁 | 107 | 市 區 職 員 | 146 |
| 名 古 屋 港 | 107 | 一 附 錄 一 | |
| 入 港 船 舶 | 109 | 都 市 要 覽 | |
| 鐵 道 | 111 | 市 域 | 1 |
| 名 古 屋 驛 | 113 | 市 の 面 積 | 1 |
| 電 車 | 114 | 人 口 | 1 |
| 電 車 營 業 成 績 | 116 | 都 市 要 覽 (表) | 4 |
| 乘 合 自 動 車 | 120 | 列 國 大 都 市 の 人 口 | |
| 乘 合 自 動 車 營 業 成 績 | 121 | 列 國 大 都 市 の 人 口 | 9 |
| 民 營 交 通 事 業 買 収 と 其 の 後 | 123 | 内 地 在 留 外 國 人 | 16 |
| 財 政 | | | |
| 財 政 膨 脹 の 趨 勢 | 125 | | |
| 昭 和 十 四 年 度 豫 算 | 127 | | |
| 市 稅 | 132 | | |



名古屋は古くから那古野、那古屋、名護屋等と呼ばれ、又古圖に浪越と書いてナゴヤと読み、或はネゴヤの轉じたものとも言はれ、其の語源に就ては諸説があつて詳でない。

惟ふに往時は古渡邊りまで海が入り込んで、大喜の丘や山崎星崎が其の入海に突き出でて、無々美しい畫幅を描いてゐたものであらう。

本市の前身とも云ふべき那古野の名稱が名古屋にある古文献上見出される最古のものは貞治三年のもので、大須寶生院眞福寺所藏弘法大師入定勘決記の奥書に記せられてある。其の後名古屋は古、護互に通用して一定しなかつた様で、明治三年四月監察よりの令によつて、茲に名古屋と一定されるに至つたのである。

名古屋は古く那古野莊に屬し、大永の初め今川氏豊が此處に城を築いて柳之丸又は那古野城と稱したが、後天文元年に至つて勝幡城主織田信秀が詭計を以て氏豊を逐ひ、其の子信長の居城とした、弘治元年信長が清洲に移るに及び、那古野城は自然廢城となつた。織田氏が那古野を廢城とした後は蘆茅簇生の野となつて、所々に村家が散在するに過ぎなかつた。

元龜、天正の期に入り、漸く此の地方が史談の寶庫となり出し、織田信秀は古渡に居城を造つたが、まだ城下町を造るに至らなかつた。

慶長十五年徳川家康が其の子義直の爲に城を築かしてから人煙稀な荒涼たる那古野は、急轉直下の勢を以て忽ち新名古屋

繁榮の基礎を開き、第二代光友時代の初期承應三年には既に人口五萬五千人を算したのである。而して王政復古を迎へて明治維新の新時代に入つてからの人口は城下丈でも十三萬人を超してゐたと推定される。慶應三年名古屋藩が置かれ、次いで明治四年廢藩置縣に際し名古屋縣となり、翌五年愛知縣と改稱せられて尾張、三河の兩國を管することゝなつたが、其の後明治十一年に郡區町村編成法が公布せられて名古屋區となり、越えて二十一年市制、町村制が發布せられ同二十二年十月一日より本市にも其の施行を見名古屋區は名古屋市となり、茲に完全なる自治行政の實施を見るに至つたのである。

爾來本市は年々長足の進歩を遂げ、戸口の増加は必然的に市域の擴張を促し、接續町村併合の必要を認めるに至つたので、明治二十九年愛知郡小碓村の一部を、三十一年同郡那古野村及古澤村を、四十年同郡熱田町全町並に小碓村の一部を併合して市域の一大擴張を行つた。

更に四十二年愛知郡千種町の一部及御器所村の一部を、四十三年南區千代田公有水面埋立地を編入した。

斯くの如く地域の擴張、戸口の増加は年と共に著しく従つて市行政事務も亦膨脹を來たし、一廳のみでは市行政の敏活を缺くため區制實施の豫儀なきに至り、明治四十一年四月全市を東西、中、南の四區に劃し、各區に區役所を設置した。其の後大正十年隣接十六ヶ町村を合併して、茲に一躍人口六十三萬餘、面積九、六方里に及ぶ大都市となり、爾來名實共に日本の大都市として發展を續け來たつたのであるが、此間昭和二年、四年、五年の三次に亘つて公有水面埋立地が編入され、更に昭和十二

年三月曩に合併から除外された萩野、庄内の二町村及下之一色町を併合し、同年十月一日には多年の懸案であつた増區の實施を見、今や廣袤東西約十五軒、南北十七軒、人口百二十二萬に達し、年工産額亦六億圓を突破して、茲に東京、大阪に次ぐ我國第三位の大經濟都市として世界的重要性を認めらるゝに至つたのである。

土地及建物

位置及地勢

名古屋市は東經136度49分乃至136度58分、北緯35度3分乃至35度13分に位し、我が國本洲の中央部に位してゐる。南方は伊勢灣に臨んで名古屋港を構成し、北西は木曾川を中心とする濃美平野を控へ、東方は東山一帯の丘陵を隔て、三河の山岳に連つてゐる。本市の地勢は概ね平坦にして、東部は東山覺王山を控へる丘陵地であつて理想的の住宅地である。最高地は千種區田代町附近で、海面よりの高度109.2米の所もあり、最低地は南區本星崎町で0.5米である。西北部を庄内川が取圍んでおり、又中心部に堀川、新堀川があり西部工業發展地帯には中川運河があつて本市産業の發展を助成してゐる。

廣袤面積

市制施行當時の本市の區域は東西6料、南北5.5料、面積13.3方料に過ぎなかつたが、今や東西15.15料、南北17.34料にして、昭和十四年一月一日現在の面積は160.133方料にして本邦大都市中第四位を占め、市制施行當時に比較すれば實に十一倍以上の膨脹を示してゐる。本市の極東は東區田代町、極西は中川區下之一色町、極南は港區潮見町埋立地海岸、極北は西區中切町である。

今區別に面積を見れば次表の如くで、港區の24方料が最大であつて、昭和區、中村區の21方料之に次ぎ、中區、熱田區の7方料が最少である。

| | | | | | |
|---|---|---------|---|---|--------|
| 全 | 市 | 方料 | 昭 | 和 | 方料 |
| 千 | 種 | 160.133 | 熱 | 田 | 21.725 |
| | 東 | 16.429 | 中 | 川 | 7.076 |
| | 西 | 13.098 | | | 21.146 |
| 中 | 村 | 17.645 | | 港 | 24.575 |
| | 中 | 12.525 | | 南 | 18.145 |
| | | 7.769 | | | |

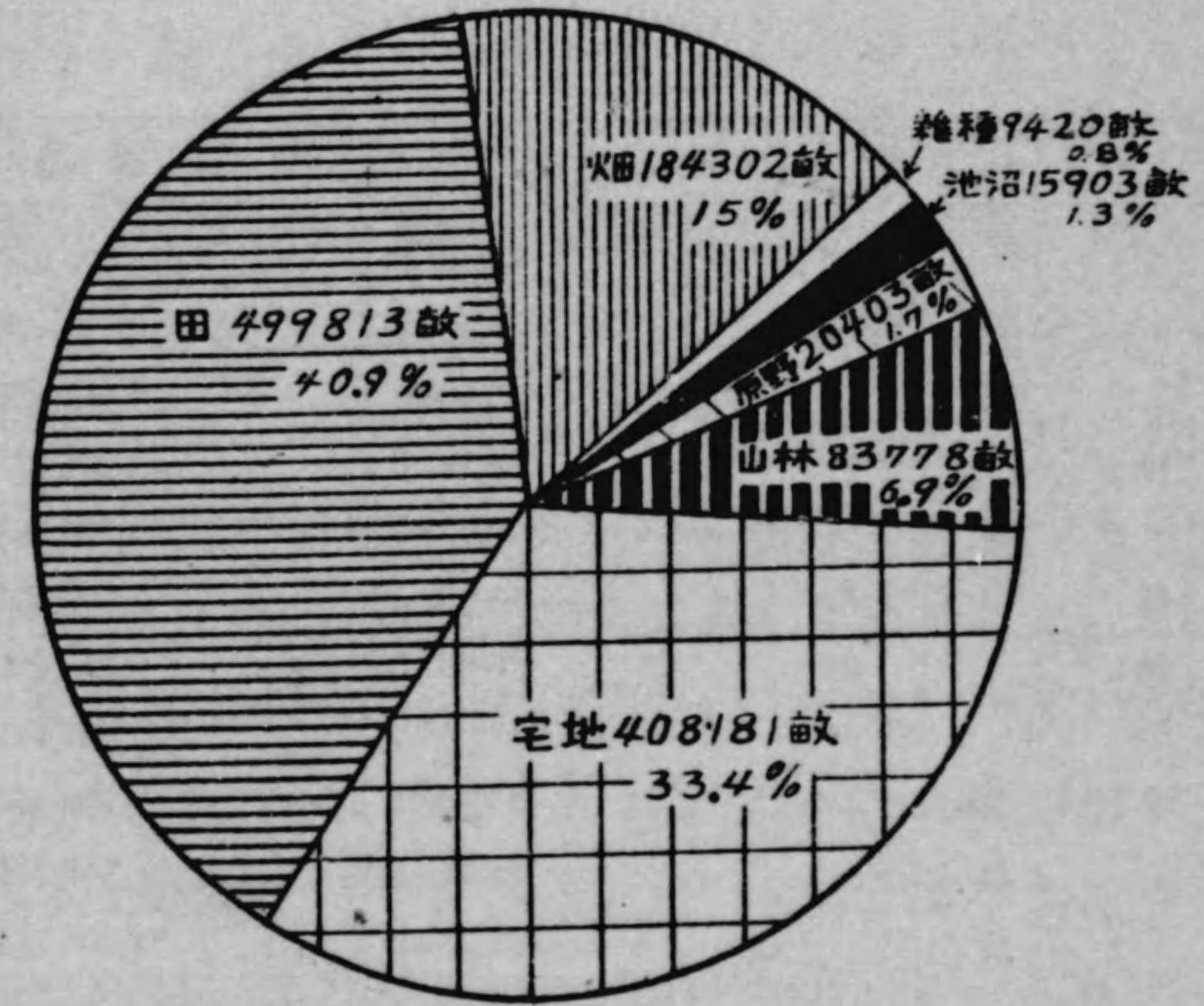
土地類別

昭和十四年一月一日現在に於ける市内の官有地は御料地18町7反歩、國有地2,706町3反歩、合計2,725町1反歩であつて、本市總面積の16.9%に當つてゐる。

土地類別

| 總面積 | 御料地 | 國有地 | 民有々租地 | 民有無租地 |
|-------------|---------|-----------|-------------|-----------|
| 1,614,676 畝 | 1,877 畝 | 270,635 畝 | 1,221,800 畝 | 120,364 畝 |

民有々租地は面積12,218町歩にして、本市面積の75.7%、賃貸價格34,907千圓、地租1,326千圓であるが、其の中田が斷然首位を占め、其の面積4,998町1反歩で、全民有々租地の40.9%に當り、次に宅地は面積



4,081町8反歩で33.4%に當つてゐる。年々急激に田畑が減少し宅地と變りつゝある状態である。

民有々租地を區別に見れば、次に示す如く中川區の1,763町6反歩、昭和區の1,698町9反歩が最も廣く、賃賃價格は面積の最も狭い中區(5,398反歩)が極めて高く11,272千圓であつて、最も安い港區(4,992千圓)の2.3倍弱に當つて居り、面積に於ては然も三分の一以下である。之に依つても本市の中心部と周邊部との賃賃價格の相違が如何に大きいかを窺はれるのである。

民有無租地は下に示す如く、面積1,203町6反歩であつて、其の主なるものは免租年期地385町2反歩、學校用地140町1反歩、用悪水路147町8反歩、運河用地140町6反歩等で本市面積の8.4%に當つてゐる。

民有々租地

| 區 | 別 | 反 | 賃賃價格 | 地租 |
|---|---|-----------|------------|-----------|
| 千 | 種 | 12,755.5 | 1,496,079 | 56,851 |
| | 東 | 9,400.4 | 6,788,491 | 257,962 |
| | 西 | 12,400.8 | 6,131,824 | 233,010 |
| 中 | 村 | 9,914.9 | 1,505,498 | 57,209 |
| | 中 | 5,398.2 | 11,272,283 | 428,347 |
| 昭 | 和 | 16,989.1 | 2,766,896 | 105,142 |
| 熱 | 田 | 5,037.3 | 2,375,063 | 90,251 |
| 中 | 川 | 17,636.2 | 1,301,447 | 49,455 |
| | 港 | 16,500.8 | 499,246 | 18,972 |
| | 南 | 16,146.8 | 769,954 | 29,258 |
| | 計 | 122,180.0 | 34,906,781 | 1,326,457 |

民有無租地

| 種別 | 總計 | 千種 | 東 | 西 | 中村 | 中 | 昭和 | 熱田 | 中川 | 港 | 南 |
|----------|---------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|--------|-------|
| 學校用地 | 14,014 | 1,806 | 3,318 | 2,955 | 1,047 | 1,212 | 1,972 | 740 | 250 | 179 | 535 |
| 府縣社郷村社地 | 830 | 162 | 92 | 273 | 57 | 41 | 38 | 16 | 45 | 34 | 72 |
| 墳墓地 | 4,250 | 742 | 1,112 | 361 | 434 | 818 | 46 | 660 | 31 | 24 | 22 |
| 用悪水路溜池井溝 | 14,776 | 1,453 | 475 | 492 | 1,057 | 139 | 3,165 | 163 | 1,899 | 2,868 | 3,065 |
| 堤道道路 | 11,785 | 281 | 1,086 | 2,053 | 1,822 | 2,606 | 12 | 981 | 878 | 429 | 1,637 |
| 線道軌道用地 | 5,310 | 170 | 1,125 | 721 | 1,252 | 88 | 170 | 740 | 407 | 274 | 363 |
| 水道用地 | 2,478 | 2,307 | — | — | — | 101 | 9 | 61 | — | — | — |
| 運河用地 | 14,058 | — | — | — | 1,982 | 1,307 | — | 1,528 | 4,074 | 5,167 | — |
| 其ノ他免租年期地 | 38,525 | — | — | — | 15 | — | — | 194 | — | 38,316 | — |
| 計 | 120,365 | 8,241 | 8,132 | 9,234 | 9,069 | 6,988 | 9,257 | 5,577 | 7,764 | 50,201 | 5,902 |

公

園

公園は都市生活者の保健、衛生、休養、慰安の場所として又非常事變に於ける避難の場所として益々其の重要性を加へて來た。本市は明治四十二年近代的施設に依る鶴舞公園の開設以來遂次其新設擴張に努めて來たが、昭和十三年中には更に三公園の新設、中村公園の擴張及皇太子殿下御降誕記念事業として十小公園の設置等が計畫せられ、現在工事中のもの四ヶ所(206,819平方米)工事施行準備中のもの六ヶ所(112,195平方米)、其面積合計319,014平方米である。昭和十四年二月一日現在に於ける本市の公園は17ヶ所、街園12ヶ所にして其の面積は1,257,273平方米である。其の他名譽屋城外徳川園等の面積(180,502平方米)を合すれば1,437,775平方米となり、本市總面積對公園面積百分比は0.785に當り、人口一人當

り公園面積は1,027平方メートルである。(公園面積中に運動場面積を含む)

建物棟数及坪数 昭和十三年十二月末現在の建物棟数は326,702棟、其の坪数5,597,819坪(官公署、神社、寺院及二階以上の建物坪数を含まず)にして、之を構造別に見れば木造断然多く、其棟数315,402棟、坪数5,133,629坪にして、總数に對し棟数坪数共に96.5%を占め煉瓦造棟数301、坪数79,885坪、石造棟数361、坪数54,318坪等が主なるもので、之を區別に見れば次の如くである。

主要建物棟数及坪数

| 區別 | 棟 数 | | | 坪 数 | | | | |
|-------|---------|-----|-----|---------|-----------|--------|--------|-----------|
| | 總 数 | 煉瓦造 | 石 造 | 木 造 | 總 数 | 煉瓦造 | 石 造 | 木 造 |
| 千 種 | 14,410 | 9 | — | 14,332 | 388,791 | 106 | — | 384,245 |
| 東 | 29,404 | 29 | 1 | 29,178 | 940,822 | 6,200 | 0 | 921,647 |
| 西 | 48,813 | 41 | 108 | 47,463 | 902,978 | 13,306 | 30,776 | 850,438 |
| 中 村 | 18,518 | 38 | 42 | 18,438 | 439,439 | 9,906 | 2,151 | 427,382 |
| 中 | 76,810 | 108 | 210 | 68,922 | 1,162,516 | 34,560 | 21,390 | 842,516 |
| 昭 和 | 64,221 | 38 | — | 63,137 | 449,402 | 1,655 | — | 445,456 |
| 熱 田 | 23,358 | 26 | — | 23,040 | 195,739 | 13,268 | — | 175,975 |
| 中 川 | 25,142 | 7 | — | 25,022 | 482,369 | 201 | — | 460,028 |
| 港 | 10,306 | 5 | — | 10,150 | 258,580 | 683 | — | 248,760 |
| 南 | 15,720 | — | — | 15,720 | 377,182 | — | — | 377,182 |
| 全 市 | 326,702 | 301 | 361 | 315,402 | 5,597,819 | 79,885 | 54,318 | 5,133,629 |
| 昭和12年 | 312,183 | 309 | 379 | 301,226 | 5,617,429 | 80,421 | 38,043 | 5,169,213 |
| 11年 | 300,137 | 307 | 554 | 270,466 | 5,991,511 | 88,892 | 57,454 | 5,404,328 |

總数中ニハ其他ノ建物ヲ含ム。

人 口

人口増加 昭和十三年十月一日現在に於ける本市の推計人口は1,224,100人であつて、之を前年の推計人口(1,186,900人)に比較すれば37,200人、一日平均101.9人の増加となつてゐる。之を市制施行當時の明治二十二年に比較すれば、五十年間に實に7.6倍強となつてゐる。

今明治二十二年市制施行以後大正十年市域大擴張までの本市人口増加の趨勢を表示すれば下記の如くである。即ち明治六年120,000人に過ぎなかつた本市の人口は、二十六ヶ年間を経て、明治三十二年漸く二倍となつたのに對し、更に十ヶ年後の明治四十二年には既に三倍となり、大正十年には近接十六ヶ町村の大併合を敢行して忽ち五倍の激増を示すに至つたのである。

| 年 度 | 公簿人口 | 増加數 | 増加率 | 期 間 | 備 考 |
|------|---------|----------|--------|-----|-----------------------------------|
| 明治6年 | 126,808 | — | — | — | — |
| 22年 | 157,496 | 30,688 | 24.20 | 16 | 市 制 施 行 |
| 27年 | 202,812 | 45,318 | 28.77 | 5 | — |
| 32年 | 252,242 | 49,430 | 24.37 | 5 | 二十九年市域擴張 三十一年戸籍簿整理 |
| 37年 | 292,548 | 40,306 | 15.93 | 5 | — |
| 42年 | 389,761 | 97,213 | 33.23 | 5 | 四十年六月七日 熱 田 合 併 |
| 大正3年 | 469,315 | 79,554 | 20.41 | 5 | — |
| 8年 | 431,813 | △ 36,502 | △ 7.73 | 5 | 四年及八年出入寄留 簿大整理 |
| 10年 | 633,274 | 201,461 | 46.65 | 5 | 十年八月二十二日十 六ヶ町村合併人口 180,867人 |

註 △印ハ減少ヲ示ス

大正十年八月二十二日近接十六ヶ町村を併合して市域の大擴張を行つた以後の人口増加は、本市の産業的發展と相呼應して

更に一層甚しいものがある。今試みに現在市域による各回國勢調査人口を見るに、大正九年より大正十四年に至る五ヶ年間の増加は實數160,400人、増加率二割六分強であつて最も著しく、昭和五年に至る五ヶ年間は稍減じて實數139,000人、増加率一割八分となり、更に其の後昭和十年に至る五ヶ年間の増加は實數175,000人、増加率一割九分強を示してゐる。

而してこの十五ヶ年間を通じての増加數は實に474,689人に達し、大正九年に比して七割八分の激増振りである。

今人口十萬以上の都市に就き其の人口増加の趨勢を見るに、次表に依り明なる如く、大正九年より大正十四年に至る五ヶ年間は増加率本市の二割六分に對して一割九分、大正十四年より昭和五年に至る五ヶ年間は本市一割八分に對し一割七分であり、又昭和五年より同十年に至る五ヶ年間は本市一割九分に對し一割七分であり、何れも本市の方が遙かに勝

國勢調査人口

| 年次 | 人口 | 前回比増 | 増加率 | 一ヶ年平均増加數 |
|-------|-----------|---------|-------|----------|
| | 人 | 人 | % | 人 |
| 大正 9年 | 608,127 | — | — | — |
| 14年 | 768,558 | 160,431 | 26.33 | 32,086 |
| 昭和 5年 | 907,404 | 138,846 | 18.07 | 27,769 |
| 10年 | 1,082,816 | 175,412 | 19.33 | 35,082 |

人口十萬以上の都市人口増加表

| 年次 | 人口合計 | 前回比増 | 増加率 |
|-------|------------|-----------|-------|
| | 人 | 人 | % |
| 大正 9年 | 10,674,177 | — | — |
| 14年 | 12,702,074 | 2,027,897 | 19.00 |
| 昭和 5年 | 14,909,669 | 2,207,595 | 17.38 |
| 10年 | 17,542,900 | 2,633,231 | 17.66 |

註 人口合計は昭和十年國勢による人口十萬以上の都市三十四に就き之れを求めた、昭和五年迄人口は昭和九年四月一日現在市域により昭和十年人口は十月一日現在市域による。

れてゐるのである。

更に六大都市に就き其の増加率を比較するに、最近五ヶ年間に於ては本市の増加率は一割九分強であつて、大阪市の二割一分強に次いで第二位を占めてゐるが、大正九年第一回國勢調査以來十五ヶ年間に就いて見れば、本市の人口増加率は前にも述べた如く實に七割八分強を示して第一位である。而してこれ等の事實は産業都市名古屋の實勢がその人口現象の上に反映せるものと見るの外ないものと思はれる。

男女別人口

昭和十三年に於ける本市男女別人口は男 626,200人、女 597,900人であつて、女 100人に就き男 105人弱となつており、男女の比率は最近五ヶ年間は殆ど異動はない。今これを區別に就いて見るに港區は男 122人で特に多く、中區の 109人之に次ぎこれと反對に中川區、中村區は女が多く前者は99.0人後者は99.6人となつてゐる。

人口密度

本市の人口密度は一方軒に付き7,644人にして、前年の7,414人に比較すれば230人の増加を示し之を區別に見る時は中區最も多く一方軒24,881人、最も低きは港區にして1,754人である。他の五大都市の人口密度、男女別割合を比較すれば下の如くである。

| | 東京 | 大阪 | 名古屋 | 京都 | 神戸 | 横濱 |
|-------|--------|--------|--------|--------|--------|--------|
| 女百に付男 | 108.5人 | 114.6人 | 104.7人 | 105.1人 | 104.7人 | 103.7人 |
| 一方軒に付 | 11,173 | 17,724 | 7,644 | 1,159 | 11,908 | 4,627 |

大都市は年々人口密度が急激に増加しつつあるが、之は人口の都市集中、就中生産年齢階級男子の向都離村によるもので、全國大都市を通じての共通現象である。又都市に男子の多いのも之と同一原因に因るものと思はれる。

區別人口

昭和13年推計人口及世帯

本市に於ける
區別人口は中
區の193,300人
東區の194,800
人最も多く、
西區の185,400
人、昭和區の
163,900人が
これに次ぎ、
最も少いのは

| 年次 | 世帯數 | 人 | | | 女百=付男 | 人口密度 |
|----|---------|-----------|---------|---------|-------|--------|
| | | 總數 | 男 | 女 | | |
| 千種 | 19,500 | 94,500 | 48,300 | 46,200 | 104.5 | 5,752 |
| 東 | 40,300 | 194,800 | 98,900 | 95,900 | 103.1 | 14,873 |
| 西 | 38,300 | 185,400 | 95,100 | 90,300 | 105.3 | 1,950 |
| 中村 | 23,300 | 112,600 | 56,200 | 56,400 | 99.6 | 8,989 |
| 中 | 39,900 | 193,300 | 101,000 | 92,300 | 109.4 | 24,881 |
| 昭和 | 33,900 | 163,900 | 83,100 | 80,800 | 102.8 | 7,544 |
| 熱田 | 18,900 | 91,600 | 47,600 | 44,000 | 108.2 | 12,945 |
| 中川 | 15,600 | 75,600 | 37,600 | 38,000 | 99.0 | 3,575 |
| 港 | 8,900 | 43,100 | 23,700 | 19,400 | 111.2 | 1,754 |
| 南 | 14,300 | 69,300 | 34,700 | 34,600 | 100.3 | 3,819 |
| 全市 | 252,900 | 1,224,100 | 626,200 | 597,900 | 104.7 | 7,644 |

港區の43,100人である。尙各區別人口を示せば右表の如くである。

人口靜態累年

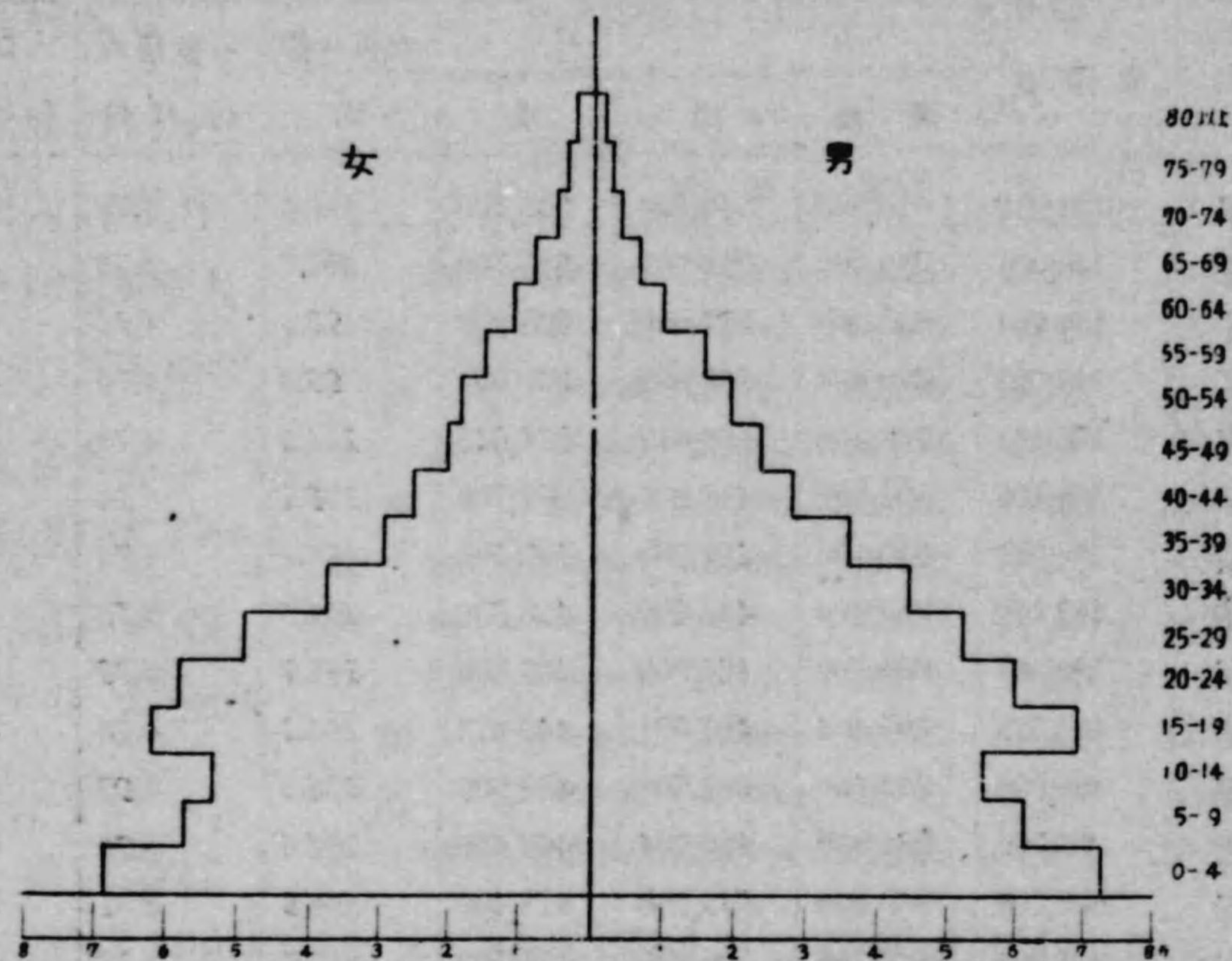
| 年次 | 世帯數 | 人 | | | 女百=付男 | 一世帯=付人口 | 人口密度 (一方軒) |
|-----------------|---------|---------|---------|---------|-------|---------|---------------|
| | | 總數 | 男 | 女 | | | |
| 明治22年 (市制施行) | 48,049 | 157,496 | 80,091 | 77,405 | 103.5 | 3.30 | 1,062 |
| 大正元年 | 94,896 | 435,219 | 228,253 | 206,966 | 110.3 | 4.59 | 1,070 |
| 2年 | 97,114 | 447,951 | 234,912 | 213,903 | 110.3 | 4.61 | 1,101 |
| 3年 | 100,844 | 469,315 | 245,736 | 223,579 | 109.9 | 4.65 | 1,153 |
| 4年 | 91,258 | 389,272 | 196,010 | 193,262 | 101.4 | 4.27 | 957 |
| 5年 | 94,030 | 404,154 | 203,363 | 200,791 | 101.2 | 7.30 | 993 |
| 6年 | 96,330 | 419,749 | 211,868 | 207,881 | 101.9 | 4.36 | 1,031 |
| 7年 | 99,085 | 433,701 | 217,900 | 215,801 | 101.0 | 4.33 | 1,066 |
| 8年 | 90,717 | 432,813 | 217,104 | 215,709 | 100.7 | 4.77 | 1,063 |
| 9年 | 92,461 | 429,997 | 220,280 | 209,717 | 105.0 | 4.65 | 1,056 |

| 年次 | 世帯數 | 人 | | | 女百=付男 | 一世帯=付人口 | 人口密度 (一方軒) |
|-------|---------|-----------|---------|---------|-------|---------|---------------|
| | | 總數 | 男 | 女 | | | |
| 大正10年 | 131,212 | 616,700 | 310,600 | 306,100 | 101.4 | 4.70 | 4,162 |
| 11年 | 136,021 | 639,300 | 325,600 | 313,700 | 103.7 | 4.70 | 4,315 |
| 12年 | 139,404 | 655,200 | 327,000 | 328,200 | 99.6 | 4.76 | 4,422 |
| 13年 | 142,723 | 670,800 | 333,800 | 337,000 | 99.0 | 4.70 | 4,523 |
| 14年 | 164,141 | 768,558 | 392,513 | 376,045 | 104.3 | 4.76 | 4,627 |
| 昭和元年 | 168,466 | 801,900 | 410,200 | 391,700 | 109.1 | 4.76 | 5,413 |
| 2年 | 175,567 | 835,700 | 428,200 | 407,500 | 105.0 | 4.75 | 5,611 |
| 3年 | 182,752 | 869,900 | 446,400 | 423,500 | 105.5 | 4.75 | 5,841 |
| 4年 | 190,063 | 904,700 | 464,900 | 439,800 | 105.7 | 4.79 | 6,074 |
| 5年 | 190,379 | 907,404 | 467,031 | 440,373 | 106.1 | 4.76 | 6,019 |
| 6年 | 198,000 | 934,400 | 481,500 | 452,900 | 106.3 | 4.90 | 6,186 |
| 7年 | 203,700 | 961,800 | 496,204 | 465,600 | 106.6 | 4.72 | 6,367 |
| 8年 | 209,700 | 989,600 | 511,200 | 478,400 | 106.9 | 4.41 | 6,551 |
| 9年 | 215,600 | 1,017,700 | 526,200 | 491,500 | 107.1 | 4.71 | 6,737 |
| 10年 | 219,737 | 1,082,816 | 554,929 | 527,887 | 105.1 | 4.93 | 7,166 |
| 11年 | 231,200 | 1,119,500 | 573,300 | 546,200 | 105.0 | 4.84 | 7,400 |
| 12年 | 243,200 | 1,186,900 | 607,400 | 579,500 | 104.8 | 4.84 | 7,414 |

大正9年以降ハ國勢調査及推計人口、以前ハ公簿人口ヲ掲グ。

年齢別人口

本市人口を年齢別に見ると、昭和十年國勢調査の結果に於ては次圖に示す如く五歳未満の幼者最も多く141,661人(13.1%)を占め、五歳から九歳の階級は118,160人(10.9%)十歳から十四歳は108,692人(10.0%)と次第にその率を減じてゐるが、次の十五歳から十九歳に至り反對に大増加を示し、實數131,876人(12.2%)となり、二十歳から二十四歳は118,528人(10.9%)、以下年齢に反比例して次第に其の率を減じてゐる。



上圖に於て中央下部に突出部を有し、特に多數を占むるものは、生産能力の充實したる年齢階級の多きを示して居り、更にこの年齢階級を幼少年、成壯年、老年の三階級に大別して男女別に觀察する時は、次表の如く男子生産年齢者(15歳—59歳)は

年齢階級別人口

| 年齢階級別 | 實 數 | | | 千 分 比 | | | |
|-------|---------|---------|---------|---------|---------|---------|---------|
| | 昭和五年 | 大正十四年 | 大正九年 | 昭和五年 | 大正十四年 | 大正九年 | |
| 男 | 0歳—14歳 | 152,788 | 129,453 | 74,521 | 327.1 | 329.8 | 338.3 |
| | 15歳—59歳 | 295,089 | 245,534 | 134,187 | 631.8 | 625.5 | 609.2 |
| | 60歳以上 | 19,154 | 17,526 | 11,572 | 41.1 | 44.7 | 52.5 |
| | 計 | 467,031 | 392,513 | 220,280 | 1,000.0 | 1,000.0 | 1,000.0 |
| 女 | 0歳—14歳 | 148,548 | 128,397 | 70,630 | 337.3 | 341.4 | 336.7 |
| | 15歳—44歳 | 218,603 | 185,579 | 101,222 | 496.4 | 493.5 | 486.6 |
| | 45歳以上 | 73,223 | 62,069 | 37,865 | 166.3 | 165.1 | 176.7 |
| | 計 | 440,373 | 376,045 | 209,717 | 1,000.0 | 1,000.0 | 1,000.0 |

295,089人(63.18%)、女子可孕年齢者(15歳—44歳)は218,602人(52.31%)を占めて共に總數の過半に達し、而も各調査毎に其の比率を増加して、本市の産業發展を反面より實證してゐるのである。

職業別人口

昭和五年國勢調査の結果により算出したる職業別人口を見れば、有業者382,096人(42.1%)、無業者525,308人(57.9%)であつて、有業者の75.9%は男であり、無業者の66.3%は女である。

有業者の内譯

| 職業別 | 農 業 | 水産業 | 鑛 業 | 工 業 | 商 業 | 交通業 | 公 務 自由業 | 家 事 使用人 | 其の他 |
|-----|--------|-----|-----|---------|---------|--------|------------|------------|--------|
| 男 | 12,157 | 359 | 225 | 125,221 | 83,253 | 23,307 | 34,366 | 1,605 | 9,571 |
| 女 | 6,610 | 4 | 7 | 32,222 | 29,284 | 1,917 | 8,002 | 12,353 | 1,633 |
| 計 | 18,767 | 363 | 232 | 157,443 | 112,537 | 25,224 | 42,368 | 13,958 | 11,204 |
| 比 例 | 4.9% | 0.1 | 0.1 | 41.2 | 29.5 | 6.6 | 11.1 | 3.6 | 2.9 |

本表に依れば本市は吾が國屈指の商工都市に恥じず従業者斷然多く有業者總數の41.2%を占め、次は商業の29.5%、公務自由業の11.1%、交通業の6.6%等であり、水産業、鑛業は全然問題にならない。

無業者に就いて見れば從屬者70.2%、學生々徒26.1%であるが、無業者の大部分は從屬者と學生であると云へるわけである。

無業者の内譯

| | | |
|---------|----------|--------|
| 總 數 | 525,308人 | 100.0% |
| 從 屬 者 | 368,717 | 70.2 |
| 學 生 々 徒 | 137,380 | 26.1 |
| 其 の 他 | 19,211 | 3.7 |

配偶關係別人口

昭和十年國勢調査の結果により算出したる配偶關係別人口を見れば、全市人口1,082,816人中、

未婚者614,503人(56.7%)、有配偶者399,318人(36.9%)、死別者57,694人(5.3%)、離別者11,301人(1.1%)であつて、之を各年齢階級男女別に見れば次表の如くである。

| 年 齢 | 未 婚 | | 有 配 偶 | | 死 別 | | 離 別 | |
|-------|---------|---------|---------|---------|--------|--------|-------|-------|
| | 男 | 女 | 男 | 女 | 男 | 女 | 男 | 女 |
| 總 數 | 335,660 | 278,843 | 200,746 | 198,572 | 14,058 | 43,636 | 4,465 | 6,836 |
| 0-9 | 131,820 | 128,001 | — | — | — | — | — | — |
| 10-19 | 123,710 | 112,851 | 184 | 3,752 | 2 | 17 | 3 | 50 |
| 20-29 | 72,685 | 33,054 | 37,246 | 70,357 | 380 | 984 | 735 | 1,676 |
| 30-39 | 5,595 | 2,941 | 70,701 | 60,052 | 1,448 | 3,274 | 1,603 | 1,938 |
| 40-49 | 1,186 | 1,036 | 46,845 | 35,490 | 2,364 | 6,486 | 1,018 | 1,427 |
| 50-59 | 455 | 587 | 29,982 | 21,052 | 3,699 | 11,824 | 747 | 1,109 |
| 60-69 | 169 | 294 | 12,060 | 6,555 | 3,399 | 11,419 | 265 | 449 |
| 70-79 | 36 | 66 | 3,328 | 1,211 | 2,154 | 7,278 | 83 | 150 |
| 80以上 | 4 | 13 | 400 | 103 | 612 | 2,354 | 11 | 87 |

今男女別に配偶關係の率を見ると、右表の如く未婚者に於ては男が7.6%多いが、有配偶者では女の方が1.4%多

| 性 別 | 未 婚 | 有 配 偶 | 死 別 | 離 別 |
|-----|------|-------|-----|-----|
| 男 | 60.4 | 36.2 | 2.5 | 0.9 |
| 女 | 52.8 | 37.6 | 3.3 | 1.3 |
| 計 | 56.7 | 36.9 | 5.3 | 1.1 |

い。死別離別に於ては共に女の率が高くなつてゐる。

人 口 動 態 總 覽 昭和十三年本市人口動態は出生30,438人であつて人口千に付24.9人であり、死産は1,638人にして出生の5.3%である。死亡は19,579人であつて人口千に付18人である。本市出生死亡は従來大體出生率及死亡率共に高い傾向にあつたが、本年は出生に於て先年の33,100人に比較し2,662人の大減少を示し、之に加へて死亡に於ても例年に比し特に多く1,299人の増加であるのは實に憂慮すべき事である。

次に本年度婚姻届出件数は9,764組、離婚924組であつて、今累年により人口動態を比較すれば下表の如くである。

人口動態累年

| 年 次 | 婚姻件數 | 離婚件數 | 出生 | 死亡 | 死 産 | 人口千に付 | |
|-------|-------|------|--------|--------|-------|-------|------|
| | | | | | | 出生 | 死亡 |
| 昭和13年 | 9,764 | 923 | 30,438 | 19,579 | 1,638 | 24.9 | 15.8 |
| 10年 | 8,491 | 846 | 30,896 | 15,836 | 1,536 | 23.5 | 14.6 |
| 5年 | 5,717 | 719 | 26,147 | 15,363 | 1,481 | 30.4 | 16.9 |
| 元年 | 7,062 | 860 | 26,313 | 14,633 | 1,407 | 31.8 | 17.7 |
| 大正10年 | 5,549 | 680 | 15,782 | 12,594 | 991 | 24.9 | 19.9 |
| 5年 | 3,658 | 708 | 12,411 | 8,354 | 690 | 30.7 | 20.7 |
| 元年 | 3,692 | 585 | 11,841 | 7,074 | 709 | 27.2 | 16.3 |
| 明治40年 | 3,005 | 474 | 9,236 | 6,206 | 740 | 26.0 | 17.5 |
| 35年 | 2,134 | 494 | 7,033 | 4,701 | 633 | 25.5 | 17.1 |

婚 姻 離 婚 昭和十三年中の婚姻數は前年の11,178組に比し1,414組の減少であつて、従來年々増加の傾向が逆轉した事は注目すべきである。次に離婚に就いて見れば前年に比較し28組の増加であるが、婚姻は減少し離婚は増加し共に反省を要する現象である。

婚姻離婚種別

| 年 次 | 婚 姻 | | | 離 婚 | | |
|-------|--------|-----|-------|------------|------------|-----------|
| | 普 通 | 入 夫 | 婿 養 子 | 妻が夫ノ家ヲ去ルモノ | 夫が妻ノ家ヲ去ルモノ | 双方婚家ニ止ルモノ |
| 昭和13年 | 9,258 | 215 | 291 | 846 | 69 | 8 |
| 12年 | 10,574 | 244 | 360 | 832 | 57 | 5 |
| 11年 | 8,117 | 232 | 283 | 717 | 48 | 6 |
| 10年 | 8,014 | 197 | 289 | 752 | 80 | 14 |
| 9年 | 6,733 | 157 | 275 | 706 | 42 | 11 |

次に昭和十三年中の離婚者婚姻中の経過期間別を見ると次表の如く、十年未満に於て最も多く、二年未満が之に次ぎ、一年三年、四年、五年の順序となつてゐる。

| 年次 | 總數 | 6月未満 | 1年未満 | 2年未満 | 3年未満 | 4年未満 | 5年未満 | 10年未満 | 15年未満 | 20年未満 | 20年以上 | 不詳 |
|-------|-----|------|------|------|------|------|------|-------|-------|-------|-------|----|
| 昭和13年 | 923 | 63 | 102 | 143 | 105 | 80 | 77 | 170 | 77 | 43 | 54 | 9 |
| 12年 | 894 | 62 | 77 | 133 | 95 | 84 | 86 | 181 | 77 | 43 | 50 | 6 |
| 11年 | 771 | 46 | 73 | 100 | 92 | 73 | 67 | 156 | 81 | 30 | 53 | — |
| 10年 | 846 | 56 | 67 | 102 | 125 | 85 | 74 | 140 | 102 | 59 | 36 | — |

今婚姻と離婚との割合を見るに、離婚數(923)は婚姻數(9,764)の9.4%であるが、累年に比較して見ると大體低下の傾向を示して來たが、本年は稍高率となつた。

| | 昭和13年 | 12年 | 11年 | 10年 | 5年 | 元年 | 六正年 | 5年 | 元年 | 明治35年 |
|-------|-------|------|------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|
| 婚姻百=付 | 9.4% | 8.0% | 8.9% | 10.0% | 12.3% | 12.2% | 12.2% | 19.3% | 15.8% | 23.2% |

昭和元年までは本籍人により昭和五年以後は現住人による。

出生 昭和十三年中の出生は男 15,696人、女 14,742人計30,438人であつて、一日平均 83.4人、出生率(人口千に付)は24.9%である。之を前年に比較すれば2,662人の減少を示し、出生率に於て3.0%の減少である。出生率減少の傾向は本市のみならず全国的現象であつて、大都市に於ては特に此の傾向が甚だしい。昭和十二年の全國出生率は人口千に付30.61%であり、之に比較しても大都市の出生率の如何に低きかを窺知する事が出来る。死産について見れば總數1,638人、之を前年の1,584人に比すれば54人の増加である。更に性別に見れば男 912人、女701人男女不詳 25人となつてゐる。都市に於ける出生率低下の原因については幾多のものがあるが經濟的事情

に由る晩婚の傾向と生活難とが主要なものであらう。然し將來に於ては時局に伴ひ斯かる傾向を排除する爲の努力が國家並都市當局者に依つて爲さるべきである。

出生、死産兒を身分別に見れば、出生、死産共に嫡出子が大多數を占めて、各百に付出生に於ては92.9%、死産に於ては78.6%である。之に比較して庶子、私生子は極めて僅少に過ぎない。又私生子は出生、死産各百に付出生2.6%に過ぎないが、死産に於ては18.6%で私生子には死産の率が極めて多い事を示してゐる。

| 身 分 別 | 實 數 | | 比 例 | |
|-------|--------|-------|-------|-------|
| | 出 生 | 死 産 | 出 生 | 死 産 |
| 總 數 | 30,438 | 1,638 | 100.0 | 100.0 |
| 嫡 出 子 | 28,301 | 1,288 | 92.9 | 78.6 |
| 庶 子 | 1,356 | 45 | 4.5 | 2.8 |
| 私 生 子 | 781 | 305 | 2.6 | 18.6 |

死 亡 昭和十三年本市に於ける死亡數は 19,579人、一日平均54人、前年に比し死亡數に於て1,299人、死亡率に於て0.7%の増加である。之を男女別に就て見れば男 10,206人、女9,373人であつて、男の方が833人多く女100に付男109の割合である。次に月別による死亡を見れば一月、二月最も多く、三月、四月は漸次其の數を減じ、五月に至つては最も少く、六月、七月と又増加してゐる。之を概観して嚴寒酷暑の候に多く、氣候の良い春秋期には少くなつてゐると云へる。

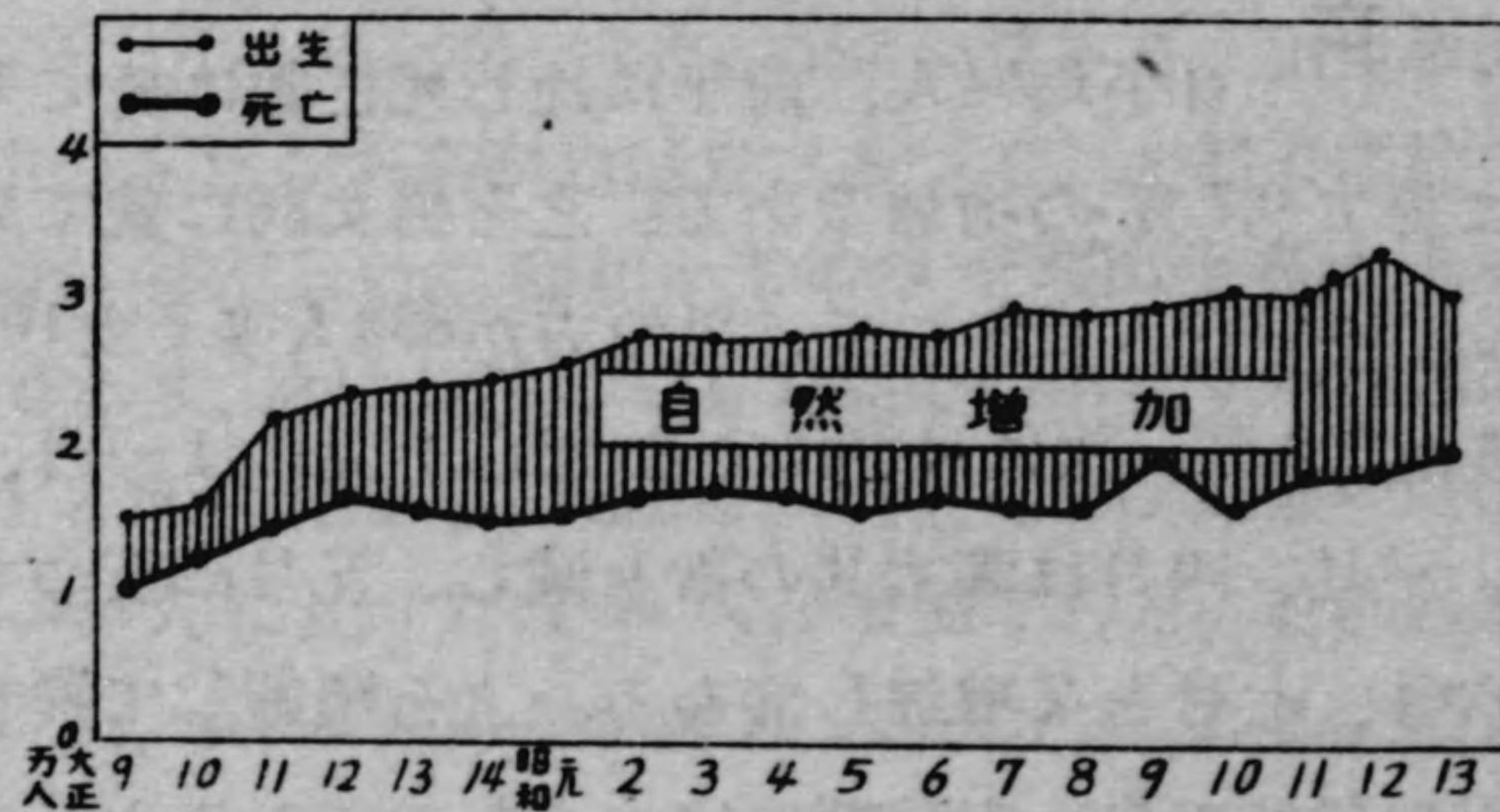
死 亡 月 別

| 年 次 | 總 數 | 1 月 | 2 月 | 3 月 | 4 月 | 5 月 | 6 月 |
|-------|--------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|
| 總 數 | 19,579 | 1,889 | 1,785 | 1,741 | 1,560 | 1,438 | 1,399 |
| 一日平均 | 59.6 | 60.9 | 63.7 | 61.5 | 52.0 | 46.3 | 47.6 |
| 昭和12年 | 18,280 | 1,535 | 1,480 | 1,506 | 1,446 | 1,401 | 1,484 |
| 11年 | 17,660 | 1,986 | 1,576 | 1,486 | 1,264 | 1,362 | 1,392 |
| 10年 | 15,836 | 1,431 | 1,324 | 1,357 | 1,267 | 1,102 | 1,143 |

| 年 次 | 7 月 | 8 月 | 9 月 | 10 月 | 11 月 | 12 月 |
|-------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|
| 總 數 | 1,720 | 1,714 | 1,587 | 1,512 | 1,476 | 1,758 |
| 一日平均 | 55.5 | 55.3 | 52.9 | 48.8 | 49.2 | 56.7 |
| 昭和12年 | 1,720 | 1,792 | 1,455 | 1,490 | 1,366 | 1,605 |
| 11年 | 1,679 | 1,483 | 1,372 | 1,405 | 1,293 | 1,362 |
| 10年 | 1,352 | 1,469 | 1,359 | 1,348 | 1,336 | 1,400 |

自然増加 出生死亡を差引した昭和十三年の自然増加数は10,859人にして、前年の14,820人に比し3,961人の大減少である。今出生、死亡及人口増加累年を圖表に示せば次の如くである。

出生死亡及人口自然増加比較



死亡原因別 昭和十三年中の死亡數19,579人を「病死によるもの」「外因死によるもの」「老衰によるもの」に分けて見るに、病死は90.9%を占め死亡者の殆んど全部は病死であり、外因死、老衰は病死に比すれば甚だ僅少である。

| 原 因 | 實 數 | 比 例 |
|----------|--------|-------|
| (總 數) | 19,579 | 100.0 |
| 病死ニヨルモノ | 17,790 | 90.9 |
| 外因死ニヨルモノ | 535 | 2.7 |
| 老衰ニヨルモノ | 844 | 4.3 |
| 不明診断及不詳 | 410 | 2.1 |

死亡原因を中分類別に見るに肺炎の2,482人最も多く、「呼吸器の結核」2,076人、「腦出血、腦栓塞及腦血栓」1,392人之に次ぎ、腎臓炎、先天性弱質(一歳未滿)、老衰、腦膜炎に起因するものが次に多いが、大分類別に於ては呼吸器、消化器の疾患が最も多く全死亡數の過半數を占めて居る。

現住人死亡原因別 昭和13年

| 死 因 | 總 數 | 男 | 女 |
|--------------------------|-------|-------|-----|
| 1 腸チフス及パラチフス | 134 | 77 | 57 |
| 2 發疹チフス | — | — | — |
| 3 痘瘡 | — | — | — |
| 4 麻疹 | 110 | 47 | 63 |
| 5 猩紅熱 | 6 | 5 | 1 |
| 6 百日咳 | 179 | 69 | 110 |
| 7 チフステリヤ | 62 | 38 | 24 |
| 8 流行性感冒 | 99 | 51 | 48 |
| 9 赤痢及疫痢 | 138 | 66 | 72 |
| 10 ベス | — | — | — |
| 11 呼吸器ノ結核(氣管及氣管支ノ淋巴腺ヲ含ム) | 2,076 | 1,163 | 913 |
| 12 其ノ他ノ結核 | 663 | 308 | 355 |

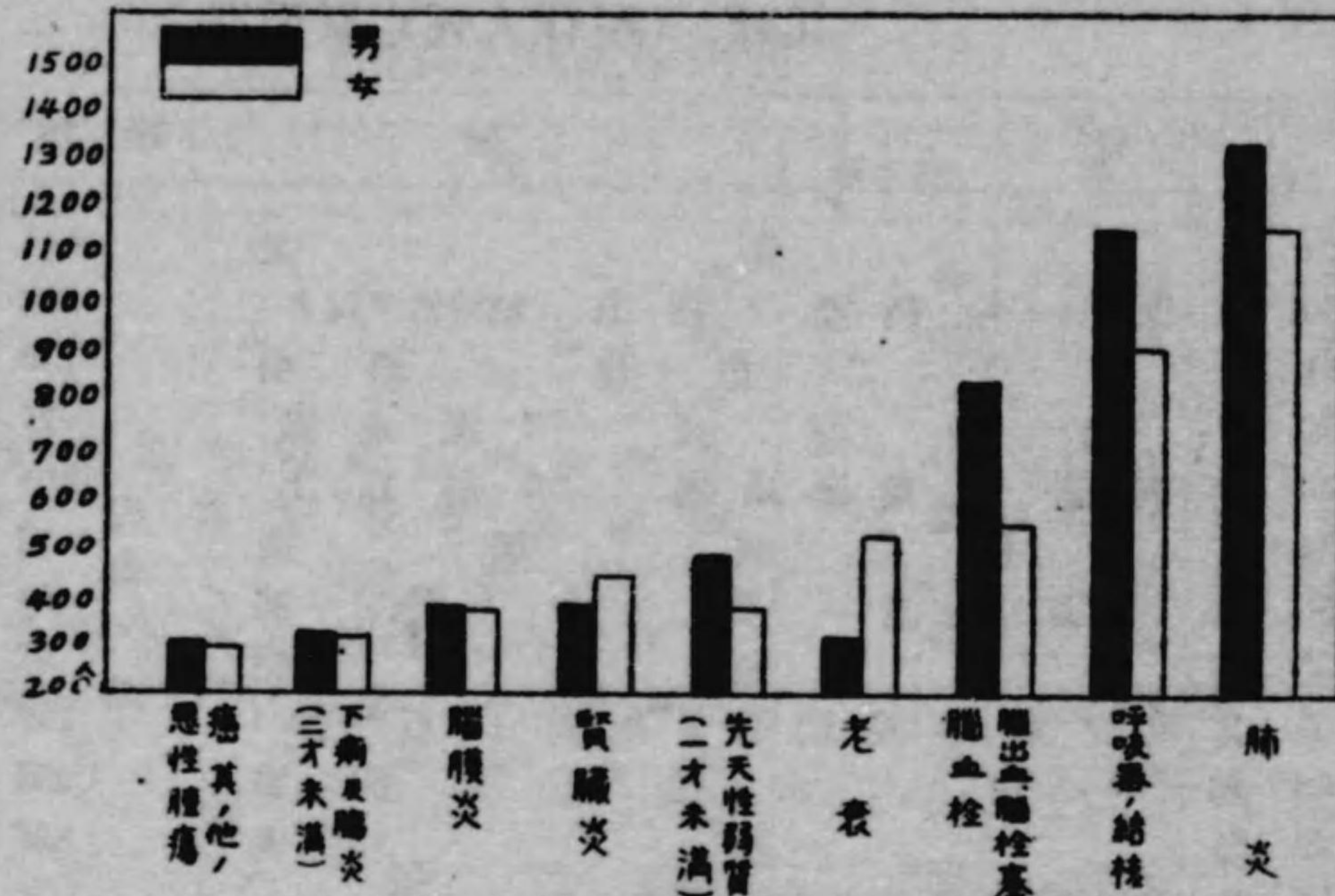
(續) 現住人死亡原因別

| 死 因 | 總 數 | 男 | 女 |
|------------------------|-------|-------|-------|
| 13 微毒 | 56 | 36 | 20 |
| 14 膿毒症及敗血症 | 102 | 62 | 40 |
| 15 マラリア | 2 | 2 | — |
| 16 寄生原蟲及寄生蠕蟲ニヨル疾患 | 11 | 7 | 4 |
| 17 其ノ他ノ傳染病及寄生蟲病 | 87 | 51 | 36 |
| 18 癌其ノ他ノ惡性腫瘍 | 650 | 326 | 324 |
| 19 良性腫瘍及惡性良性ノ別不明ノ腫瘍 | 49 | 26 | 23 |
| 20 急性關節レウマチ | 6 | 1 | 5 |
| 21 慢性レウマチ及痛風 | 5 | 1 | 4 |
| 22 糖尿病 | 55 | 29 | 26 |
| 23 ビタミンニ缺乏症 | 350 | 214 | 136 |
| 24 甲状腺及副甲状腺ノ疾患 | 11 | 3 | 8 |
| 25 其ノ他ノ全身病 | 65 | 34 | 31 |
| 26 貧血 | 6 | 2 | 4 |
| 27 白血病其他ノ血液及造血臟器ノ症 | 27 | 10 | 17 |
| 28 アルコール中毒症 | 6 | 5 | 1 |
| 29 其ノ他ノ慢性中毒 | 7 | 3 | 4 |
| 30 腦膜炎 (結核性ヲ除ク) | 773 | 388 | 385 |
| 31 脊髄癆 (進行性運動失調) | 32 | 21 | 11 |
| 32 腦出血、腦栓塞及腦血栓 | 1,392 | 826 | 566 |
| 33 癱瘓性癱瘓 | 108 | 87 | 21 |
| 34 早發性癱瘓、其ノ他ノ精神病 | 68 | 39 | 29 |
| 35 癱瘓 | 16 | 10 | 6 |
| 36 其ノ他ノ神經系ノ症 | 147 | 69 | 78 |
| 37 眼、耳及其ノ附屬器ノ疾患 | 14 | 6 | 8 |
| 38 心囊炎 | 5 | 1 | 4 |
| 39 急性心臟内膜炎 | 29 | 15 | 14 |
| 40 慢性心臟内膜炎及心臟瓣膜ノ障碍 | 356 | 163 | 193 |
| 41 心筋ノ症 (心臟ノ動脈瘤ヲ含ム) | 59 | 36 | 23 |
| 42 冠狀動脈ノ疾患及狭心症 | 116 | 71 | 45 |
| 43 其ノ他ノ心臟ノ疾患 | 358 | 179 | 179 |
| 44 動脈瘤 (心臟ノ動脈瘤ヲ除ク) | 6 | 5 | 1 |
| 45 動脈硬化 (冠狀動脈ヲ除ク) 及 壞疽 | 85 | 42 | 43 |
| 46 其ノ他ノ血行器ノ疾患 | 22 | 12 | 10 |
| 47 氣管支炎 | 531 | 282 | 249 |
| 48 肺炎 | 2,482 | 1,330 | 1,152 |

(續) 現住人死亡原因別

| 死 因 | 總 數 | 男 | 女 |
|---------------------------------|--------|--------|-------|
| 49 肋膜炎 | 441 | 223 | 218 |
| 50 其他ノ呼吸器ノ疾患 (結核性ヲ除ク) | 282 | 178 | 104 |
| 51 胃及十二指腸ノ潰瘍 | 186 | 136 | 50 |
| 52 下痢及腸炎 (2歳未満) | 617 | 313 | 304 |
| 53 下痢、腸炎及腸潰瘍 (2歳以上) | 968 | 410 | 558 |
| 54 蟲瘻突起炎 | 42 | 25 | 17 |
| 55 脱腸及腸管閉塞 | 64 | 34 | 30 |
| 56 肝硬變 | 57 | 36 | 21 |
| 57 其他ノ肝臟及膽道ノ疾患 (膽石ヲ含ム) | 170 | 82 | 88 |
| 58 其ノ他ノ消化器ノ疾患 | 1,255 | 549 | 706 |
| 59 腎臟炎 | 836 | 385 | 451 |
| 60 其ノ他ノ腎臟腎盂及輸尿管ノ疾患 (妊娠ニヨルモノヲ除ク) | 29 | 7 | 22 |
| 61 排尿道ノ結石 | 2 | 1 | 1 |
| 62 膀胱ノ疾患 (腫瘍ヲ除ク) | 13 | 5 | 8 |
| 63 尿道ノ疾患 | 5 | 4 | 1 |
| 64 攝護腺ノ疾患 | 1 | 1 | — |
| 65 生殖器ノ疾患 (花柳病性ヲ除ク) | 24 | 2 | 22 |
| 66 妊娠中ノ不慮ノ障碍 | 12 | — | 12 |
| 67 産ニヨル出血 | 9 | — | 9 |
| 68 産褥熱 | 6 | — | 6 |
| 69 妊娠中毒 (蛋白尿、子癇等) | 33 | — | 33 |
| 70 其ノ他ノ産ニヨル疾患 | 10 | — | 10 |
| 71 皮膚及皮下結締組織ノ疾患 | 47 | 29 | 18 |
| 72 骨及運動器ノ疾患 (結核性及レウマチ性ヲ除ク) | 31 | 21 | 10 |
| 73 先天性關節形 | 47 | 36 | 11 |
| 74 先天性弱質 (1歳未満) | 863 | 488 | 375 |
| 75 早産 (1歳未満) | 77 | 38 | 39 |
| 76 分娩ニヨル産兒ノ障碍 (3ヶ月未満) | 1 | 1 | — |
| 77 其ノ他ノ幼若乳兒固有ノ疾患 3ヶ月未満 | 101 | 53 | 48 |
| 78 老衰 | 844 | 316 | 528 |
| 79 自殺 | 177 | 115 | 62 |
| 80 其ノ他ノ外因死 | 358 | 259 | 99 |
| 81 不明ノ診断及不詳ノ原因 | 410 | 241 | 169 |
| 計 | 19,579 | 10,206 | 9,373 |

主なる死亡者を男女別に見れば次表に示す如く、「脳出血、脳栓塞及脳血栓」に因る死亡者は特に男が多く呼吸器の結核肺炎に因るの



も亦男が多くなつてゐるが、老衰、腎臓炎に因るものに於ては女の方が遙に多くなつてゐる。

在留外國人 本市在留外國人は次表に示す如く、明治二十八年日清戦争終息當時は總數僅かに44人であつて内譯は米國人(35人)が大部分を占め、他は僅か英國人8人、佛蘭西人1

人に過ぎなかつた十年後の明治三十八年日露戦争後當時では斷

| | 總數 | 米國 | 獨乙 | 佛蘭西 | 英國 | 中華民國 | 露西亞 |
|-------|-------|----|----|-----|----|------|-----|
| 昭和13年 | 412 | 37 | 54 | — | 17 | 221 | 50 |
| 10年 | 721 | 37 | 41 | — | 14 | 518 | 61 |
| 十年後の | 1,035 | 41 | 27 | 4 | 28 | 881 | 54 |
| 明治三十 | 387 | 22 | 19 | — | 21 | 293 | 22 |
| 元年 | 199 | 46 | 11 | — | 28 | 101 | — |
| 大正10年 | 106 | 29 | 4 | 1 | 3 | 57 | — |
| 3年 | 63 | 37 | — | 4 | 7 | 15 | — |
| 明治38年 | 44 | 35 | — | 1 | 8 | — | — |
| 28年 | | | | | | | |

總數中ニハ其他ノ外國人ヲ含ム

然米國人多く、63人中37人であつて、清國人の15人が次に目立つてゐる。更に十年後の大正三年末、即ち歐洲大戰前には總數

106人に増加し、米國人の29人に代つて支那人が57人となり、大半以上を占むるに至つた。歐洲戦争後外國人の在留する者年々増加し、支那人に於ては特に著しくなつた。

而して昭和五年頃より漸次減少して今日に至つてゐる。

昭和十三年末に於ける本市在留外國人は412人にして、前年に比し14人、世帯に於て19世帯の減少である。次に國籍別に就き之を見るに中華民國人最も多く221人にして總數の54%即ち過半数以上を占めてゐる。次いで舊露國人(50人)、獨乙人(54人)、米國人(37人)が主なるものである。在留外國人數の累年を示せば次表の如くである。(昭和十三年末)

| 國籍 | 世帯 | 人口 | | | |
|------|-----|-----|-----|-----|-----|
| | | 總數 | 男 | 女 | |
| 中華民國 | 74 | 221 | 153 | 68 | |
| 米國 | 16 | 37 | 18 | 19 | |
| 英國 | 9 | 17 | 9 | 8 | |
| 加爾各答 | 2 | 3 | 2 | 1 | |
| 露國 | 13 | 50 | 26 | 24 | |
| 獨乙 | 24 | 54 | 25 | 29 | |
| 和 | 2 | 3 | 2 | 1 | |
| チエツコ | 1 | 1 | 1 | — | |
| 白 | — | — | — | — | |
| 葡 | — | — | — | — | |
| 佛 | — | — | — | — | |
| 瑞 | 2 | 2 | 2 | — | |
| 西 | 1 | 1 | 1 | — | |
| 運 | 9 | 9 | 9 | — | |
| 波 | 1 | 1 | 1 | — | |
| 比 | 2 | 2 | 2 | — | |
| 滿 | 4 | 11 | 9 | 2 | |
| 合計 | 160 | 412 | 260 | 152 | |
| 昭和 | 12年 | 179 | 426 | 279 | 147 |
| | 11年 | 217 | 704 | 461 | 243 |
| | 10年 | 226 | 721 | 476 | 245 |
| | 9年 | 190 | 682 | 478 | 204 |
| | 8年 | 198 | 731 | 541 | 190 |
| | 7年 | 179 | 725 | 558 | 167 |

教 育

校 園 教 育 概 観

本市人口の増加と一般文化の向上のため本市校
園施設は逐年増加擴張し昭和十四年三月一日現
在の學校及幼稚園は官公私立を合して416校、その學生、生徒、

| 種 別 | 校 園 數 | 教員、保 姆 | 學生、生徒、兒童 | 兒童數 |
|--------|-------|--------|----------|---------|
| 官 縣 立 | 28 | 742 | 10,098 | 9人に達した。 |
| 市 立 | 241 | 5,715 | 213,688 | 就中兒童數の |
| 私 立 | 147 | 1,636 | 60,213 | 如きは |
| 合 計 | 416 | 8,093 | 283,999 | 大正十 |
| 昭和12年度 | 470 | 7,959 | 245,153 | 年市域大擴張 |

當時に較べるも實に178%の激増である。尙前年に比し15.8%
の増加は主として新興教育機關たる青年學校の整備充實に基く
ものである。この校園施設を經營主體別に觀ると上記表の如く
である。

幼 稚 園

學齡前の幼兒保育機關で總數42園、(縣立1、市
立4、私立36)にして私立の多いことは其の特徴
の一つであり又各都市共通の現象である。昭和十四年三月末日
現在の保姆166人、園兒4,209人で前年に比し園數1、保姆8人、園
兒260人増加してゐる。

小 學 校

本市學齡兒童は市勢の發展膨脹に伴つて逐年増
加し、昭和14年3月1日現在に於ては209,103人の
多きに達し毎年8,000人内外の増加を見てゐる。之れを一世帯當
りに付て見れば0.83人、人口百に付きて17人弱に相當してゐる。
就學率は大正十一年度までは常に98%臺を示して居たが爾來逐
年向上し、昭和十二年度には99%、13年度に於ては96%と云ふ

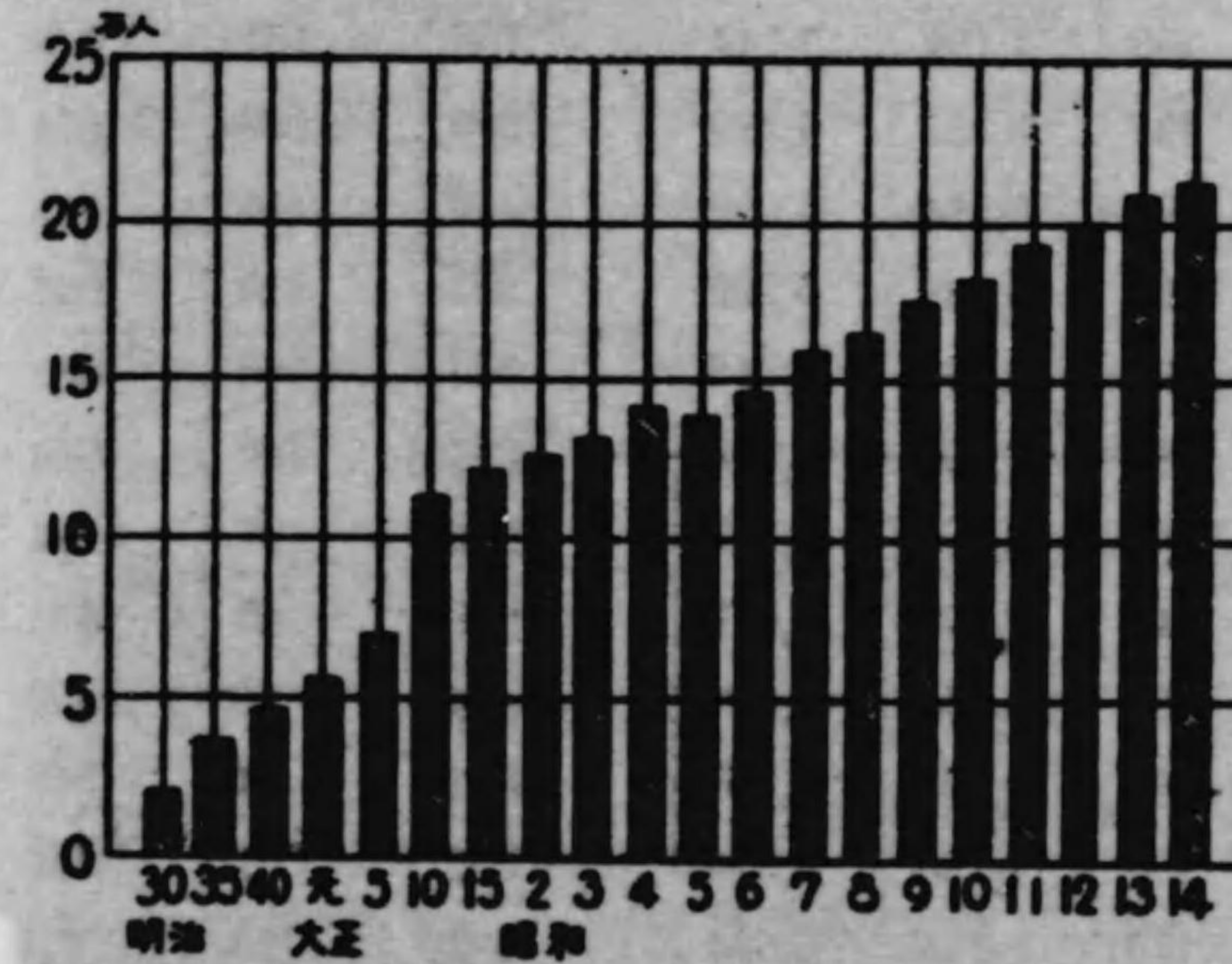
好成績を示すに至つた。

學齡兒童數を各區別に見れば次の如くである。

各區別學齡兒童數比較

| 區 名 | 就 學 | | | 不 就 學 | | | 就學ノ始期ニ達セザル者 | | | 就 學 歩 合 |
|-----|---------|--------|--------|-------|-----|-----|-------------|--------|--------|---------|
| | 總 數 | 男 | 女 | 總 數 | 男 | 女 | 總 數 | 男 | 女 | |
| 千 種 | 12,877 | 6,567 | 6,310 | 83 | 37 | 46 | 2,262 | 1,149 | 1,113 | 99.36 |
| 東 | 27,863 | 14,467 | 13,396 | 123 | 45 | 78 | 5,299 | 2,686 | 2,613 | 99.56 |
| 西 | 25,908 | 13,241 | 12,667 | 140 | 82 | 58 | 4,180 | 2,144 | 2,036 | 99.46 |
| 中 村 | 15,132 | 7,725 | 7,407 | 123 | 64 | 59 | 3,092 | 1,559 | 1,533 | 99.19 |
| 中 | 24,155 | 12,239 | 11,916 | 100 | 53 | 47 | 4,053 | 2,156 | 1,897 | 99.59 |
| 昭 和 | 22,839 | 11,843 | 10,996 | 130 | 58 | 72 | 3,742 | 1,872 | 1,870 | 99.43 |
| 熱 田 | 12,570 | 6,435 | 6,135 | 66 | 32 | 34 | 2,454 | 1,227 | 1,227 | 99.48 |
| 中 川 | 11,896 | 6,118 | 5,778 | 62 | 27 | 35 | 2,249 | 1,154 | 1,095 | 99.48 |
| 港 | 5,724 | 2,982 | 2,742 | 16 | 11 | 5 | 1,124 | 585 | 539 | 99.72 |
| 南 | 9,842 | 5,059 | 4,783 | 69 | 31 | 38 | 1,992 | 1,009 | 983 | 99.30 |
| 全 市 | 168,806 | 86,676 | 82,130 | 912 | 440 | 472 | 30,447 | 15,541 | 14,906 | 99.46 |

學齡兒童累年比較



尙ほ學齡兒童數増加の
推移を見るに左圖の如
く明治三十年には僅か
に29,273人に過ぎなか
つたが本市人口の増加
に伴ひ逐次増加し、大
正元年には123,802人
に達し昭和十四年には
209,103人の多きに達
した。

全市小學校は120校、教員數3,462人、在學兒童數171,324人で、
一校當り平均1,428人の兒童を收容してゐる。今兒童及學級數

の比較を見れば次表の如くである。

在學兒童及學級數

| 年 度 | 尋 常 科 | | | | 高 等 科 | | | |
|-------|---------|--------------|-------|--------|--------|--------------|-----|-------|
| | 兒童數 | 前年度比較 増△減 | 學級數 | 卒業者數 | 兒童數 | 前年度比較 増△減 | 學級數 | 卒業者數 |
| 昭和13年 | 149,847 | 3,490 | 2,667 | 22,195 | 21,477 | 2,083 | 400 | 8,280 |
| 12年 | 146,357 | 14,689 | 2,573 | 21,459 | 19,394 | 3,419 | 374 | 8,207 |
| 10年 | 131,668 | 29,417 | 2,420 | 18,369 | 15,975 | 5,340 | 359 | 7,017 |
| 5年 | 102,251 | 13,532 | 1,806 | 14,037 | 10,635 | 1,541 | 240 | 4,947 |
| 元年 | 88,719 | 7,867 | 1,607 | 14,890 | 9,094 | 2,561 | 194 | 3,819 |
| 大正10年 | 80,852 | 37,250 | 987 | 11,742 | 6,533 | 3,242 | 75 | 2,553 |
| 5年 | 43,602 | 7,711 | 754 | 4,823 | 3,291 | 800 | 60 | 1,307 |
| 元年 | 35,891 | 466 | 687 | 3,947 | 2,491 | 201 | 51 | 971 |
| 明治44年 | 35,425 | 635 | 668 | 3,618 | 2,290 | 231 | 50 | 832 |
| 43年 | 34,790 | 2,301 | 651 | 3,367 | 2,059 | △ 132 | 48 | 751 |
| 42年 | 32,489 | 6,169 | 614 | 2,499 | 2,191 | △ 2,341 | 50 | 857 |
| 41年 | 26,320 | 3,965 | 496 | — | 4,532 | △ 2,612 | 101 | 1,045 |
| 40年 | 22,355 | 4,882 | 408 | 4,182 | 7,144 | 755 | 151 | 1,028 |
| 39年 | 17,473 | 1,252 | 321 | 3,133 | 6,389 | 290 | 133 | 874 |
| 38年 | 16,221 | 822 | 299 | 3,084 | 6,099 | 800 | 114 | 723 |
| 37年 | 15,399 | 164 | 293 | 3,286 | 5,299 | 283 | 110 | 647 |
| 36年 | 15,235 | △ 37 | 295 | 3,183 | 5,016 | 323 | 108 | 631 |
| 35年 | 15,272 | 914 | 285 | 2,907 | 4,693 | 347 | 100 | 654 |
| 34年 | 14,353 | 1,614 | 267 | 2,500 | 4,346 | 276 | 97 | 524 |
| 33年 | 12,739 | 1,309 | 247 | 2,369 | 4,070 | 229 | 89 | 461 |
| 32年 | 11,430 | 877 | 222 | 2,052 | 3,841 | 484 | 80 | 492 |
| 31年 | 10,553 | 656 | 203 | 1,777 | 3,357 | 381 | 74 | 309 |
| 30年 | 9,897 | 603 | 190 | 1,783 | 2,976 | 322 | 57 | 367 |
| 29年 | 9,294 | 108 | 175 | 1,748 | 2,654 | 184 | 60 | 373 |
| 28年 | 9,186 | ? | 168 | 1,924 | 2,470 | ? | 53 | 238 |

明治四十一年度尋常科卒業生無キハ義務年限ノ延長ニ依ル

兒童激增の結果は現今都市兒童教育の痛とされてゐる二部教授を実施するの止むなきに至らしめ、本市に於ても昭和十年四月末現在二部教授實施兒童數 10,052 人、學級 177 の多きに達して居たが爾來小學校の新築、或は獨立高等小學校の新築教室の増築等に依り漸次緩和し昭和十二年四月末現在に於ては學級數 30、兒童數 1,677 人にまで激減するに至つた。今小學校の新築、増改設の推移を示せば次の如くである。

第一回 明治四十三年度

新築 11校 計 24校
増改築 13校

第二回 自大正九年度至同十四年度(六ヶ年繼續事業)

新築 5校 計 30校
増改築 25校

第三回、四回 自大正十四年度至昭和四年度(五ヶ年繼續事業)

新築 13校(分校2校ヲ含ム) 計 71校
増改築 58校

第五、六、七回 自昭和六年度至同九年度(四ヶ年繼續事業)

新築 15校 計 58校
増改築 43校

第八、九回 自昭和十年度至昭和十一年度(二ヶ年繼續事業)

新築 13校 計 48校
増改築 35校

第十回 昭和十二年度

新築 4校 計 10校
増改築 6校

第十一回 自昭和十三年度至同十四年度(二ヶ年繼續事業)

新築 13校 計 28校
増改築 15校

本市就學兒童の増加は前掲の如く其の停止する所を知らざる状態にあるも、今次事變のため諸物資統制の危に遭ひ新規事業中止の止むなきに至り従つて學校建築事業にも一頓座を來たし、再び二部教授實施時代を現出し本年度に於てはその學級數

90、児童數5,232人、前年同期に比すれば學級數に於て3倍、児童數に於て3倍強の増加を見るに至つた。此れが爲本市に於ては國策の許す限り不足教室の新增築又は腐朽校舎の補強改築等に全力を擧げてこれが緩和に努力してゐる。

昭和十三年三月市立小學校卒業児童數は22,195人で其の内上級學校に入學した者は7,297人、其の他は高等小學校或は職業に又は家庭にあるもので其の合計14,898人となつてゐる。

| | 尋常科卒業児童 | | | | | 高等科卒業児童 | | | | |
|-----------|---------|--------|--------|-------|-------|---------|-------|-------|-------|-------|
| | 總數 | 男 | 女 | 卒業者百中 | | 總數 | 男 | 女 | 卒業者百中 | |
| | | | | 男 | 女 | | | | 男 | 女 |
| 師範學校入學者 | — | — | — | — | — | 6 | 4 | 2 | 0.1 | 0.1 |
| 中學校入學者 | 1,541 | 1,541 | — | 13.5 | — | 17 | 17 | — | 0.3 | — |
| 女學校入學者 | 2,494 | — | 2,494 | — | 23.1 | 57 | — | 57 | — | 1.6 |
| 商業學校入學者 | 2,255 | 1,493 | 762 | 13.1 | 7.1 | 51 | 40 | 11 | 0.8 | 0.3 |
| 工業學校入學者 | 414 | 326 | 88 | 2.9 | 0.8 | 24 | 22 | 2 | 0.4 | 0.1 |
| 工藝學校入學者 | — | — | — | — | — | — | — | — | — | — |
| 其他各種學校入學者 | 593 | 293 | 300 | 2.6 | 2.8 | 65 | 31 | 34 | 0.6 | 1.0 |
| 高等小學校入學者 | 11,531 | 6,679 | 4,852 | 58.6 | 44.9 | — | — | — | — | — |
| 職業ニ就ケル者 | 1,339 | 602 | 737 | 5.3 | 5.8 | 5,485 | 4,270 | 1,215 | 85.1 | 37.2 |
| 家庭ニアル者 | 2,028 | 465 | 1,563 | 4.1 | 14.5 | 2,575 | 634 | 1,941 | 12.6 | 59.5 |
| 計 | 22,195 | 11,399 | 10,796 | 100.0 | 100.0 | 8,280 | 5,018 | 3,262 | 100.0 | 100.0 |

次に本市に於ては經濟的に恵まれない児童のため家庭の狀況を考慮して特別學級を設け、又晝間勞働に従事する貧困児童に對しては特に夜間授業を行ひ、又特殊な環境にある子女には學年の上下を問はず適當に學級を設けて特別な取扱ひを講じゐるが其數昭和十三年三月現在に於て18校、21學級、児童609人に達してゐる。

特殊學校

市内に於ける特殊教育機關の主なるものに盲、聾者を教育する盲聾學校及青年公民教育の充實を圖る青年學校がある。青年學校に就ては之れが擴充強化に全力を盡し既に十三年度より準義務制と見做し諸般の準備を了へその發展に備へてゐる。即ち昭和十三年四月末現在の校數、教員數、生徒數は次の通りである。

| | 校數 | 教員數 | 生徒數 |
|------|-----------------|----------------|------------------|
| 盲聾學校 | 2 | 37 | 盲生 167 聾生 246 |
| 青年學校 | 市立 100 私立 28 | 1,533 1,918 | 29,244 13,514 |

中等學校

産業都市たる本市に於ては早くより實業教育の普及に力を盡したためその發達顯著であり内容も亦充實してゐる。又女子教育も其の向上を叫ばれたる時代の思潮に依り古くから之れが設置を見た。

本市に於ける中等學校數及生徒數は次の如くである。

| | 校數 | 生徒數 | 校數 | 生徒數 | |
|------|----|--------|---------|-----|--------|
| 中學校 | 11 | 8,974人 | 女學校 | 17 | 9,587人 |
| 女學校 | 14 | 10,371 | 工業學校 | 7 | 4,029 |
| 實業學校 | 31 | 10,305 | 其ノ他各種學校 | 24 | 2,596 |
| 師範學校 | 2 | 688 | | | |

内市立の學校は高等女學校3、商業學校3、工藝、機械專修學校各1、商業工業の專修學校各々1、其の他實業學校10、合計20校を數へ何れも本市中堅市民の養成或は中堅技術員の養成に努めてゐる。尙ほ本市に於ては近年航空機工業の著しき發達に伴ひ未だ全國に類を見ない航空工業學校の設置を見、今後益々其の發展が期待されてゐる。

中等學校の入學難は各地等しく唱ふる處にして昭和十三年六大都市の入學率は次の如く京都市が最も高率を示してゐる。

入學志願者に對する入學者百分比

| | 中學校 | 女學校 | 商業學校 | 工業學校 |
|-----|-----|-----|------|------|
| 東京 | 38 | 43 | 49 | 32 |
| 大阪 | 48 | 39 | 48 | 38 |
| 京都 | 58 | 61 | 70 | 41 |
| 名古屋 | 35 | 37 | 40 | 40 |
| 神戸 | 39 | 41 | 31 | 23 |
| 横濱 | 42 | 47 | 49 | 29 |

高等、専門學校及大學

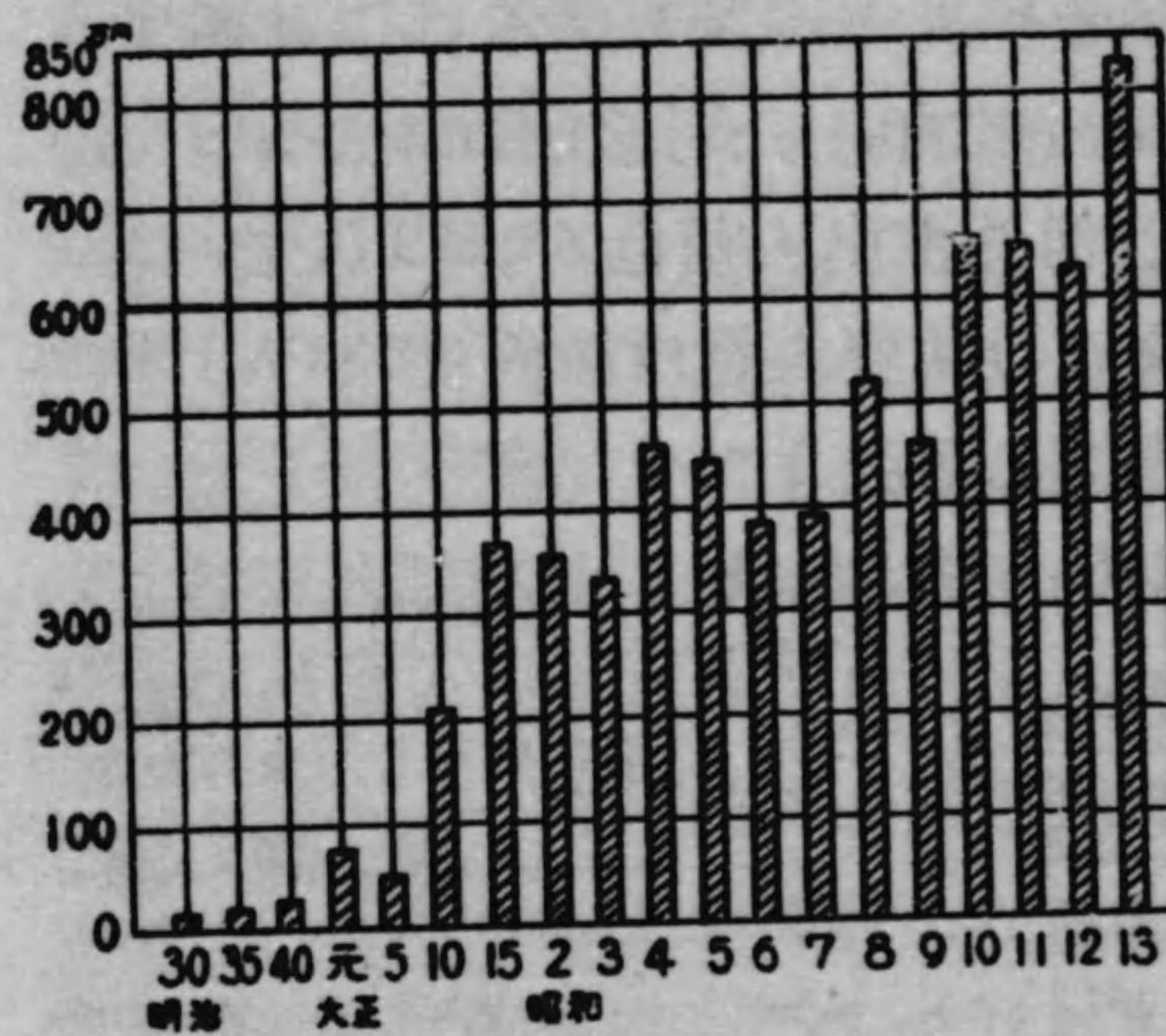
初等、中等教育機關は相當整備充實してゐるが専門學校以上の高等教育機關は他都市に比し甚だ少ない、昭和十三年三月一日現在大學 1、高等學校 1、専門學校 7、にして教員數、學生數は次の通りである。

| | 校數 | 教員數 | 學生、生徒數 |
|------|------|-----|--------|
| 大學 | 官立 1 | 69 | 388 |
| 高等學校 | 官立 1 | 47 | 619 |
| 専門學校 | 官立 4 | 173 | 1,936 |
| | 私立 3 | 75 | 415 |

官立大學は初め縣立醫學校として設立され、明治三十六年醫學專門學校に昇格、昭和六年官立に移管單科大學として創立、然るに最近本市人口の著しき増加と工業の發達とに伴ひ、夙に綜合大學設立の必要が叫ばれてゐたが、昭和十四年に至り遂に宿望を達し從來の醫科に理工科を加へ茲に綜合大學の設立を見産業都市としての面目を一新するに至つた。

公學費 昭和十三年度本市公學費は8,328,876圓にして前年度に比べると實に1,953,792圓(30.6%)の激増を示し、其の大部分は新營費である。

次ぎに生徒、兒童、幼兒一人當りの費用を見るに



幼稚園に於ては 33.42圓、小學校 22.30圓、にして高等女學校 58.86圓、工藝學校 111.44圓、商業學校 63.32圓、商業實務學校 58.38圓、工業專修學校 35.85圓、機械專修學校 154.54圓、實務學校 26.54圓等にして工業關係學校が斷然多い。

次に公學費累年比較を見れば上圖の如く明治三十年度は僅かに十數萬圓なりしが、昭和十三年度に於ては 850 萬圓の巨額に達するに至つた。

社會教育概観

本市に於ては夙に社會教育の重要性を認めこれに關する施設の擴充、事業の振興を圖つてゐるが現在その施設としては青年學校、青年團、圖書館を始め、動物園、植物園、美術館等あり、市民に對して絶へず修養、研究の機會を提供し以て文化都市の建設に努力を拂つてゐる。尙ほ本市に於ける社會教化の特色とも謂ふべきは全ての社會教育の運営及實行が聯區(尋常小學校區域)を單位として實施せられてゐると云ふことである。

圖書館

市民の文化的要求に應ずべき本市の圖書館は現在市、私立を合して10館に數へる。昭和十三年十月末現在市立圖書館の備付圖書は、和漢書 144,584 冊、洋書 6,347 冊の多きに上つてゐる。

次に閱覽人員は（自昭和十二年十一月至昭和十三年十月）215,374 人、一日平均 618 人、館外携出人員は 63,422 人で一日平均 173 人である、外に盲人文庫の閱覽人員は館内（593 人）館外（12,351 人）を合して 12,943 人である。

閱 覽 人 員

| | 館 内 | 館 内 | 館 外 | 館 内 兒 童 | 館 外 兒 童 |
|---|---------|-------|--------|---------|---------|
| | (普 通) | (特 別) | | | |
| 男 | 148,292 | 7,143 | 36,126 | 46,064 | 53,785 |
| 女 | 4,856 | 497 | 4,649 | 8,552 | 1,997 |
| 計 | 153,148 | 7,640 | 40,775 | 54,616 | 55,782 |

註館外へ館外携出人員ヲ示ス

尙ほその外軍人慰安文庫を設け第一回 318 冊、第二回 342 冊、を書函 40 箱に編成し復傷軍人を慰問してゐる。上記の外市内には私設圖書館 1、小學校附設のもの 8、これら圖書館の閱覽人員は合計 14 萬餘人で、其の利用狀況も略々市立圖書館のそれに類似してゐる。上述の私設圖書館である名古屋公衆圖書館は本市に寄附せられ本年九月六日よりは市立圖書館として繼續開館せられてゐる。

青年團

本市の青年團は從來市内各町毎に組織せられてゐたが青年團の聯絡の必要上 大正八年十月一日、市聯合青年團に統一された。然るに昭和十三年四月聯合青

年團を廢し各聯區（小學校通學區域）毎に單一青年團とした。昭和十四年二月現在の團數は區聯合 10、聯區 94、町單位のもの 34（特殊のもの 1 を含む）計 128 を以て構成され其の團員は 35,000 人を擁してゐる尙ほ昭和十四年九月を以て町單位の青年團は廢止する豫定である。女子青年團は區聯合 10、聯區單位 71、其の團員は約 11,000 人に達してゐる。支那事變勃發するや其の活動目覺しく、團員の非常召集による奉仕並に愛國給血團の結成、又は女子青年團に於ても團員の動員計畫を樹立し以て軍用勞役或は陸軍病院奉仕等、長期戦下に於ける非常時局をよく自覺し愈銃後の堅めを強固ならしめてゐる。

運動場

市設鶴舞公園運動場は一般市民の體位向上の見地より施設したるものにして、其の面積に於て又設備に於て縣下唯一のものである。昭和七年四月の開設で敷地面積 26,200 平方米、トラックには 150 米直線コース（幅 12 米）400 米曲線コース（幅 10 米）が設けられ其の他選手控室、事務室、食堂、浴室等の設備も設けられてある。運動場收容人員は 15,000 人を裕に收容することが出来る。

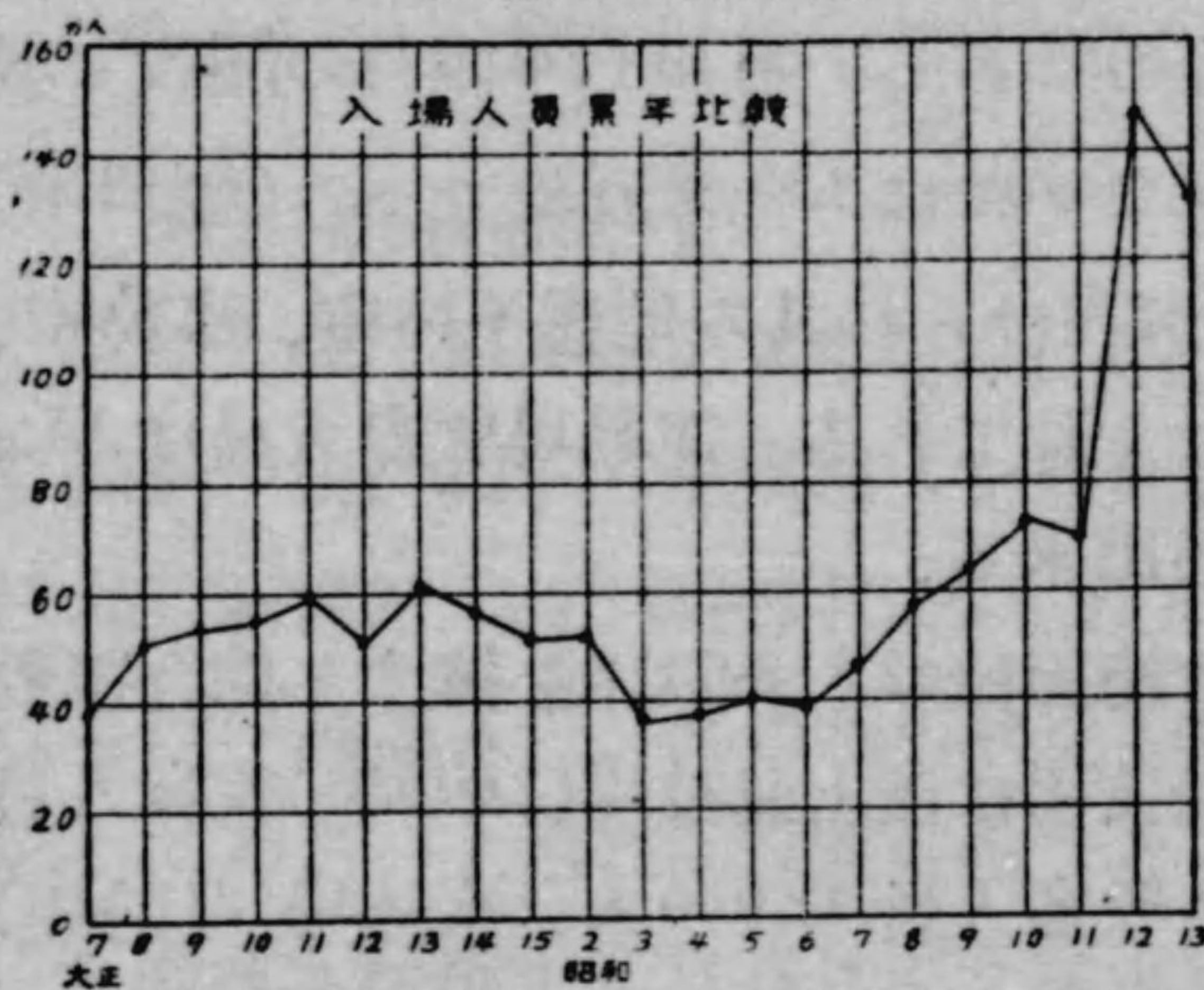
尙ほ昭和區瑞穂町地内に總面積 42,318.53 坪を擁する綜合運動場が建設されつゝある、競技場は陸上競技場（7800 坪）收容人員 25,000 人、野球場（8300 坪）收容人員 42,000 人、水泳場（2185 坪）收容人員 3,000 人、相撲場（530 坪）收容人員 5,000 人、が主なるもので其の外に馬術場、兒童園等を含み其の建設費は 164 萬圓を超へ昭和十五年度に完成の豫定である。



植 物 園 昭和七年十月植物園新設費として25萬圓の寄附に依り、公園指定面積81萬坪の内約1/3の24萬餘坪の一大森林公園内に19,427坪の植物園新設計畫を樹立し、昭和十年一月工事に着手昭和十二年三月竣工した。園内には熱帯植物、多肉植物、水生植物、花卉等の觀賞室を有する大温室(427坪)があり其の外藥草園、郷土植物園、教材園、竹林園工藝植物園等植物主要區分20園、其の面積は19,000坪を擁し、栽培植物の種類凡2,500餘種に及んでゐる。

動 物 園 工費50萬圓を以て移轉新築した東山動物園は其の面積約45,000坪、規模の壯大、設計の豪華さに於て全く本邦唯一の大動物園となつた。而して本園の最も誇りとするものは猛獸の無柵式放養場であつてこれは從來の如く鐵柵を設けずして特種の裝置をなし動物の逸出を防ぎ直接に動物を見ることが出来るやうになつてゐる。昭和十三年中動物園觀覽者數は實に1,304,903人で觀覽料は

動物園入場人員



138,858圓、1日平均入場者數は3,575人の多數に上つてゐる。

國民精神總動員運動 昭和十二年支那事變勃發に伴ひ國民精神總動員運動開始せらるゝや本市に於ては教育部社會教育課を中心として實踐運動に努め來つたのである。然し時局の

進展に伴れ中央では總動員運動の新展開に關する基本的方策が樹立せられ、本市に於ては時恰も行政機構の改正が斷行せられたので、昭和十四年七月を以つて新に總動員部、國民精神總動員課の新設により中央の方策に則り本運動を一層強化することゝなつた。

昭和十二年十一月本運動の實施方針に關し市内有識經驗者にはかりたる結果先づ町内常會を開催し之を單位として各戸各人に徹底せしむることが最も緊要であるとの結論に達し爾來常會開催の奨励に關しては種々なる方策を講じ來つた。又之と平行して各種團體の協力をも求むることゝし、常會、各種團體との聯繫を一層密にし本運動の普及に努めつゝある。

かくして益々強調せられつゝある本運動をより徹底せしむる爲政府の提唱に基き各種強調週間には種々なる運動方法を講じ毎回非常に良好なる結果を見た。次に主なる強調週間を掲げれば

| | |
|-----------------|------------------|
| 國民精神總動員 強調週間 | 昭和12年10月13日より一週間 |
| 國民精神總動員 健康週間 | 昭和13年5月17日より一週間 |
| 國民精神總動員貯蓄報國強調週間 | 昭和13年6月21日より一週間 |
| 國民精神總動員經濟戰強調週間 | 昭和13年7月21日より一週間 |
| 國民精神總動員國民心身鍛鍊運動 | 昭和13年8月1日より20日まで |
| 國民精神總動員銃後後援強化週間 | 昭和13年10月5日より1週間 |
| 國民精神總動員國民精神作興週間 | 昭和13年11月7日より1週間 |
| 國民精神總動員經濟戰強調週間 | 昭和13年12月15日より1週間 |
| 國民精神總動員日本精神發揚週間 | 昭和14年2月5日より1週間 |
| 國民精神總動員百億貯蓄強調週間 | 昭和14年6月15日より一週間 |

陸軍記念日、海軍記念日及び四大節等に於ける全市一齊の記念式或は奉祝式等は一層盛大に、事變記念日等の記念行事は奉

祝式と併せて神社参拜、講演、映畫會等精神作興に關する各種の行事を行ひ他面成人講座、市政講座、婦人講座、講演會等の講習講座を行ひ或は國民精神總動員叢書(自第一輯一至第二輯)を發行する等、時局の認識を深め、本運動の意義の普及徹底を計る等之が強化に努めつゝある。

又國民精神總動員名古屋市實行會を市内の學識經驗ある者及各種團體關係者等50餘名の委員を以て組織し、本市に則したる具體的實踐事項を企劃し、その徹底を計り生活刷新を協凝することゝなつた。

社會教育委員 地方適切の社會教育施設を徹底せしむるため、本縣社會教育委員規定に基き、昭和七年小學校聯區(小學校通學區域)に常設委員會を設置、一聯區毎に40名内外の委員を置き社會教育事業遂行に完璧を期してゐる。現在委員數3,400名にして時局下國民精神總動員の主旨徹底の強化を圖りつゝある。

史蹟天然記念物 本市に於ける指定史蹟は名古屋城本丸を初め四ヶ所、其の他主なる史蹟16ヶ所、天然記念物には名古屋の榎がある。國寶は熱田神宮の所藏品を初め約60點、國寶建造物は名古屋城 熱田神宮海上門、鎮皇門、セツ寺本堂 東照宮等9ヶ所にして夫々適切なる保存施設を講ぜられてゐる。

神 社 宗 教

神 社 及 職 昭和十二年末現在市内の神社は官幣大社熱田神宮を首め縣社5、郷社21、村社168、無格社81、合社276社あり、神職103人(兼務136人)が奉仕してゐる。

寺 院 及 會 教 寺院數は市内に565ヶ寺、これに奉仕する僧侶は男813人(内住職329人)女39人(内住職7人)計852人である。寺院の宗派は曹洞宗154ヶ寺、淨土宗120ヶ寺、眞宗の144ヶ寺等が其の主なるもので、これ等の寺は42,284の檀家を有してゐる。昭和十二年末現在の教會數は神道(328)、佛道(216)、外に基督教會等がある。

| | 教 會 | 教 師 | 教 會 | 教 師 |
|-----|-----|-----|-----|-----|
| 神 道 | 328 | 284 | 佛 道 | 216 |
| | | | | 218 |

社 會 事 業

社 會 事 業 概 観 本市に於ける社會事業が體係付けられたのは大正八年四月救護機關の設立に始まり、主に窮民の救済に當つて居たが、社會狀勢の推移に伴ひ年々量的にも質的にも施設の整備改善に努めた結果、最近では漸次その近代的型態を整へるに至つた。

これより先本市に於ては大正二年救護院(現在の東山寮)の建設が計畫され、大正七年十一月經濟保護施設として東公設市場を開設、更に市營住宅、宿泊所、公益質屋等を設置、失業保護事業として職業紹介所を設け、又大正十四年より失業應急事業を行つた。

醫療保護事業としては診療所、八事療養所、市民病院或は兒

童保護事業等各般に亙り施設を經營するに至つた。尙今次支那事變の勃發に際會するや、軍事援護の方面にも亦盛に活動を續けるなど、社會情勢に即應せる施設の整備に意を注いでゐる。

母子救護事業 大正十二年以來本市に於ては老幼、不具廢疾にして自活困難な者を救助し來つたのであるが、昭和六年十二月限り廢止せられ、更に昭和十三年一月母子保護法に依り實施せられた昭和十二年度中の救護取扱狀況は次の如くである。

| 救護ノ種類 | 救護ノ方法 | 救護實人員 | 救護延人員 |
|-------|-------|----------------|---------|
| 生活扶助 | 居宅 | 3,754 | 898,709 |
| | 收容 | 787 | 14,604 |
| 醫療 | 居宅 | 99 (186) | 8,331 |
| | 收容 | 1 (703) | 114,417 |
| 助産 | 居宅 | 13 | ? |
| | 收容 | 2 | ? |
| 計 | 居宅 | 3,866 (186) | ? |
| | 收容 | 788 (705) | ? |

括弧内は二種以上の救護を受けしものを示す

幼児保護事業 社會狀勢の推移に従ひ生活難の深刻化と母性の職業戰線への進出に伴ひ、益々其の重要性を加へて來た、本市の保育園は比較的小額所得者の多い地區に設置されてゐるため在籍者常に定員を越へる状態にある。尙ほ水上生活者兒童のために昭和九年四月より夜間託兒所を設け、晝間通學に便ならしむると共に夜間保育事業を開始した。本事業は公私合して29ヶ所あり前年に比し4ヶ所の増設を見た。昭和十

二年度中の本事業成績を示せば次の如くである。

幼児保護事業成績 13年度

| 名 稱 | 前年ヨリ越 | | 本年度入園 | | 退 園 | | 年度未現在 | |
|------------------------------|-------|-----|-------|-----|-----|-----|-------|-----|
| | 男 | 女 | 男 | 女 | 男 | 女 | 男 | 女 |
| (市 設) | 人 | 人 | 人 | 人 | 人 | 人 | 人 | 人 |
| 新尾頭町保育園 | 17 | 13 | 19 | 16 | 15 | 13 | 12 | 15 |
| 新出來町保育園 | 16 | 13 | 24 | 27 | 16 | 7 | 21 | 10 |
| 向田町保育園 | 11 | 17 | 28 | 15 | 13 | 12 | 21 | 14 |
| 北押切町保育園 | 12 | 21 | 23 | 22 | 20 | 13 | 17 | 14 |
| 杉村町保育園 | 12 | 23 | 19 | 24 | 14 | 22 | 9 | 19 |
| 築地保育園 | 19 | 19 | 17 | 21 | 17 | 21 | 14 | 21 |
| 則武保育園 | 17 | 12 | 20 | 21 | 22 | 20 | 17 | 17 |
| 藤ノ宮保育園 | 18 | 15 | 15 | 16 | 20 | 14 | 14 | 13 |
| 正色保育園 | 17 | 23 | 70 | 52 | 53 | 22 | 39 | 22 |
| 板橋保育園 | 9 | 18 | 18 | 21 | 20 | 21 | 8 | 21 |
| 中央社會館保育部 | 32 | 37 | 47 | 41 | 53 | 45 | 26 | 33 |
| 東社會館保育部 (昭和十二年四月 市=移管) | 42 | 26 | 39 | 33 | 41 | 39 | 40 | 20 |
| 計 | 222 | 237 | 339 | 309 | 313 | 249 | 238 | 219 |

次に母子保護法に依る實施狀況は生活扶助537人、養育扶助1,372人、醫療其他30人、計1,939人で、之が延人員は實に156,094人の多きに上つてゐる。

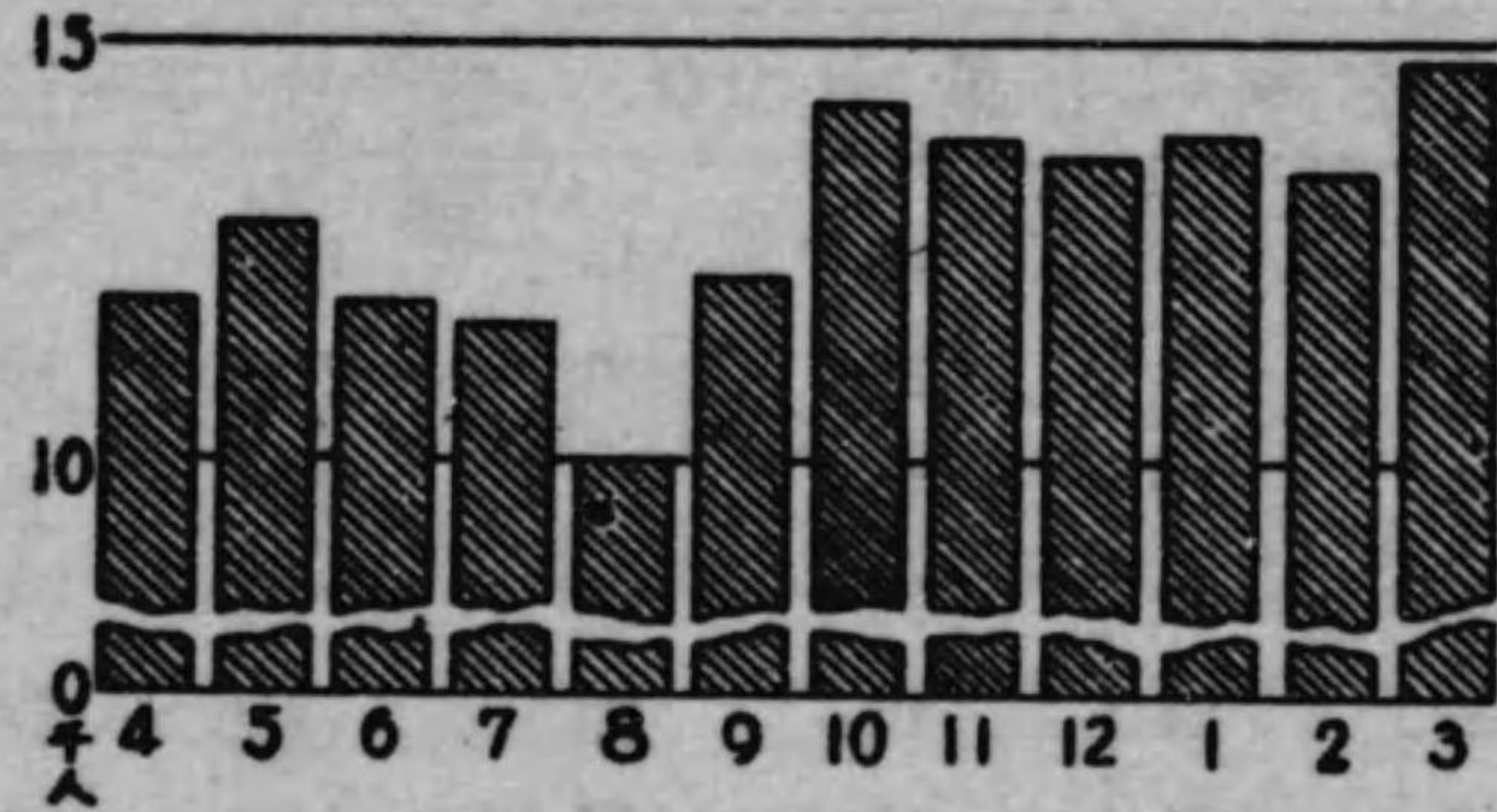
東山寮 本市に於ては從來行路死亡人、精神病者等を各病院に委託して居つたが、昭和八年三月に現在の東山寮を設立した。其の收容定員は373名であつて、昭和十二年度中の取扱狀況は次の如くである

| 種 別 | 救 護 數 | 救 護 延 人員 | 一日平均在寮數 |
|-------------|----------|-------------|-------------|
| 行路病者 | 294 | 33,086 | 97.65 |
| 癩 患 者 | 16 | 196 | 0.54 |
| 救護法該當者 | (市費) 428 | (市費) 82,067 | (市費) 224.82 |
| | (縣費) 50 | (縣費) 7,138 | (縣費) 19.56 |
| 救護法ニ該當セザル國民 | 5 | 717 | 1.96 |
| 計 | 793 | 123,204 | 337.58 |

経済保護事業

現在本市に於ては住宅、宿泊所、公益質屋等の経済保護施設がある。即ち市設住宅は歐洲大

宿泊人員月別比較 (延人員)



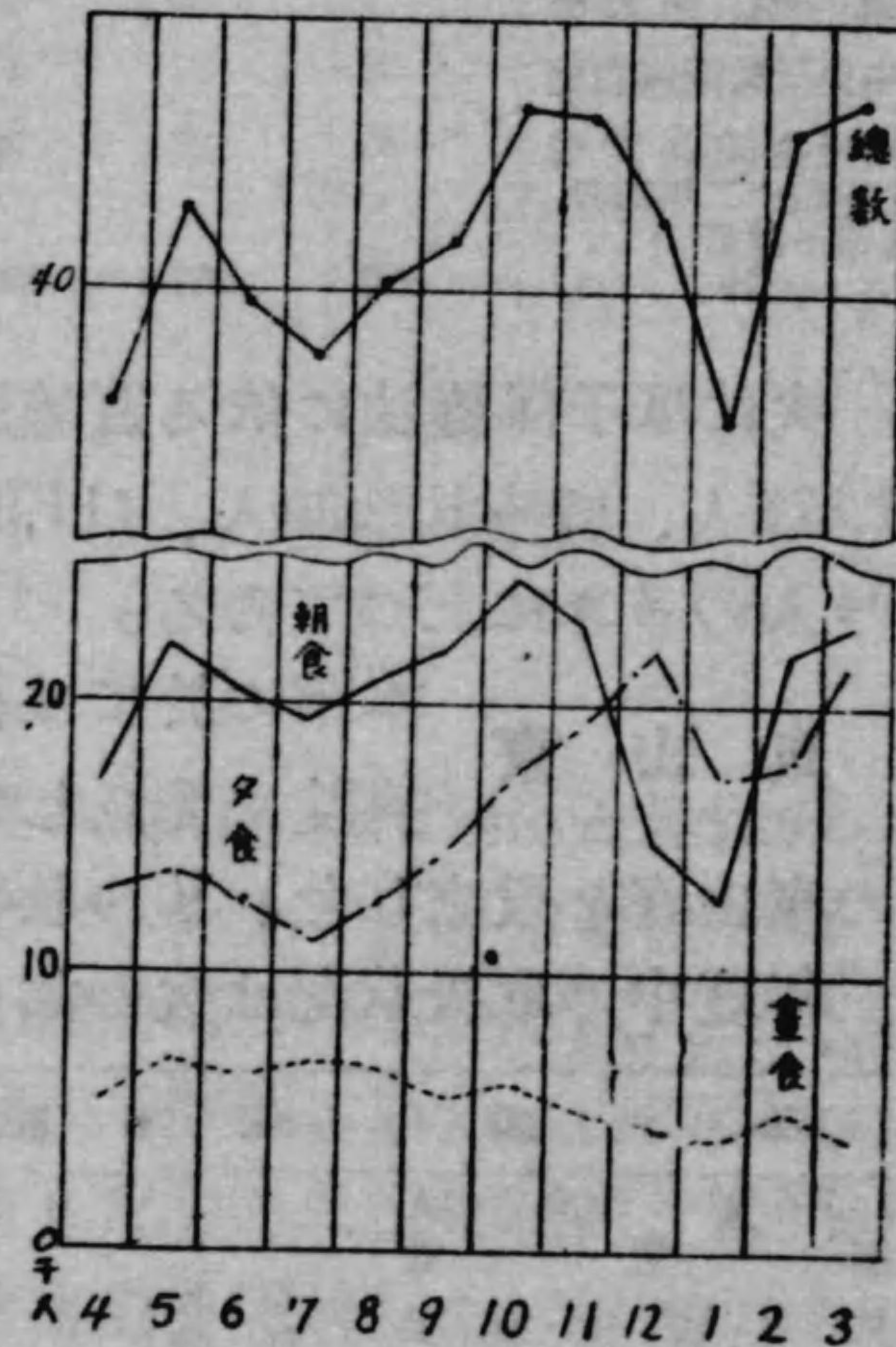
戦後に於ける一般住宅難の緩和の目的を以て大正九年十月以降 281 戸を新設したのであるが其の後 空家積出するに至つたので、昭和六年十一月以來 160 戸を廢

し現在市設住宅数は合計 167 戸であつて、昭和十二年度末の充實率は 91% である。

次に労働者或は少額所得者のために廉價なる安息所となす目的を以て大正十四年八月日置共同宿泊所を、翌十五年八月熱田共同宿泊所を、更に昭和七年十一月に築地、大會根に無料宿泊所を建設したが、事業資金の関係上昭和十一年十月十日限り築地、大會根、兩宿泊所は有料とし、次いで十三年五月前記四宿泊所は時代に即應すべく工場従業者の爲の居宅になる様改造を施しそれと共に名稱も夫々清和寮、熱田寮、海風寮、新興寮と改められた。而して其の附帯施設として食堂、理髪部等がある。尙此の外低利資金及小資本融

公衆食堂入場人員月別

12年度



尚此の外低利資金及小資本融

通等の事業として公益質屋の經營がある。

昭和十二年度中の経済保護事業成績は次に示す如くである。

| 事業種類 | 事業所 | 取扱数 | 一日平均 |
|-------|-----|----------------------------------|-------------|
| 住宅 | 7 | 167戸(現在戸数) | |
| 宿泊所 | 4 | { 一泊 113,052人 下宿 17,955人(延人員) | 307人 49人 |
| 理髪所 | 4 | 138,272人 | 381人 |
| 公益質屋 | 5 | 266,080.96圓(貸付金額) | 735.03圓 |
| 公衆食堂 | 4 | 576,476人(延人員) | 1,597人 |
| 小資本融通 | 1 | 24,378.00圓(運轉資金) | |

職業保護事業

失業者に對し適切なる職業を與へ生活の不安を芟除する目的の下に、本市に於ては從來職業紹介所と労働紹介所が其の中樞機關をなしてゐた。

然るに偶々支那事變勃發するや、敏速適切なる軍需勞務の充足並に事變に伴つて生ずる職業轉換の圓滑、其の他勞務の需給を全国的に調整する必要に迫られ、職業紹介所法の改正を見、從來の市町村公營主義の原則を改め、昭和十三年七月を以て總てを國營に移管さるゝに至つた。市營最後の年次である昭和十二年度中の業績を年齢別及教育程度別は次の如くである。

紹介者年齢別

| 名 稱 | 年 齢 別 | | | | | | |
|----------------|--------|--------|-------|-------|--------|--------|---------|
| | 十八歳以上 | | 十八歳未満 | | 台 計 | | |
| | 男 | 女 | 男 | 女 | 男 | 女 | |
| 市 設 | 56,207 | 16,517 | 7,642 | 4,987 | 63,849 | 21,504 | 85,353 |
| 中央職業紹介所 | 5,337 | 784 | — | — | 5,337 | 784 | 6,121 |
| 千種職業紹介所 | 8,885 | 2,534 | — | — | 8,885 | 2,534 | 11,419 |
| 熱田職業紹介所 | 4,454 | 1,970 | — | — | 4,454 | 1,970 | 6,424 |
| 押切職業紹介所 | 1,878 | 335 | 105 | 49 | 1,983 | 384 | 2,367 |
| 愛知職業紹介所 | 2,022 | 484 | 109 | 145 | 2,131 | 629 | 2,760 |
| 其他 | 78,783 | 22,624 | 7,856 | 5,181 | 86,639 | 27,805 | 114,444 |
| 名古屋基督教青年會職業紹介所 | 40,367 | 16,998 | 6,774 | 6,648 | 47,141 | 23,646 | 70,787 |
| 合 計 | 49,890 | 15,413 | 5,997 | 4,540 | 55,887 | 19,953 | 75,840 |
| 昭和 1 1 年 | | | | | | | |
| 1 0 年 | | | | | | | |

紹介者教育程度別

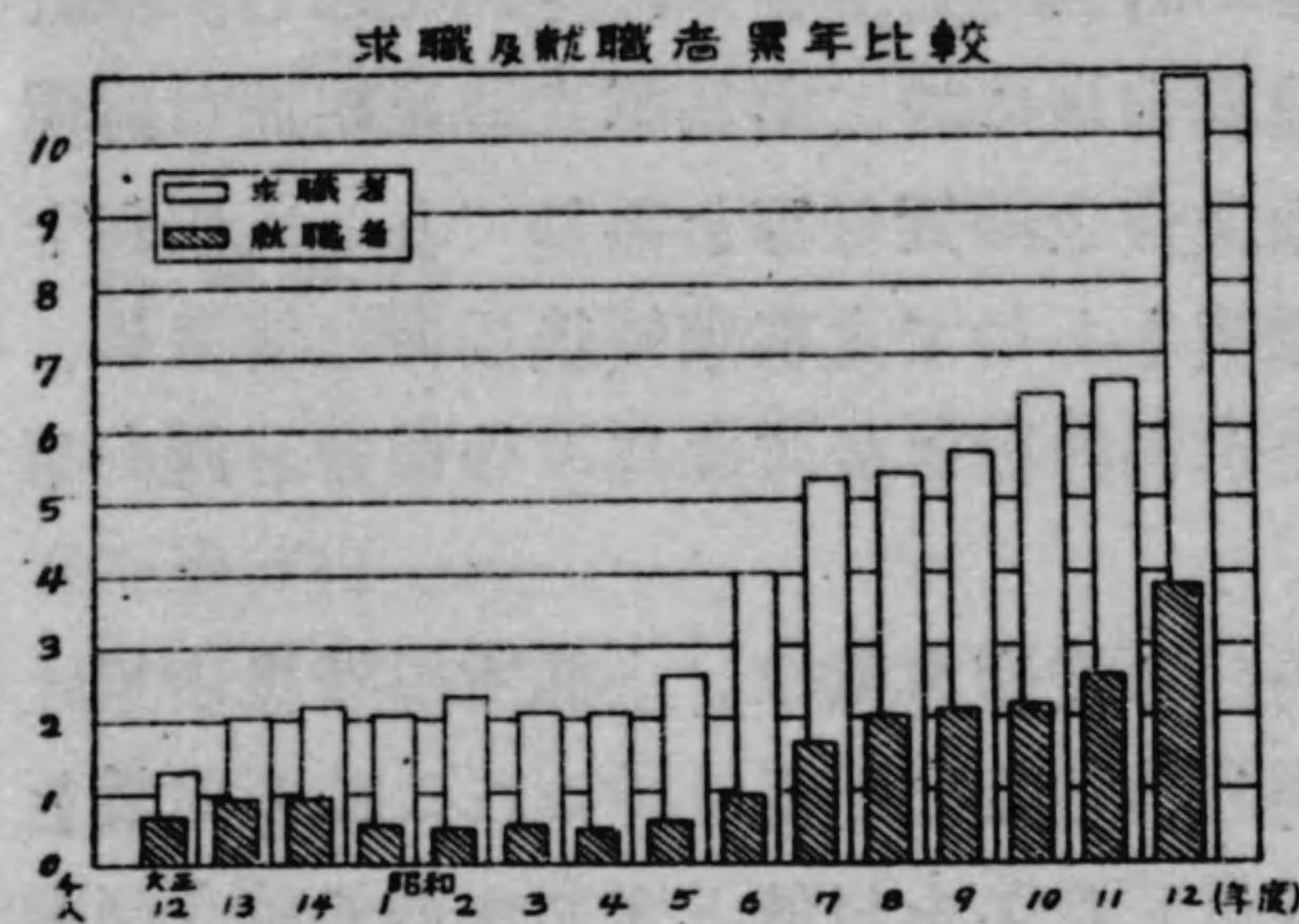
| 名 稱 | 中 卒 以 上 | | 其 他 | | 合 計 | | 計 |
|----------------|---------|-------|--------|--------|--------|--------|---------|
| | 男 | 女 | 男 | 女 | 男 | 女 | |
| 市 中央職業紹介所 | 3,693 | 3,438 | 60,156 | 18,066 | 63,849 | 21,504 | 85,353 |
| 千種職業紹介所 | — | — | 5,337 | 784 | 5,337 | 784 | 6,121 |
| 熱田職業紹介所 | — | — | 8,885 | 2,534 | 8,885 | 2,534 | 11,419 |
| 押切職業紹介所 | — | — | 4,454 | 1,970 | 4,454 | 1,970 | 6,424 |
| 其他 愛知職業紹介所 | 215 | 81 | 1,768 | 303 | 1,983 | 384 | 2,367 |
| 名古屋基督教青年會職業紹介所 | 251 | 159 | 1,880 | 470 | 2,131 | 629 | 2,760 |
| 合 計 | 4,159 | 3,678 | 82,480 | 24,127 | 86,639 | 27,805 | 114,444 |
| 昭和 11 年 | 4,183 | 3,690 | 42,958 | 19,956 | 47,141 | 23,646 | 70,787 |
| 10 年 | 6,657 | 5,329 | 49,230 | 14,624 | 55,887 | 19,953 | 75,840 |

次に労働紹介所に於ける昭和十二年度中取扱成績を見れば次の如くである。

労働紹介所取扱成績 (12年度中)

| 月別 | 求人数百=對シ | | | | 求 職 者 百 = 對 シ | | | | | |
|------|---------|--------|-------|--------|---------------|--------|-------|--------|-------|--------|
| | 紹介者數 | | 就職者數 | | 求 人 數 | | 紹介者數 | | 就職者數 | |
| | 男 | 女 | 男 | 女 | 男 | 女 | 男 | 女 | 男 | 女 |
| 4 月 | 96.33 | 100.00 | 96.33 | 100.00 | 89.32 | 100.00 | 86.04 | 100.00 | 86.04 | 100.00 |
| 5 月 | 93.31 | 100.00 | 93.31 | 100.00 | 98.66 | 100.00 | 92.05 | 100.00 | 92.05 | 100.00 |
| 6 月 | 86.47 | 100.00 | 86.47 | 100.00 | 107.23 | 100.00 | 92.73 | 100.00 | 92.73 | 100.00 |
| 7 月 | 86.24 | 100.00 | 86.24 | 100.00 | 103.48 | 100.00 | 89.24 | 100.00 | 89.24 | 100.00 |
| 8 月 | 78.95 | 100.00 | 78.95 | 100.00 | 123.05 | 100.00 | 97.15 | 100.00 | 97.15 | 100.00 |
| 9 月 | 76.46 | 98.38 | 76.46 | 98.38 | 125.82 | 100.00 | 96.21 | 100.00 | 96.21 | 100.00 |
| 10 月 | 83.66 | 100.00 | 83.66 | 100.00 | 109.61 | 100.00 | 91.70 | 100.00 | 91.70 | 100.00 |
| 11 月 | 86.88 | 100.00 | 86.88 | 100.00 | 111.75 | 100.00 | 97.09 | 100.00 | 97.09 | 100.00 |
| 12 月 | 98.05 | 100.00 | 98.05 | 100.00 | 96.00 | 100.00 | 94.13 | 100.00 | 94.13 | 100.00 |
| 1 月 | 96.62 | 100.00 | 96.62 | 100.00 | 89.84 | 100.00 | 86.80 | 100.00 | 86.80 | 100.00 |
| 2 月 | 96.48 | 100.00 | 96.48 | 100.00 | 98.35 | 100.00 | 94.89 | 100.00 | 94.89 | 100.00 |
| 3 月 | 95.49 | 100.00 | 95.49 | 100.00 | 98.63 | 100.00 | 94.18 | 100.00 | 94.18 | 100.00 |

尚市設職業紹介所としての求職及就職累年を圖示すれば下圖



の通りである。

現在國營になつた紹介所が勞務動員計畫實施の一部を分擔し勞働力の募集と之が養成の爲大活躍して居るのに比し、大戰後の不況時代に於て多數の失業者をか

かへた時代を考へる時、時代の流れに對し一驚するものがある。

軍事援護事業

軍事援護事業は事變下銃後々援の中樞をなすもので、出征將士をして些も後顧の憂ひなからし

むることが其の目的とする所であつて、獨り國家其他公共團體に依つてのみ行はれるべきではなく、銃後國民の總力を以て行はれる處に本事業の重要性が存在するのである。

因に事變發生と同時に本市に於ては支那事變後援會を設立しこれに依り軍人遺家族に對し扶助の斡旋、慰問、勞力援助等諸般の援護を實施し、又軍事扶助法に

| 市 の 施 設 | | 會社其他團體の施設 | |
|-----------|-------|-----------|--------|
| 種 類 | 件數 | 種 類 | 件數 |
| 水道給水料 | 2,277 | 電 灯 料 | 2,145 |
| 市立學校授業料 | 758 | ガ ス 料 | 542 |
| 保 育 料 | 112 | ラヂオ聴取料 | 2,187 |
| 公益質屋利子減額 | 61 | 醫 師 會 診 療 | 21,396 |
| 市民病院及各診療所 | 4,810 | 齒科醫師會診療 | 65 |
| 屎尿汲取手数料 | 813 | 藥劑師會調劑 | 40 |
| 埋葬手数料 | 10 | 法 律 相 談 | 31 |
| | | 保育事業協會保育 | 171 |

該當せざる世帯に對しては支那事變後援會に依つて扶助を實施してゐる。其他扶助金の一時立替贈呈等もなされてゐる。尙此他名古屋市方面事業助成聯合會に於て出征軍人遺家族並に歸還軍人、傷痍軍人のため生業資金の貸付等をなしてゐる。昭和十四年五月よりは政府の勸奨もあつて支那事變後援會は解散し、銚後奉公會が組織されたが、同會に於てはほぼ後援會と同一事業を繼續經營してゐる。

授産事業 本市に於ける授産事業は、小額所得階級の家庭婦人に對し職業技能を授け、これに依る工賃を以て家庭収入の増加を計らしむるを目的とするもので、今昭和十三年中の事業概況を見れば次の如くである。

| 従業實人員 | 延人員 | 工賃總額 | 最高 | 最低 | 一ヶ月平均 |
|-------|---------|------------|--------|-------|-------|
| 4,756 | 80,920人 | 23,577.79圓 | 32.73圓 | 0.03圓 | 5.56圓 |

醫療保護事業 疾病が原因となつて貧困への悲惨なる徑路を辿る者の如何に數多きかに鑑み、本事業は無料或は僅少の實費を徴して治療を施し、以て間接に防貧の目的を達せんとするものであつて、其の機關は市立病院3、私立2、診療所4、私設診療所7、治療所12、特殊療養所1ヶ所である。

尙社會衛生上の見地から、中産階級以下の妊産婦、乳幼児の收療保育、母性の保護指導の爲の救護施設として産院、乳兒院を設置すべく目下工事中である。(詳細は醫療機關の項参照)

方面事業 各種社會事業機關と連絡を保ち、窮民救助を一層効果的ならしめるため方面を區劃し、個々の細民家族に親しく接しての生活状態を調査し、その指導向上を計り又は救護を行はんとする爲、本市内に73方面、409人の委

員がある。昭和十二年度中に於ける取扱件數は、生活扶助金品1,104件、醫療助産1,704件、生業扶助63件、埋葬40件、兒童保護561件、相談指導531件、其他207件、合計4,226件である。

社會教化事業 直接市民と接觸して之れが精神的或は經濟的指導援助をなす爲、本市に於ける斯種の事業としては隣保事業、司法事業、窮民保護事業、融和事業、協和事業等を擧げ得る。

隣保事業は主として小額所得者地區の中心に開設し、地區民と接觸することに依り人格的感化を及ぼし、その經濟生活を誘導し、福祉を増進せしめんとするを目的とするもので、市設二ヶ所、其他四ヶ所、其の事業成績は次の如くである。

| 名 稱 | 乳幼児幼 少年保護 人員 | 職業紹介 人員 | 宿 泊 人員 | 人事相談 件 數 | 日曜學校 收 容 延 人員 | 講習及講 演體講收 容延人員 | 慰 安 會 收 容 延 人員 | 其 他 取扱人員 |
|--------|--------------------|------------|-----------|-------------|---------------------|----------------------|----------------------|-------------|
| (市 設) | | | | | | | | |
| 中央社會館 | 14,239 | — | — | 966 | — | 8,839 | 30,847 | ? |
| 東社會館 | 30,931 | — | — | 141 | — | 1,060 | — | ? |
| (其 他) | | | | | | | | |
| 熱有 隣 田 | 22,094 | — | — | — | — | ? | — | ? |
| 森 隣 園 | 38,083 | — | — | — | — | ? | — | ? |
| 共 隣 野 | 34,130 | — | — | — | — | — | — | ? |
| 平 隣 存 | 34,130 | — | — | — | — | — | — | ? |
| 共 善 館 | 21,308 | — | — | — | — | — | — | — |
| 衆 善 計 | 160,785 | — | — | 1,107 | — | ? | 30,847 | ? |

又寄邊なき釋放者の保護、教化の暖い手を差し延べて更生の機會を與へんとする司法保護事業は、本市では法人の經營になり、其の數2ヶ所であつて、其の保護人員は570人、收容延人員は24,453人である。

因みに昭和十二年度中に保護を解いた503人(直接保護)の内約半數は正業に復してゐる。

尙本市には融和事業として購買會を組織し、組合員の福利増進に備へてゐる。

更に内鮮協和の主旨を以て本市在住半島出身同胞の中堅となる青年層に對し、修養訓練をし將來半島出身者の指導者たらしむるを目的とする協和事業等がある。

カード階級 本市内73方面に於て登録した所謂カード階級は3,930世帯であつて、その範圍別に付て見れば次の如くである。

| 範 圍 | 世 帯 數 | | 人 口 | |
|------------------------|-------|---------|--------|---------|
| | 實 數 | 全市世帯千=付 | 實 數 | 全市人口千=付 |
| 總 數 | 3,930 | 15.5 | 15,366 | 12.6 |
| 公私ノ救助ヲ受クルニアラザレバ生活困難ナル者 | 2,582 | 10.2 | 9,406 | 7.7 |
| 辛ジテ自活シ得ルモノ | 1,348 | 5.3 | 5,960 | 4.9 |

前年に比し世帯數に於て55%、其の人口に於て41%の増加となつてゐることは眞に悲しむべき現象である。

衛 生

上 水 道

本市上水道は其の水源を本邦四大川の一に數へらるゝ木曾川に求め、其の清冽豊富なることは實に理想的と稱せられ、本市諸事業中最も特色ある存在であり給水成績も非常に良く市民の大に誇りとしてゐる所である。

本市が今日の上水道施設に初めて着工したのは、明治四十三年五月で、之が完成に依り、市内に給水を始めたのは、大正三年九月である。其の後、市勢の急激なる膨脹發展に伴ひ、次表の如く數次に亘り施設の大擴張を行ひ、現在に至つた。

上 水 道 工 事 一 覽

| 工 事 名 | 起 工 | 竣 工 | 總 工 費 | 工 事 概 要 | |
|------------|-------------|--------------|--------------|------------------|---------------|
| 創設及第一期擴張工事 | 明治43. 5. 1 | 大正 3. 3. 31 | 5,279,882 | 取水場以下全施設及其ノ擴張 | |
| 第二期擴張工事 | 大正12. 9. 8 | 13. 3. 31 | 346,048 | 千種町始メ配水管増設 | |
| 第三期擴張工事 | 15. 1. 10 | 昭和 5. 3. 31 | 7,132,185 | 淨水設備及配水池、配給幹支線擴張 | |
| 第四期擴張 | 取水場及送水路擴張工事 | 昭和 4. 12. 10 | 8. 3. 31 | 3,607,119 | 取水場及送水路増設 |
| | 淨配水設備擴張工事 | 7. 12. 6 | 11. 3. 31 | 2,297,106 | 沈澱池、濾過池、配水池増設 |
| 配水管擴張工事 | 10. 2. 2 | 豫定13. 3. 31 | 豫算 2,850,000 | 市内配水管擴張 | |
| 水道應急給水増加工事 | 目下認可申請中 | | | 淨水設備増設 | |
| 第五期擴張工事 | 13. 10. 1 | 豫定19. 3. 31 | 11,800,000 | 取水場以下全施設増設 | |

昭和十三年度末現在給水區域は市内一圓竝隣接西枇杷島町、新川町の一部に及び、給水區域内面積は次の如くである。

| | |
|------------------|-----------|
| 市内 名古屋市域全部 | 160.13平方軒 |
| 市外 西春日井郡西枇杷島町ノ一部 | .20 |
| 西春日井郡新川町ノ一部 | 1.17 |
| 合 計 | 161.50 |

給水区域内の総人口1,289,457人に對し、給水人口は1,076,255人で、其の普及率は83.5%に當つてゐる。

給水区域内に於ける昭和四年以降最近十ヶ年間の給水戸口、普及率を示せば次の如くである。

| | 給水区域内總戸口數 | | 給水戸口數 | | 普及率 | |
|-------|-----------|-----------|---------|-----------|-------|-------|
| | 戸數 | 人口 | 戸數 | 人口 | 戸數 | 人口 |
| 昭和13年 | 268,496 | 1,289,457 | 202,067 | 1,076,255 | 75.6% | 83.5% |
| 12年 | 263,201 | 1,241,613 | 190,288 | 1,008,526 | 72.4 | 81.2 |
| 11年 | 254,730 | 1,200,068 | 175,813 | 932,515 | 69.0 | 77.7 |
| 10年 | 248,431 | 1,160,726 | 165,028 | 864,028 | 66.4 | 74.4 |
| 9年 | 241,287 | 1,121,305 | 156,074 | 819,520 | 64.7 | 73.1 |
| 8年 | 234,571 | 1,114,311 | 145,628 | 766,805 | 62.1 | 68.8 |
| 7年 | 225,937 | 1,066,806 | 134,137 | 709,394 | 59.4 | 66.5 |
| 6年 | 225,959 | 1,063,915 | 122,324 | 652,085 | 54.1 | 61.3 |
| 5年 | 222,026 | 1,042,319 | 106,395 | 571,258 | 47.9 | 54.8 |
| 4年 | 214,177 | 1,001,838 | 98,947 | 532,662 | 46.2 | 53.2 |

取水場は木曾川左岸、丹羽郡犬山町地内に二ヶ所在つて、第一取水場の取水量は毎秒3.62立方米、第二取水場の取水量は毎秒1.56立方米である。

配水池は千種區田代町に四面（總容量46,980立方米）同鍋屋上野町に一面（總容量29,450立方米）計五面あつて、其の總貯水量は76,198立方米である。

大正三年給水開始の際に於ける配水管延長は289,054米であつたが、其の後二十四年の期間に異常なる發達を遂げ、昭和十三年度末現在總延長は1,059,675米に及んでゐる。之を比例數に依つて見れば、實に大正三年に比し266.7%の増加であり、本

市内道路總延長（昭和十三年末）3,519,000米の約三分の一弱に當つてゐる。

配水管延長（鉛管ヲ除ク）

| 年度別 | 600耗 | | 250耗 | | 200耗以下 | 合計 (總延長) | 指數 |
|--------|------|--------|------|--------|---------|-------------|-------|
| | 自至 | 米 | 自至 | 米 | | | |
| 昭和13年度 | | 36,450 | | 90,680 | 932,545 | 1,059,675 | 366.7 |
| 10年度 | | 34,059 | | 83,749 | 732,041 | 849,849 | 294.0 |
| 7年度 | | 34,104 | | 83,465 | 677,849 | 795,418 | 275.2 |
| 4年度 | | 33,303 | | 83,837 | 612,506 | 729,646 | 252.4 |
| 元年度 | | 7,847 | | 47,218 | 317,847 | 372,912 | 129.0 |
| 大正12年度 | | 7,847 | | 47,212 | 298,038 | 353,097 | 122.2 |
| 9年度 | | 7,847 | | 45,818 | 243,357 | 297,022 | 102.8 |
| 6年度 | | 7,847 | | 45,810 | 241,989 | 295,646 | 102.3 |
| 3年度 | | 7,822 | | 43,970 | 237,262 | 289,054 | 100.0 |

本市上水道の一日最大給水量は238千立方米であるが、近時、人口の増加、各種商工業の飛躍的隆盛、特に事變に入つて時局産業の繁盛等異常なる進展を遂ぐると共に、市民生活の向上と衛生思想の普及は、勢ひ一人一日當使用水量の増加を來たし、此の趨勢を以てすれば、日ならずして斷水の已むなきに至る可

| 年度別 | 給水戸數 | 給水栓數 | 配水量 | | 指數 |
|--------|---------|---------|------------|----------|---------|
| | | | 立方米 | 一日當平均配水量 | |
| 昭和13年度 | 202,067 | 151,615 | 61,961,090 | 169,756 | 1,956.4 |
| 12年度 | 190,288 | 144,921 | 53,369,090 | 146,214 | 1,685.1 |
| 11年度 | 175,813 | 140,721 | 49,126,950 | 134,594 | 1,551.2 |
| 10年度 | 165,028 | 131,437 | 42,126,160 | 115,099 | 1,326.5 |
| 9年度 | 156,074 | 122,896 | 39,348,040 | 107,803 | 1,242.4 |
| 8年度 | 145,628 | 112,953 | 35,623,520 | 97,599 | 1,124.8 |
| 7年度 | 134,137 | 104,807 | 28,578,712 | 78,298 | 902.4 |
| 6年度 | 122,324 | 94,918 | 25,191,755 | 68,830 | 793.2 |
| 5年度 | 106,395 | 81,303 | 19,701,709 | 53,977 | 622.1 |

| 年度別 | 給水戸数 | 給水栓数 | 配水量 | 一日平均配水量 | 指数 |
|--------|--------|--------|-------------------|---------------|-------|
| 昭和4年度 | 98,947 | 75,898 | 19,205,493 立方米 | 52,618 立方米 | 606.4 |
| 3年度 | 85,816 | 66,407 | 17,716,565 | 48,539 | 559.4 |
| 2年度 | 77,343 | 59,265 | 15,940,678 | 43,554 | 501.9 |
| 元年度 | 71,112 | 55,249 | 14,867,941 | 40,734 | 469.4 |
| 大正14年度 | 66,117 | 51,156 | 15,106,604 | 41,388 | 477.0 |
| 13年度 | 61,364 | 46,181 | 14,519,260 | 39,779 | 458.4 |
| 12年度 | 54,296 | 40,137 | 13,634,899 | 37,254 | 429.3 |
| 11年度 | 48,755 | 36,075 | 12,179,804 | 33,370 | 384.6 |
| 10年度 | 43,920 | 31,655 | 11,603,235 | 31,788 | 366.3 |
| 9年度 | 38,094 | 27,497 | 11,570,816 | 31,701 | 365.3 |
| 8年度 | 33,980 | 25,708 | 11,028,038 | 30,131 | 347.3 |
| 7年度 | 27,355 | 20,118 | 9,683,101 | 26,529 | 305.7 |
| 6年度 | 23,799 | 17,349 | 7,563,323 | 20,721 | 238.8 |
| 5年度 | 16,675 | 13,591 | 5,857,685 | 16,048 | 184.9 |
| 4年度 | 8,811 | 8,197 | 3,623,957 | 9,902 | 114.1 |
| 3年度 | 3,194 | 4,430 | 1,752,774 | 8,677 | 100.0 |

給水栓数ハ中止栓数ヲ除ク、大正三年度ハ九月ヨリ三月迄ノ配水量デアル

く、依つて前述の第五期擴張計畫を立て、一日最大給水量五十萬立方メートルの目標のもとに着々工事中である。

昭和十三年度中の總配水量は實に61,9641千立方メートル、を算し一日最大配水量225,490立方メートル一日平均配水量は169,756立方メートルあり、大正三年の一日平均配水量8,677立方メートルに比すれば、約二十倍弱に當る激増振で、之は本市の大膨脹と市民文化の向上を如實に物語るものである。

下水道 本市の地勢は概して平坦であるが、大體東部覺王山の方面稍高地となつて居る。又本市は河川に乏しく僅に堀川、新堀川、中川があるが、何れも固有水量少な

下水道工事一覽表

| 工事概要 | 起工 | 竣工 | 工費 |
|---------------------|-------------|-------------|-------------|
| 當初名古屋市域下水道布設 | 明治41. 2. 19 | 大正12. 3. 31 | 2,432,000 |
| 舊熱田町始メ下水道擴張 | 44. 4. 1 | 12. 3. 31 | 2,021,769 |
| 熱田海岸堤塘並下水道築造 | 大正5. 1. 11 | 昭和2. 6. 7 | 600,029 |
| 第一回失教・市内東部下水道増築 | 14. 12. 25 | 大正15. 6. 20 | 284,383 |
| 第二回失教・市内西部下水道増築 | 15. 12. 17 | 昭和2. 3. 31 | 411,801 |
| 第三回失教・市内北部下水道増築 | 昭和2. 12. 3 | 3. 3. 31 | 517,317 |
| 第四回失教・市内東、北、西部下水道増築 | 3. 12. 1 | 4. 3. 31 | 391,823 |
| 堀留及熱田下水處理場築造 | 3. 7. 21 | 6. 3. 31 | 1,855,411 |
| 西部下水幹線築造 | 4. 3. 15 | 8. 3. 31 | 2,237,935 |
| 第五回失教・市内北、西、南部下水道増築 | 4. 11. 21 | 6. 3. 31 | 792,266 |
| 第六回失教・同 | 5. 7. 19 | 7. 3. 31 | 1,089,520 |
| 第七回失教・市内東、北、西部下水道増築 | 5. 11. 14 | 8. 3. 31 | 2,922,017 |
| 下水道及下水處理場増築 | 7. 9. 1 | 9. 12. 31 | 1,888,001 |
| 市内各所下水道増築 | 9. 11. 19 | 11. 3. 31 | 356,110 |
| 下水處理場、汚泥處理場増築 | 10. 2. 28 | 11. 3. 3 | 811,502 |
| 市内各所下水道増築 | 10. 12. 17 | 11. 3. 31 | 507,967 |
| 市内各所下水道擴張及河川淨化設備築造 | 11. 8. 7 | 工事中 | ※ 2,310,000 |
| 市内各所下水道増築 | 13. 4. 1 | 同 | ※ 290,000 |

備考 ※印ヲ附セルハ工費豫算額

く下水悪水の排除には、少なからず悩まされて來た。依つて明治二十六年初めて下水道に關する調査を開始し、同四十年工事に着手し爾來本市の發展に伴ひ別表の如く、數次に亘る擴張工事を施行し、大正十二年三月を以て、舊市域に屬する大部分の下水工事を完了した。其の後新市域中人口稠密で比較的繁華な部分に對して逐次擴張工事を施行し完成に努めて來た。之が排水系統は全市を地勢の關係上、堀川、新堀川、笈瀬川、黒川、山崎川及中川運河流域の各區に大別して、所謂直角式下水網の

配置法に依り排水渠を施設し、凡て合流法を採り、汚水雨水同一管を以て各所屬排水路に導入してゐる、而して排水路の汚水雨水は、下水處理場の處理區域内に於ては汚水集水管を設けて之を遮り、各處理場に取り入れ（汚水集水管は、降雨時には晴天時汚水量の三倍迄を收容流下する）淨化處理を行ひ、爾餘の嵩水は隨所に設けられた溢流堰、跳越堰等を以て排水路より直接河川に放流してゐる。

現在排水渠の施設された區域の排水面積は、大體 5,714 ヘクタールに及び、其の區域内に居住する人口は昭和十一年十月末調査に依ると 780,540 人である。此の内下水處理場の處理區域に屬する 4,500 ヘクタール、即ち排水區域の 79% は、屎尿の下水道放流が可能とされて居る。

此の區域内の人口は 736,000 人である。

下水管は凡て土管及鐵筋コンクリート管を使用し、平均六十米毎に人孔を設け且道路の兩側に側溝を築造し、約三十六米毎に一個の雨水柵を設置し、下水本管に連絡せしめてゐる。

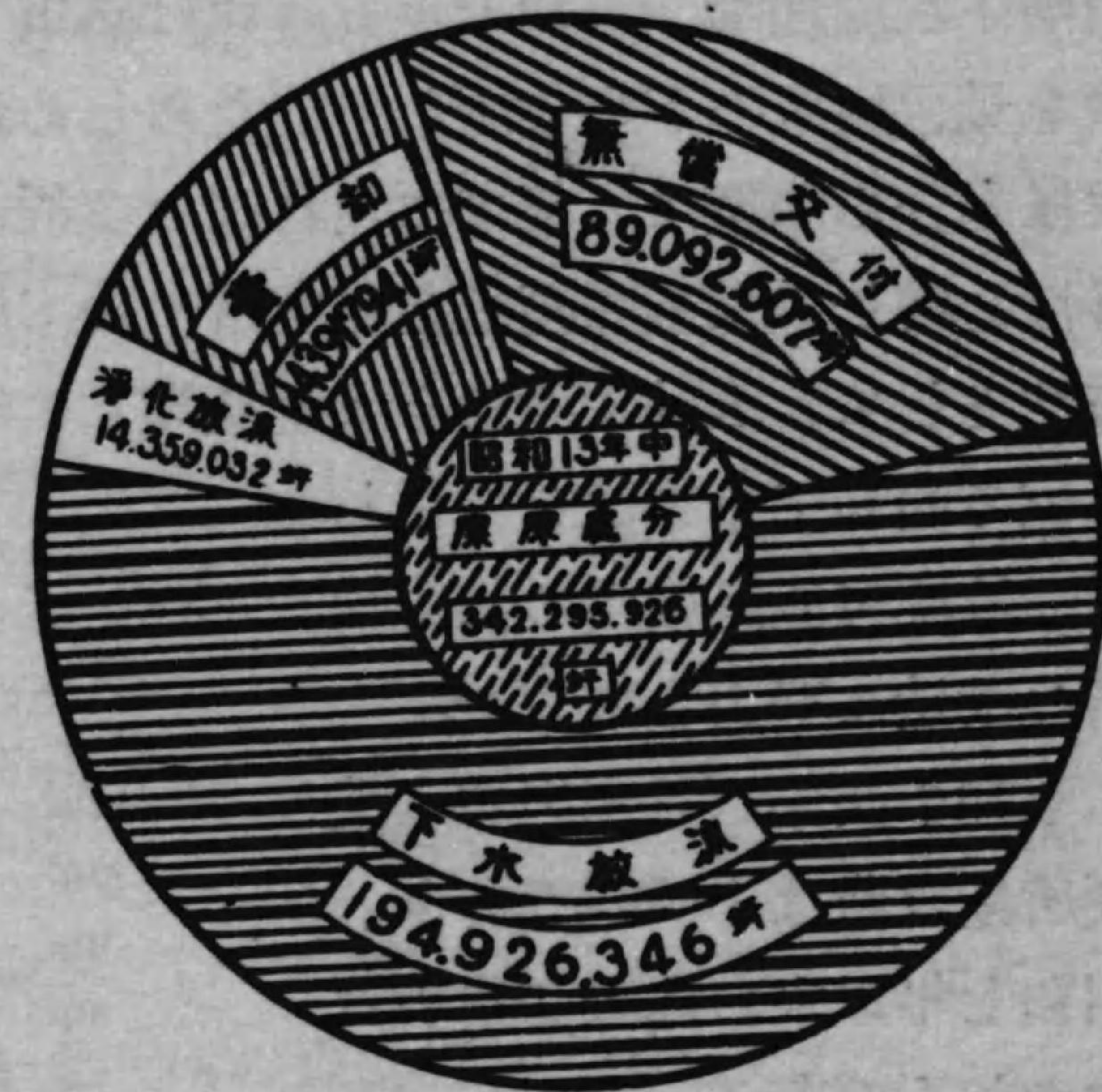
下水管の大きさは内徑 230 耗より、最大 360 耗に及び此の内 450 耗以下は陶管、450 耗以上は鐵筋コンクリート管を用ひ、下水管の布設延長は昭和十三年度末現在 784,348 米、全市道路延長の四分の一弱に達してゐる。

| 年度末 | 下水管延長 米 | 下水道建設費 圓 |
|---------|------------|-------------|
| 昭和13年度末 | 784,348 | 21,033,419 |
| 12年度末 | 770,161 | 20,674,934 |
| 9年度末 | 685,545 | 17,781,511 |
| 6年度末 | 559,209 | 14,189,760 |
| 3年度末 | 436,172 | 7,095,369 |
| 大正14年度末 | 361,478 | 5,033,726 |
| 11年度末 | 342,485 | 4,453,769 |
| 8年度末 | 314,572 | 2,954,445 |
| 5年度末 | 276,281 | 2,336,305 |
| 2年度末 | 113,333 | 1,232,513 |
| 明治43年度末 | 1,456 | 144,281 |
| 40年度末 | 391 | 10,104 |

屎尿處分

本市の屎尿處分は總て市營であつて、大部分は請負制度に依り、一部を附近農民に汲取らせてゐる。而して汲取つた屎尿の大部分は下水道に放流して堀留、熱田、露橋、傳馬町の四下水處理場で淨化し、殘餘は販賣業者及附近沿海農村へ有償にて交付してゐる。

之れが沿革は明治末期頃本市が上下水道築造の財源を得る爲、當時尙有價物であつた屎尿を市に於て蒐集の上其の賣却代金を以て、水道事業の完備費用に充てんとし、且つ都市衛生確立の目的を以て市營を斷行したことにある。爾來舊市域



の大部分に亘る市汲取區域内の屎尿は年額十二萬圓の料金納付

(最近五ヶ年ニ於ケル屎尿ノ搬出狀況)

| 年 | 屎尿搬出 計 | 一日平均 計 |
|-------|-----------|-----------|
| 昭和13年 | 343,097 | 938.0 |
| 12年 | 311,855 | 854.4 |
| 11年 | 304,736 | 832.6 |
| 10年 | 288,421 | 792.2 |
| 9年 | 264,358 | 724.0 |

契約の下に、此の目的の爲設立せられた會社に汲取處分を請負はしめて來たが、大正十一年に至り、會社との契約を解除し、全區域について市直

營と一部は從來通り附近農民をして無償汲取搬出をなさしめてゐたが、昭和三年度以降直營汲取制度を漸次請負制度に改變す

配置法に依り排水渠を施設し、凡て合流法を採り、汚水雨水同一管を以て各所屬排水路に導入してゐる、而して排水路の汚水雨水は、下水処理場の処理区域内に於ては汚水集水管を設けて之を遮り、各處理場に取り入れ（汚水集水管は、降雨時には晴天時汚水量の三倍迄を收容流下する）淨化處理を行ひ、爾餘の嵩水は隨所に設けられた溢流堰、跳越堰等を以て排水路より直接河川に放流してゐる。

現在排水渠の施設された區域の排水面積は、大體 5,714 ヘクタールに及び、其の区域内に居住する人口は昭和十一年十月末調査に依ると 780,540 人である。此の内下水處理場の處理區域に屬する 4,500 ヘクタール、即ち排水區域の 79% は、尿尿の下水道放流が可能とされて居る。

此の區域内の人口は 736,000 人である。

下水管は凡て土管及鐵筋コンクリート管を使用し、平均六十米毎に人孔を設け且道路の兩側に側溝を築造し、約三十六米毎に一個の雨水柵を設置し、下水本管に連絡せしめてゐる。

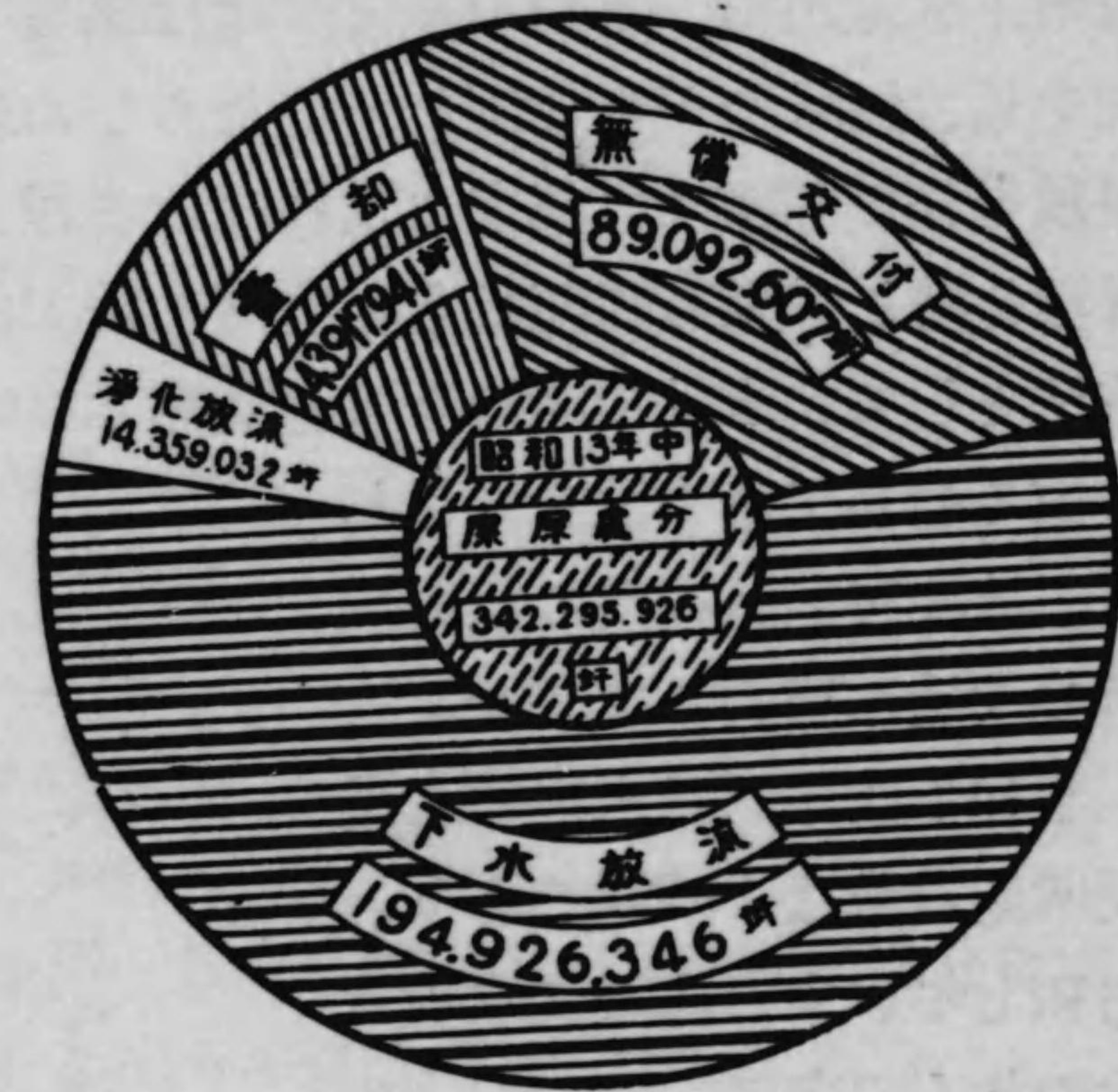
下水管の大きさは内徑 230 耗より、最大 360 耗に及び此の内 450 耗以下は陶管、450 耗以上は鐵筋コンクリート管を用ひ、下水管の布設延長は昭和十三年度末現在 784,348 米、全市道路延長の四分の一弱に達してゐる。

| 年度末 | 下水管延長 米 | 下水道建設費 圓 |
|---------|------------|-------------|
| 昭和13年度末 | 784,348 | 21,033,419 |
| 12年度末 | 770,161 | 20,674,934 |
| 9年度末 | 685,545 | 17,781,511 |
| 6年度末 | 559,209 | 14,189,760 |
| 3年度末 | 436,172 | 7,095,369 |
| 大正14年度末 | 361,478 | 5,033,726 |
| 11年度末 | 342,485 | 4,453,769 |
| 8年度末 | 314,572 | 2,954,445 |
| 5年度末 | 276,281 | 2,336,305 |
| 2年度末 | 113,333 | 1,232,513 |
| 明治43年度末 | 1,456 | 144,281 |
| 40年度末 | 391 | 10,104 |

尿尿處分

本市の尿尿處分は總て市營であつて、大部分は請負制度に依り、一部を附近農民に汲取らせてゐる。而して汲取つた尿尿の大部分は下水道に放流して堀留、熱田、露橋、傳馬町の四下水處理場で淨化し、殘餘は販賣業者及附近沿海農村へ有償にて交付してゐる。

之れが沿革は明治末期頃本市が上下水道築造の財源を得る爲、當時尙有價物であつた尿尿を市に於て蒐集の上其の賣却代金を以て、水道事業の完備費用に充てんとし、且つ都市衛生確立の目的を以て市營を斷行したことにある。爾來舊市域



の大部分に亘る市汲取區域内の尿尿は年額十二萬圓の料金納付

(最近五ヶ年ニ於ケル尿尿ノ搬出狀況)

| 年 | 尿尿搬出 計 | 一日平均 計 |
|-------|-----------|-----------|
| 昭和13年 | 343,097 | 938.0 |
| 12年 | 311,855 | 854.4 |
| 11年 | 304,736 | 832.6 |
| 10年 | 288,421 | 793.2 |
| 9年 | 264,358 | 724.0 |

契約の下に、此の目的の爲設立せられた會社に汲取處分を請負はしめて來たが、大正十一年に至り、會社との契約を解除し、全區域について市直

營と一部は従來通り附近農民をして無償汲取搬出をなさしめてゐたが、昭和三年度以降直營汲取制度を漸次請負制度に改變す

ることとし、汲取りたる屎尿は、全部市直営にて処分することとした。更に昭和六年度に於ては市直営区域全部を請負に付したが、斯かる汲取り制度の改変のみでは經濟上、衛生上屎尿處分の根本的解決を告ぐるに至らないので、昭和二年度以降下水處理場並屎尿流注場の建設に着手し、昭和五年十月には堀留、熱田兩下水處理場、昭和十年五月には熱田下水處理場東分場の完成を見、屎尿の下水放流を可能ならしめ現在に至つてゐるが、屎尿處分の問題は大都市になればなる程、益々其の重要性と困難性を増して來る問題であり本市に於ては之が根本的解決の一方法として、水洗便所の普及を奨励し、昭和八年以來月賦制度に依る簡易工事方法を採用し

て、放流可能区域内の汲取り便所の改造に努力して來た。

昭和十四年八月末現在水洗便所施設數は 13,952 であり、昭和七年以來の施設工事數は次の如くである。

| | 施設數 | 累 計 |
|-----------|-------|--------|
| 昭和14年8月末迄 | 491 | 13,952 |
| 13年 | 1,666 | 13,461 |
| 12年 | 2,500 | 11,795 |
| 11年 | 2,897 | 9,295 |
| 10年 | 2,677 | 6,398 |
| 9年 | 2,266 | 3,721 |
| 8年 | 1,435 | 1,455 |
| 7年 | 20 | 20 |

塵芥及汚泥

本市に於て塵芥處分の組織的に行はれるに至つたのは、汚物掃除法に依つて各戸で蒐集した塵芥を、市に於て搬出處分する様になつた明治三十三年十月以後の事である。其の後大正三年東區千種町に始めて塵芥焼却爐を建設し一部の塵芥を焼却處理したが、小規模の爲充分能力を發揮することが出來ず、大正六年稍大規模に爐を改造した。然るに世界大戰後に於ける、本市商工業の異常なる殷賑に伴ひ、人口増加の必然の結果として塵芥の産出量を高め、且大正十年の

隣接町村の合併を行つた爲、從來の如く、其の大部分を埋立處分に依ることは不可能となり、都市衛生上寒心に耐へないものがあるので、全部の塵芥を焼却處分する計畫を樹て、數次に亘る増設を経て、次表の如き設備を有するに至つた。尙塵芥搬出の一日平均は四十七萬噸である。而して焼却所に故障があつ

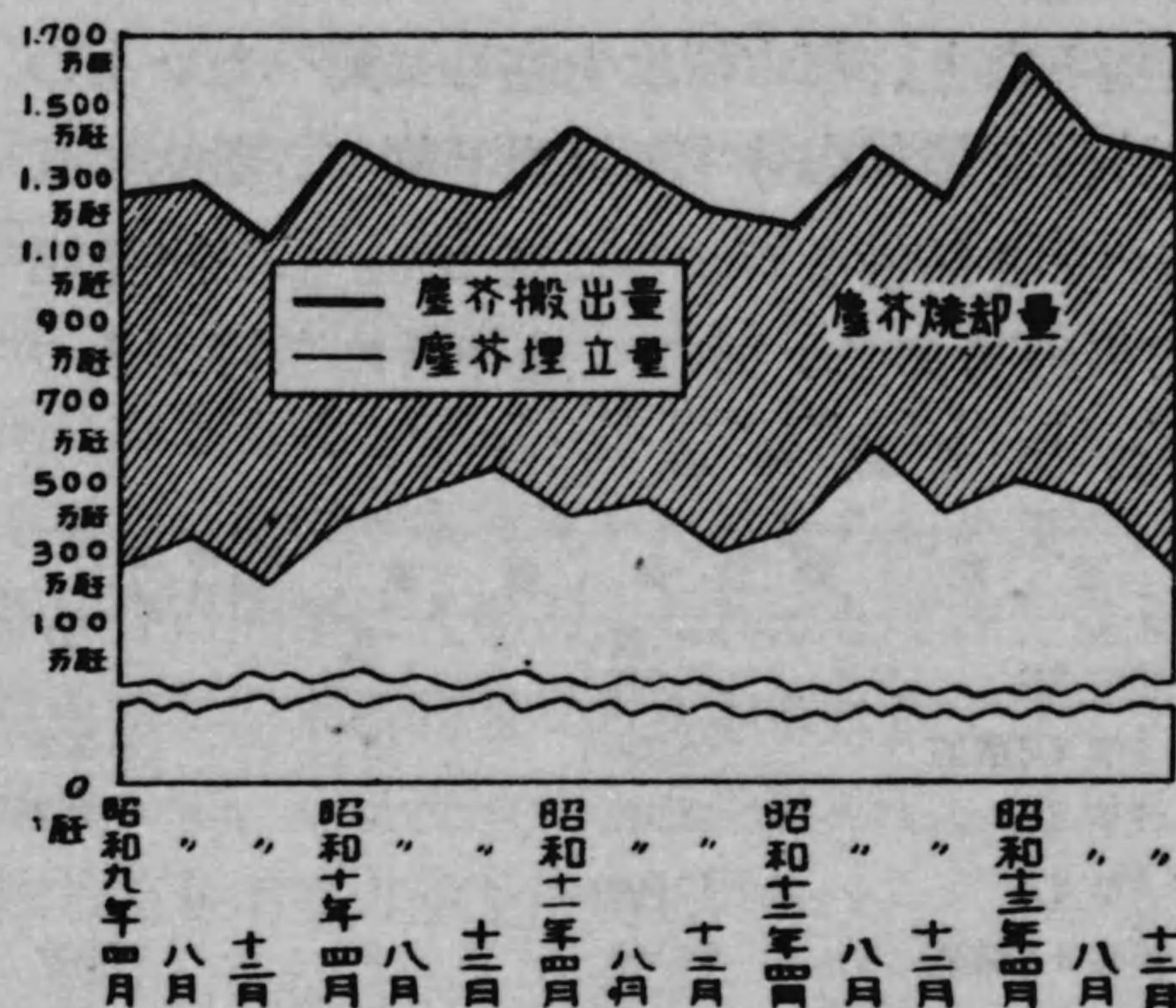
市營塵芥焼却場一覽

| 名 稱 | 建 設 期 | 建 設 費 | 爐 數 | 燒 却 能 力 (1日=付) |
|----------|------------|---------|-----|-------------------|
| 下飯田塵芥焼却場 | 大正15年 3月 | 97,642 | 基 | 基 |
| | 昭和 4年 4月増築 | 58,536 | 15 | 126,562 |
| 庄内塵芥焼却場 | 7年 8月 | 74,512 | 6 | 67,500 |
| 則武塵芥焼却場 | 大正 6年 8月 | 12,600 | | |
| | 13年 1月増築 | 52,605 | 6 | 42,000 |
| 八事塵芥焼却場 | 昭和 7年 3月 | 86,009 | 8 | 90,000 |
| 高畑塵芥焼却場 | 5年 2月 | 118,118 | | |
| | 6年 6月増築 | 37,079 | 20 | 168,750 |
| 鴨浦塵芥焼却場 | 8年 3月 | 39,408 | 3 | 33,750 |

て焼却し得ない場合の豫備として、露天焼却又は埋却處分をする爲、新市部及市外に十七ヶ所の假置場を設備してゐる。

次表に依つて見るも塵芥の搬出量は、人口の著増に伴ひ累年増加の傾向を示してゐるも、埋立量は漸次減少の傾向に在り、即ち、塵芥の完全なる焼却が行はれつゝ在る今日、焼却量の増加は都市保健衛生上本市の大いに誇りとする處であるが、最近時は時局柄出來る丈塵芥中より有價物を蒐集して利用することが資源愛護の目的にもかなひ、且つ處理費の低減を期する所以でもあるので、之が實行並に利用の道を構する様大いに市民運動をおこしてゐる。

最近五ヶ年に於ける塵芥処理状況



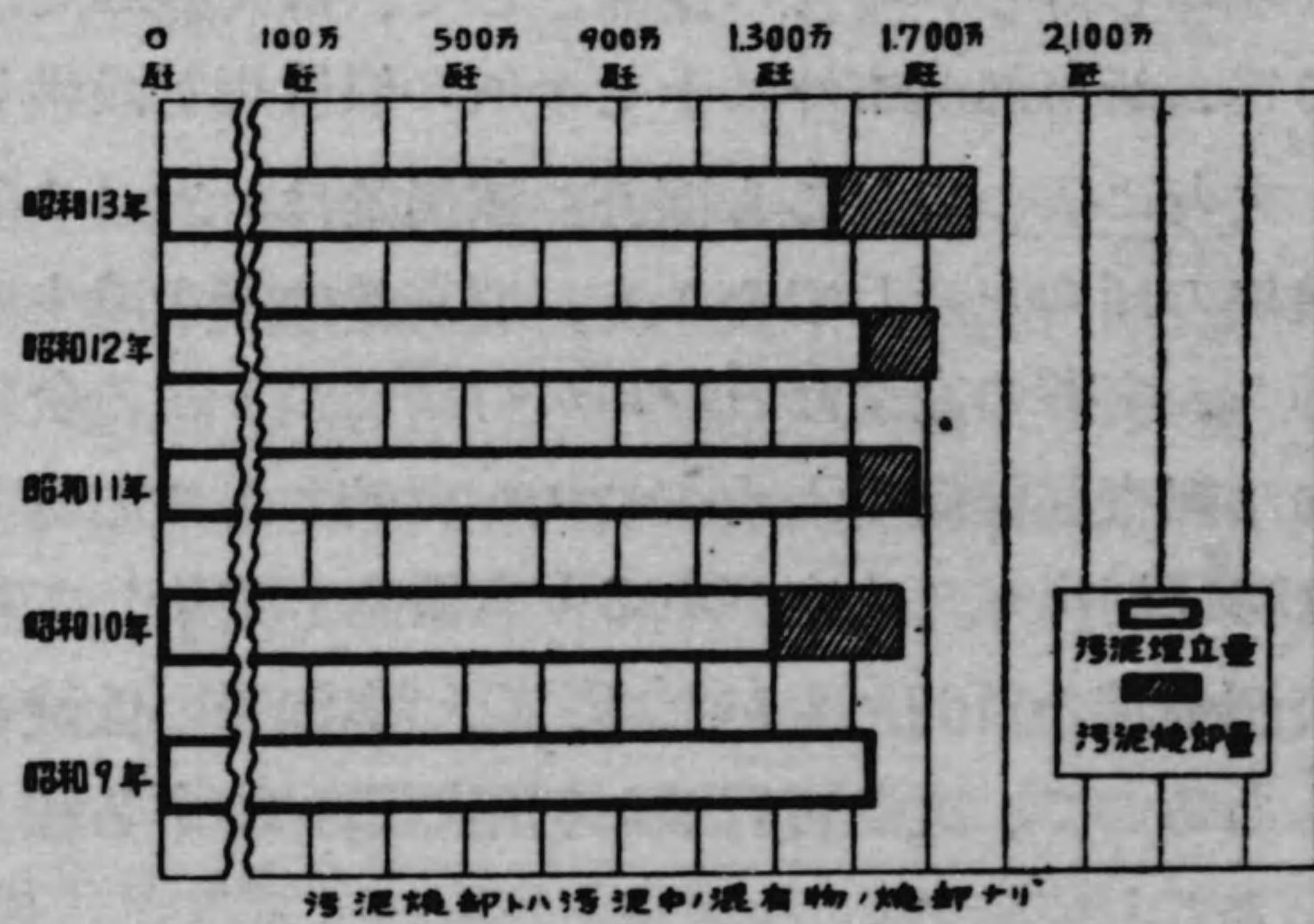
本市の下水処理場より生ずる汚泥は一日平均約五萬噸に達するが、此の汚泥中實際の汚泥は僅に1%乃至2%に過ぎない状態に在り、従つて其の嵩が非常に多い。本市は當初此の汚泥を海

中へ捨てゝゐたが、次第に其の量が増加し、之が處理として昭和七年三月以降は汚泥輸送管により、天白河口の天白汚泥處理場

に唧筒壓送し、此處に於て消化法、砂濾法の二法に依り之を處理してゐる。

消化法とは汚泥を腐敗せしめて消化する方法で、即ち汚泥をタン

最近五ヶ年に於ける汚泥處理状況



汚泥輸送管ハ汚泥中ノ泥有物ノ焼却ナリ

クの中に入れ、之に加熱して腐敗せしめるのである。一日平均處理能力は約650立方米に及び、副産物として熱量の高い瓦斯を産出し、消化槽の昇温及砂濾法により脱出した汚泥肥料の乾燥に使用してゐる。此の作用に依つて汚泥の容積は約四分の一乃至五分の一に縮少され、而して縮少された汚泥は外部に出され、これに生の汚泥を加へ砂濾法に依り汚泥肥料を生産する。砂濾法とは汚泥を砂床の上に運び乾燥せしめて容積を減少せしめる方法で、四十六個の砂床を備へ、此の總面積37,300平方

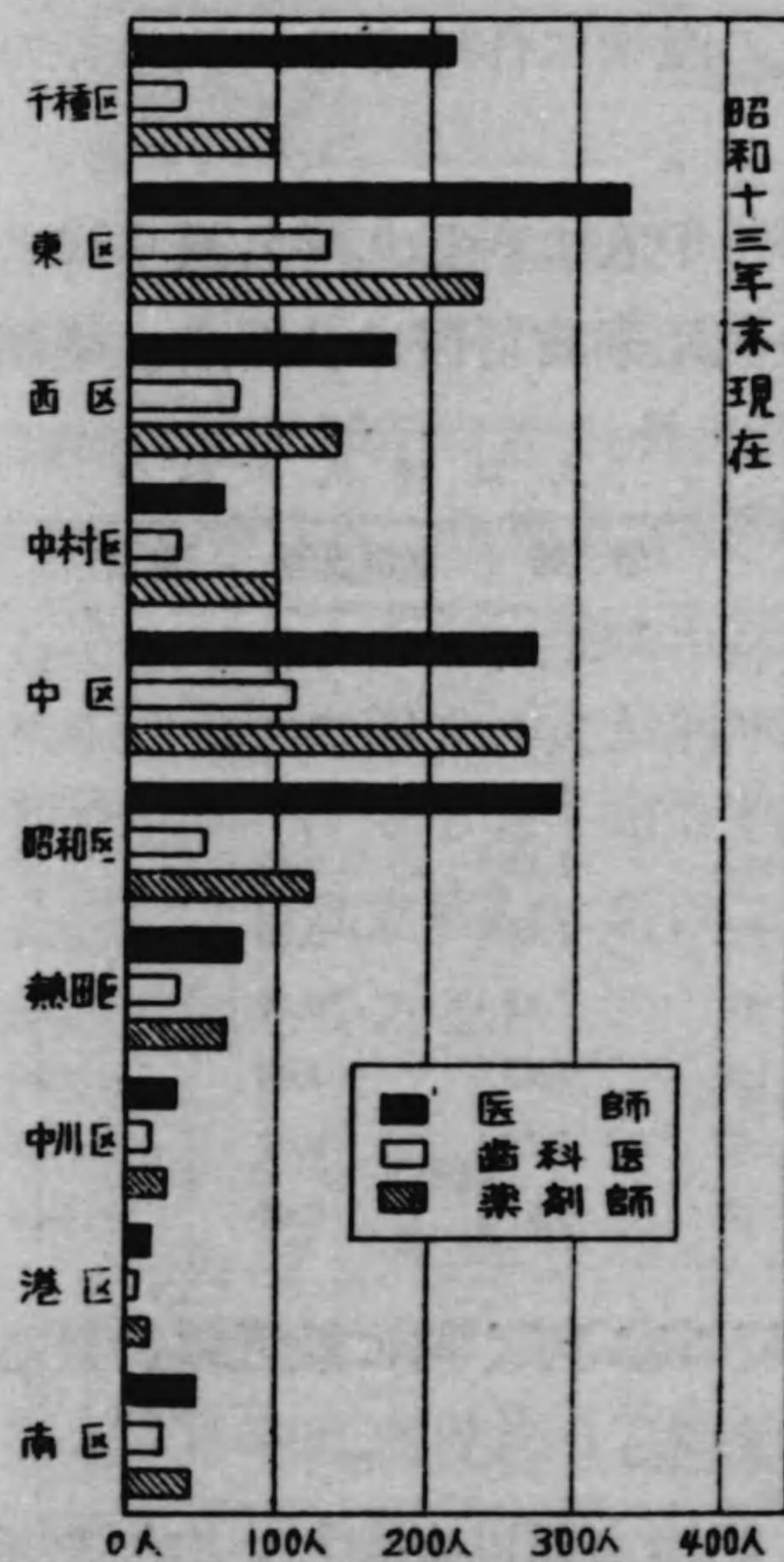
米に及び、一日平均約500立方米の汚泥を處理して居る。此の脱水した汚泥を更に乾燥し活性肥料として、昭和十三年度には43,526圓の賣上を見てゐる。

名古屋産活性汚泥肥料生産高

| | |
|--------|---------|
| 昭和13年度 | 2,306 噸 |
| 12年度 | 2,336 |
| 11年度 | 2,136 |
| 10年度 | 1,450 |
| 9年度 | 817 |
| 8年度 | 381 |

昭和8年度ハ8月ヨリ生産開始ノタメ8ヶ月分ナリ

凡そ都市の堅實なる發展の重大要素として、必要缺く可からざるものに市民の保健衛



生思想の普及啓發と、各種衛生施設の充實完備とがある。而も年々歳々人口集中の傾向著しき本市に於ては尙更である。本市に於ける昭和十三年末現在醫師の總數は 1,528 名で、人口千に付 1.25 名の割合であり、全國 0.75 名（昭和十一年末）東京府の 1.46 名、大阪府の 1.04 名に依つて見るも、醫師數に於ては相當充實せるものと言ひ得るであらう。別表に依り年次別に之を見れば人口一千人に對する醫師の比率は左程増加の傾向を見ないが、之は醫師數に於ては明治三十一年に比し 1,294 名の著増を示して居るにも係らず、他面人口の激増に伴はざるに依るものである。

齒科醫及藥劑師に在つては人口一千人に對し 0.43 名及 0.92 名にして、昭和十一年末に於ける全國比率齒科醫は 0.27 名、藥劑

| 種別 年次 | 醫師 | 齒科醫師 | 藥劑師 | 人口千人 = 付キ | | |
|----------|-------|------|-------|-----------|------|------|
| | | | | 醫師 | 齒科醫師 | 藥劑師 |
| 昭和13年 | 1,528 | 521 | 1,120 | 1.25 | 0.43 | 0.92 |
| 8年 | 1,114 | 419 | 641 | 1.16 | 0.35 | 0.54 |
| 3年 | 871 | 352 | 518 | 1.00 | 0.40 | 0.60 |
| 大正12年 | 792 | 300 | 350 | 1.21 | 0.46 | 0.53 |
| 7年 | 545 | 107 | 223 | 1.26 | 0.25 | 0.51 |
| 2年 | 592 | 50 | 201 | 1.32 | 0.11 | 0.45 |
| 明治41年 | 553 | 30 | 100 | 1.42 | 0.08 | 0.26 |
| 36年 | 337 | 19 | 62 | 1.13 | 0.07 | 0.22 |
| 31年 | 234 | 15 | 37 | 0.97 | 0.06 | 0.15 |

師は 0.38 名に比し、相當なる高率と云ふ可く殊に最近に於ける藥劑師の激増は最も甚しき状態である。

産婆、看護婦の總數に於ても、明治末期以來著しい増加を示

し、昭和十三年末現在に於ては、産婆 1,195 名、看護婦 2,949 名、内正看護婦 2,849 名、準看護婦 100 名を算してゐる。

| | 産婆 | 看護婦 |
|--------|-------|-------|
| 昭和13年末 | 1,195 | 2,949 |
| 8年末 | 976 | 2,081 |
| 3年末 | 707 | 1,587 |
| 大正12年末 | 547 | 1,137 |
| 7年末 | 332 | 374 |
| 2年末 | 305 | 349 |

市内に於ける官公私立病院數は昭和十三年末現在總數 55 にして、其の科目別は次の如くである。

| | | | | | |
|------------------|----|-------|---|------|----|
| 全科 | 11 | 内科 | 9 | 外科 | 6 |
| 小兒科 | 3 | 眼科 | 1 | 産婦人科 | 10 |
| 皮膚花柳病 生殖器泌尿病科 | 4 | 耳鼻咽喉科 | 3 | 腦神經科 | 4 |
| 肛門科 | 4 | | | | |

而して、其の病床總數 3,356 を有し、336 名の醫師、90 名の藥劑師、看護婦 956 名が勤務してゐる。之が昭和十三年中の入院患者總數は 79,758 名で、外來患者總數は 137,028 名、年末現在入院患者 2,041 名、外來患者數 81,290 名である。

以上の中、市立病院は市民病院、市民病院分院、城東病院、八事療養所の四で、之が病床總數 672、醫師 70 名、藥劑師 21 名看護婦 220 名である。市立病院に於ける入院並に外來延患者數と前記官公私立病院に於ける入院並外來延患者數とを比較すれば次の如くである。

| | 入院延患者數 | 外來延患者數(昭和13年中) |
|--------|-----------|----------------|
| 官公私立病院 | 1,224,375 | 2,274,965 |
| 市立病院 | 193,656 | 534,145 |

即ち全市に於ける官公私立病院の入院延患者數の一割五分八厘を、外來延患者數の二割三分五厘弱を、夫々市立病院に於て取扱つて居る譯である。

結核療養施設 本市に於ける結核療養設備は未だ完全の域に達せず、僅に市立八事療養所及日本赤十字社八事療養所を數ふるのみである。

市立八事療養所 大正六年四月内務大臣より本市に對し結核療養所の設置を命ぜられたので、市外八事山中（現在昭和區川名山町）に敷地を選定し、大正十一年六月竣功を見たのであるが、其の後入所希望者の増加に伴ひ逐次擴張を施し現在定員 224 名、建物總面積は 5,148 平方米である。本所は環境上病毒傳播の虞ある結核患者の收療の機關であるが併せて之が早期診断をも行つて居る。市立八事療養所並に日赤八事療養所に於ける最近五ヶ年間の取扱患者數は次の如くである。

| 名 稱 | 前年度ヨリ | | | 入 院 | | | 退 院 | | | 死 亡 | | | 年度末現在 | | |
|---------------------|-------|-----|----|-----|-----|-----|-----|-----|----|-----|-----|-----|-------|-----|----|
| | 總數 | 男 | 女 | 總數 | 男 | 女 | 總數 | 男 | 女 | 總數 | 男 | 女 | 總數 | 男 | 女 |
| (市設) | | | | | | | | | | | | | | | |
| 八 事 療 養 所 | 224 | 175 | 49 | 530 | 337 | 193 | 150 | 108 | 42 | 383 | 235 | 148 | 221 | 169 | 52 |
| (其他) | | | | | | | | | | | | | | | |
| 日本赤十字社愛知 支部八事療養所 | 49 | 40 | 9 | 141 | 100 | 41 | 87 | 71 | 16 | 53 | 40 | 13 | 50 | 38 | 12 |
| 合 計 | 273 | 215 | 58 | 671 | 437 | 234 | 237 | 179 | 58 | 436 | 275 | 161 | 271 | 207 | 64 |
| 昭和 11 年度 | 270 | 201 | 69 | 617 | 401 | 216 | 239 | 169 | 70 | 375 | 219 | 156 | 273 | 215 | 58 |
| 10 年度 | 303 | 220 | 83 | 612 | 405 | 207 | 249 | 181 | 68 | 368 | 231 | 137 | 315 | 225 | 90 |
| 9 年度 | 250 | 185 | 65 | 635 | 432 | 203 | 256 | 183 | 73 | 361 | 238 | 123 | 283 | 202 | 81 |
| 8 年度 | 245 | 180 | 65 | 617 | 394 | 223 | 251 | 170 | 81 | 361 | 219 | 142 | 250 | 185 | 65 |

一般に結核患者數は結核に依る死亡者數の大凡十倍に上るのであると云ふこと、及本市に結核以外の呼吸器系疾患に依る死亡者の相當大であることから推定して、本市内の結核患者數は

大凡二、三萬人を算するものと思はれる。然るに結核患者の特設ベットは、患者總數の少くとも一割を要し、本市の現状を見れば、八事療養所の收容定員 224 名は餘りに少く、療養施設の新設は本市衛生行政上現下の最大急務であるに鑑み、更に豫算七十五萬圓を以て定員 750 名の收容設備を有する大擴張計畫を立て愛知郡天白村大字梅森坂に敷地九萬九千七百九十二坪を買収し工事を開始せる處、最近に至り 200 名收容の第一期工事を終り、近く開所の豫定である。

尙特別健康地區に於て昭和十四年一月中旬より三月末に亘りて松ヶ枝、旗屋、森後、三地區に就き結核罹患狀況調査を実施した。

マントー氏反應検査

傳研舊ツベルクリン千倍液 0.1 耗使用

判定二十四時間經過後

發赤浸潤直徑 0.7 糎以上を陽性とす

| 第一學年 | | | 第二學年 | | | 第三學年 | | | 第四學年 | | |
|------|------|-----|------|------|-----|-------|-------|-----|------|------|-----|
| 検査人員 | 陽性者數 | 率 | 検査人員 | 陽性者數 | 率 | 検査人員 | 陽性者數 | 率 | 検査人員 | 陽性者數 | 率 |
| 465 | 127 | 27% | 528 | 170 | 32% | 472 | 181 | 33% | 493 | 167 | 33% |
| 第五學年 | | | 第六學年 | | | 計 | | | | | |
| 検査人員 | 陽性者數 | 率 | 検査人員 | 陽性者數 | 率 | 検査人員 | 陽性者數 | 率 | | | |
| 435 | 174 | 38% | 454 | 206 | 45% | 2,847 | 1,025 | 36% | | | |

陽性反應者全部に對し一週間に亘り檢温及理學的診査の結果 422 名を選び、レントゲン寫眞を撮影し其の一部に就きて赤血球沈降速度検査を行ひ左記の結果を得た。

| 撮影数 | 陽性者ニ對スル率 | 七 歳 | | 八 歳 | | 九 歳 | | 十 歳 | | | |
|-------|----------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|------|----------|
| | | 養護ヲ要ス | 治療ヲ要ス | 養護ヲ要ス | 治療ヲ要ス | 養護ヲ要ス | 治療ヲ要ス | 養護ヲ要ス | 治療ヲ要ス | | |
| 422 | 41% | 2 | — | 11 | 4 | 9 | 5 | 5 | 3 | | |
| | | 11 歳 | | 12 歳 | | 13 歳 | | 14 歳 | | 計 | 陽性者ニ對スル% |
| 養護ヲ要ス | 治療ヲ要ス | 養護ヲ要ス | 治療ヲ要ス | 養護ヲ要ス | 治療ヲ要ス | 養護ヲ要ス | 治療ヲ要ス | 養護ヲ要ス | 治療ヲ要ス | | |
| 5 | 4 | 15 | 6 | 4 | 3 | 5 | 5 | 56 | 30 | 8.3% | |

診断状況左の如し。

| 要 養 護 者 | | 巴 腺 結 核 | | | | |
|---------|---------------|----------|----------|-------|--------|-----|
| 肺門淋腺結核 | (肺門陰嚢増大肺紋理増強) | 硬 性 初期感染 | 肺門淋(肺門炎) | 初期症候群 | 播種性肺結核 | 肋膜炎 |
| | 55 | 1 | 19 | 8 | 1 | 2 |

罹患學童に就ては學校、父兄と連絡をとり適切なる治療處置をとらしめ尙保健婦をして訪問指導を行はしめ又松ヶ枝地區罹患學童家庭に對しては家庭の一齊檢診を行ひ目下詳細なる調査を進めてゐる。

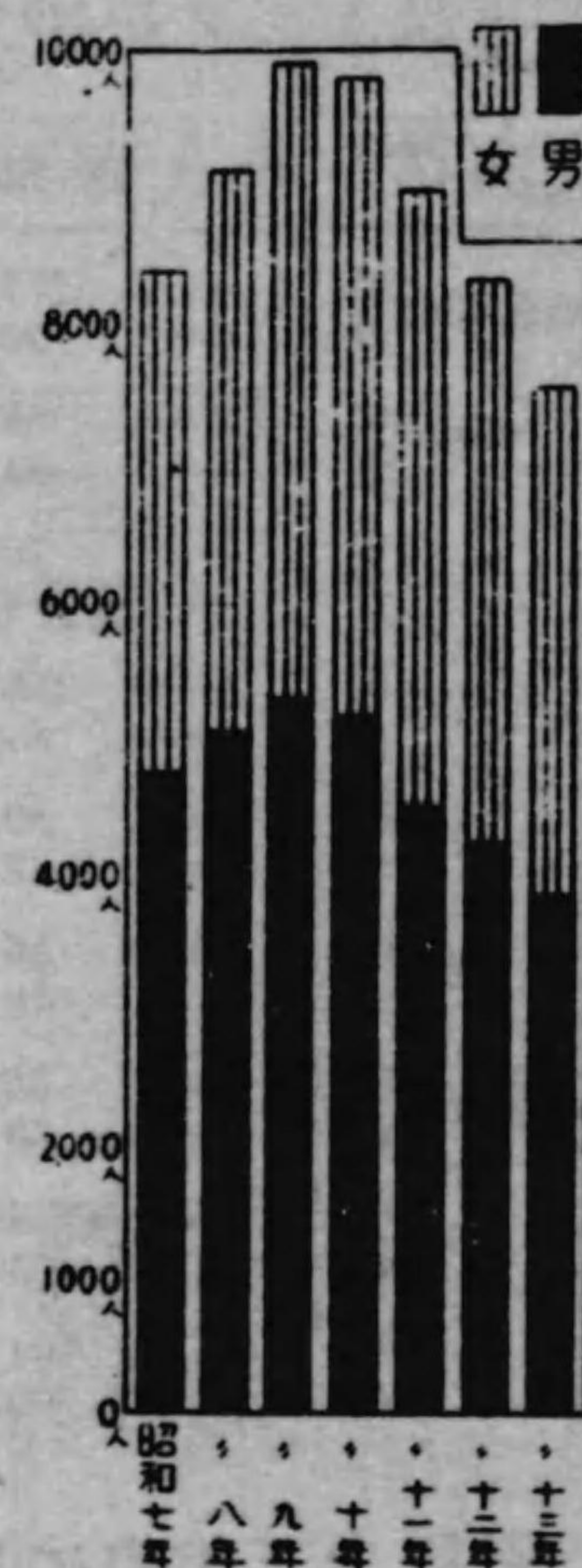
診 療 所 本市の住民にして醫療の資力乏しき患者の診療機關として、市内に四ヶ所の市立診療所を設置してゐる。尙診療は方面委員に於て醫療を受くる資力なきことの證明を受けて來た者には無料、其の他の者には實費以下の費用を徴集して居る。

市立四診療所開設以來の診療患者數に就いて見るに、昭和七年中には男4,737名、女3,601名、計8,338名にして、昭和九年迄は漸増の傾向を示してゐたが其の後は減少の一途を辿り、昭和十三年中の患者數は男3,760名、女3,673名、計7,433名となつて

ゐる。此の事實は從來診療所に於て療養を受けてゐた者が市民病院設備の完成に依り、市民病院の方へ移動せるを示すものである。

委託施療 現下の社會狀勢に鑑み、本市に於ける診療所の増設を計ることは極めて緊要な事であるが、之が實現は相當困難を伴ふので、其の缺陷を補ひカード者に對する醫療保護を徹底せしむる爲、昭和五年度より、本市醫師會と協定の上診療、往診並投薬を之に委託し更に昭和六年より縣齒科醫師會名古屋支部並縣藥劑師會第一、第二、第三、第四支部及各區方面事業助成會等と協定し、齒科診療及投薬の委託を行つてゐる。

最近七ヶ年に於ける市立診療所患者數



傳 染 病 本市に於ける傳染病患者發生數は、過去累年に亘り其の比率より見て五大都市中最も低いのは

六大都市傳染病患者發生死亡數 括目に値するものがある。

(昭和11年中)

| | 發生數 | 死 亡 | 人口千ニ對スル發生數 |
|-----|--------|-------|------------|
| 名古屋 | 1,627 | 310 | 1.45 |
| 東京 | 30,167 | 5,094 | 4.96 |
| 大阪 | 13,730 | 2,469 | 4.43 |
| 京都 | 5,888 | 866 | 5.32 |
| 神戸 | 2,370 | 374 | 2.47 |
| 横 濱 | 2,321 | 349 | 3.14 |

る。勿論人口の増加に伴ひ實數に於ては漸増の傾向に在るのであるが、尙他都市に比し衛生都市としての本市は絶對優位を占め本市民

の次に誇りとする處である。

傳染病患者發生數

| 年次 | コレラ | 赤痢 | 腸チフス | パラチフス | 痘瘡 | 猩紅熱 | チフテリア | 流行性腦脊髄膜炎 | 合計 |
|---------|-----|-----|------|-------|-----|-----|-------|----------|-------|
| 昭和13年 男 | — | 277 | 316 | 21 | 1 | 145 | 223 | 2 | 985 |
| 昭和13年 女 | — | 226 | 278 | 13 | — | 135 | 214 | 1 | 867 |
| 8年 男 | — | 86 | 621 | 93 | 1 | 179 | 43 | 2 | 1,025 |
| 8年 女 | — | 64 | 590 | 78 | — | 175 | 45 | 1 | 953 |
| 3年 男 | — | 70 | 475 | 19 | 6 | 40 | 47 | — | 657 |
| 3年 女 | — | 74 | 404 | 22 | 3 | 45 | 43 | — | 591 |
| 大正12年 男 | — | 106 | 447 | 20 | — | 10 | 43 | 4 | 630 |
| 大正12年 女 | — | 61 | 351 | 23 | — | 10 | 31 | 3 | 479 |
| 7年 男 | — | 89 | 247 | 17 | 2 | 7 | 79 | — | 441 |
| 7年 女 | — | 89 | 204 | 13 | 1 | 12 | 69 | — | 388 |
| 2年 男 | 1 | 56 | 86 | 40 | — | 5 | 111 | — | 299 |
| 2年 女 | — | 40 | 62 | 32 | — | 4 | 106 | — | 244 |
| 明治41年 男 | — | 35 | 78 | — | 246 | 6 | 209 | — | 574 |
| 明治41年 女 | — | 59 | 46 | — | 113 | 5 | 144 | — | 367 |
| 36年 男 | 1 | 74 | 66 | — | — | — | 143 | — | 284 |
| 36年 女 | 1 | 55 | 47 | — | — | — | 123 | — | 226 |
| 31年 男 | — | 104 | 106 | — | 5 | — | 209 | — | 424 |
| 31年 女 | — | 102 | 72 | — | — | 1 | 209 | — | 384 |

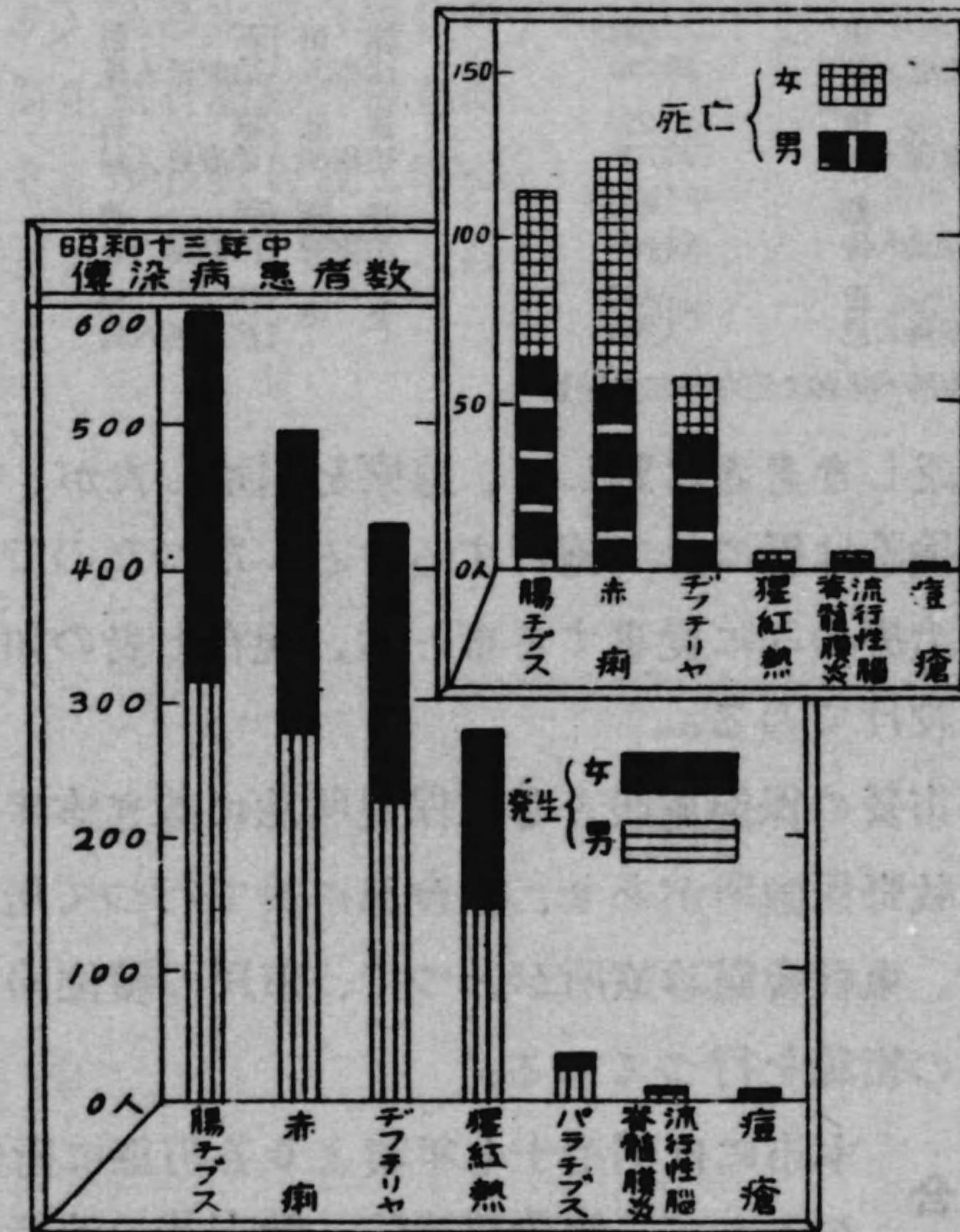
昭和十三年中に於ける法定傳染病患者發生數を各區別に見るに、其の發生率に於ては昭和區最も多く、港區之に次ぎ、千種、熱田、東、西、南、中川、中、中村の順序となつて居り、而して發生者の死亡率から見れば南區最も大にして中川、東、中村

傳染病患者區別發生死亡數 (昭和13年中)

| 區別 | 發生 | 死亡 | 人口千=對スル發生率 | 發生數百=對スル死亡率 |
|----|-----|----|------------|-------------|
| 千種 | 163 | 21 | 1.72 | 12.9 |
| 東 | 296 | 60 | 1.91 | 20.3 |
| 西 | 277 | 36 | 1.49 | 13.0 |
| 中村 | 120 | 23 | 1.07 | 19.2 |
| 中 | 244 | 45 | 1.26 | 18.4 |
| 昭和 | 337 | 49 | 2.06 | 14.5 |
| 熱田 | 140 | 27 | 1.53 | 19.3 |
| 中川 | 98 | 20 | 1.30 | 20.4 |
| 港 | 77 | 11 | 1.79 | 14.3 |
| 南 | 100 | 21 | 1.44 | 21.0 |

之に次ぎ最少は千種區である。

尙之を病類別に見れば其の發生數に於ては腸チフスも最多く549名を數へてゐるが、死亡數に於ては赤痢の124名が最大である。



トラホーム治療所

トラホーム豫防法に基いて本市に對し其の治療所の設置を命ぜられたので、宿屋料理店等の接客業者其の他特殊區域の住民に對して檢診を行ふため大正九年九月市役所内に之が治療所を設置し檢診に併せて

市立トラホーム治療所患者數 (昭和13年中)

| | | | |
|-------------|--------|-------------|---------|
| 百人 (新患) | 335 | 笹島 (新患) | 516 |
| 治療所 (治療延人員) | 23,429 | 治療所 (治療延人員) | 48,236 |
| 金作 (新患) | 392 | 平野 (新患) | 670 |
| 治療所 (治療延人員) | 43,757 | 治療所 (治療延人員) | 59,623 |
| 下奥 (新患) | 1,325 | 八熊 (新患) | 308 |
| 治療所 (治療延人員) | 64,162 | 治療所 (治療延人員) | 26,379 |
| 廣路 (新患) | 334 | 旗屋 (新患) | 453 |
| 治療所 (治療延人員) | 18,794 | 治療所 (治療延人員) | 49,462 |
| 御器所 (新患) | 223 | 眞砂 (新患) | 1,043 |
| 治療所 (治療延人員) | 20,520 | 治療所 (治療延人員) | 21,953 |
| 都通 (新患) | 609 | 呼羅 (新患) | 451 |
| 治療所 (治療延人員) | 43,022 | 治療所 (治療延人員) | 11,664 |
| 白金 (新患) | 165 | 全市 (新患) | 6,824 |
| 治療所 (治療延人員) | 1,363 | 治療所 (治療延人員) | 432,364 |

白金治療所へ昭和十三年十二月開始

醫療の資に乏しき患者に對して、施療を開始したが、大正十四年二月以來檢診は縣に於て施行することゝなつたので、本市に於ては専ら治療のみに従事する事とし、現在上表の如く治療所十三ヶ所を設けてゐる。

以上の外市營の保健施設として保健所法に基き本年九月二日に開所した牧野保健所があり、社會部に於て行つて居る中央社會館診療所、東社會館診療所があつて、市民の體位向上の爲必要な保健上の指導を行つてゐる。

衛生組合

本市には明治十七年頃より各町毎に衛生補助員があつて、傳染病豫防、消毒其の他衛生事項の補助機關として衛生事務に従事して來たが、明治二十年六月縣令第七十號を以て衛生組合準則が發布せられ、始めて各町に衛生組合を設ける事となつた。其の後幾度か規定の改正が加へられたが、組合の實體には消長なく、傳染病豫防救治其の他一般

衛生に關し隣保協同の實を擧げてゐる。尙組合の連絡統一を計る爲に各町衛生組合を以て區衛生組合聯合會を(中區のみは二聯合會あり)區衛生組合聯合會を以て市衛生組合總聯合會を組織して居り、現在組合數(昭和十三年度末)は1,323組合となつてゐる。

衛生組合數並經費

| | 組合數 | 經費 |
|-------|-------|---------|
| 昭和13年 | 1,323 | 61,046圓 |
| 8年 | 969 | 66,255 |
| 3年 | 807 | 41,607 |
| 大正12年 | 662 | 28,608 |
| 7年 | 385 | 8,678 |
| 2年 | 356 | 3,668 |
| 明治41年 | 328 | 3,266 |
| 36年 | 292 | 2,054 |
| 31年 | 327 | 4,084 |

産 業

農 業 一般産業界の異常なる発展に伴ひ區劃整理着々進捗し、耕地は住宅、工場或は道路、運河等に改変せられ、大正十年本市大発展の地盤を築いた大合併當時の78,484反の耕地面積は、昭和十三年末には約二分の一の36,231反となり、年々減少の一途を辿つてゐる。米麥等の作付は順次時勢に應じた蔬菜、果實、花卉等主として畑による栽培に移行しつつある。即ち大正二年田100に對する畑の割合は22であつたが十年後の大正十二年

耕 地 面 積

| 年 次 | 總 數 | | 田 | 畑 | 田百=付 畑ノ割合 |
|-------|--------|-----|--------|--------|--------------|
| | 面 積 | 指 數 | | | |
| 昭和13年 | 36,231 | 47 | 26,117 | 10,114 | 39 |
| 8年 | 51,781 | 67 | 36,563 | 15,218 | 42 |
| 3年 | 58,186 | 75 | 41,380 | 16,806 | 41 |
| 大正12年 | 77,525 | 100 | 57,401 | 20,124 | 35 |
| 7年 | 8,703 | — | 7,022 | 1,681 | 24 |
| 2年 | 8,195 | — | 6,710 | 1,485 | 22 |

大正十二年ノ激増シタルハ大正十年隣接十六ヶ町村ノ合併ヲ施行シタルタメナリ

には35となり、更に昭和十三年には39となり漸次田に對する畑の耕作反別が増加し、栽培に比較的手數を要しない畑の栽培が多くなりつつあることは、都市農業が一つの副業的産

業として生命をつないでゐることを示してゐる。かゝる現象は

農 家 戸 數

| 年 次 | 總 數 | 專 業 | 兼 業 | 專業百=付 兼 業 |
|-------|--------|-------|-------|--------------|
| 昭和13年 | 7,311 | 1,876 | 5,435 | 290 |
| 8年 | 7,261 | 3,681 | 3,580 | 97 |
| 3年 | 8,944 | 4,393 | 4,551 | 104 |
| 大正12年 | 13,545 | 6,778 | 6,767 | 100 |
| 7年 | 916 | 554 | 362 | 65 |
| 2年 | 901 | 584 | 317 | 54 |

農家戸數の變遷殊に專業者兼業者の割合に徴するも想像に難くない。大正十年大合併に依り増加した農家戸數は概して減少の傾向にあり、殊に專業者は兼業者に

兼業者は他産業へ轉向する等の關係より、大正十二年專業、兼業同戸數であつたが、昭和十三年には兼業者は專業者の約三倍となつた。要するに本市農業は他産業の重壓下に愈々集約的となり、その規模を縮小しながらも都市近郊農業として特殊の形態を採りつつある。

養 鶏

本市内に營まれる牧畜業は、農業と共に殆ど語るに足らない程度のものであるが、養鶏業は極めて隆盛であつて、本邦の中樞をなし、所謂名古屋コーチンの名に依つて全國的に著名である。その産卵は内地各地方のみならず、遠く海外へも輸出せられ最近主要輸出品として指定せられ今後益々盛ならむとする傾向にある。

養 鶏

| 年 次 | 飼養戸數 | 飼 育 數 | | | 産 卵 | |
|-------|--------|---------|---------|---------|------------|-----------|
| | | 總 數 | 成 禽 | 雛 | 個 數 | 價 額 |
| 昭和13年 | 2,640 | 514,443 | 355,818 | 158,625 | 48,563,480 | 1,942,539 |
| 8年 | 11,355 | 539,573 | 332,258 | 207,315 | 48,332,570 | 966,651 |
| 3年 | 6,975 | 440,318 | 273,156 | 167,162 | 31,275,337 | 1,094,637 |

水 産 業

南部の一端のみ僅かに海に面したる本市に於て水産業の振はないことは今更言ふまでもない。最近迄の産額は僅々2,000千圓程度に過ぎなかつた。然し昭和十二年隣接三ヶ町村の併合に伴ひ漁港下之一色港の包含せられた結果3,000千圓臺にのぼつたが、その大部分は水産製造物で魚獲物は非常に僅かである。

水産額

| 年次 | 總額 | 水産製造物 | 漁獲物 | 水産養殖 | 遠洋漁業 |
|-------|-----------|-----------|-----------|---------|-------|
| 昭和13年 | 3,360,488 | 2,262,300 | 1,019,221 | 78,967 | — |
| 8年 | 628,683 | 518,651 | 64,287 | 37,777 | 7,968 |
| 3年 | 1,741,864 | 1,216,980 | 360,473 | 164,411 | — |
| 大正12年 | 1,769,505 | 1,389,722 | 265,305 | 114,478 | — |
| 7年 | 483,877 | 319,548 | 151,660 | 12,669 | — |
| 2年 | 345,705 | 238,045 | 91,110 | 16,550 | — |

取引所

經濟界の動靜を最も敏感に反映するものに取引所の業績がある。現在市内に在る取引所は名古屋米穀、名古屋株式、名古屋綿糸布の三取引所である。名古屋米穀取引所取引状況

| 年次 | 賣買高 | | 受渡高 | | 年次 | 賣買高 | | 受渡高 | |
|-------|-------|---------|-----|-------|-------|-----------|---------|-------|-------|
| | 數量 | 金額 | 數量 | 金額 | | 數量 | 金額 | 數量 | 金額 |
| 昭和13年 | 2,186 | 77,183 | 40 | 1,405 | 昭和13年 | 444,900 | 97,029 | 120 | 26 |
| 12年 | 4,301 | 140,823 | 29 | 957 | 12年 | 33,050 | 3,845 | 70 | 7 |
| 11年 | 3,524 | 109,404 | 23 | 739 | 12年 | 3,155,480 | 785,055 | 7,910 | 2,019 |
| 10年 | 5,026 | 151,961 | 45 | 1,352 | 11年 | 1,653,470 | 348,354 | 4,230 | 908 |
| 9年 | 5,290 | 142,434 | 37 | 952 | 10年 | 1,556,760 | 318,580 | 3,720 | 655 |
| 8年 | 5,836 | 138,566 | 58 | 1,338 | 9年 | 1,382,040 | 288,036 | 3,950 | 1,069 |
| | | | | | 8年 | 1,590,330 | 310,465 | 4,860 | 913 |

米穀取引所は全國多數の取引所中最古の沿革をもち、現在資本金全額拂込 1,300千圓、組合員は一般 15名、正米 16名である。之が賣買高は最近減少の傾向を辿り、昭和十三年には 2,186千石、77,183千圓で五年前の昭和八年

| 年次 | 賣買高 | | 受渡高 | |
|-------|--------|-----------|-------|---------|
| | 株數 | 金額 | 株數 | 金額 |
| 昭和13年 | 20,451 | 2,851,539 | 3,210 | 370,992 |
| 12年 | 29,468 | 3,907,207 | 3,670 | 396,633 |
| 11年 | 16,545 | 1,879,553 | 2,421 | 220,089 |
| 10年 | 18,962 | 2,224,415 | 2,330 | 224,038 |
| 9年 | 19,920 | 2,233,707 | 2,915 | 294,247 |
| 8年 | 23,616 | 3,223,128 | 3,460 | 366,006 |

名古屋綿糸布取引所取引状況 (千圓千圓)

に比較すれば大凡二分の一に減少した。(本年八月二十六日より米穀統制法に基く最高價格決定に伴ひ、機能を停止してゐる)

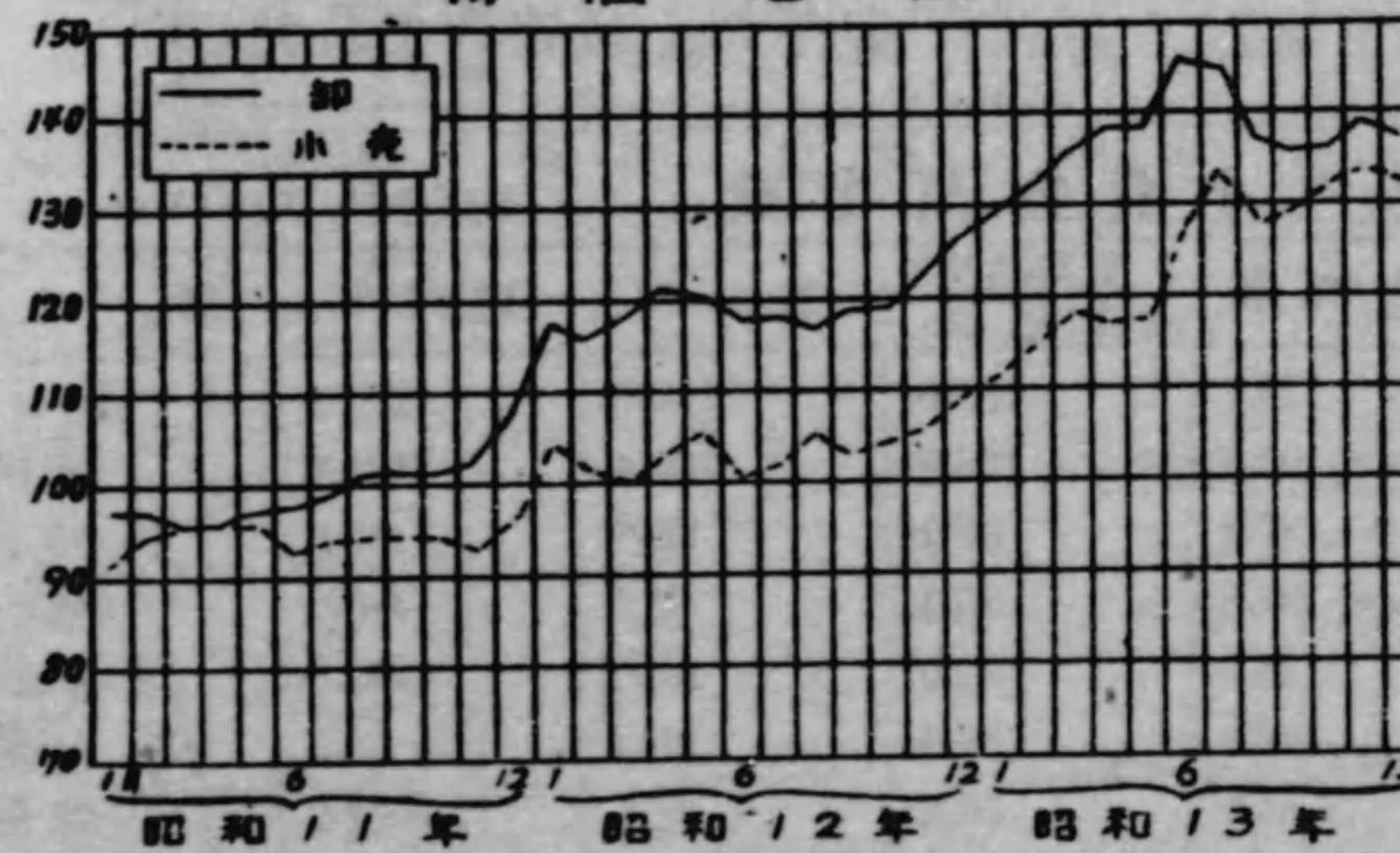
名古屋株式取引所は東西兩有價證券市場に次ぐ全國有數の市場であつて、現在資本金 6,000千圓拂込済額 5,125千圓、取引員は一般 29名、短期 26名を擁し、最近の賣買高は米穀取引所と同様減少の傾向にある。

綿糸布取引所は大正十一年開所に係るもので、本市取引所中最も歴史の淺いものである。現在資本金は 27,000千圓全額拂込済の會員組織で 36名の會員を持ち、昭和十二年には賣買高 3,155,480千圓、785,055千圓と言ふ活況を呈したが、昭和十三年に入つて綿業統制の結果極端に減少を示した。

物價指數

歐洲大戰の餘波を蒙り異狀なる騰貴を續けた物價も、大年九年を絶頂として概して下り坂となつてゐたが、金輸出再禁止、滿洲事變等を遷て再び上昇に向つた。今昭和四年十二月の平均價格を 100 とした名古屋市卸賣物

物價指數



價指數を見るに左表に示す如く順次昂騰し昭和十三年には 139.6 と言ふ急騰を示した。然し今次支那事變發生と共に逸早く叫ばれた政府の物

價抑制策が影響して七月の 145 を頂上として大體安定を保つ様

になつた。

卸賣物價の騰貴に併行し小賣物價も亦昂騰を續けつゝあることは勿論であつて、名古屋市小賣物價指數（昭和四年十二月十六日現在價格を100とす）に付て見るに、昭和十二年總平均は103.4を示し、前年迄100以下にあつた指數は遂に100臺を超へ、翌昭和十三年には123.2となつた。之を種類別に見れば建築材料の騰貴最も激しく、昭和十二、三年には急激なる上昇を示した。之に續いては衣料品及身廻品で夫々164.4 133.0と言ふ指數を示してゐる。

卸賣物價指數 (昭和四年ヲ100トス)

| 年次 | 總平均 | 食料品 | 繊維品 | 金屬品 | 建築材料 | 工業藥品 | 肥料 | 燃料 | 雜品 |
|-------|-------|-------|-------|-------|-------|------|-------|-------|-------|
| 昭和13年 | 139.6 | 115.4 | 215.1 | 218.8 | 195.8 | 85.5 | 134.0 | 136.7 | 145.0 |
| 12年 | 119.0 | 108.1 | 104.6 | 175.0 | 153.4 | 75.0 | 123.0 | 115.1 | 118.6 |
| 11年 | 99.5 | 101.6 | 89.4 | 110.0 | 116.8 | 62.0 | 100.8 | 98.0 | 97.3 |
| 10年 | 96.0 | 94.1 | 88.6 | 102.4 | 113.6 | 74.0 | 97.3 | 94.7 | 99.0 |
| 9年 | 94.9 | 83.6 | 92.6 | 105.0 | 121.2 | 84.0 | 88.3 | 95.1 | 103.1 |
| 8年 | 94.0 | 84.2 | 90.1 | 107.2 | 112.0 | 90.5 | 88.8 | 92.6 | 103.7 |
| 7年 | 81.0 | 77.3 | 74.1 | 85.6 | 93.4 | 68.0 | 82.5 | 79.1 | 96.1 |
| 6年 | 74.8 | 70.4 | 66.7 | 74.4 | 92.9 | 71.0 | 67.8 | 84.6 | 80.6 |
| 5年 | 88.0 | 87.8 | 81.4 | 89.6 | 93.8 | 88.0 | 86.2 | 94.1 | 91.1 |

小賣物價指數 (昭和四年ヲ100トス)

| 年次 | 總平均 | 食料品 | 衣料品及身廻品 | 燃料 | 建築材料 | 雜品 |
|-------|-------|-------|---------|-------|-------|-------|
| 昭和13年 | 123.2 | 117.7 | 133.0 | 116.0 | 164.4 | 108.4 |
| 12年 | 103.4 | 101.1 | 103.7 | 101.4 | 132.7 | 95.0 |
| 11年 | 94.2 | 97.8 | 93.1 | 93.7 | 93.9 | 75.4 |
| 10年 | 91.4 | 92.8 | 93.1 | 92.1 | 90.0 | 80.0 |
| 9年 | 88.2 | 86.0 | 92.0 | 93.0 | 93.6 | 85.1 |
| 8年 | 86.5 | 86.1 | 86.4 | 90.3 | 88.9 | 84.8 |
| 7年 | 78.9 | 81.0 | 76.2 | 82.1 | 72.3 | 75.3 |
| 6年 | 78.3 | 79.7 | 75.7 | 89.4 | 71.4 | 73.0 |
| 5年 | 89.5 | 91.9 | 84.9 | 94.3 | 84.4 | 86.2 |

何レモ商工省調査ニ依ル

卸賣市場

本市に於ける生鮮食料品卸賣機關は大別して卸賣市場、鶏卵共同販賣所、市場外問屋、自然發生取引場の四つになる。中でも最も大きな部分を占むるものは卸賣市場である。

本市は中央卸賣市場法による中央卸賣市場を持たない爲、生鮮食料品は市内12箇所の私設卸賣市場を通じて配給せられる。その取扱高は人口の増加に伴ひ漸次増加し、昭和十三年度には33,271千圓に達し、前年の昭和十三年度に比し4,115千圓を増加した。

食小賣市場

歐洲大戰の餘波により生活必需品は暴騰を續け、市民の生活難は日々に險悪化の一途を辿り、中でも米の暴騰は彼の米騒動の勃發となつて表面化するに及び、之が緊急對策として東西中南の各區に一箇所宛の市設廉賣市場を設置、米を始めとし生活必需品の低廉豊富販賣に當つたのが今日の市設食品小賣市場の濫觴である。かくして物價は一

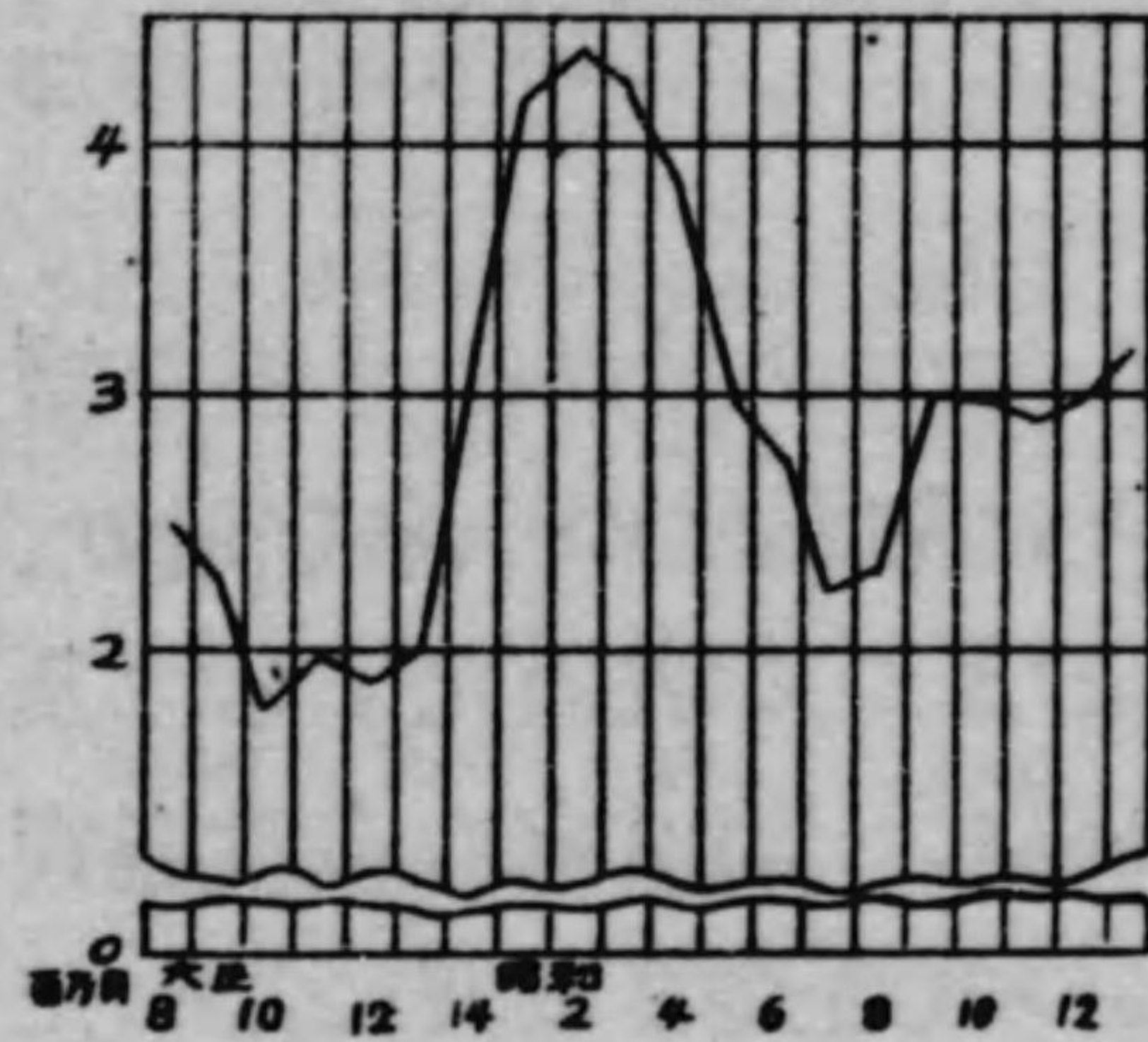
食品小賣市場 13年末 公設市場賣上高

| 區名 | 總數 | 公設 | 私設 | 年次 | 賣上高 | 市場數 | 使用店舗 |
|-----|-----|----|----|-------|-----------|-----|------|
| 全市 | 103 | 14 | 89 | 昭和13年 | 3,147,795 | 14 | 405 |
| 千種 | 8 | — | 8 | | | | |
| 東西 | 20 | 4 | 16 | 8年 | 2,678,492 | 14 | 406 |
| 中村 | 11 | 1 | 10 | | | | |
| 中和 | 13 | 3 | 10 | 3年 | 4,271,844 | 13 | 427 |
| 昭和中 | 20 | 1 | 19 | | | | |
| 熱田 | 7 | 2 | 5 | 六正12年 | 1,884,420 | 5 | 141 |
| 中川 | 3 | — | 3 | | | | |
| 港南 | 4 | 1 | 3 | 7年 | 374,919 | 4 | 131 |
| | 5 | — | 5 | | | | |



段落したもの、市場の利用は極めて多く、その後追々増設を見
 現在では14箇所となり、更に昭和に入つて非常な勢を以つて設
 立せられた私設食品小賣市場89箇所を合すれば現在103箇所と
 なり、物價の抑壓、物資の圓滑なる配給、平時に於ける市中標
 準物價の決定並に牽制、優良物資の正量、正價販賣等を經營方
 針とし非常時下物價對策遂行の一有力機關として重要な使命
 をはたしつゝある。

公設市場売上高



公設市場使用店舗數

| | | | | | |
|-----|------|----|---|-------|-----|
| 米 | 雜穀 | 14 | 茶 | | 3 |
| 蔬 | 菜 | 40 | 味 | 噌溜 | 17 |
| 果 | 實 | 16 | 麵 | 類 | 16 |
| 鮮 | 魚 | 32 | 甘 | 藪 | 9 |
| 牛 | 豚肉 | 15 | 薪 | 炭 | 17 |
| 鶏 | 肉卵 | 20 | 吳 | 服太物 | 12 |
| 鹽 | 干魚乾物 | 32 | 洋 | 品雜貨 | 12 |
| 蒲 | 銚 | 10 | 化 | 粧品小問物 | 12 |
| 佃 | 煮 | 15 | 履 | 物 | 11 |
| 調理品 | 天プラ | 10 | 荒 | 金物 | 12 |
| 豆 | 腐揚 | 14 | 花 | 卉 | 10 |
| 漬 | 物 | 23 | 陶 | 磁器 | 2 |
| 砂 | 糖菓子 | 22 | 文 | 具玩具 | 3 |
| 生 | 餅菓子 | 6 | 計 | | 405 |

市設市場の使用店舗數
 は昭和十三年末に於て40

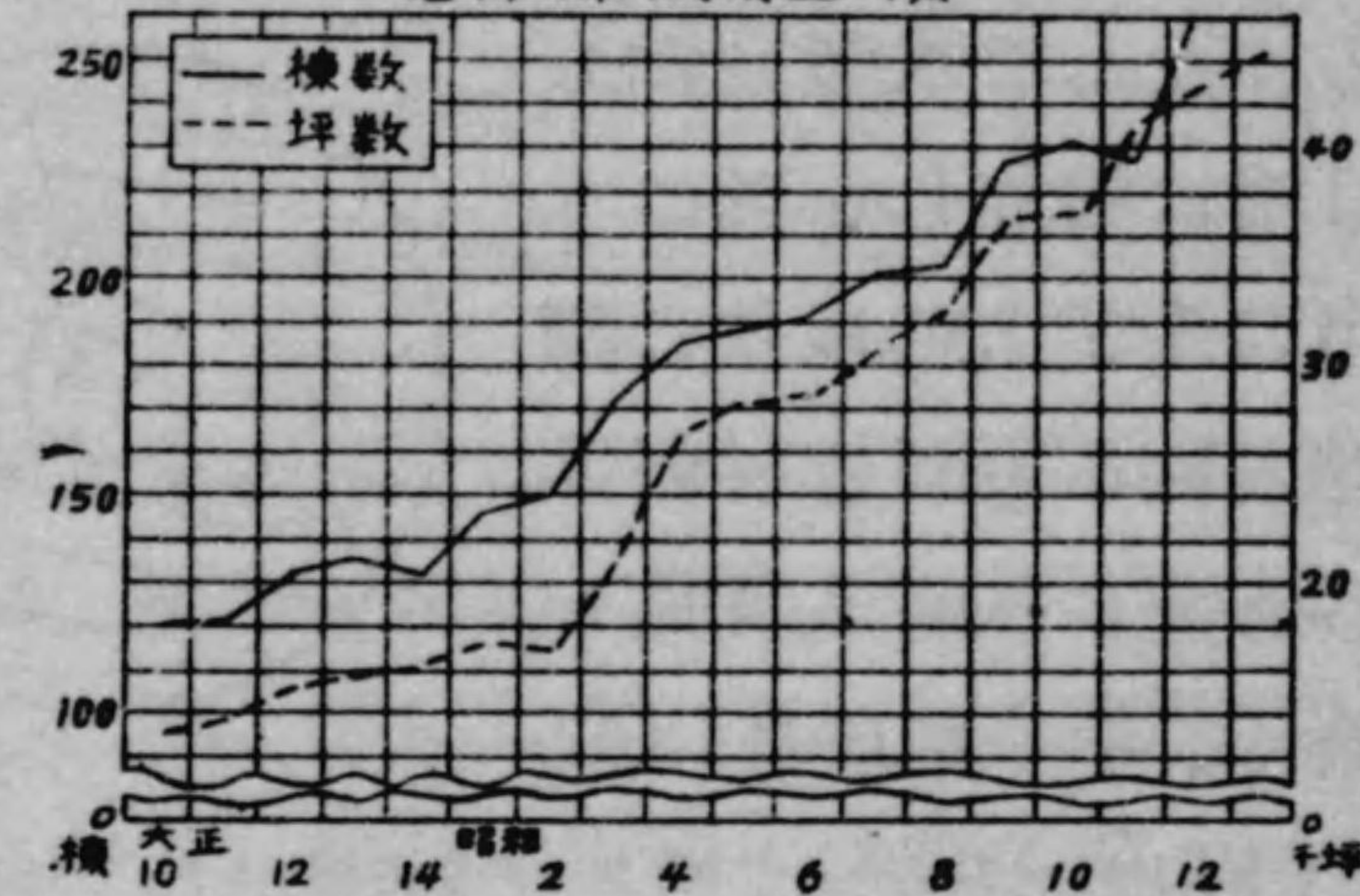
5店を算し、之を取扱商品別に見れば、流石に蔬菜販賣店が最
 も多く、全店舗の1割即ち40店で、之に次ぐは鮮魚販賣店の32
 店、鹽干魚乾物販賣店の同じく32店、漬物販賣店の23店、砂糖
 菓子販賣店の22店等である。

倉庫 市内主要營業倉庫たる東陽、東神、川西、四日
 市の四社の昭和十三年建物坪數は44,290坪で、

本市産業の發展に伴ひ年々増加し、十年前の昭和三年末に比す
 れば二倍強となつた。

之等四倉庫の貨物出入
 高を見るに、昭和六、七
 年を除いては最近迄順次
 増加し、昭和十二年には
 入庫高250,932千圓、出庫
 高237,699千圓、年末殘高
 347,814千圓に達し、前年
 の昭和十一年に比較すれ
 ば入庫高に於て94,973千圓、出庫高81,202千圓、年末殘高14,314千圓の各増加を見た。即ち貨物の荷動き相當頻繁なりしことが察せられる。

倉庫棟數及面積



昭和十三年統制經濟の強化せられるに及び自由取引にかなり
 の制限を加へられた爲か貨物の荷動き少く、入庫、出庫共に著
 しい減少を見せた。

尙出入貨物の主なるものは羊毛、砂糖、綿織物、人絹用パ
 ルプ、洋紙、毛糸、綿糸等である。

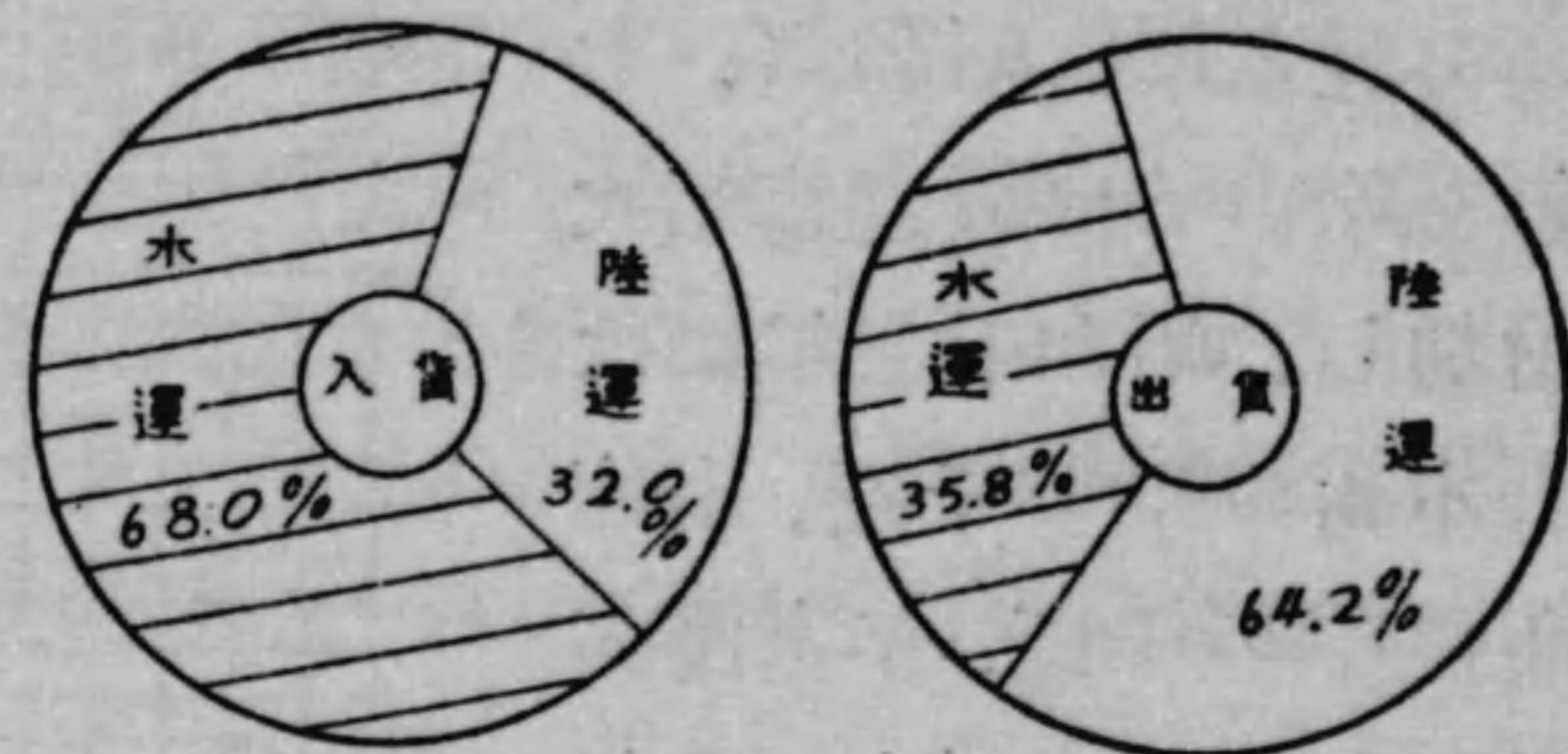
市内倉庫概況

| 年次 | 棟數 | 面積 坪 | 入庫高 千圓 | 出庫高 千圓 | 年末殘高 千圓 |
|-------|-----|---------|-----------|-----------|------------|
| 昭和13年 | 261 | 44,290 | 176,535 | 180,004 | 31,581 |
| 8年 | 203 | 32,129 | 94,486 | 87,494 | 24,048 |
| 3年 | 171 | 20,412 | 125,806 | 122,717 | 31,649 |
| 大正12年 | 130 | 15,320 | 80,380 | 77,367 | 17,657 |
| 7年 | 100 | 11,680 | 94,942 | 90,696 | 16,805 |
| 2年 | 68 | 8,737 | 17,965 | 17,818 | ? |

貨物の出入

本市は從來より貨物の一大集散地として知られ
 てゐたが、輸送機關の關係上鐵道便に依る陸運

貨物を主としてゐた。然るに明治四十年名古屋港の開港せられるに及んで水運貨物も日増に増加し、殊に本市の産業上の地位の躍進と共に原料、材料品の海運に依る入貨愈々繁く、今や集散量13,11



7千噸に達した。然して陸運に於ては大體出超となり、水運に於ては入超となつてゐる。之は要するに生活料品、及半製品の入貨、全製品の出貨が陸運に依るもの多く、容量の重い原料材料品の入貨及び軽量なる全製品が主として水運に依り出貨せられる關係であらう。

貨物集散

| 年次 | 出 貨 | | | 入 貨 | | |
|-------|-----------|-----------|-----------|-----------|-----------|-----------|
| | 陸 運 | 水 運 | 合 計 | 陸 運 | 水 運 | 合 計 |
| 昭和13年 | 2,925,480 | 1,628,796 | 4,554,276 | 2,741,051 | 5,822,595 | 8,563,646 |
| 12年 | 3,061,631 | 1,896,112 | 4,957,743 | 2,781,933 | 6,125,910 | 8,907,843 |
| 11年 | 2,843,219 | 1,835,398 | 4,678,617 | 2,503,002 | 5,756,309 | 8,259,311 |
| 10年 | 2,568,047 | 1,684,302 | 4,252,349 | 2,270,297 | 5,027,693 | 7,298,190 |
| 9年 | 2,453,648 | 1,498,213 | 3,951,861 | 2,016,279 | 4,842,683 | 6,858,962 |
| 8年 | 2,321,341 | 1,406,984 | 3,728,325 | 1,797,671 | 4,638,603 | 6,436,274 |

工業概況

名古屋市の驚異的發展は實に工業に負ふ所大なるものがある。由來名古屋市は豊穰肥沃なる濃美平野の中心に位し、東西交通の要衝に當り水質、土質、氣候の自然的條件は固より中部地方一帯の水電王國を背後に控へ、動力に欠くる所なく、勞力も亦良質豊富で然も勞賃の低廉なる

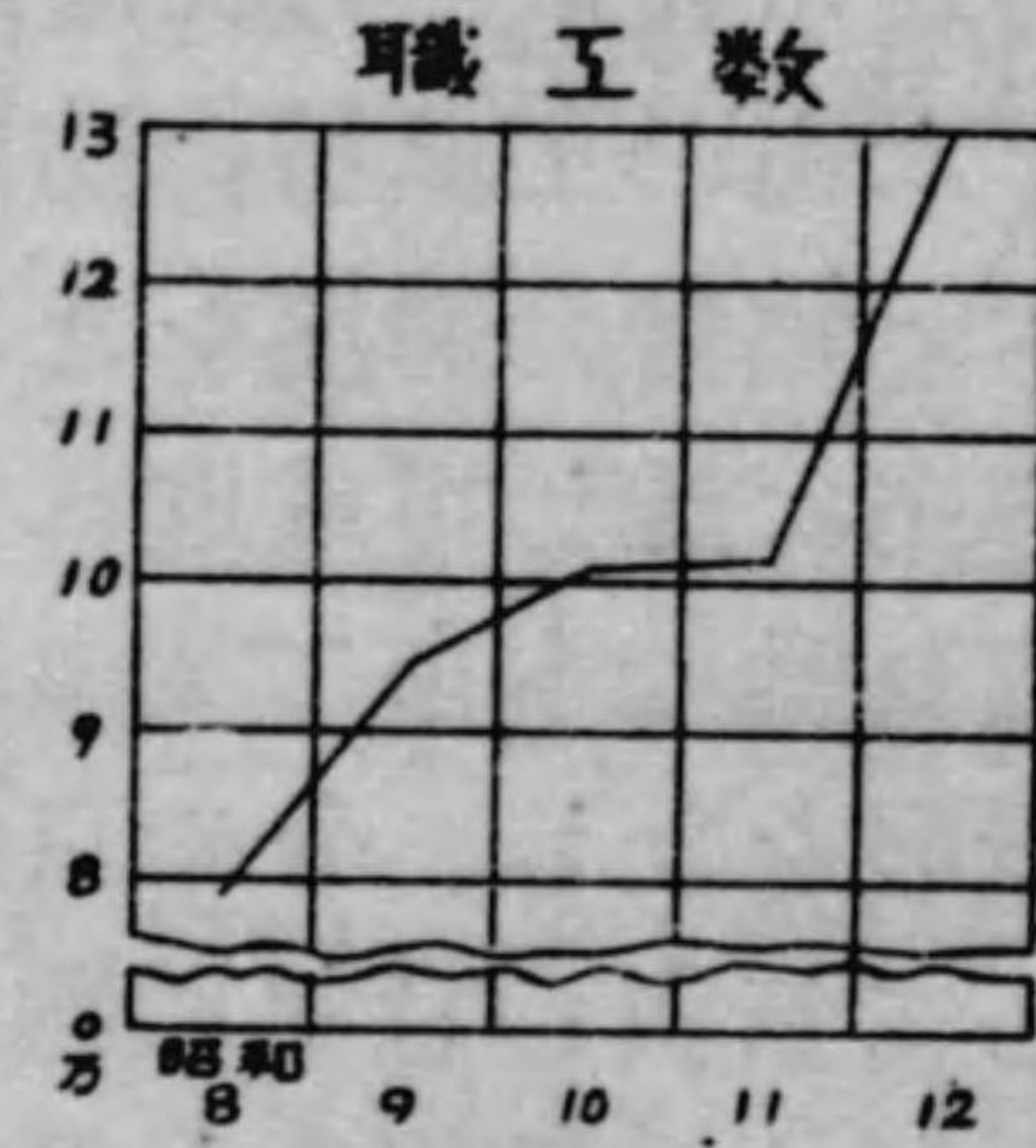
ことは他にその比を見ない。かゝる物的諸條件に恵まれてゐると同時に、多年培はれ來つた市民一般の質實剛堅、不撓不屈の精神力は物的諸條件と混然融合し、此處に工業都市大名古屋の發展が約束せられてゐるのである。

本市の工業特に紡織、窯業等は藩政時代より既に藩の保護の下に相當の發展をなしたが、所謂近代的工業は大阪その他の諸都市に比し可成遅れて發生した。併し本市の恵まれた諸條件は遅れ馳の本市工業に拍車をかけ、最近十年間には實に驚くべき發展をなし、今や京濱阪神地方に次ぐ本邦第三位の工業地帯として新興の意氣に燃え立つてゐる。

斯くも目覺ましき發展を遂げた本市工業を仔細に觀察する時、此處に先進工業都市とは異つた點を發見する事が出来る。即ち本市工業はその天與の諸條件に恵まれつゝ自然の發展に任されて來た爲、工業形態に於ては正に跛行的で、紡織工業を中心とする輕工業の殷盛さに引換へ、重工業方面に於ては非常に見劣がするのである。併し最近の生産力擴充方策に基く機械器具、金屬、化學工業の勃興は實に目覺ましく、昭和七年迄は本市工業の大部分を占めてゐた紡織工業が、八年以降には漸次重、化學工業にその地位を譲りつゝある。勿論昭和十二年以降に於て斯くも機械、金屬、化學工業の占むる比重の高まつて來たのは隣接町村の併合による大工場の包含せられたことをその要因とするが、何れにしても本市産業機構の擴充整備を具現したるものとして注目すべきである。

| | 生産額ノ割合 | | | | | | | | | |
|----------|--------|------|------|------|------|------|------|------|------|------|
| | 大正10 | 昭和4 | 昭和5 | 昭和6 | 昭和7 | 昭和8 | 昭和9 | 昭和10 | 昭和11 | 昭和12 |
| 紡織 | 56.4 | 55.0 | 50.7 | 52.3 | 51.0 | 41.6 | 43.9 | 40.8 | 39.2 | 30.7 |
| 機械、金屬、化學 | 13.3 | 13.0 | 13.2 | 11.0 | 16.7 | 22.4 | 23.2 | 25.8 | 27.6 | 39.3 |
| 其の他 | 30.3 | 32.0 | 36.1 | 36.7 | 32.3 | 36.0 | 32.9 | 33.4 | 33.2 | 30.0 |

工場及生産額 昭和十二年末に於て五人以上を使用する設備を有し、又は五人以上の職工を使用する工場、即ち資源調査法に基く商工省令工場調査規則該當工場は5,310工場、職工数133,416人、生産額614,745千圓を算し、前年に較べ工場数に於て27.2%、職工数に於て23.4%、生産額に於ては實に31.7%の各増加を見た。なほ之に五人未満の工場又は職場の生産額を合すれば、工業生産額は640,916千圓となり、本市全生産額(原始産業を加へた生産額)の約9割9分と言ふ大部分を占めてゐる。



工場及生産額

| 年次 | 工場又ハ職場数 | 職工数 | 生産額 |
|-------|---------|---------|-------------|
| 昭和12年 | 15,321 | 143,887 | 640,915,942 |
| 11年 | 11,659 | 143,303 | 608,460,556 |
| 10年 | 13,878 | 142,615 | 555,898,990 |
| 9年 | 13,669 | 156,641 | 515,719,693 |
| 8年 | 13,374 | 128,950 | 414,781,585 |
| 大正13年 | 10,952 | 85,296 | 397,660,107 |
| 12年 | 12,205 | 89,761 | 268,884,784 |
| 7年 | 14,190 | 67,820 | 127,737,421 |

斯くの如き隆々たる本市工業を過去に遡り検討するに、圖表に示す如く昭和五、六年には世界的經濟不況の打撃を受け生産額は急激に萎縮し、本市工業の前途に一抹の不安を感じさせないでもなかつた。

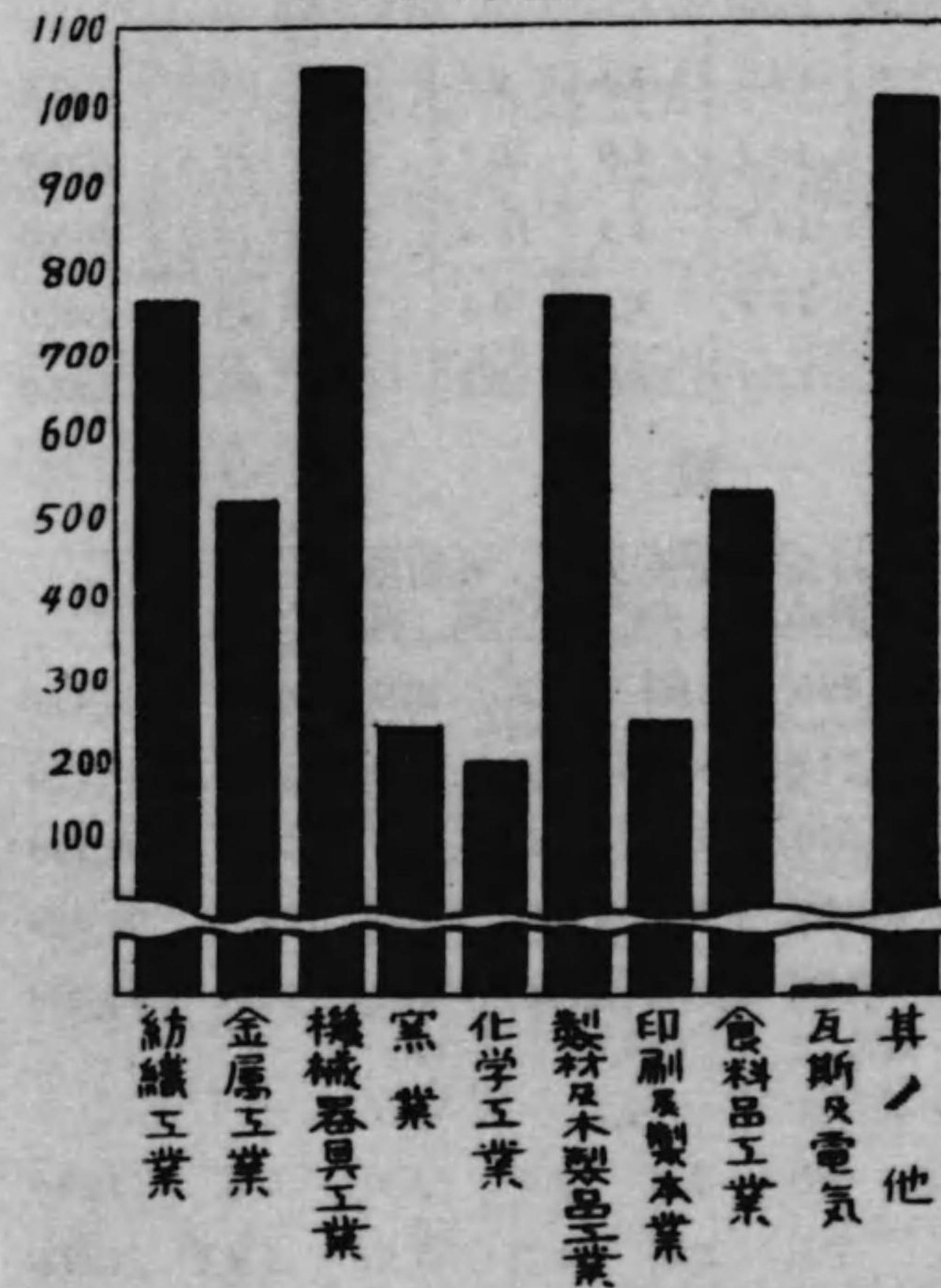
併し昭和七年滿洲事變勃發するや、軍需關係工業の勃興と爲替安に依る輸出貿易の殷盛とに依り再び隆盛に赴き、以後昭和

十二年支那事變の發生に伴ふ時局産業の活況により飛躍的發展をなし、昭和七年に比し工場数、職工数は約二倍に、生産額は二倍半に達した。

事業別工場

昭和十二年末に於ける商工省令工場調査規則に該當する5,310工場をその營む事業に依り分類するに、第一位を占むるものは機械器具工業の1,070工場で全體の20.2%に當り、之に次ぐは(雜工業の1,009工場(1.9%)は論外とす)製材及木製品工業の769工場(14.5%)、金屬工業の528工場(9.9%)、食料品工業の521工場(9.8%)、印刷及製本業の247工場(4.6%)、窯業の223工場(4.2%)等の順序である。

事業別工場数



次に之等工業に従事する職工数を見るに、次表に示す如く昭和八年には紡織工業に従事するものが最も多く全體の34.8%を占め、機械器具工業に従事するものは29.2%であつた。併し昭和九年には兩者殆んど同率となり十年以降には全くその地位を轉換し、機械器具工業に従事するものは昭和十二年末に於て全體の37.4

%を占め、紡織工業に従事するものは24%で第二位となつた。かかる情勢は獨り紡織工業に限らず窯業に於ても同様な傾向が

見られ年々職工数の割合は減じてゐる。之に對し金屬、機械器具、化學等の所謂重化學工業に従事するものは急激な増加振りを示し、本市工業の將來に就て何物かを暗示してゐる。

工場 數

| 年次 | 紡織 | 金屬 | 機械器具 | 窯業 | 化學 | 製材及木製品 | 印刷及木 | 食料品 | 瓦斯及電氣 | 其他 | 合計 |
|-------|-----|-----|-------|-----|-----|--------|------|-----|-------|-------|-------|
| 昭和12年 | 758 | 528 | 1,070 | 223 | 182 | 769 | 247 | 521 | 3 | 1,009 | 5,310 |
| 11年 | 605 | 384 | 852 | 228 | 142 | 599 | 203 | 420 | 3 | 737 | 4,173 |
| 10年 | 577 | 362 | 815 | 194 | 150 | 588 | 173 | 415 | 3 | 731 | 4,008 |
| 9年 | 557 | 284 | 725 | 183 | 132 | 454 | 157 | 328 | 3 | 650 | 3,473 |
| 8年 | 517 | 235 | 575 | 136 | 123 | 354 | 131 | 226 | 3 | 460 | 2,760 |

比 例

| | | | | | | | | | | | |
|-------|------|-----|------|-----|-----|------|-----|------|-----|------|-------|
| 昭和12年 | 14.3 | 9.9 | 20.2 | 4.2 | 3.4 | 14.5 | 4.6 | 9.8 | 0.1 | 19.0 | 100.0 |
| 11年 | 14.5 | 9.2 | 20.4 | 5.5 | 3.4 | 14.3 | 4.9 | 10.1 | 0.1 | 17.6 | 100.0 |
| 10年 | 14.4 | 9.0 | 20.3 | 4.8 | 3.7 | 14.7 | 4.3 | 10.4 | 0.1 | 18.3 | 100.0 |
| 9年 | 16.0 | 8.2 | 20.9 | 5.3 | 3.8 | 13.1 | 4.5 | 9.4 | 0.1 | 18.7 | 100.0 |
| 8年 | 18.7 | 8.5 | 20.8 | 4.9 | 4.5 | 12.8 | 4.8 | 8.2 | 0.1 | 16.7 | 100.0 |

職 工 數

| 年次 | 紡織 | 金屬 | 機械器具 | 窯業 | 化學 | 製材及木製品 | 印刷及木 | 食料品 | 瓦斯及電氣 | 其他 | 合計 |
|-------|--------|-------|--------|--------|-------|--------|-------|-------|-------|-------|---------|
| 昭和12年 | 32,053 | 9,031 | 49,901 | 12,895 | 6,254 | 8,195 | 2,810 | 4,573 | 276 | 7,428 | 133,416 |
| 11年 | 27,373 | 6,290 | 37,515 | 12,155 | 3,677 | 7,712 | 2,840 | 4,012 | 262 | 6,290 | 108,126 |
| 10年 | 27,748 | 5,600 | 32,674 | 11,268 | 3,852 | 7,070 | 2,632 | 3,959 | 198 | 5,747 | 100,748 |
| 9年 | 29,634 | 4,884 | 28,580 | 10,481 | 3,514 | 6,139 | 2,287 | 3,543 | 203 | 5,563 | 94,828 |
| 8年 | 27,663 | 3,238 | 23,186 | 8,484 | 2,952 | 5,051 | 2,110 | 2,730 | 172 | 3,813 | 79,399 |

比 例

| | | | | | | | | | | | |
|-------|------|-----|------|------|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-------|
| 昭和12年 | 24.0 | 6.8 | 37.4 | 9.7 | 4.7 | 6.1 | 2.1 | 3.4 | 0.2 | 5.6 | 100.0 |
| 11年 | 25.3 | 5.8 | 34.7 | 11.3 | 3.4 | 7.1 | 2.6 | 3.7 | 0.3 | 5.8 | 100.0 |
| 10年 | 27.6 | 5.6 | 32.4 | 11.2 | 3.8 | 7.0 | 2.6 | 3.9 | 0.2 | 5.7 | 100.0 |
| 9年 | 31.3 | 5.2 | 30.1 | 11.1 | 3.7 | 6.5 | 2.4 | 3.7 | 0.2 | 5.8 | 100.0 |
| 8年 | 34.8 | 4.1 | 29.2 | 10.7 | 3.7 | 6.4 | 2.7 | 3.4 | 0.2 | 4.8 | 100.0 |

規模別工場及職工數 前記工場の中使用職工30人未滿を小工場、100人未滿を中工場、100人以上を大工場と假定し、昭和十二年末現在の工場分布状態を見るに、小工場は全工場の89.5%と言ふ圧倒的多数を占め、中工場は遙かに下つて7.7%、大工場に至つては僅かに2.8%に過ぎず、本市工業の分野が中小工業的色彩を多分にもつてゐることが察知せられる。

併しながら之を職工数の側より見れば、工場数の場合と全く逆の現象を見ることが出来る、即ち工場數に於て僅に3%に満たない大工場が全體の61.1%と言ふ全職工の過半数を占め、小工場は24.4%、中工場は14.5%、に當つてゐる。かゝる状態は現下工業界の寵兒たる金屬、機械器具、化學工業等近代的大規模工業の急激なる發展が一つの有力な原因となつてゐるのであらう。かゝる状況は今後生産力擴充の愈々要望せらるゝに伴ひ益々顯著となつて來るであらうが、それと同時に之等大工場に從屬する中小工場の簇生と言ふことも忘るゝことの出来ない問題であらう。

規模別工場及職工

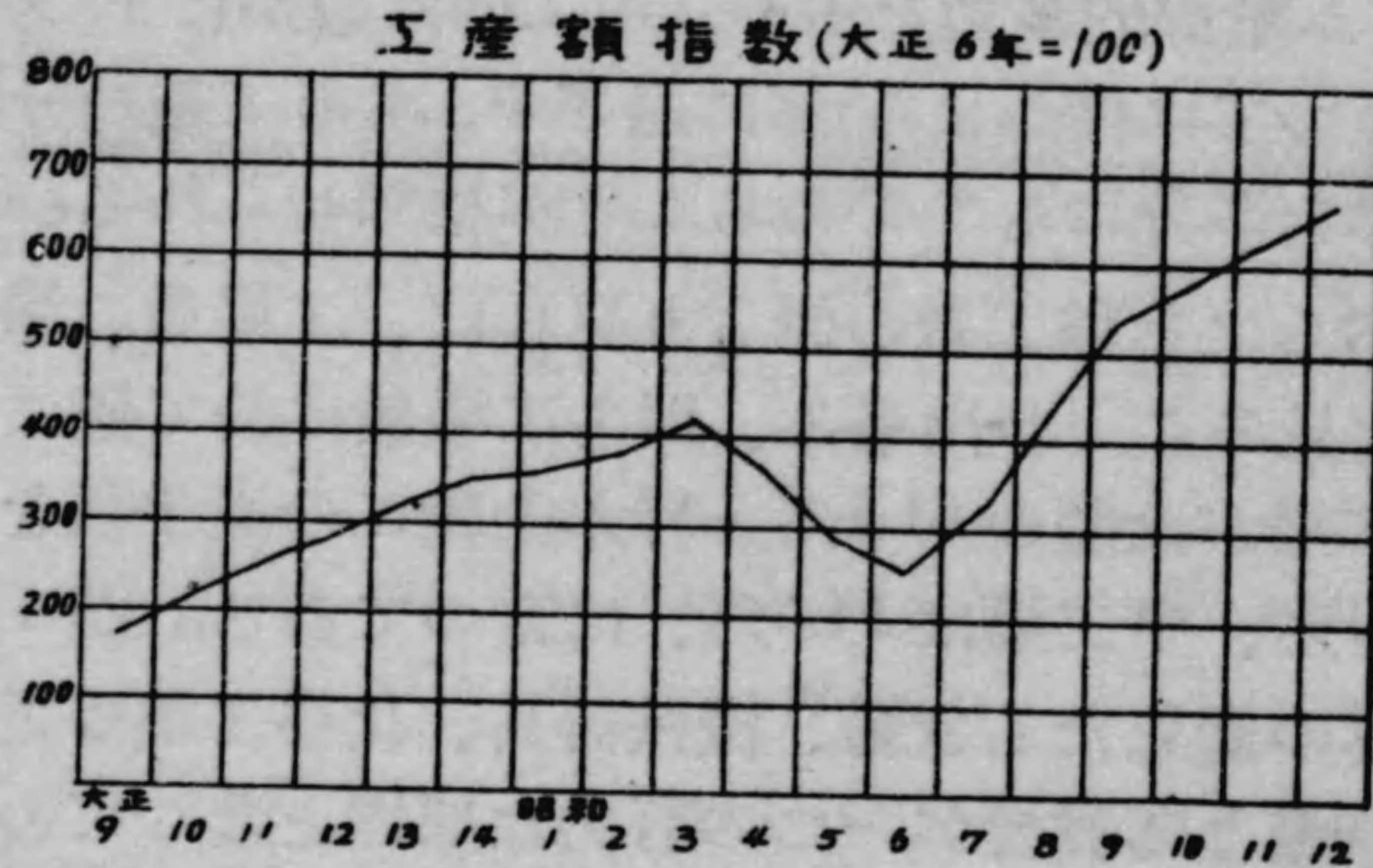
| 年次 | 30人未滿 | | 100人未滿 | | 100人以上 | |
|-------|-------|--------|--------|--------|--------|--------|
| | 工場 | 職工 | 工場 | 職工 | 工場 | 職工 |
| 昭和12年 | 4,754 | 32,524 | 407 | 19,330 | 149 | 81,562 |
| 11年 | 3,704 | 29,074 | 345 | 16,992 | 124 | 62,060 |
| 10年 | 3,584 | 27,347 | 306 | 14,909 | 118 | 58,491 |
| 9年 | 3,088 | 25,233 | 279 | 13,767 | 106 | 55,828 |
| 8年 | 2,457 | 19,155 | 217 | 71,097 | 86 | 49,147 |

比 例

| | | | | | | |
|-------|------|------|-----|------|-----|------|
| 昭和12年 | 89.5 | 24.4 | 7.7 | 14.5 | 2.9 | 61.1 |
| 11年 | 88.8 | 26.9 | 8.2 | 15.7 | 3.0 | 57.4 |
| 10年 | 89.4 | 27.1 | 7.6 | 14.8 | 3.0 | 58.1 |
| 9年 | 88.8 | 33.1 | 8.1 | 16.4 | 3.1 | 50.5 |
| 8年 | 89.0 | 24.1 | 8.0 | 14.0 | 3.0 | 61.9 |

工産額

職工五人未満の工場を含む、昭和十二年中の工産額は640,915千円で、前年の608,460千圓に比較すれば32,455千圓、割合にして5.3%の増加を見た。



之を事業別に見れば次表に示す如く、古くより発達し來つた紡織工業は工産額196,686千圓で全體の30.7%を占め第一位である。

工場生産額 (昭和十二年)

| 種別 | 生産額 | | 前年=對スル 増減(一)割合 |
|----------|-------------|-------|-------------------|
| | 實數 | 割合 | |
| 紡織工業 | 196,686,288 | 30.7% | - 17.5% |
| 金屬工業 | 35,635,031 | 5.6 | 77.4 |
| 機械器具工業 | 167,115,695 | 26.1 | 44.9 |
| 窯業 | 28,687,560 | 4.5 | - 33.9 |
| 化學工業 | 48,991,463 | 7.6 | 49.7 |
| 製材及木製品工業 | 39,230,634 | 6.1 | 33.4 |
| 印刷及製木業 | 16,868,653 | 2.6 | 27.1 |
| 食料品工業 | 54,501,835 | 8.5 | - 2.5 |
| 瓦斯及電氣業 | 6,555,705 | 1.0 | - 28.4 |
| 其の他の工業 | 46,643,078 | 7.3 | - 8.1 |

之に次ぐは最近驚異的發展を遂げた機械器具工業で167,115千圓(26.1%)、兩者を併すれば本市全工産額の約半分に當る。

之を前年の昭和十一年に比較すれば、金屬工業、機械器具工業、化學工業、の如きは各

77.4%、44.9%、49.7%と驚く可き増加を示してゐるに對し、紡織工業は17.5%、窯業に至つては33.9%と言ふ大減少を來した。之は畢竟今次事變の産業上に及ぼした重大なる影響の一つの現はれであつて、時局産業の好調と平和産業の全面的不振とに因るものであらう。

工場動力

工場規模の擴大に伴ひ、工場燃料及動力の消費量は著しく増加した。今昭和十二年中の實績に徴するに、石炭消費量の多い工業は紡織、窯業及化學工業で、此の三工業の石炭消費量合計は330,951千噸に達し、全量の78%

工場燃料及動力消費料

| 年次 | 石炭 | コークス | 石油 | 木炭 | 電力 | 瓦斯 |
|-------|-------------|------------|---------|------------|-------------|------------|
| | 噸 | 噸 | 箱 | 噸 | KW | 立方米 |
| 昭和12年 | 422,296,740 | 51,904,273 | 135,902 | 3,982,931 | 593,015,803 | 16,429,562 |
| 11年 | 327,685,420 | 40,263,104 | 201,085 | 3,253,433 | 463,027,933 | 14,168,875 |
| 10年 | 368,765,072 | 26,361,394 | 101,252 | 1,960,267 | 440,767,257 | 19,403,674 |
| 9年 | 357,341,681 | 37,363,309 | 118,095 | 29,010,784 | 398,198,937 | 17,440,819 |
| 8年 | 250,443,683 | 30,153,707 | 445,189 | 4,719,509 | 314,002,505 | 19,040,169 |

薪ノ使用量ハ不明ニ付除ク

を占めてゐる。又コークスは金屬、瓦斯及電氣業、機械器具工業等で、石油は機械器具、窯業、電力は化學工業、瓦斯は機械器具及化學工業等が夫々大消費工業である。

會社資本金

大正末期より引續き深刻なる經濟界の不況の中にあつて、本市内の會社企業も相當甚大なる打撃を蒙りながら社數資本金共に累年増加の一途を辿りつゝあつた。然し昭和十一年以降は合資、合名の小會社にして個人經營に轉換したるもの或は株式會社に変更したるもの等のあつた

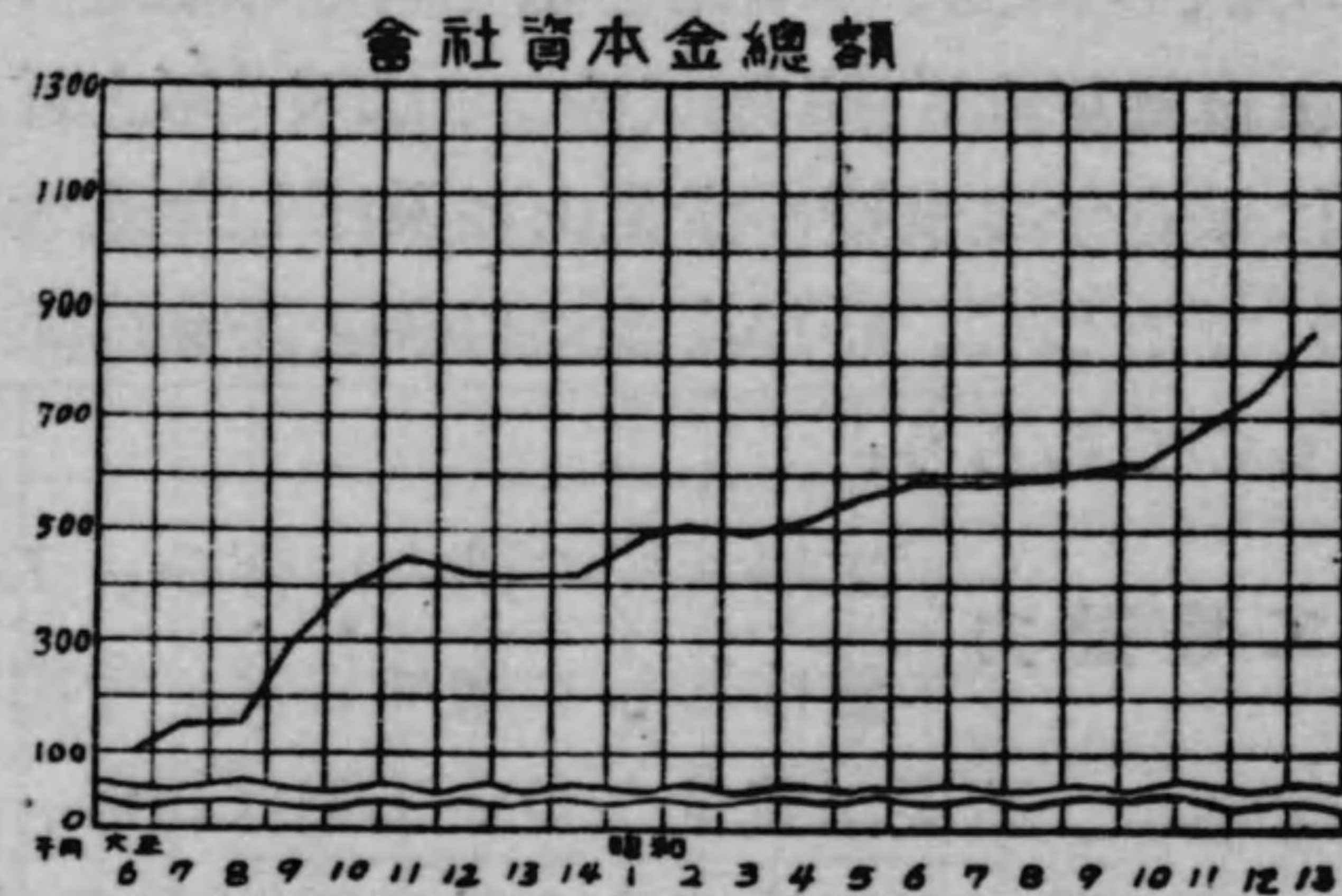
爲實際に増加したものは株式會社のみである。又之が資本金を見るに合資、合名兩會社は累年減少し、昭和十三年に入つてやゝ復活したるもそれは極く僅少であ

つた之に對し、株式會社資本金は逐年増加し、十三年末には777,151千圓を算するに至つた。

會社組織別

| 年次 | 株式 | | 合資 | | 合名 | |
|-------|-----|-----------------|-------|-----------------|-------|-----------------|
| | 社數 | 資本金總額及出資額 千圓 | 社數 | 資本金總額及出資額 千圓 | 社數 | 資本金總額及出資額 千圓 |
| 昭和13年 | 773 | 777,151 | 1,444 | 36,846 | 833 | 55,645 |
| 8年 | 511 | 495,676 | 2,100 | 39,707 | 1,164 | 52,161 |
| 3年 | 423 | 428,987 | 1,157 | 31,470 | 585 | 32,118 |
| 大正12年 | 374 | 372,449 | 580 | 20,941 | 423 | 34,707 |
| 7年 | 149 | 134,833 | 413 | 8,115 | 324 | 13,300 |

昭和十三年末株式、合資、合名全部を加へた會社總數(市内に本店を有するものは)3,050社にして、前年に比し120社を減少(合資、合名兩社の減少せるに依る)した。併しその資本金總額は869,641千圓で前年に較べ112,306千圓を増加してゐる。なほ一社平均資本金は285,129千圓で、前年の238,456圓に比すれば46,673圓を増加した。かゝる増加は主として株式會社資本金の増加に基くものであつて、本市産業經營の趨勢を如實に物



語つてゐる。

會社營業別

産業經營の中樞を爲す會社企業を營業別に見れば次表に示す如く、社數に於ては依然商業が多く總數の52.2%、之に次ぐは工業で43.6%を占め、兩者を合すれば、總數の95.8%と言ふ絶對多數を占め、商工都市の面目を遺憾なく發揮してゐる。

又資本金より見れば商業は總數の33.6%、工業は53.5%を占め、社數の場合とは逆に工業は商業を遙かに凌駕してゐる。之等は本市産業の中心が漸次商業より工業へ移向しつつあることを明示してゐるものとして注目し値する。

會社營業別

| 種別 | 昭和13年 | | 昭和12年 | | 昭和11年 | |
|-----|-------|-----------------|-------|-----------------|-------|-----------------|
| | 社數 | 資本金總額及出資額 千圓 | 社數 | 資本金總額及出資額 千圓 | 社數 | 資本金總額及出資額 千圓 |
| 總數 | 3,050 | 869,641 | 3,176 | 757,336 | 3,534 | 680,104 |
| 農業 | 14 | 5,772 | 13 | 5,874 | 14 | 5,885 |
| 水産業 | 1 | 400 | 1 | 400 | 1 | 400 |
| 鑛業 | 17 | 11,790 | 16 | 7,398 | 9 | 4,570 |
| 工業 | 1,329 | 465,497 | 1,286 | 380,400 | 1,436 | 329,575 |
| 商業 | 1,591 | 292,608 | 1,755 | 306,567 | 1,967 | 280,864 |
| 運輸業 | 98 | 93,574 | 105 | 56,697 | 107 | 58,810 |

會社資本階級別 昭和十三年末に於ける會社を資本階級別に見れば、10,000圓~50,000圓のものが1,049社で最も多く全體の34.3%に當り、1,000圓未滿のものは918社で之に次いでゐる。之を前年に比すれば1,000圓未滿のもの、10,000圓~50,000圓のものは何れも減少を示し、殊に10,000圓未滿の小會社の減少著しいのに對し、50,000圓以上の會社は何れも増加を

示してゐる。かかる傾向は此處數年間に於ける常態的趨勢であつて、本市の會社企業が比較的大なる資本を必要とする工業經營に傾きつゝある點等にその原因を求むることが出来る。

會社資本階級別

| 年次 | 一萬圓未滿 | 自一萬圓至五萬圓 | 自五萬圓至十萬圓 | 自十萬圓至五十萬圓 | 自五十萬圓至百萬圓 | 自百萬圓至五百萬圓 | 自五百萬圓至千萬圓 | 千萬圓以上 |
|-------|-------|----------|----------|-----------|-----------|-----------|-----------|-------|
| 昭和13年 | 918 | 1,049 | 363 | 512 | 82 | 93 | 15 | 18 |
| 12年 | 1,088 | 1,105 | 351 | 424 | 81 | 97 | 14 | 16 |
| 11年 | 1,396 | 1,206 | 351 | 403 | 72 | 79 | 13 | 14 |
| 10年 | 1,624 | 1,341 | 356 | 377 | 66 | 78 | 11 | 12 |
| 9年 | 1,642 | 1,279 | 341 | 353 | 64 | 77 | 8 | 15 |
| 8年 | 1,706 | 1,245 | 325 | 341 | 62 | 75 | 9 | 12 |

會社營業成績

昭和十三年中の市内會社企業の營業成績を見るに、次表に示す如く純益金は62,982千圓、純損金は4,767千圓、差引利益金は58,214千圓で、昭和十二年の差引利益金47,745千圓に比すれば10,469千圓を増し利益率は10.0%

會社營業成績 (昭和十三年中)

| | 純益金 圓 | 純損金 圓 | 差引利益 圓 | 利益率 % |
|-------|------------|-----------|------------|----------|
| 總數 | 62,982,398 | 4,767,812 | 58,214,586 | 10.0 |
| (組織別) | | | | |
| 株式會社 | 51,941,497 | 3,783,171 | 48,158,326 | 9.3 |
| 合資會社 | 4,458,163 | 569,568 | 3,888,595 | 10.6 |
| 合名會社 | 6,582,738 | 415,073 | 6,167,665 | 11.1 |
| (營業別) | | | | |
| 農業 | 166,103 | 2,208 | 163,895 | 3.4 |
| 水産業 | 93 | — | 93 | 4.7 |
| 礦業 | 213,305 | 200,816 | 12,489 | 1.3 |
| 工業 | 35,312,896 | 2,626,912 | 32,685,984 | 12.9 |
| 商業 | 23,688,140 | 1,849,633 | 21,838,507 | 13.0 |
| 運輸業 | 3,601,861 | 88,243 | 3,513,618 | 6.4 |

を修め、昭和八年の6.9%昭和五年の3.1%に比し非常な上昇振りである。之を組織別に

を見るに合名會社は11.1%で最も高率を示し、合

見れば商業、工業は流石に高く各13.0%、12.9%を示し、運輸業は6.4%で之に次ぎ礦業は最低の1.3%である。

銀行預金

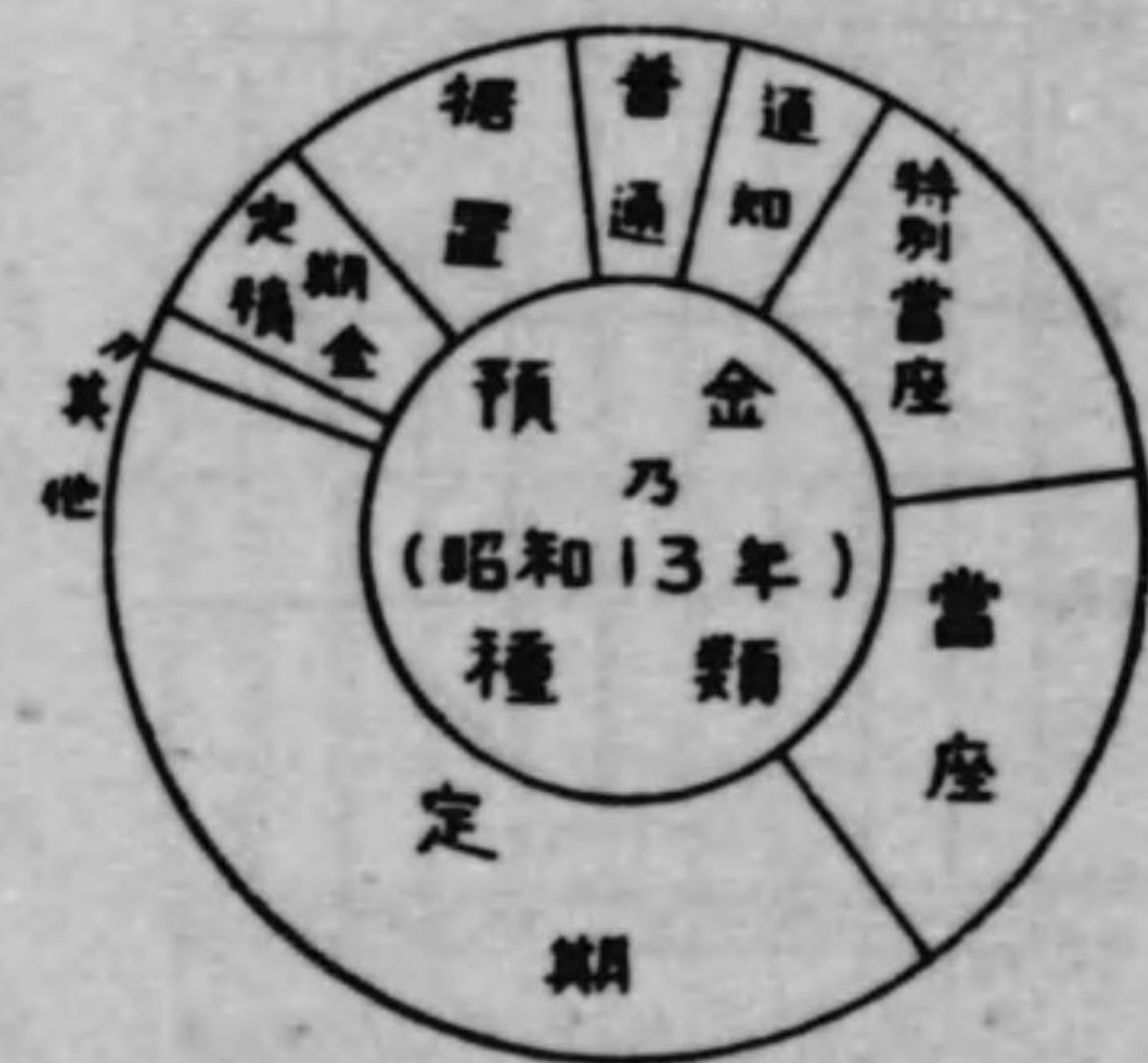
金融の中樞を爲すものが銀行であることは言ふまでもない。昭和十三年末に於て市内に本店を有する銀行は特殊銀行1行、普通銀行4行、貯蓄銀行1行にしてその支店は市内に62行で、之に本店を市外に有する支店銀行26行を加ふれば合計94行である。市内本店銀行の資本金總額は49,900千圓で内拂込濟額は36,050千圓、諸積立金は36,932千圓にして、前年に比し普通銀行に於て1行を減じたる結果資本金總

銀行預金 (預り高中ニハ前年末残高ヲ含ム)

| 年次 | 預り高 | 支拂高 | 年、末、残、高 | |
|-------|-----------|-----------|---------|-----|
| | | | 金額 | 指數 |
| 昭和13年 | 8,573,054 | 7,820,444 | 752,610 | 186 |
| 12年 | 7,902,702 | 7,284,760 | 617,942 | 153 |
| 11年 | 6,093,422 | 5,562,877 | 530,545 | 131 |
| 10年 | 5,465,003 | 4,970,446 | 494,557 | 123 |
| 9年 | 5,486,175 | 5,021,743 | 464,432 | 115 |
| 8年 | 4,732,288 | 4,316,124 | 416,164 | 103 |
| 7年 | 4,501,932 | 4,124,620 | 377,312 | 93 |
| 6年 | 4,190,120 | 3,741,742 | 448,378 | 111 |
| 5年 | 4,295,223 | 3,858,314 | 436,909 | 108 |
| 4年 | 4,747,212 | 4,343,510 | 403,702 | 100 |

額諸積立金等何れも減少を示した。

昭和十三年中市内各銀行に於て取扱はれた預金總額は8,573,054千圓、拂出額は7,820,444千圓、年末残高は752,610千圓に達し、本市經濟界の活潑なる動きと市民の貯蓄心を反映し近時愈々



増加の一途を辿りつゝある。

之を十年前の昭和四年に比すれば將に二倍に垂んとしてゐる。

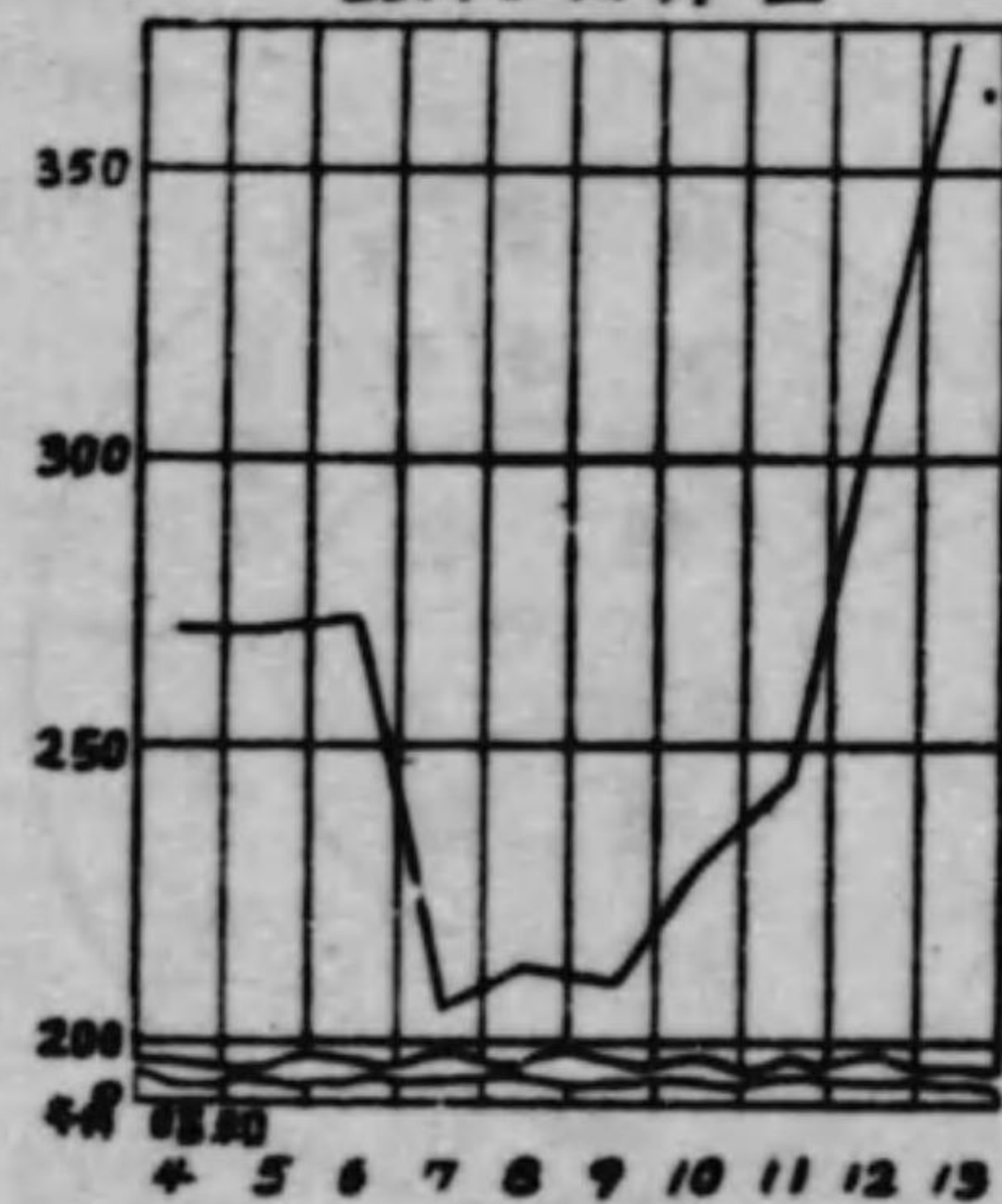
年末残高 752,610千圓を種類別に見れば、定期預金が最も多く預金總額の41.1%を占め、當座預金(17.1%)、特別當座預金14.5%が之に次ぎ、三預金を合すれば總額の72.7%と言ふ過半数に當つてゐる。

昭和十三年 銀行預金種類別 (昭和十三年)

| 種別 | 本年預高 | 本年支拂高 | 年末残高 | |
|--------|-----------|-----------|---------|-------|
| | | | 金額 | 割合 |
| 總數 | 8,573,054 | 7,820,444 | 752,610 | 100.0 |
| 定期預金 | 798,211 | 488,353 | 309,858 | 41.1 |
| 當座預金 | 5,897,859 | 5,769,043 | 128,816 | 17.1 |
| 特別當座預金 | 1,002,753 | 894,004 | 108,749 | 14.5 |
| 通知預金 | 274,668 | 237,420 | 37,248 | 5.0 |
| 普通預金 | 123,042 | 86,141 | 36,901 | 4.9 |
| 据置貯金 | 181,758 | 109,986 | 71,772 | 9.5 |
| 定期積金 | 74,299 | 27,647 | 46,652 | 6.2 |
| 其他 | 220,464 | 207,850 | 12,614 | 1.7 |

七年經濟不況の影響を受け非常に萎縮した銀行貸付金はその後やゝ回復に向ひつゝも未だその増加率はまことに遅々たるものであつた。然し今

銀行貸付金



次事變の勃發するや産業界の活況は實に目覺ましく、従つて貸付金も急激なる膨脹を示した。昭和十三年の貸付高は、4,173,297千圓、回収高は3,795,274千圓、年末残高は378,023千圓で前年の昭和十二年に比し各357,943千圓、288,113千圓69,830千圓の増加を見た。之を種類別に見れば手形貸付が最も多く、同年中の貸

付高は1,516,897千圓、回収高は1,252,052千圓、年末残高は264,845千圓で、之に次ぐは證書貸付、當座貸付で何れも特殊及普通銀行の貸付金である。貯蓄銀行の貸付金は以上の特殊及普通銀行の貸付金に比し非常に少額で全額7,858千圓に過ぎない。

次に貸付金年末現在高を擔保別に見れば、社債及株券に依るものが最も多く92,880千圓に達し、總額の24.6%に當り、之に次ぐは信用の21.3%、雜の20.4%の順位である。

銀行金利 名古屋銀行集會所組合銀行金利は次表に示す如く、大體昭和六、七年頃を峠とし、逐年低下し所謂低金利時代を現出してゐる。

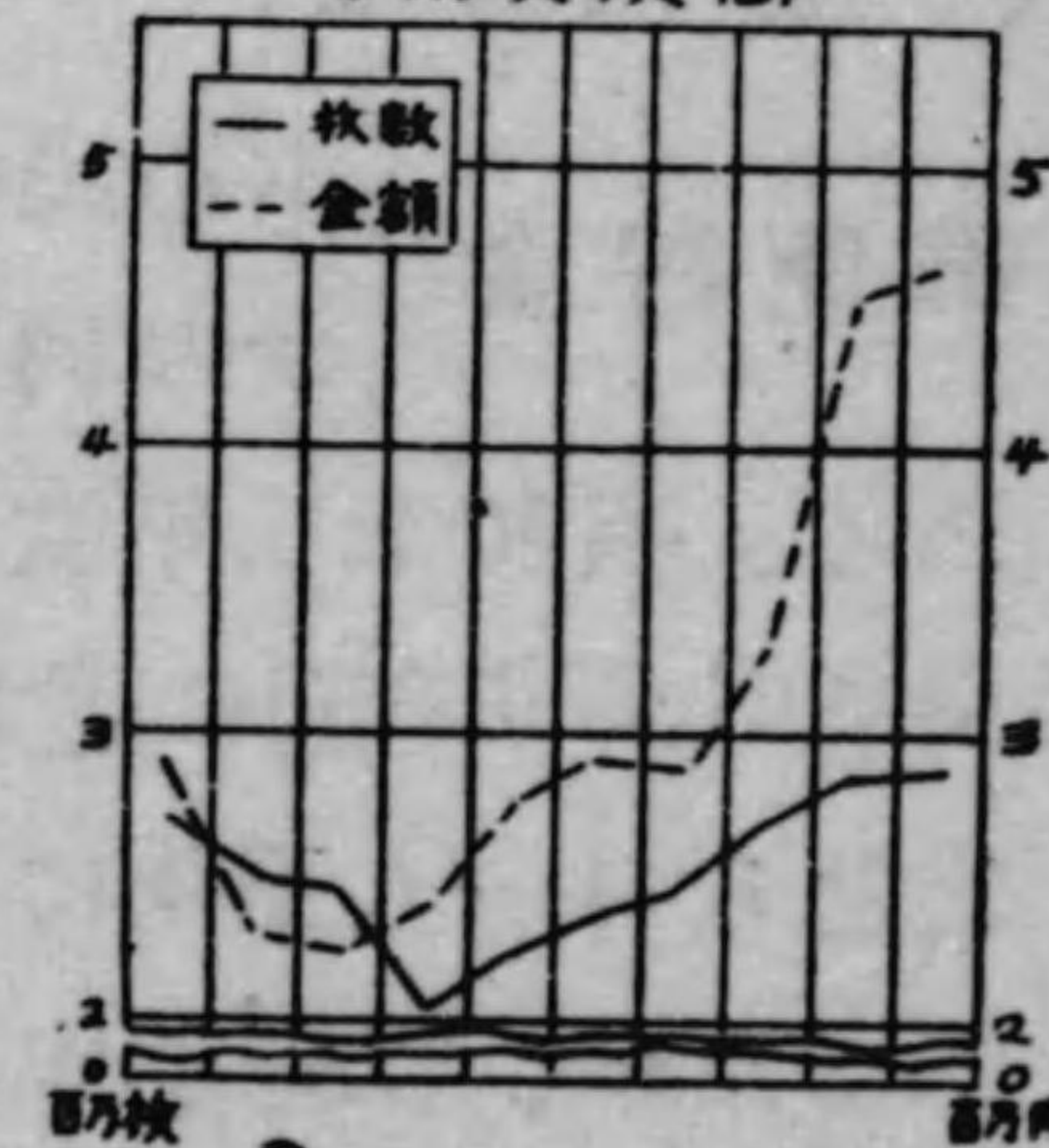
銀行金利

| 年次 | 貸付金日歩 | | | 割引手形日歩 |
|-------|-------|------|------|--------|
| | 手形貸付 | 證書貸付 | 當座貸付 | |
| 昭和13年 | 1.37 | 1.58 | 1.59 | 1.30 |
| 12年 | 1.38 | 1.58 | 1.60 | 1.32 |
| 11年 | 1.43 | 1.62 | 1.63 | 1.36 |
| 10年 | 1.56 | 1.73 | 1.70 | 1.47 |
| 9年 | 1.54 | 1.77 | 1.71 | 1.46 |
| 8年 | 1.64 | 1.84 | 1.79 | 1.57 |
| 7年 | 1.81 | 1.93 | 1.79 | 1.80 |
| 6年 | 1.71 | 1.95 | 1.92 | 1.67 |
| 5年 | 1.70 | 1.94 | 1.99 | 1.67 |
| 4年 | 1.74 | 1.99 | 2.04 | 1.70 |

手形交換高 一般金融界の状況を最も鋭敏に反映するものゝ一つに手形交換高がある。

今名古屋手形交換所に於ける手形交換高の推移を見るに大正七、八年頃には歐洲大戰に基く經濟界の活況に刺戟せられ急激に増加し以來引續き増加の趨勢を持続し、昭和元年には實に34億圓と言ふ手形交換所開所以來の新記録を樹立した。然し翌年にはかの未曾有の金融恐慌の餘波を蒙り26億圓臺に急落し、昭和四年には又29億圓に回復した

手形交換高



るも経済界の不況やうやく深まると共に再度減少するに至つた。

其後昭和十二年事變勃發に伴ふ産業界の活潑なる動きは手形交換高にも鋭敏に反映し、翌昭和十三年には枚數2,860,888枚、金額4,620,391千圓と言ふ巨額に達し、一枚當り金額も1,615圓と言ふ大口となり本市経済界の飛躍的發展を物語つてゐる。

名古屋手形交換所手形交換高

| 年次 | 枚數 | 金額 | 一枚平均 |
|--------|-----------|-----------------------------|------------------------|
| 昭和 13年 | 2,860,888 | 4,620,391 <small>千圓</small> | 1,615 <small>圓</small> |
| 12年 | 2,844,086 | 4,501,934 | 1,583 |
| 11年 | 2,642,684 | 3,305,643 | 1,251 |
| 10年 | 2,471,037 | 2,893,105 | 1,171 |
| 9年 | 2,249,298 | 2,919,072 | 1,243 |
| 8年 | 2,235,014 | 2,795,718 | 1,251 |
| 7年 | 2,076,405 | 2,435,575 | 1,173 |
| 6年 | 2,480,771 | 2,279,472 | 919 |
| 5年 | 2,568,361 | 2,331,177 | 908 |
| 4年 | 2,758,067 | 2,911,929 | 1,056 |
| 3年 | 2,671,635 | 2,884,022 | 1,079 |
| 2年 | 2,432,441 | 2,678,794 | 1,101 |
| 元年 | 2,574,624 | 3,436,365 | 1,335 |
| 大正 14年 | 2,296,703 | 2,871,208 | 1,250 |

郵便貯金

本市民の勤儉貯蓄の傳統的美風は時節柄郵便貯金の利用度を高からしめ年々貯金額は増加しつつある。昭和十二年度末本市内146局の預入高は67,036千圓、拂戻高61,666千圓に達し、年末現在高は112,274千圓に上つた。

之を人口一人平均にして見れば昭和三年には僅か34圓に過ぎなかつたが、以降逐年増加し同七年には91圓となつた。然し九

郵便貯金

| 年度 | 人員 | 年度末現在預金 | 預金者一人平均 | 人口一人當平均 |
|--------|-----------|------------------------------|----------------------|---------|
| 昭和 12年 | 1,035,168 | 112,274,286 <small>圓</small> | 109 <small>圓</small> | 95 |
| 11年 | 910,969 | 102,602,153 | 113 | 92 |
| 10年 | 787,764 | 94,087,718 | 119 | 87 |
| 9年 | 729,520 | 91,005,246 | 125 | 89 |
| 8年 | 674,864 | 89,110,640 | 132 | 90 |
| 7年 | 620,932 | 87,898,077 | 142 | 91 |
| 6年 | 559,223 | 83,705,317 | 150 | 90 |
| 5年 | 483,838 | 48,025,644 | 99 | 53 |
| 4年 | 456,444 | 38,394,133 | 84 | 42 |
| 3年 | 409,233 | 29,425,355 | 71 | 34 |

年以降にはやゝ減少の傾向現はれ昭和十年には遂に87圓に迄減少した。しかるに最近に於ては政府の貯蓄奨励に應へ再度増加の傾向が見え、同十二年には95圓と言ふ多額になり十年前の昭和三年當時に較ぶれば實に2.7倍に増加した。

貿易

海陸 我國生産力の約三割を其の手中に収める中部日
出入貨物 本の一産業圏を背後に控へて、今や出入貨物
量 8,000千噸に達し、貿易額又 600,000千圓に垂んとする我が名
古屋港は、其の發展率に於ては本邦主要港中稀に見る比率を示
しつゝ、新興日本の最前線に極めて目覺しい躍進を續けてゐる
が、翻つて本港港勢の推移を觀察するに、開港前に於ける本港
の存在は極めて微々たるものであつた爲、海運は陸運の發展に
伴はず、貨物は主として四日市、大阪、神戸、横濱等の各港を
經由して輸送されてゐたので、従つて港灣としての實力を充分
發揮することが出来なかつたのである。明治四十年十一月開港
場に指定せられたのを契機として、爾來貿易は年々増進の一途
を辿り來つたが、昭和五、六年に於て世界的財界不況の影響を
うけ幾分の減少を見、昭和七年即ち滿洲事變勃發以來背後地に
於ける諸産業の目覺しい發展に伴ひ、其の活動原力たる工業資
材の急激なる移輸入増加は爲替安に因る輸出貿易の殷盛と相俟
つて、昭和十二年は嘗て見ざる激増を示し、總噸數は 7,900 千
噸、價額は 590,000餘千圓に上り、開港以來の新記録を示したが
續いて昭和十三年は日支事變に因る直接間接の打撃が相當深刻
であつたにも拘らず、尙總噸量に 7,200千噸、價額に 510,000千
圓を算し、前年に比し數量に於て 0.91%、價額に於て 13.7%の
減少に喰止め得たことは、本港が本州中部に於ける産業貿易上
重要な地位を占め居れるを如實に裏書し得るものと言ふこと
が出来よう。

汽船及帆船貿易別 出入貨物を汽船と帆船とに別けて其の趨勢を觀
るに、開港當時に於ける貨物の輸送は帆船を主
とし、汽船貿易としては僅かに小型汽船に依る輸送を見る程度
に過ぎなかつた、従つて其の比率に於ても帆船貿易は80%を占
め、汽船貿易は僅かに20%であつたが、爾來汽船貿易の異常な
る發展に伴ひ、漸次其の地位を轉ずるに至つた。

| 年次 | 汽船貿易 | | 帆船貿易 | | 比 例 | |
|-------|-----------|-------------|-----------|-------------|--------|--------|
| | 移輸出 | 移輸入 | 移 出 | 移 入 | 汽 船 | 帆 船 |
| 昭和13年 | 噸 840,413 | 噸 3,815,088 | 噸 737,394 | 噸 1,825,228 | % 64.5 | % 33.5 |
| 8年 | 791,467 | 3,669,252 | 693,360 | 896,301 | 75.0 | 25.0 |
| 3年 | 379,229 | 3,336,030 | 679,556 | 862,842 | 70.7 | 29.3 |
| 大正12年 | 244,606 | 2,244,045 | 496,190 | 847,006 | 64.9 | 35.1 |
| 7年 | 120,879 | 941,318 | 382,520 | 912,556 | 45.1 | 54.9 |
| 2年 | 61,058 | 702,165 | 335,756 | 693,081 | 42.6 | 57.4 |
| 明治41年 | 14,206 | 163,374 | 186,302 | 510,478 | 20.3 | 79.7 |

内國貿易 内國貿易の趨勢を概觀するに、本市は從來年々
大量の物資を移入してゐたが、昭和七年滿洲事
變の勃發を契機として、本市を始め背後地に於ける生産工業の
目覺しい發展に伴ひ、其の活動原力たる工業資材の移入は消費
物資の移入と共に最近著しく増加し、昭和十三年に於ては事變
下にあつて、船腹不足をはじめ幾多困難の事情に逢着したにも
拘らず異常なる躍進を示し、昭和十二年の貿易額（移入貿易噸
量 47,070千噸、價額215,706千圓）を遙かに凌駕するに至つた。

昭和十三年中の移入貿易は噸量に 4,742千噸、價額に 238,680
千圓を算し、増加したる主なるものは米、砂糖、石炭及其の他
の工業資材等で、これ等物資の大部分は資源に富む臺灣、九州

北海道、朝鮮等の各地より移入してゐる現状である。

更に一方移出の状況を観るに、移入の増加に反し外國輸入貿易の不振が反映して、從來伊勢灣内各地へ多量仕向けつゝあつた飼料、鐵、石炭等の所謂中繼貿易品が激減したので、其の他に於ては全面的に増加を見たるに拘らず結局噸量に於て7%を減じ、價額は貿易品單價の騰貴に因り5%の増加を示した。

| 年次 | 移入 | | 移出 | | 合計 | |
|-------|-----------|-------------|-----------|------------|-----------|-------------|
| | 數量 | 價額 | 數量 | 價額 | 數量 | 價額 |
| 昭和13年 | 4,742,048 | 238,679,555 | 1,003,914 | 83,957,100 | 5,745,962 | 322,636,655 |
| 8年 | 3,540,538 | 122,252,842 | 772,265 | 41,596,840 | 4,312,803 | 163,849,682 |
| 3年 | 3,140,516 | 124,478,837 | 732,990 | 45,984,192 | 3,873,506 | 170,463,029 |
| 大正12年 | 2,368,544 | 124,469,865 | 585,189 | 41,698,204 | 2,952,733 | 166,168,069 |
| 7年 | 1,673,825 | 85,687,723 | 374,137 | 24,715,087 | 2,047,962 | 110,402,810 |
| 2年 | 1,281,823 | 34,013,054 | 358,824 | 14,690,393 | 1,640,647 | 48,703,447 |
| 明治41年 | 649,311 | 18,849,771 | 182,022 | 6,370,792 | 831,333 | 25,220,563 |

尙本港が名古屋市を中心としたる後方地域の消費物資及工業資材の供給に至大なる地位を持つことは次表に示すが如く、其の移動貨物の約91%が食料品、原料品及半製品に依つて占められてゐる事實を見ても明かなる所である。

| 品種別 | 數量 | | | 價額 | | |
|-------|-----------|-----------|-----------|------------|-------------|-------------|
| | 移出 | 移入 | 合計 | 移出 | 移入 | 合計 |
| 食料品 | 103,886 | 359,044 | 462,930 | 17,573,512 | 77,326,509 | 94,900,021 |
| 原料品 | 407,937 | 3,569,218 | 3,977,155 | 13,469,166 | 72,622,233 | 86,091,399 |
| 原料用製品 | 249,034 | 587,979 | 837,013 | 19,157,411 | 56,027,019 | 75,184,430 |
| 全製品 | 171,541 | 200,192 | 371,733 | 27,660,024 | 31,056,000 | 58,716,024 |
| 其ノ他 | 71,516 | 25,615 | 97,131 | 6,096,987 | 1,647,794 | 7,744,781 |
| 計 | 1,003,914 | 4,742,048 | 5,745,962 | 83,957,100 | 238,679,555 | 322,636,655 |

本港内國貿易に於ける貨物の集散地域は近時著しく擴大され其の取引港は北は樺太、北海道より、南は臺灣、南洋諸島に亘り全國の主要港を網羅して餘す處なきに至つた。就中臺灣、朝鮮、北海道、九州地方との取引は最も盛況を極め、殊に本港對内貿易の重要品である食料品及原料品の大部分はこれ等各地より移入しつゝある現状で、特に密接な關係にある。而して其の主なる品は臺灣方面より砂糖、米、朝鮮方面より米、豆、肥料、鐵、樺太及北海道方面より木材、石炭、人絹用パルプ、肥料、鐵、九州方面より石炭、鐵、工業藥品、セメント等である。

名古屋港内國貿易地方別 (昭和13年中)

| 地方別 | 移出 | | 移入 | |
|------|-----------|------------|-----------|-------------|
| | 數量 | 價額 | 數量 | 價額 |
| 樺太 | 6,297 | 686,189 | 247,008 | 13,763,670 |
| 北海道 | 33,415 | 4,074,439 | 796,519 | 35,684,909 |
| 朝鮮 | 117,986 | 19,627,004 | 274,855 | 25,512,928 |
| 臺灣 | 89,866 | 12,499,796 | 329,166 | 49,325,063 |
| 九州 | 73,793 | 1,935,962 | 1,198,020 | 46,425,796 |
| 四國 | 4,870 | 453,527 | 33,454 | 1,102,501 |
| 中國 | 36,328 | 1,266,842 | 150,588 | 7,989,046 |
| 近畿 | 64,422 | 3,185,286 | 199,626 | 10,422,721 |
| 奥羽 | 2,202 | 199,568 | 32,241 | 3,973,127 |
| 關東 | 39,596 | 2,351,960 | 94,411 | 14,226,301 |
| 伊勢灣 | 534,667 | 37,559,102 | 1,375,073 | 27,450,259 |
| 南洋諸島 | 472 | 117,425 | 11,087 | 2,803,234 |
| 計 | 1,003,914 | 83,957,100 | 4,742,048 | 238,679,555 |

外國貿易

本港外國貿易は逐年異常の伸展を續けつゝあり數年以前の世界的財界不況時にありては一時沈

滞を免れ得なかつたが、滿洲事變を契機とする軍需工業の勃興と爲替安に因る輸出貿易の旺盛に依り、爾來貿易は増進の一途を辿り、即ち昭和十三年は支那事變の勃發以來排日貨は世界的に行はれ、又諸原材料の輸入制限、圓ブロック地區への輸出制限、リンク制の實施等幾多困難の事象に直面したが、貿易關係業者は時局の重大性と輸出振興の重要性とを認識し、輸出増進の爲排日空氣の緩和と海外舊市場の確保及新市場の開拓とに懸命の努力を續け、これ等の悪條件を克服したる結果、昭和十三年の外國貿易は巨額の出超額を示し、事變下としては豫想以上の好成績であつた。

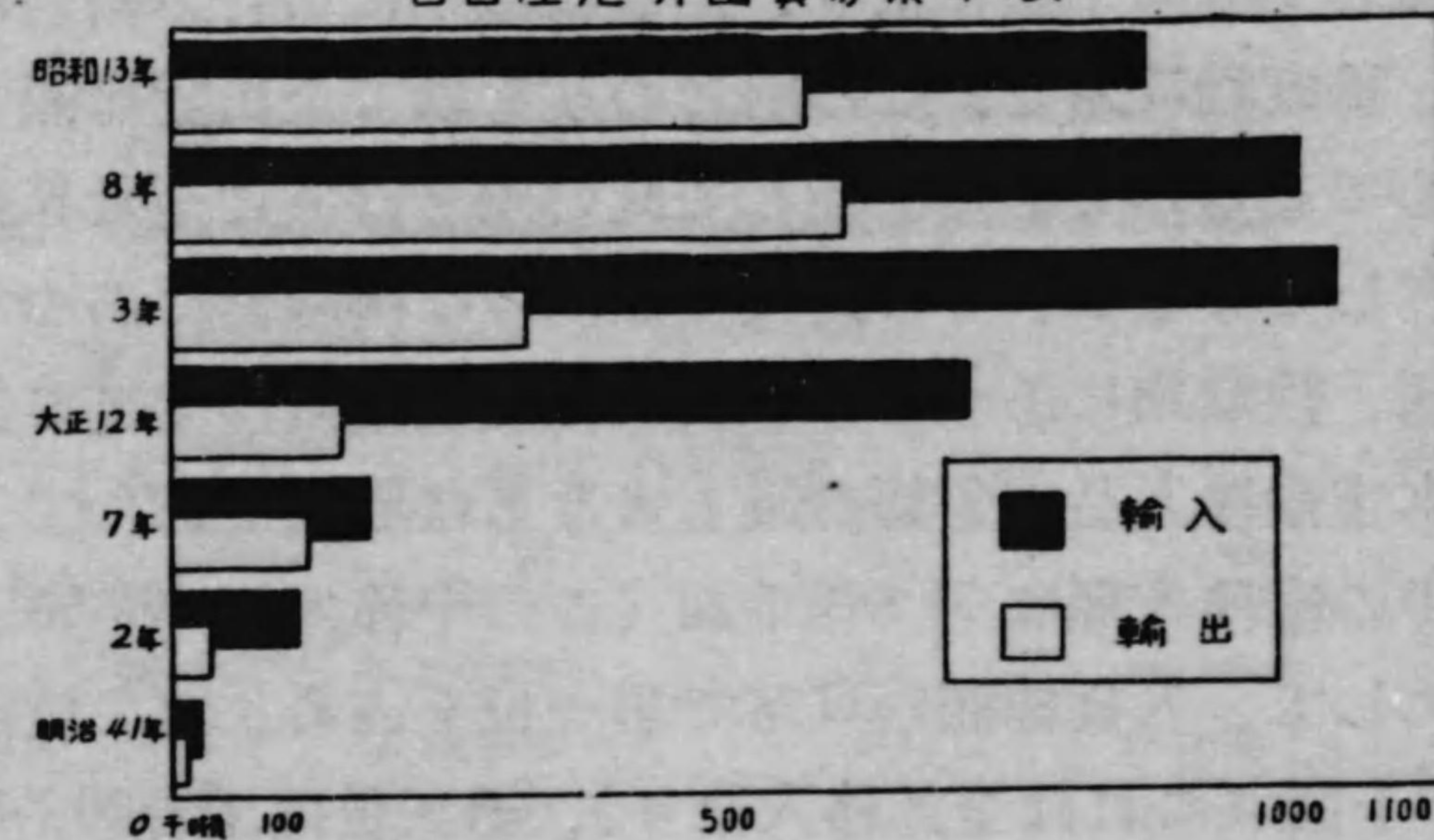
即ち昭和十三年中の外國貿易額は輸出115,100千圓、輸入74,130千圓で差引40,970千圓の出超額となり、その出超額は實に空前のことにして、且又本邦各港の出超額中の首位を占めてゐる。勿論昭和十二年の貿易額輸出147,909千圓、輸入148,329千圓に比較すれば輸出入共減少はしてゐるが、輸入の50%の著減に對し、輸出22%の減少に止めたことは特筆すべき事象と言ふべきである。

今や第四期工事の完成を目睫の間に控へたる名古屋港は、面目全く一新するに至り、神戸、横濱、大阪の各港とともに四大國際港として躍進の途上にあるに拘らず、外國貿易は今なほ阪神依存の所謂間接的取引の傾向が解消しないことは遺憾であるが、此點に關しては關係各業者側が本港の實勢を十分認識し、此の如き不自然なる慣習を打破し、中部日本の生産品を悉く直接貿易に移すに於ては、始めて輸出振興を助長するのみならず、本港の躍進を更に大ならしめる所以となるのである。

今や事變は新段階に入り、興亞建設の大業完成に向つて邁進しつつあるとき、今後に於ける輸出振興は一層痛感されると共に、本港背面地域は全國一の紡織工業及窯業地であり、又各種雜貨類の主産地である關係上、是等生産工業者と貿易關係業者の一致協力と天惠的地の利とに依り、本港今後の外國貿易の發展は蓋し期して待つべきものがあらう。

今開港以來に於ける外國貿易の異數なる發展振りを示せば次表の如くであつて、其の躍進の跡まことに著しいものあることが伺はれるのである。

名古屋港外國貿易累年表



輸出入貨物を品種別に就いて其の情況を觀るに、輸出に於ては全製品が其の大半を占め、即ち噸量は75%、價額は83%に當り輸入に於ては輸出に反し原料品が大部分を占め、噸量は54%、價額は52%に該當してゐる。之を詳細に表示すれば次の如くである。

| 品 種 別 | 数 量 | | | 價 額 | | |
|-------|---------|---------|-----------|-------------|------------|-------------|
| | 輸 出 | 輸 入 | 合 計 | 輸 出 | 輸 入 | 合 計 |
| 食 料 品 | 59,267 | 71,993 | 131,260 | 7,992,047 | 5,553,910 | 13,545,957 |
| 原 料 器 | 22,561 | 486,730 | 509,291 | 1,911,864 | 38,618,773 | 40,530,637 |
| 原料用製品 | 63,352 | 224,828 | 288,180 | 9,281,537 | 17,147,867 | 26,429,404 |
| 全 製 品 | 428,627 | 1,295 | 429,922 | 95,908,370 | 3,268,881 | 99,177,251 |
| 其 ノ 他 | 85 | 113,423 | 113,508 | 7,297 | 9,536,574 | 9,543,871 |
| 計 | 573,892 | 898,269 | 1,472,161 | 115,101,115 | 74,126,005 | 189,227,120 |

出入貨物 主要品別 輸移出中金額の最も大なるは陶磁器及綿織物であつて、昭和十三年中の輸移出額は前者 35,612 千圓、後者 33,109 千圓に上り、出貨總額中に占むる割合は陶磁器 18%、綿織物 17% で、この兩者のみを以て全出貨總額の過半数を占めてゐるのである。而して此の兩者は共に全世界にその販路を有してゐるが、その最大の仕向地は陶磁器にあつては北米合衆國、綿織物にあつては、英領印度及蘭領印度等である。

更に本市輸移入品中金額の最も大なるは石炭であつて、昭和十三年中の輸移入額は 51,842 千圓（この中移入額 46,583 千圓を含む）にして、入貨總額の 17% で第一位を占め、第二位は砂糖の 31,299 千圓（これは全部移入なり）、第三位は米の 30,749 千圓（大部分移入）、第四位は羊毛の 22,565 千圓の順序となつてゐる。而して羊毛にありてはその 75% は濠洲からの輸入である。

次は遙かに下つて木材の 17,747 千圓、洋紙の 11,646 千圓、飼料の 11,094 千圓が之に續いてゐる。これ等主要品の主なる仕入地は、石炭にありては滿洲國、木材にありては比律賓である。（石炭の移入は若松、室蘭、砂糖は高雄、基隆、米は砂糖と同じく高雄、基隆等である）

今昭和十三年中に於ける主要品の出貨、入貨を見れば次表の如くである。

(出貨) 主要移出入品

| 品 名 | 價 額 | 出貨總額ニ對スル割合 | 數 量 | 出貨總噸量ニ對スル割合 |
|--------|------------|------------|-----------|-------------|
| 陶 磁 器 | 35,611,815 | 17.9% | 338,190 噸 | 21.4% |
| 綿 織 物 | 33,109,147 | 16.6 | 34,625 | 2.2 |
| 車輛同部分品 | 13,451,904 | 6.8 | 43,599 | 2.8 |
| 小 麥 粉 | 7,752,359 | 3.9 | 40,505 | 2.6 |
| 飼 料 | 6,093,697 | 3.1 | 71,456 | 4.5 |
| 鐵 類 | 5,904,104 | 3.0 | 58,964 | 3.7 |
| 紡 織 機 | 5,475,715 | 2.7 | 20,221 | 1.3 |
| 石 炭 | 4,584,022 | 2.3 | 187,846 | 11.9 |
| 肥 料 | 4,583,627 | 2.3 | 56,763 | 3.6 |
| 毛 織 物 | 4,444,589 | 2.2 | 1,833 | 0.1 |

(入 貨)

| 品 名 | 價 額 | 入貨總額ニ對スル割合 | 數 量 | 入貨總噸量ニ對スル割合 |
|--------|------------|------------|-------------|-------------|
| 石 炭 | 51,842,480 | 16.5% | 2,330,429 噸 | 41.3% |
| 砂 糖 | 31,299,299 | 10.0 | 100,634 | 1.8 |
| 米 | 30,749,689 | 9.9 | 152,035 | 2.7 |
| 羊 毛 | 22,565,219 | 7.2 | 34,354 | 0.6 |
| 木 材 | 17,747,700 | 5.7 | 418,817 | 7.4 |
| 洋 紙 | 11,646,603 | 3.7 | 44,860 | 0.8 |
| 飼 料 | 11,093,665 | 3.5 | 137,425 | 2.4 |
| 工業用藥品 | 11,024,825 | 3.5 | 72,522 | 1.3 |
| 肥 料 | 9,146,140 | 2.9 | 116,204 | 2.1 |
| 豆 類 | 7,717,554 | 2.5 | 61,483 | 1.0 |
| 人絹用パルプ | 6,914,612 | 2.2 | 21,794 | 0.4 |

輸出入貨物國別 本港對外貿易の發展に伴ひ取引範圍も漸次擴大せられつゝあるが、殊に最近阿弗利加及中、南米諸國の新市場に對する進出が頗る活潑を呈するに至つた。而して其の取引國の如きは百有餘ヶ國に上り、全世界殆ど行渉らざる所なき迄に著しき發展を示した。就中貿易額の逐年多額を算する取引國は、滿洲國、英領印度、濠太刺利、關東州、北米合衆國、中華民國、蘭領印度等で、次で埃及スーダン、比律賓、英吉利、南阿聯邦、加奈陀等である。

更に之を輸出入別に見ると、輸出は英領印度、關東洲、中華民國、滿洲國、北米合衆國の順位で、之を輸出總額の115,100千圓に比較すると、英領印度は17%、關東洲は13%、中華民國は11%、滿洲國は10%、北米合衆國は0.8%に該當してゐる。而してこれ等各國に輸出するものは、主として綿織物、陶磁器、毛織物、車輛、玩具、箱板、合板等である。

輸入は滿洲國、濠太刺利、北米合衆國、蘭領印度、英領印度の順位で、これを輸入總額74,130千圓に比較すると、滿洲國は31%を占め斷然多く、次に濠太刺利は23%、北米合衆國は10%、蘭領印度は0.5%、英領印度は0.4%に當つてゐる。

而してこれ等各國より輸入するものは、主として滿洲國の石炭、豆、肥料、雜穀及飼料、濠太刺利の羊毛、北米合衆國の人絹用パルプ、木材、蘭領印度の玉蜀黍、木材等である。

市設貿易助長機關 本市貿易の目覺ましい發展の蔭に名古屋市が單獨に、或は縣、商工會議所との共同に試みつゝある各種の貿易助長機關のあることは忘るゝことが出来ない。之等機關は本市貿易の確固たる地位を築き、且つ之を發展せし

むる爲に重要な機關で、今後益々その活躍に期待する所が大である。

名古屋商品紹介所 名古屋商品紹介所は對支竝に對滿貿易の進展を圖る目的を以て昭和七年より實施せられた施設であつて、支那及滿洲國の産業中心地に設置せられ、名古屋商品の販路擴張と商權確保の爲直接商業者との間に立つて取引の紹介斡旋に務むるものである。その業務は取引紹介の外に市況の調査、信用調査、紛議の調停等で現在奉天、天津、上海、廣東の四箇所竝に張家口、漢口の二出張所を有し大いにその効果を上げてゐる。

貿易斡旋所 貿易斡旋所は隆々たる本市貿易の現狀に適應すると同時に、躍進名古屋の貿易に益々拍車をかける爲、昭和十一年九月十五日從來市役所内に設置せられてゐた貿易相談所の業務を擴大充實すると共に、市内商業中心地區に進出開所せられたもので、本市外國貿易關係業者に對する貿易上の斡旋をなさんとするものである。その業務の概略を示せば次の如くである。

1. 海外商取引の紹介斡旋
2. 貿易實務の幫助助成指導
3. 商品見本の海外送付
4. 海外市場に於ける商品見本、型録等の蒐集展示
5. 其他貿易斡旋に關する事項

交 通

街 路

大正九年一月本市に於ても都市計畫法が施行せらるゝことゝなり、獨り街路のみならず其他の都市重要施設も之に依つて計畫し實施し得ることゝなつたので、本市の都市計畫上茲に一新紀元を開いたものである。

本市はこれより先、大正八年所謂五幹線（岩井「第一號線」、高岳「第二號線」、千早「第三號線」、明道町「第四號線」、大津町「第五號線」）なるものを都市計畫事業として施行し、尙之が追加事業たる東郊連絡線の新設を第一期街路事業とし、事業計畫は當初大正八年度より同十一年度に至る四ヶ年繼續（總事業費4,559千圓）を以て完成の豫定であつたが、此の間幾多の支障を來した爲、數次年期の延長、豫算の更正を爲し、漸く大正十四年度に至り七ヶ年の日子と9,000千圓（此の中東郊連絡線街路の新設費を含む）の事業費を費し、完成したもので、其の總延長は6,670米42、内第一號線の擴築延長1,455米63を除き他は總て新設で、街路幅員は第一號線32米727、第五號線23米636、他は19米999である。

尙東郊連絡線は市内中央線以東、東郊一帶の地が學校街及屈竟の住宅適地として其の發展目覺しいものがあるにも拘らず、同方面と舊市街とは數町僅かに一小徑を以て連絡するに止まり交通上の不便と危険が大である爲、兩者を連絡せしむる軌道布設事業と相俟つて、之を前記追加事業としたもので、延長307米27、幅員24米545の新設であつて、當初大正十三年度に於て（事業費278,256圓を以て）完成の豫定であつたが、用地買収遅

延等の爲一ヶ年延長し、大正十四年度末を以て完成を見るに至つた。

更に新榮町九丁目から覺王山に至る線も電車軌道の改良上急施を要するので、大正十三年十二月事業に着手（事業費1,110千圓）昭和二年に於て之が完成を見るに至つた。之に依つて一路坦々として名古屋驛より覺王山に至る大路に複線電車の運轉を見るに至つたのである。

次いで第二期街路事業は昭和四年七ヶ年繼續（事業費29,000千圓）を以て昭和四年度より同十年度に亘り實施し、更に同十一年之が追加並に變更に依り（事業費を45,500千圓に増額）繼續年期を七ヶ年延長し目下實施中であり、昭和十七年度に於て之が完成を見る豫定である。

斯くの如く第二期事業は街路工事としては詢に本市空前の大計畫に依るものであつて、之が實現の曉には海陸交通運輸の諸設備に多大の利便を齎らし、産業大名古屋建設に向つて躍進の歩に副ふものと期待されて居る。

昭和十三年末現在本市道路面積は15,672千平方米（延長3,519千米）に達し、本市總面積の9.8%に當つて居る。

| 年 次 | 國 道 | | 縣 道 | | 市 道 | | 計 | |
|-------|--------|---------|--------|-----------|-----------|------------|-----------|------------|
| | 延 長 | 面 積 | 延 長 | 面 積 | 延 長 | 面 積 | 延 長 | 面 積 |
| 昭和13年 | 22,457 | 349,436 | 96,735 | 1,155,786 | 3,400,221 | 14,167,224 | 3,519,413 | 15,672,446 |
| 9年 | 23,174 | 222,578 | 85,800 | 887,063 | 2,931,412 | 10,792,821 | 3,040,386 | 11,902,462 |
| 4年 | 23,098 | 181,722 | 86,972 | 777,309 | 2,459,589 | 6,559,453 | 2,569,659 | 7,518,484 |
| 大正13年 | 22,636 | 175,312 | 80,564 | 735,973 | 2,288,895 | 5,310,152 | 2,392,095 | 6,221,938 |
| 8年 | 15,271 | 119,554 | 24,605 | 497,607 | 600,351 | 1,215,884 | 649,318 | 1,833,044 |

街路舗装

都市施設中街路は各種交通機關の基礎を爲すものにして、市民生活の根源たる交通を掌るものであり、又一面市民の保健、衛生に貢献し、産業の開發、都市の美觀上にも亦極めて重要な地位を占むるものである。従つて街路網の完備、路面の改良は近代都市に於ける最も緊事たる施設であることは言ふ迄もない。

本市に於ける街路舗装は、明治四十四年大須仁王門前がアストン舗装に依り舗装されたのを最初とし、次いで大正十三年廣小路通の歩道がコンクリートブロックに依り舗装され、更に大正十五年納屋橋、名古屋驛前間が同様アストンに依り車道に舗装されたもので、これが本市に於ける車道舗装の嚆矢である。以上は街路舗装の先驅的のものであつて、所謂本格的に舗装工事の施行されたのは、昭和三年御大典記念事業として國道十二號線の玉屋町四丁目より本町一丁目に至る延長1,010米65、面積14,413 平方米32が擴築工事と共に車道をシートアスファルト、歩道をコンクリートブロックに依り舗装されたのが即ちそれである。

街 路 舗 装

| 年 次 | 車 道 | | 歩 道 | |
|-------|-------------|---------------|------------|-------------|
| | 延 長 | 面 積 | 延 長 | 面 積 |
| | 米 | 平方米 | 米 | 平方米 |
| 昭和13年 | 387,273.726 | 2,312,354.046 | 44,245.531 | 284,090.263 |
| 12年 | 386,553.509 | 2,291,530.317 | 44,571.691 | 282,955.156 |
| 11年 | 231,590.174 | 1,354,601.080 | 32,929.955 | 186,453.285 |
| 10年 | 197,073.492 | 1,145,571.551 | 31,818.105 | 179,218.435 |
| 9年 | 184,087.702 | 1,381,916.491 | 27,994.945 | 164,354.895 |
| 8年 | 74,767.644 | 734,069.624 | 17,338.195 | 115,715.731 |

橋 梁

橋梁は街路の一部を寫し街路と共に産業上、交通上都市施設の格幹を爲すもので、都市計畫上之を分離して考ふることが出来ないのみならず、都市の美觀上重要な地位を有するものである。

由來本市には大河尠く架橋幅員 100 米を超ゆるものは庄内川一川に止まり、従つて大橋梁と稱すべきものは尠いが、市内を流るゝものには大江川、山崎川、中川運河、堀川、新堀川、運河等があつて、都市計畫街路事業の進捗に伴つて着々近代的構築に新設又を改築されつゝある。

橋 梁

| 年 次 | 總 數 | 石 橋 | 鐵 橋 | 木 橋 | 木 鋼 混合橋 | 鋼筋混 凝土橋 | 其ノ他 |
|-------|-------|-----|-----|-----|---------|---------|-----|
| 昭和13年 | 724 | 16 | 26 | 447 | — | 212 | 23 |
| 10年 | 542 | 17 | 32 | 371 | 1 | 114 | 7 |
| 5年 | 497 | — | — | — | — | — | — |
| 大正14年 | 1,440 | — | — | — | — | — | — |
| 9年 | 165 | — | — | — | — | — | — |
| 4年 | 166 | — | — | — | — | — | — |
| 明治43年 | 288 | — | — | — | — | — | — |
| 38年 | 216 | ? | 1 | 13 | ? | ? | ? |
| 33年 | 228 | ? | 1 | 12 | ? | ? | ? |

備考 大正十四年橋數の著しく増加せるは隣接町村併合の結果に依る。

上表に示すが如く本市橋梁總數724橋の内、其の過半數の447橋は舊型式木造橋にして幅員狭少現代の自動車交通に適しないものがあるので、昭和十一年より五箇年繼續事業として之が改築を行ふこととなつた。

名古屋港

今の名古屋港、昔の熱田港は昔から船舶の出入相當頻繁であつたが、もともと遠淺で近代的巨

船を入れる譯には行かなかつた、されば本市産業の異状なる發達に依り早くも改修の必要に迫られ、愈其の具體案を備へて築港を計畫したのが明治二十八年で、起工したのは翌二十九年である。

第一期工事は總噸數 3,000 噸數船舶を標準とし、總工費 2,860 千圓、繼續年期十五ヶ年を以つて明治二十九年度に着手、同四十三年度に竣工、其の事業の竣工に近付いた頃は海運界の形勢は著しく進歩し、従つてその計畫に満足し得ない様になつたのである。當時は尙熱田港と稱して本市の市域に屬してゐなかつたが、本市は其の築港を完成するには熱田を併合し其の徹底を期するの要あるを想ひ、明治四十年熱田と小碓村の一部を編入して、更に時勢に順應する築港計畫を要求したのである。斯くして第一期工事の竣工した四十三年に、更に 6,000 噸級の船舶を標準とした第二期工事（總工費 3,960 千圓）を施行することになつたのであるが、其の工事の終る頃には矢張り同計畫では満足出來ず、大正九年から更に 10,000 噸級を標準として、第三期工事（總工費 8,670 千圓）に着手し、大正十五年度に竣工を見たのである。

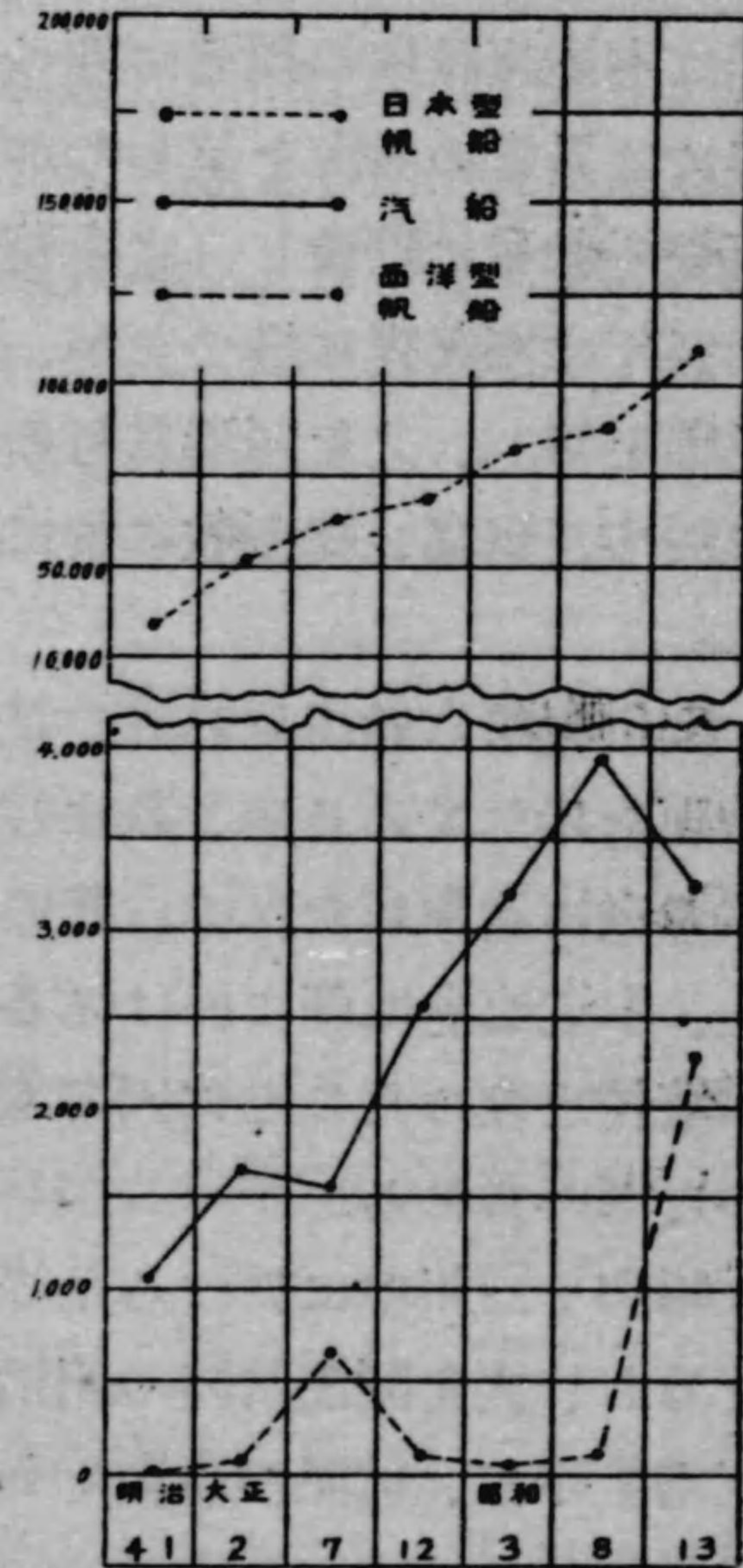
以上三期工事の竣工に依つて 10,000 噸級の船舶は自由に出入することが出來、又船溜には同時に 38 隻の内外船舶を碇泊せしめ、之に伴つて上屋、鐵道及其他の設備も漸次備つたので、船舶の出入、貨物の吞吐は頓に著しい増加を告げ、中部日本に於ける重要港灣として認識せらるるに至つたのであるが、本港の將來は到底斯種の規模のみでは安んずることは許さず、今後益振興發達せんとする中部日本の産業貿易に對應し、港灣の性

能を發揮し、其の使命を完ふする施設の必要ある趨勢に鑑み、總工費 20,120 千圓、繼續年期十二ヶ年を要する第四期擴張計畫を樹て、昭和二年度に着手し、爾來銳意工事の進捗に邁進しつつあるのである。

之が完成の暁には内港航路の幅員は 90 間、水深は 30 尺となり船溜面積は 880 千坪に擴張され、10,000 噸級を始め大小 66 隻の船舶を一時に繋留させることが出來、岸壁に於ては 2,000 千噸、船舶に於ては 8,000 千噸、合計 10,000 千噸以上の貿易貨貨物が裕に取投はれ得ることになり、本港將來の躍進は期して待つべきものがあり、華々しき明日を約束されるに至つた。

入港船舶 本港修築工事の着手以前は勿論開港當時に於ても出入船舶は帆艇船を主とし、僅かに小型汽船の出入を見るに過ぎず、遠洋航路の大型汽船の大部分は四日市港に入り、艇船又は鐵道に依つて四日市、名古屋間の連路をなす情勢であつた。即ち開港當時は未だ第一期の修築工事中であり、港灣としての機能を十分に

入港船舶隻數



發揮することが出来なかつた。其の後第二、第三期擴張工事の竣工を見、今又第四期擴張工事の完成を目睫に控へ本港の面目は全く一新し、更に本市及其の後方地域の産業の勃興による出入負物の激増は必然的に各合種航路の船舶を誘致する結果となり従つて入港船舶は比年著しく増加し、殊に輓近非常な激増を示したことは前表で明らかな所であつて、開港當時の情勢に比較すると實に隔世の觀があるのである。

今入港船舶を汽船と帆船とに區別して其の趨勢を見るに、汽船は本港諸設備の擴充に伴つて年々遞増の一途を辿り、昭和八年には異常の活況を呈したが、其後昭和十二年七月に到り支那事變の勃發に際會し、之を契機に漸次減退の傾向を示し、昭和十三年は不況裡に終つたが、隻數に於て3,225隻、總噸數12,817千噸を算し、之を開港當時の明治四十一年に比較すると、隻數に於て三倍強、總噸數に於て實に四十三倍の増加を示して居る。

次に帆船に就て見ると、是又汽船の躍進と軌を一にし、累年増加を示してゐるが、茲に注目すべきは最近西洋型帆船の利用が急激に増加した點で、其の主要原因は汽船の船腹不足の補充と、本港臨港地帯に於ける各種工業の殷盛に伴ふ原料品の輸送が繁忙となつたことに因るもので、今後益増加の趨勢を辿るものと考へられる。

昭和十三年中に於ける是等西洋型帆船の入船隻數は 2,327 隻を算し、之を開港當時の明治四十一年に比較すると二十六倍の巨増を示し、前記の事實を如實に反映してゐるものと言ふことが出来る。

入 港 船

| 年 次 | 汽 船 | | 西 洋 型 帆 船 | | 日 本 型 帆 船 | |
|-------|-------|------------|-----------|---------|-----------|-----------|
| | 隻 數 | 總 噸 數 | 隻 數 | 總 噸 數 | 隻 數 | 總 噸 數 |
| 昭和13年 | 3,225 | 12,816,982 | 2,327 | 195,147 | 111,920 | 3,091,825 |
| 8年 | 3,968 | 13,271,314 | 292 | 45,205 | 89,823 | 2,279,532 |
| 3年 | 3,213 | 8,116,239 | 161 | 23,049 | 81,150 | 1,861,819 |
| 大正12年 | 2,547 | 4,716,259 | 218 | 33,641 | 69,640 | 1,346,852 |
| 7年 | 1,581 | 1,044,113 | 723 | 108,377 | 63,280 | 971,223 |
| 2年 | 1,640 | 1,281,289 | 169 | 18,271 | 50,796 | 662,380 |
| 明治41年 | 1,028 | 298,120 | 88 | 9,514 | 23,550 | 307,092 |

鐵 道

本市に始めて鐵道が通じたのは明治十九年四月のことで、同年三月武豊港より熱田驛に至る鐵道が開通し、四月名古屋笹島まで延長され、五月更に笹島、清洲間が開通した。名古屋驛は笹島に設けられた停車場で、此の附近多年繁昌の源を此處に起してゐる。

東海道線は東京、神戸間全線の開通を見たのが明治二十二年七月のことである。

關西鐵道は明治二十一年私設として關西鐵道株式會社の起工する所で、二十三年末に開業し、二十八年四日市より名古屋迄の延長線を開通し、三十年九月には名古屋、大阪兩都市の連絡を完成したのである。

中央線はこれ等の鐵道より遙に後れて建設され、名古屋、中津間は明治三十五年十二月開通したが、全線の開通を見たのは四十四年である。

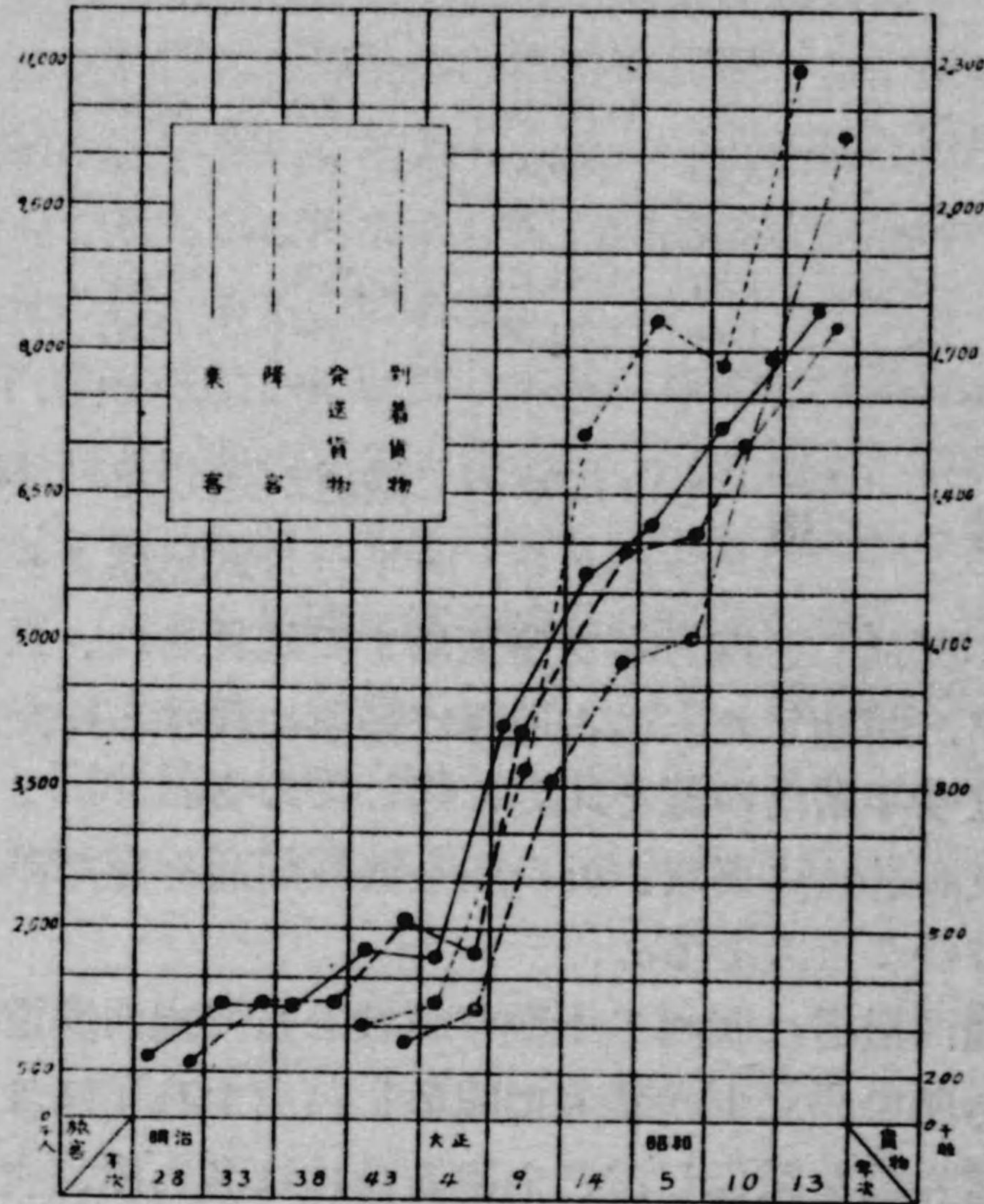
上述三線の外、臨港線は一部愛知縣で敷設され、明治四十四年五月竣工した。線路は名古屋中央埠頭を起點として名古屋港驛を経て名古屋驛に達し、前述の諸線と連絡する。延長は約9軒

である。

而して市内停車場は貨客驛に名古屋、熱田千種、大曾根、鶴舞、八田の6驛あり、貨物専用驛には笹島、堀川口、名古屋港、白鳥の四驛がある尙此の外旅客扱所2ヶ所、小荷物扱所8ヶ所がある。今

之等各驛の昭和十三年度中に於ける実績を見るに、乗客總數8,498千人、降客總數8,376千人にして、更に發着貨物について観るに、發送1,961千噸、到着2,166千噸に達してゐる。

鐵道旅客及貨物



鐵道乗降客及發着貨物

| 年次 | 乗車 | | 降車人員 | 發送貨物 | | 到着貨物 |
|-------|-----------|-----------|-----------|-----------|-----------|-----------|
| | 人員 | 料金 | | 噸數 | 料金 | |
| 昭和13年 | 8,498,239 | 7,343,294 | 8,376,105 | 1,961,582 | 8,369,339 | 2,166,953 |
| 10年 | 7,167,349 | 6,201,801 | 7,036,061 | 1,676,799 | 6,276,351 | 1,682,239 |
| 5年 | 6,162,278 | 5,395,399 | 6,076,499 | 1,762,672 | 5,366,896 | 1,104,252 |
| 大正14年 | 5,744,613 | 5,632,972 | 5,906,325 | 1,535,465 | 5,406,203 | 1,052,195 |
| 9年 | 4,253,238 | 4,078,162 | 4,172,698 | 842,089 | 2,835,972 | 811,432 |
| 4年 | 1,781,807 | 1,145,793 | 1,839,857 | 357,765 | 1,010,664 | 349,278 |
| 明治43年 | 1,848,673 | 1,220,013 | 2,075,917 | 307,242噸 | 719,554 | 284,614噸 |
| 38年 | 1,211,129 | 779,587 | 1,221,241 | ? | ? | ? |
| 33年 | 1,243,240 | 628,525 | 1,249,743 | ? | ? | ? |

名古屋驛 名古屋驛は他の諸大都市の中央停車場が逐次改良擴張される中にあつて獨り舊來の状態を存し年々激増する貨客の輸送上の不便は言ふ迄もなく、都市美觀上にも好ましからぬ存在であつた。

此の改良計畫は大正七年樹立され、翌八年末より工事に掛つて十數年に餘る歳月と23,300餘千圓の總工費を以て、昭和十二年始めに竣工し、二月一日より營業を開始した。

名古屋驛の改良に伴ひ、驛を中心として南北相當區間は高架化され、既に新驛には開西急行電鐵の乗入が實現されて居り、又名古屋鐵道西部線は目下工事中にして近く此の乗入も實現を見る豫定で、更に名古屋鐵道東部線と同西部線との連絡も懸案となつて居り、これ等が實現の曉には名古屋市近郊の運輸は一段と目覺しい發展振りを爲すことは豫測に難くないところである。

電 車 本邦に於て電氣軌道を開業したのは、明治二十八年一月京都電氣鐵道株式會社の伏見線であつた。

名古屋はこれに次ぐ明治三十一年五月の開業で、現在大名古屋の目貫通をなせる笹島（舊名古屋驛前）一縣廳前（現在久屋町）の二軒二の線路である。

本市電氣軌道事業の沿革は古く明治二十七年六月、愛知馬車鐵道株式會社の設立に遡る。即ち明治二十六年愛知縣では笹島と枇杷島とを連絡する所謂三間道路を拓く計畫を樹てたのを動機として、馬車鐵道敷設を企圖し、明治二十七年三月枇杷島、榮町、本町線三線の特許を得たが、馬車運轉は日清戰爭勃發による一般事業界不振の影響を受けて遂に實現するに至らなかつた。然るに當時電氣利用の途が拓けた際であつたから、動力を電氣に変更するを得策であるとして、社名を名古屋電氣鐵道株式會社と改稱した。明治二十九年六月馬車鐵道時代の三線の外熱田線を加へて特許を受けたので、資本金を250千圓に増資すると同時に工事に着手し、三十一年五月笹島、縣廳前間の電車（三十四人乗）運轉營業を開始した。これが名古屋に市街電車の通つた嚆矢である。

其の後會社は明治三十二年に500千圓、同三十一年に1,000千圓、同四十年に6,000千圓に増資し、翌四十一年には一時に2,000千圓に減資したが、更に四十三年には5,000千圓、大正八年に7,600千圓と累増して、翌九年には11,500千圓の資本を擁する一大會社となつた。二十五ヶ年間に實に四十六倍の増資となつたのである。

開業當時の營業路線は僅々1哩27鎖で、全線を四區に分ち一區一錢の比例區間制度（此の區間制度が四錢均一制に改正されたのは、會社經營の末期に當る大正十年十二月であつて、これが本市電車賃均一制の最初である）を採り、創業第一期六月末日迄五、六日間の營業成績は、一日平均運轉車輛8輛6分、乗車人員5,992人、同收入108圓と云ふ可愛ゆいものであつた。

本市は明治四十三年に開催された關西府縣聯合共進會を契機として一大膨脹期を劃した。而して電氣鐵道も市勢の膨脹に順應して其の施設を擴充し、公共機關としての自負と榮譽とを誇つてゐたが、大正三年九月に至つて電車燒打事件といふ不祥事件に逢着したのである。名古屋電氣鐵道の乗客賃金は他都市に例のない一區一錢とする比例賃金制度に依る區間制を採つてゐたが、線路の延長に比例して區間は増加し、従つて長距離乗客たる多數通勤者の負擔を遞増し、最高料金十幾錢に達するに至つた。當時は世界戰爭初期に於ける未曾有の經濟界不況に見舞はれ失業者續出した時であり、殊に他都市に於ては順次均一制又は制限區間制を採りつゝあつた際であつたので、市民の輿論は期せずして賃金制度變更の叫びとなり、上述の燒打事件を見るに至つたのである。

會社は斯る災厄に遇つたに拘らず、爾來躍進的發展を續け、其後屢々見舞はれた經濟界の波瀾にも殆ど影響を受けず、社運隆々たるものがあつた。市營直前たる大正十一年上半期には軌道延長複線24哩78鎖、單線1哩35鎖であつて、營業成績は一日平均運轉車輛159輛、運轉哩數17,635哩、乗客收入7,936圓となつて居り、創業當時に比較し軌道に於て約二十倍、收入に於て

約七十倍と云ふすばらしい成績を擧ぐるに至つた。

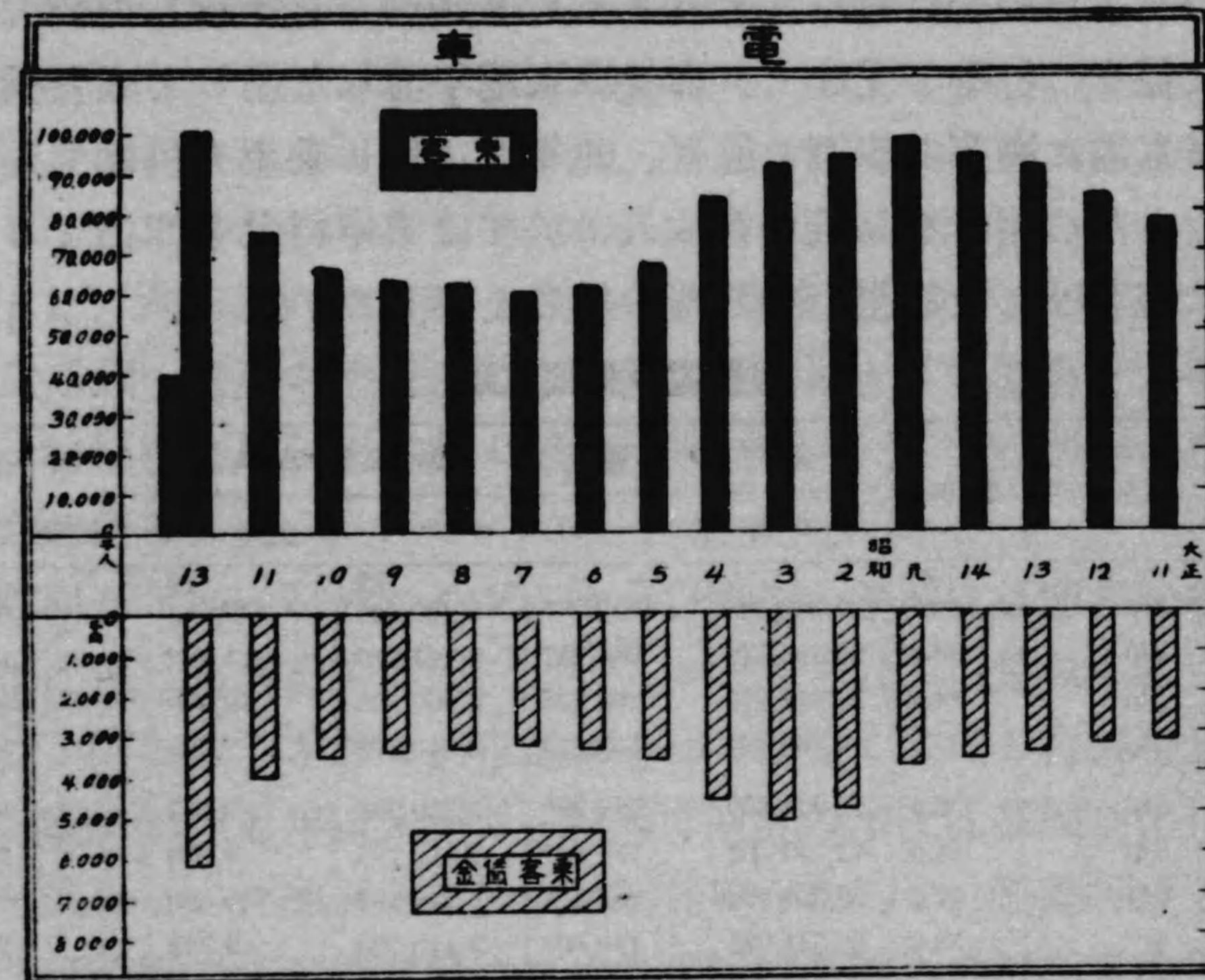
然るに一方市街電車公營の新機軸が大阪市に依つて先鞭（明治三十六年）を着けられて以來、順次各都市に波及し市營電車の運轉を見るに至つた爲、本市に於ても電車市營の議は焼打事件以前既に其胚芽を生ずるに至つた。爾來紆餘曲折を経て遂に大正十一年八月一日（買收價格2,670千餘圓）目出度く市電の實現を見るに至つたのである。

今市電氣局が會社より引繼いだ開通路線は次表の如くである。

| 線路名 | 區間 | 復線路長 | 單線路長 |
|------|------------|----------|---------|
| 榮町線 | 名古屋驛前—千種 | 4.17826 | — |
| 押切線 | 志摩町—押切 | 1.61940 | — |
| 熱田線 | 榮町—東築地 | 9.69259 | — |
| 公園線 | 赤塚—門前町 | 4.71035 | — |
| 築地線 | 熱田驛前—築港 | 4.83350 | 0.27797 |
| 江川線 | 淨心前—船方 | 8.11311 | — |
| 覺王山線 | 西裏—覺王山 | — | 2.30337 |
| 片端線 | 明道橋—平田町 | 2.96844 | — |
| 高岳線 | 東新町—大曾根 | 3.60895 | — |
| 堀内町線 | 名古屋驛前—那古野町 | 0.78576 | — |
| 計 | | 39.91036 | 2.58134 |

電車營業成績 市營後に於ては經濟界の不況にも拘らず益良好なる成績を續けて來たが此間軌道の改良、新線の建設計畫、營業の改善、制度の改革等矢繼早に行はれた。市電最初の一ヶ月間の収入は257千圓、乗客數は6,538千人、前年同月に比し収入50千圓、乗客540千人の増加と云ふ好成績を擧げた。「會社の電車」から「市民の電車」となつて花々しい門出

に就いてから十五年、此間の成育發展の跡を次表に依つて回顧して見よう。



次表に見るが如く、昭和元年度に入り一般經濟界の不況は順次深刻化の傾向現はれ、大衆の購買力は著しく減少し、商工業の衰微甚しい状態であつたが、電氣軌道事業は順調に経過し、殊に此年通行税が廢止されたので、乗車人員は尙増加の傾向を辿つた。即ち乗車人員99,090千人、乗車料収入3,815千圓であつて乗車人員に於ては市營十五年中最高の數字を示すに至つた。

昭和二年前に於ては產業界の不況は益深刻となり、遂に全國的金融恐慌が勃發して未曾有の混亂時代を現出した。而して此年四月多年の懸案たる乗車料の値上が許可され、六月一日より

實施することゝなつたが、八月には循環乗合自動車會社（循環バス）が公園循環線に十錢均一バスの營業を開始し、續いて既設の名古屋乗合自動車（名バス）も十錢均一を斷行した爲、市電は益その打撃を受けて、市營以來逐年増加を示して來た乗車人員も遂に漸落の歩調を辿り、前年度に比し乗車人員は5%の減少となつた。然し乗車料収入に於ては乗車料金を四錢より六錢に値上げした結果、約30%の增收を示した。

市營電車營業成績

| 年 度 | 營業料 | 乗 客 數 | | 乗 車 料 收 入 | | 一日一車 當 乘 客 |
|-------|------|-------------|---------|-----------|--------|---------------|
| | | 一ヶ年 | 一 日 | 一ヶ年 | 一 日 | |
| 昭和13年 | 84.0 | 139,563,328 | 382,365 | 6,200,300 | 17,041 | 1,093 |
| 12年 | 83.8 | 96,696,529 | 264,927 | 5,121,779 | 14,032 | 848 |
| 11年 | 84.4 | 76,078,870 | 208,435 | 4,002,636 | 10,966 | 820 |
| 10年 | 55.0 | 66,763,394 | 182,414 | 3,543,175 | 9,681 | 810 |
| 9年 | 55.0 | 62,924,359 | 172,396 | 3,350,937 | 9,181 | 807 |
| 8年 | 54.6 | 62,755,301 | 171,932 | 3,370,195 | 9,233 | 787 |
| 7年 | 54.2 | 60,399,294 | 165,477 | 3,286,182 | 9,003 | 757 |
| 6年 | 53.5 | 62,516,085 | 170,808 | 3,410,730 | 9,319 | 792 |
| 5年 | 53.5 | 67,961,679 | 186,196 | 3,715,348 | 10,179 | 826 |
| 4年 | 52.2 | 84,060,853 | 230,304 | 4,632,920 | 12,693 | 962 |
| 3年 | 52.2 | 93,551,178 | 256,305 | 5,192,502 | 14,226 | 1,090 |
| 2年 | 51.4 | 94,142,533 | 257,220 | 4,942,894 | 13,505 | 1,075 |
| 元年 | 49.8 | 99,090,368 | 271,480 | 3,814,560 | 10,451 | 1,224 |
| 大正14年 | 49.5 | 94,828,207 | 259,803 | 3,638,789 | 9,969 | 1,155 |
| 13年 | 49.9 | 91,539,902 | 250,794 | 3,511,964 | 9,621 | 1,161 |
| 12年 | 48.8 | 85,944,341 | 234,820 | 3,303,281 | 9,025 | 1,205 |
| 11年 | 46.3 | 79,614,111 | 218,120 | 3,081,949 | 8,443 | 1,321 |

昭和三年度は曠古の御大典を壽ぎ奉る名古屋博覽會が開設せられ、相當活況を呈したが、九月に入り巴バス、銀バス、赤バス、中央バス等七會社十五路線が營業を開始した爲これが影響

を蒙り、前年度に比し乗車人員591千人を減じたが、同収入に於ては249千餘圓の増加を見た。

昭和四年度は前年度以上の最災厄時代であつた。即ち八月には民間各バス賃金の値下げ（八錢均一）が許可され、翌昭和五年二月には市營バスが許可され、間もなく又私營バスの運賃再値下げとなつたのみならず、私營乗合自動車は雨後の筍の如く簇出し、本市域内には驚く勿れ二十二會社を算するに至つた。是が爲剩へ財界の不況に禍された市電は愈々其の影響を大きくし、前年度に比し乗客數10%強の減少となり、收入559千圓の減少を招來した。

昭和五年度は財界の不況と乗合自動車の壓迫は益顯著となり前年に比し乗客數19.2%、同收入19.8%と云ふ市營以來嘗て見ざる大幅の減少となり、市電にとつては全く甚大の打撃を蒙つた。更に昭和七年度に至り、打續く財界の不況は益深刻化し、將に底をついた感あるも恢復の曙光明かならず、亂舞叫喚する乗合自動車の乗客爭奪戦はますます猛烈を極め之が對策は焦眉の急を告げ、市電は勿論競争の民營自動車と雖も利益なく、公私共に全くの經營難に陥り、遂に市内交通機關の一大統制を必要とするに至つた。前年度に比し乗車人員2,116千人、同收入124千餘圓の減少を示し、乗車人員は最低に位してゐる。

昭和八年度に至り打續いた經濟界の不況も前年度を底として本年度は幾分好轉の曙光が見えた。然し私營バスの脅威は依然として甚だしく、統制の必要は愈急にして機運も從つて濃厚となつた。

七月に至り豫て計畫準備中であつた乘繼制度が實施され、賃

金二錢を以て電車、バス相互の乗繼を認めた結果、前年度に比し乗車人員 2,356千人、同収入 84千圓を増し大いに意を強ふした。

更に昭和十年度に於ては一般景氣は一段と活況を呈し、軌道事業も頗る順調の裡に前半期を終へた。十二月には愈多年懸案であり市民待望の的であるバス統制が實現の緒につき、名古屋乗合自動車（名バス）を買収し市營とした。越えて昭和十一年度五月には第二次統制として、赤バス、中村電車バス、中央バスが何れも市營として繼承された。翌十二年三月には第三次統制として、新三河電車バス、下之一色電車、築地電車バス及岩塚、東海、桴投所の各バスの合計六會社が市營の傘下に糾合され、斯くて市内の主要電車、バスは殆ど統制されたのである。此年は本市劃期的大事業である汎太平洋平和博覽會が華々しく開會され、入場者輸送に完璧を期し最大能率を擧げ、前年度に比し乗車人員 9,315千人、同収入 459千圓の増加で、其の増加率 14%と云ふ飛躍的の成績を示した。

乗合自動車

市營バスが始めて營業を開始したのは昭和五年二月一日である。當時市内には民間業者の經營に係る名バス（名古屋乗合自動車）、赤バス（愛知乗合自動車）、循環バス（名古屋循環乗合自動車）、中央バス（中央乗合自動車）銀バス（名古屋銀バス自動車）等數種のバスが互に鎬を削つて火の出る様な乗客爭奪戦を續けてゐた。バス市營が計畫されてより、これが實現を見るに至る迄の徑緯は、文字通り紆餘曲折の過程を経た難事業であつて、果して何日開業し得るかその成行は市民凝視の的であつた。

此の計畫を縣當局に對して認可を申請した最初は昭和二年九月で、その出願内容は營業路線 12、車輛數 150、乗車料は區間制（一區六錢、二區十錢、三區以上は五錢増）と云ふ可成り尨大な計畫であつたが、其の内容に大變改があつて、路線は二十系統に短分し、一系統の乗車料を六錢均一に変更した。越えて昭和三年九月に至り、書類不備を理由として本出願は一先づ留保となつた。翌四年一月に至り再度の出願となり、その内容は九路線、車輛數 50輛、乗車料八錢均一で、前回に比し非常に小規模なものであつた。然し本計畫もその後變改を餘儀なくされ同年十月出願事項を變更して十一路線、車輛數 60輛、乗車料は六錢均一とした。これが出願の最後案となり昭和四年十二月漸くにして、市民の待望裡に許可の指令に接したのである。

| | | | |
|---------|------|---------------|------|
| 淨心—覺王山 | 9.2 | 淨心—公園 | 6.5 |
| 名古屋驛—守山 | 8.3 | 淨心(大津町經由)—内田橋 | 10.8 |
| 名古屋驛—道徳 | 10.4 | 公園—笠寺 | 7.7 |
| 大津町—石川橋 | 8.0 | 淨心—船方 | 8.1 |
| 公園—三階橋 | 8.6 | 大津町—氣田 | 7.1 |
| 熱田驛—築港 | 5.1 | | |

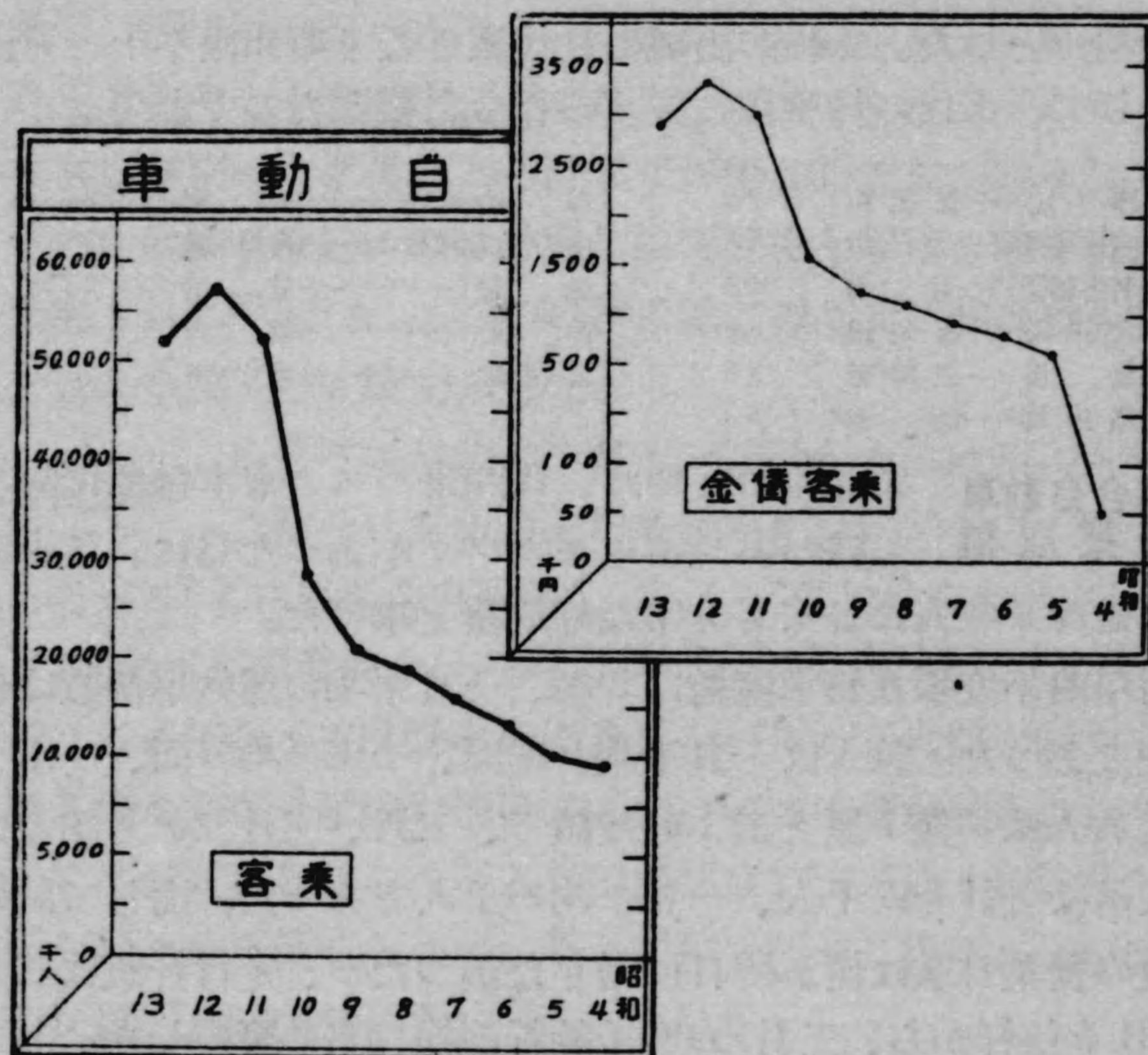
**乗合自動車
營業成績**

市營開始當時は、民間諸バスと乗車料金に於て二錢のハンデーキャツプがあつた爲に、各車満員の盛況で収入に於ても非常な好成績を擧げた。

昭和四年度末在籍車輛數は 40輛、一日平均の運轉車輛數は約 30輛であつた。収入は一日平均 946圓、一車平均 31圓、一車一料當収入は 13錢 7厘と云ふ好成績で、二月、三月二ヶ月間の乗車人員は合計 945千人、一日平均 16千人であつた。而して此の年度の營業日數は僅か 59日に過ぎなかつたが、走行料數は二月の 221千餘料から、三月の 406千餘料の約二倍に躍進した。

乗合自動車営業成績

| 年 度 | 營業料 | 乗 客 數 | | 乗車料收入 | | 一日一車 當 乗 客 |
|-------|-------|------------|---------|-----------|-------|---------------|
| | | 一ヶ年 | 一 日 | 一ヶ年 | 一 日 | |
| 昭和13年 | 179.3 | 52,547,833 | 143,967 | 2,914,073 | 7,984 | 548.0 |
| 12年 | 182.8 | 57,614,744 | 157,848 | 3,285,773 | 9,002 | 484.2 |
| 11年 | 156.2 | 52,904,402 | 144,943 | 3,021,261 | 8,277 | 503.7 |
| 10年 | 113.8 | 27,525,006 | 75,204 | 1,564,742 | 4,275 | 515.7 |
| 9年 | 102.0 | 21,391,564 | 58,607 | 1,212,187 | 3,321 | 471.5 |
| 8年 | 101.0 | 19,172,416 | 52,527 | 1,097,201 | 3,006 | 431.8 |
| 7年 | 69.8 | 16,266,069 | 44,564 | 963,708 | 2,640 | 399.4 |
| 6年 | 67.3 | 13,802,225 | 37,711 | 817,037 | 2,232 | 330.1 |
| 5年 | 54.6 | 10,357,515 | 28,377 | 613,539 | 1,680 | 383.6 |
| 4年 | 22.6 | 945,666 | 16,028 | 55,866 | 946 | 536.1 |



民營交通事業
買収と其の後

昭和八年八月新廳舎移轉後の財界は漸時回復し來り、加ふるに民營バス買収の機運は次第に熟し、終に昭和十年二月民營バス買収調査臨時委員會の成立を見るに至つた。

先づ第一次として名古屋乗合自動車(名バス)を昭和十二年十二月二十八日に、第二次に愛知乗合自動車(赤バス)、中央乗合自動車(中央バス)、中村電氣軌道株式會社(中村バス)、を昭和十一年五月に、更に第三次に新三河鐵道株式會社始め六社(下之一色電車軌道株式會社、築地電軌株式會社、岩塚バス株式會社、東海自動車株式會社、株式會社名古屋浮投所)の電車バスを昭和十二年三月夫々買収し、茲に全市殆ど統制せられ、軌道に於ては中村線3軒1、八事線6軒5、下之一色線6軒5、築地線7軒3の増加を見るに至つた。

今民營會社の運輸成績を見るに次表の如くである。

| 社 名 | 營業 路線長 | 所有 車輛數 | 一 ヶ 年 | | | 一日一車平均 | |
|----------|-----------|-----------|------------|------------|-----------|--------|-------|
| | | | 運轉軒數 | 乗客數 | 收 入 | 乗客數 | 收 入 |
| 名 バ ス | 49.50 | 223 | 15,462,858 | 25,065,091 | 1,483,241 | 390 | 23.05 |
| 赤 バ ス | 6.40 | 25 | 1,460,000 | 3,165,556 | 188,728 | 434 | 25.85 |
| 中 央 バ ス | 17.90 | 18 | 1,204,500 | 1,840,638 | 112,680 | 336 | 20.61 |
| 中村 {自動車 | 4.00 | 10 | 642,400 | 1,269,436 | 75,779 | 395 | 23.59 |
| 電軌 {電車 | 3.10 | 10 | 234,600 | 368,290 | 14,309 | 315 | 12.25 |
| 新三河 {自動車 | 35.80 | 39 | 1,464,850 | 1,643,736 | 131,418 | 197 | 15.77 |
| 電 車 | 6.50 | 12 | 524,966 | 2,552,591 | 80,717 | 905 | 28.60 |
| 下之一色電車 | 6.50 | 10 | 272,086 | 1,236,607 | 64,104 | 566 | 29.34 |
| 築 地 {自動車 | 5.00 | 4 | 134,476 | 390,815 | 26,907 | 356 | 24.51 |
| 電 車 | 7.30 | 8 | 327,798 | 1,090,059 | 45,804 | 621 | 26.11 |
| 岩塚自動車 | 5.70 | 10 | ? | 420,199 | 33,358 | 144 | 11.42 |
| 東海自動車 | 6.20 | 2 | 107,653 | 104,085 | 12,754 | 143 | 17.47 |
| 浮投町自動車 | 4.00 | 2 | 87,103 | 71,969 | 5,487 | 132 | 10.03 |

(備考 名バスは昭和九年度、其の他は十年度)

斯くして市内の交通機關は略市營の下に統制せられたのであるが、同十二年七月には偶々事變が勃發し、本市交通事業も亦種々甚大なる影響を受けることになつた。

就中ガソリンの消費制限、車輛補充の困難等は輸送上大なる支障を來すこととなり、更に最近の激増する交通量は此の悩みを深くしたが、之が對策としてガソリン自動車の減車を斷行する一方木炭バス電氣バスを多數使用し、又運轉系統の改正其の他事業の改善等を圖り時局下交通の完璧に努力して居る。

財 政

財政膨脹の趨勢

本市は東京、大阪に次ぐ我國第三位の大都市として文化經濟の中樞をなしその發展著しいものがある。今これを財政に就いて觀るに、昭和十四年度當初歳入歳出豫算總額は55,302,997圓に達し内一般會計は18,408,128圓特別會計は36,894,869圓にして之を明治二十三年度即ち本市が市制を施行した翌年の歳入77,353圓、歳出59,946圓と比較すれば歳入に於て715倍、歳出に於て923倍の膨脹を示してゐるのである。

歳 入 出 累 年 比 較

| 年 度 | 合 計 | | 指 數 | |
|----------|------------|------------|---------|---------|
| | 歳 入 | 歳 出 | 歳 入 | 歳 出 |
| 明 治 23 年 | 77,353 | 59,946 | 100 | 100 |
| 28 年 | 116,699 | 101,768 | 151 | 170 |
| 38 年 | 683,912 | 682,633 | 826 | 1,139 |
| 大 正 元 年 | 9,961,789 | 7,453,436 | 12,878 | 12,434 |
| 5 年 | 4,863,806 | 3,987,015 | 6,238 | 6,651 |
| 8 年 | 7,135,736 | 5,066,383 | 9,225 | 8,352 |
| 10 年 | 13,551,533 | 10,377,500 | 17,519 | 17,312 |
| 12 年 | 25,236,812 | 19,329,000 | 32,626 | 32,245 |
| 昭 和 元 年 | 44,565,775 | 39,951,709 | 57,614 | 66,632 |
| 3 年 | 43,195,532 | 37,484,476 | 55,842 | 62,531 |
| 5 年 | 52,731,248 | 49,540,417 | 68,170 | 82,643 |
| 8 年 | 95,356,847 | 94,993,649 | 123,275 | 158,468 |
| 10 年 | 97,190,191 | 90,799,989 | 117,345 | 151,467 |
| 11 年 | 99,418,901 | 94,212,486 | 121,795 | 157,656 |
| 12 年 | 86,839,151 | 73,838,716 | 95,457 | 123,177 |
| 13 年 | 65,744,570 | 51,022,070 | 84,992 | 85,113 |
| 14 年 | 55,302,997 | 55,302,993 | 714,943 | 922,547 |

斯くの如き財政膨脹の趨勢は、國家及び地方團體に於ける一般的な現象であるが、是を國庫及地方財政の膨脹率に比較するに明治二十四年度歳出決算總額は國庫に於ては83,556千圓地方は43,881千圓にして昭和十三年度に於ける國庫の3,514,521千圓、地方の2,116,140千圓に比すれば國庫は42倍地方は48倍の膨脹を示せるも本市は60,902圓より51,022,068圓の83.7倍に増加しその膨脹率に於て遙に前兩者を凌駕してゐるのである。今是を表示せば次の如くである。

國庫(一般會計)及地方と名古屋市の財政膨脹比較

| 年 度 區 分 | 國 庫 (一般會計) | | 地 方 | | 名 古 屋 市 | |
|------------|------------|-------|-----------|-------|------------|---------|
| | 歳 出 | 指 數 | 歳 出 | 指 數 | 歳 出 | 指 數 |
| 明 治 24 年 | 83,556 | 100 | 43,881 | 100 | 60,902 | 100 |
| 28 年 | 85,317 | 102 | 58,518 | 133 | 101,768 | 167 |
| 33 年 | 392,750 | 350 | 135,688 | 309 | 543,562 | 892 |
| 88 年 | 420,741 | 504 | 133,560 | 312 | 682,633 | 1,120 |
| 43 年 | 569,154 | 681 | 287,608 | 635 | 3,082,461 | 5,061 |
| 大 正 4 年 | 583,269 | 698 | 317,872 | 724 | 3,235,416 | 5,312 |
| 9 年 | 1,359,978 | 1,623 | 962,872 | 2,194 | 8,658,443 | 14,217 |
| 14 年 | 1,524,988 | 1,825 | 1,429,443 | 3,158 | 24,829,722 | 40,770 |
| 昭 和 5 年 | 1,557,863 | 1,864 | 1,775,065 | 4,045 | 49,540,417 | 81,344 |
| 10 年 | 2,206,477 | 2,641 | 2,229,444 | 5,081 | 90,799,989 | 149,043 |
| 11 年 | 2,282,175 | 2,731 | 2,738,930 | 6,241 | 94,212,486 | 154,695 |
| 12 年 | 1,981,691 | 3,565 | 2,078,905 | 4,733 | 73,838,716 | 121,242 |
| 13 年 | 3,514,521 | 4,206 | 2,116,140 | 4,822 | 51,022,068 | 83,777 |

備 考 1. 國庫及地方歳出ハ昭和11年迄ハ決算、昭和12、13年度ハ豫算
2. 名古屋市ハ各年度共決算トス

尙本市の財政膨脹は前述の如く市制施行當時に比較すれば昭和十四年度豫算總額は923倍の驚異すべき數字を示してゐるが、之を市民の負擔と密接なる關係を有する普通經濟のみに就いて

觀るに昭和十四年度純歳出豫算は13,808,367圓にして明治二十三年度の歳出59,946圓に比し230倍の増加である。之が累年趨勢は次の通りである。

一般會計歳入歳出累年比較

| 年 次 | 純 歳 入 | 純 歳 出 | 現 在 一 世 帯 當 平 均 額 | | 現 在 人 口 一 人 當 平 均 額 | |
|----------|------------|------------|-------------------|--------|---------------------|-------|
| | | | 純 歳 入 | 純 歳 出 | 純 歳 入 | 純 歳 出 |
| 明 治 23 年 | 76,168 | 59,946 | 1.73 | 1.36 | 0.46 | 0.36 |
| 24 年 | 45,835 | 60,902 | 1.03 | 1.37 | 0.26 | 0.35 |
| 28 年 | 103,742 | 101,930 | 1.97 | 1.94 | 0.48 | 0.48 |
| 32 年 | 452,849 | 540,213 | 7.39 | 6.32 | 1.79 | 1.78 |
| 36 年 | 680,570 | 785,449 | 10.01 | 11.55 | 2.38 | 2.75 |
| 40 年 | 925,725 | 1,525,984 | 11.40 | 18.79 | 2.10 | 4.30 |
| 43 年 | 1,691,093 | 1,162,446 | 19.27 | 13.24 | 4.16 | 2.86 |
| 大 正 元 年 | 1,317,448 | 1,166,051 | 13.88 | 12.28 | 3.02 | 2.67 |
| 5 年 | 1,548,880 | 1,046,079 | 16.47 | 10.80 | 3.83 | 2.51 |
| 10 年 | 5,832,975 | 4,345,794 | 44.31 | 33.01 | 9.21 | 6.86 |
| 13 年 | 6,898,251 | 7,350,328 | 44.97 | 47.92 | 9.39 | 10.01 |
| 昭 和 元 年 | 9,568,133 | 8,945,039 | 53.97 | 50.46 | 11.56 | 10.81 |
| 4 年 | 18,295,280 | 18,979,927 | 85.42 | 88.61 | 18.26 | 18.94 |
| 7 年 | 37,789,356 | 40,671,368 | 167.26 | 180.11 | 35.41 | 38.12 |
| 10 年 | 25,289,730 | 22,574,147 | 115.09 | 102.73 | 23.35 | 20.84 |
| 12 年 | 15,312,349 | 15,904,495 | 62.45 | 64.86 | 12.90 | 13.40 |
| 13 年 | 19,012,191 | 14,787,325 | 75.17 | 58.47 | 15.53 | 12.08 |
| 14 年 | 17,739,052 | 13,808,367 | 70.14 | 54.60 | 14.49 | 11.28 |

前述の如く本市の經費は累年増嵩の一途を辿つてゐるが、昭和十四年度豫算編成に當つては政府の財政々策に隨ひ極力整理節約をなし時局に關係薄きものは努めて之が計上を見合せ又は繰延べたるも發展途上にある本市として國策に順應し、貿易の振興、産業施設の擴

充、銃後諸般の施設並に市民體位の向上等に要する経費はこれを計上するに意を須ひたのである。

昭和十四年度歳出豫算 (當初豫算)

| 經濟別 | 總歳出 | 他經濟へ繰入 | 運用金 | 運用金元金償還 | 別途積立財産へ積立 | 純歳出 |
|-----------|----------------|------------|------------|----------|------------|------------|
| 一 般 會 計 | 18,408,128 | 4,595,845 | — | — | 3,916 | 13,808,367 |
| 公企業經濟 | 水道事業費 | 6,223,842 | 3,091,289 | — | — | 3,132,553 |
| | 電氣軌道事業費 | 9,288,206 | 1,834,366 | — | 286,976 | 7,166,864 |
| | 電氣軌道事業貯蔵物品資金 | 600,300 | 599,390 | — | — | 910 |
| | 計 | 16,112,348 | 5,525,045 | — | 286,976 | 10,300,327 |
| 其ノ他ノ經濟 | 都市計畫費 | 4,992,065 | 1,964,314 | — | — | 3,027,751 |
| | 都市計畫土地區調整費 | 738,001 | 44,453 | — | — | 693,548 |
| | 名古屋屋城並徳川園費 | 101,500 | 25,904 | — | 26,000 | 49,596 |
| | 公益質屋費 | 374,083 | 33,991 | — | — | 340,092 |
| | 市債費 | 14,352,177 | 4,263,000 | — | — | 10,089,177 |
| | 児童就學奨励費 | 69,065 | — | — | — | 69,065 |
| | 基本財産特別基本財産及積立金 | 122,728 | 33,291 | 50,000 | — | 28,046 |
| | 學校作業資金 | 32,898 | — | — | — | 32,898 |
| | 計 | 20,782,517 | 6,364,953 | 50,000 | — | 54,046 |
| | 合 計 | 55,302,993 | 16,485,843 | 50,000 | — | 344,938 |
| 前 年 度 | 62,177,994 | 20,207,653 | 150,000 | 242,150 | 562,509 | |
| 前年度=比シ増△減 | △6,875,001 | △3,721,810 | △100,000 | △242,150 | △217,571 | |
| | | | | | △2,593,470 | |

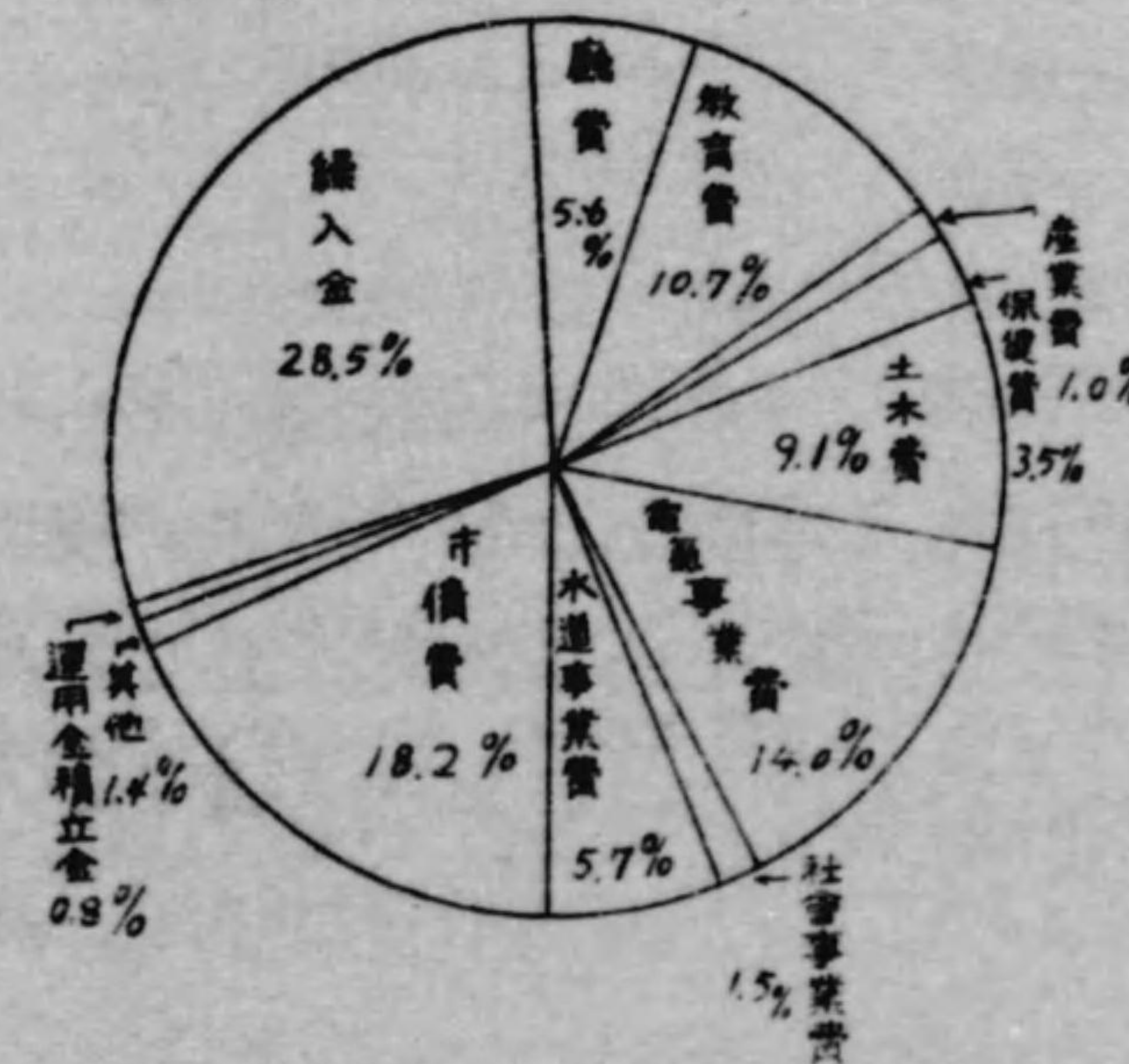
即ち普通及特別兩經濟を合して歳入55,302,997圓、歳出55,302,993圓、之を前年度豫算に對比すれば歳入6,874,998圓、歳出6,875,001圓の減少なるも各經濟間の組入組替等重複計上せられたるもの及實質的收支と認め難きものを控除した純計額は歳入37,750,126圓、歳出38,422,212圓で、前年に比し歳入は6.2%、歳出は6.3%の減少である。

尙前述の歳出を各事業別に觀れば次の通りである。

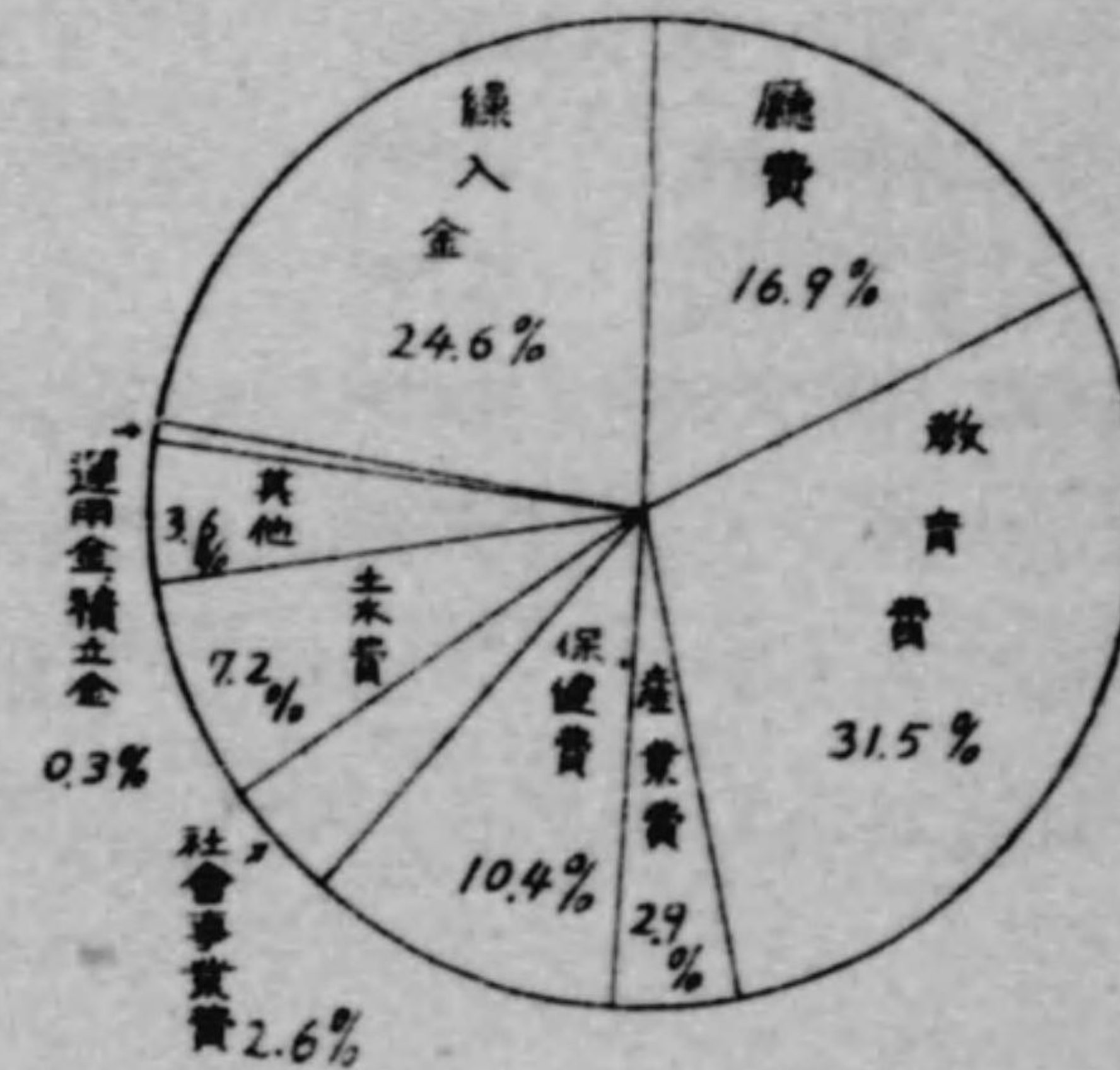
歳 出 事 業 別

| 事業別 | 豫算總額 | | 普通經濟 | | 特別經濟 | |
|-----------|------------|--------|-------------|--------|-------------|--------|
| | 金額 | 割合 | 金額 | 割合 | 金額 | 割合 |
| 廳 費 | 3,197,317 | 5.64 | 3,197,317 | 16.93 | — | — |
| 教 育 費 | 5,907,703 | 10.68 | 5,805,540 | 31.52 | 102,163 | 0.38 |
| 産 業 費 | 540,240 | 0.96 | 540,240 | 2.88 | — | — |
| 保 健 費 | 1,912,308 | 3.46 | 1,912,308 | 10.59 | — | — |
| 社 會 事 業 費 | 886,718 | 1.48 | 546,626 | 2.60 | 340,092 | 1.27 |
| 土 木 費 | 5,043,004 | 9.12 | 1,321,705 | 7.20 | 3,721,299 | 13.88 |
| 電 氣 事 業 費 | 7,167,774 | 14.04 | — | — | 7,167,774 | 28.93 |
| 水 道 事 業 費 | 3,132,553 | 5.72 | — | — | 3,132,553 | 11.81 |
| 市 債 費 | 10,089,177 | 18.24 | (3,539,684) | — | (6,549,493) | — |
| 其 他 | 545,418 | 1.36 | 484,631 | 3.60 | 60,787 | 0.32 |
| 純 歳 出 計 | 38,422,212 | 69.47 | 13,808,367 | 75.01 | 14,524,668 | 91.82 |
| ※繰入金 | 16,485,843 | 28.50 | 4,595,845 | 24.61 | 11,889,998 | 41.99 |
| ※運用金積立金 | 394,938 | 0.60 | 3,916 | 0.27 | 391,022 | 1.46 |
| 合 計 | 55,302,993 | 100.00 | 18,408,128 | 100.00 | 26,805,688 | 100.00 |

昭和十四年度豫算歳出事業別
總歳出 55,302,993圓
純歳出 38,422,212圓



昭和十四年度豫算普通經濟歳出事業別
總歳出 18,408,128圓
純歳出 13,808,367圓



次に前述の各種事業費を支辨する爲に調達せられる昭和十四年度歳入予算総額は55,302,997圓にして、その内前年度繰越金、他経済よりの繰入金、運用金、運用金元金償還金及別途積立財産繰入金を除いた純歳入は37,750,126圓である。これを前年度予算に較ぶれば歳入総額に於て6,874,998圓、純歳入で2,490,874圓の減少である。この内容を各経済別に示せば次の通りである。

昭和十四年度歳入予算（当初予算ニ依ル）

| 経済別 | 總歳入 | 前年度繰越金 | 他経済ヨリ繰入 | 運用金 | 運用金元金償還 | 別途積立財産繰入 | 純歳入 |
|-----------|----------------|------------|------------|------------|----------|----------|------------|
| 一 般 會 計 | 18,408,128 | 1 | 619,075 | 50,000 | — | — | 17,739,052 |
| 公企業經濟 | 水道事業費 | 6,223,842 | 181,456 | 2,448,319 | — | — | 3,594,067 |
| | 電氣軌道費 | 9,288,206 | 460,000 | — | — | 271,500 | 8,556,706 |
| | 電氣軌道事業貯藏物品資金 | 600,300 | 10,000 | 590,000 | — | — | 300 |
| | 計 | 16,112,348 | 651,456 | 3,038,319 | — | 271,500 | 12,151,073 |
| 其ノ他ノ經濟 | 都市計畫費 | 4,992,065 | 1 | 2,040,000 | — | — | 2,952,064 |
| | 都市計畫整理費 | 738,001 | 1 | 589,000 | — | — | 149,000 |
| | 名古屋城並徳川園費 | 101,500 | 2,000 | — | — | — | 99,500 |
| | 公益質屋費 | 374,083 | 62,724 | 16,444 | — | — | 294,915 |
| | 市債費 | 14,552,181 | 1 | 10,089,177 | — | — | 4,263,003 |
| | 兒童就學獎勵費 | 69,065 | 2,500 | 58,465 | — | — | 8,100 |
| | 基本財産特別基本財産及積立金 | 122,728 | 7 | 34,330 | — | 23,120 | 65,271 |
| 學校作業資金 | 32,898 | 4,750 | — | — | — | 28,148 | |
| 計 | 20,782,521 | 71,984 | 12,827,416 | 50,000 | — | 23,120 | 7,860,001 |
| 合 計 | 55,302,997 | 723,441 | 16,484,810 | 50,000 | — | 294,620 | 37,750,126 |
| 前 年 度 | 62,177,997 | 1,002,331 | 20,187,516 | 150,000 | 242,148 | 355,000 | 40,241,000 |
| 前年度ニ比シテ増減 | △6,874,998 | △278,890 | △3,702,706 | △100,000 | △242,148 | △60,380 | △2,490,874 |

尙前記歳入を種類別に觀れば

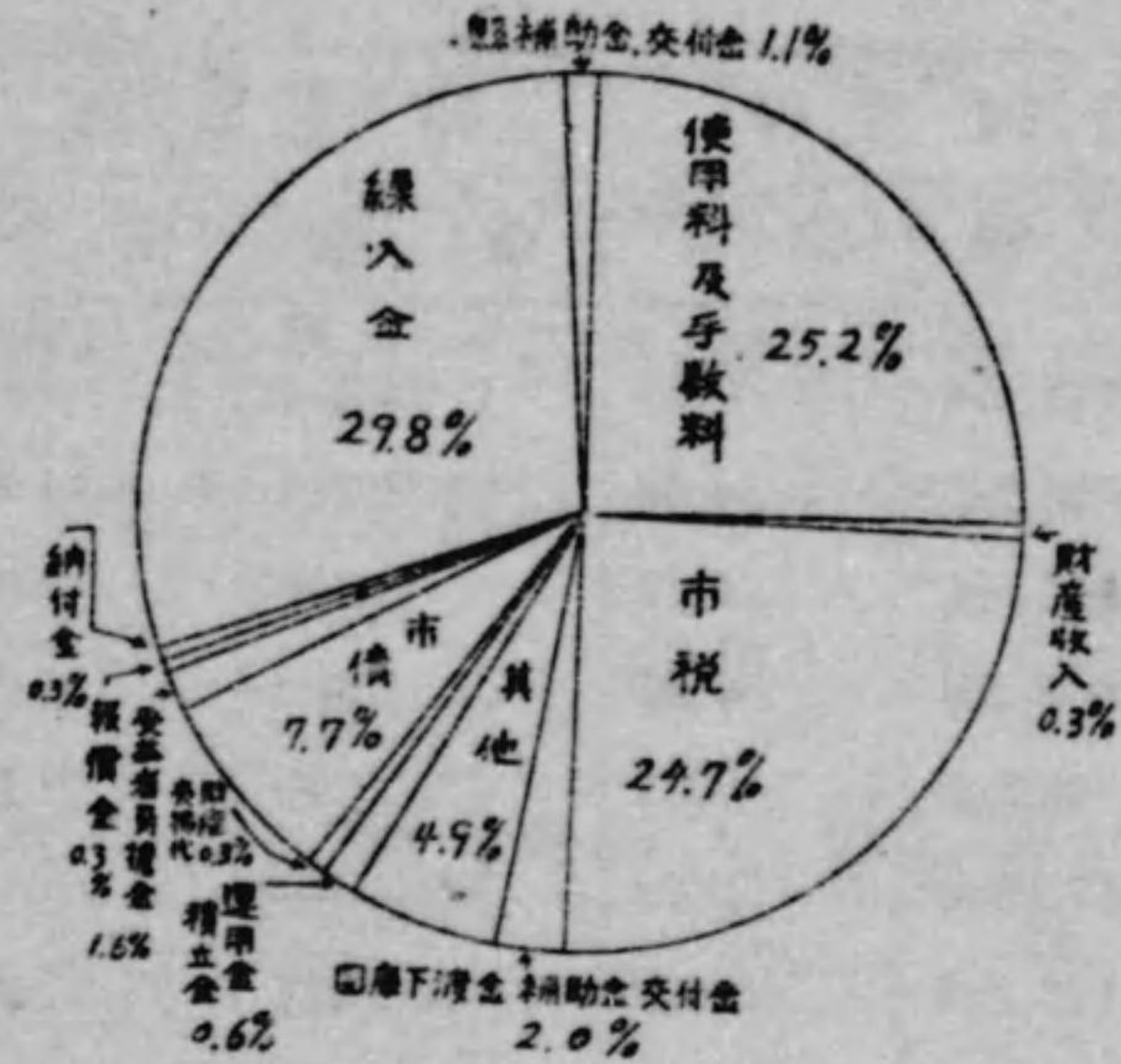
昭和十四年度歳入種類別（当初予算）

| 種類 | 豫算總額 | | 普通經濟 | | 特別經濟 | |
|---------------|--------------|---------|-------------------------|---------|---------------------------|--------|
| | 金額 | 割合 | 金額 | 割合 | 金額 | 割合 |
| 財産收入 | 178,568 | 0.32 | 136,294 | 0.74 | 42,274 | 0.13 |
| 使用料 手数料 | 13,910,694 | 25.15 | 2,656,983 | 14.43 | 11,253,711 | 34.49 |
| 國庫下渡金 補助金 交付金 | 1,131,398 | 2.04 | 1,126,398 | 6.11 | 5,000 | 0.02 |
| 縣補助金交付金 | 604,108 | 1.09 | 598,208 | 3.22 | 5,900 | 0.02 |
| 納付金 | 147,879 | 0.26 | 98,189 | 0.53 | 49,690 | 0.15 |
| 報償金 | 150,000 | 0.27 | 150,000 | 0.81 | — | — |
| 受益者 負担金 | 879,495 | 1.59 | 127,238 | 0.69 | 752,257 | 2.31 |
| 財産賣拂代 | 179,601 | 0.32 | 164,601 | 0.89 | 15,000 | 0.05 |
| 市 税 | 13,636,807 | 24.65 | 12,070,540 | 65.56 | 1,566,267 | 4.80 |
| 過年度市税 | × 3,394,472 | × 6.13 | × 3,002,760 | × 16.31 | × 391,712 | × 1.20 |
| 現年度市税 | × 10,242,335 | × 18.42 | × 9,067,780 | × 49.25 | × 1,174,555 | × 3.60 |
| 市 債 | 4,263,000 | 7.70 | (134,000) | — | (4,129,000) | — |
| 其 他 | 2,668,576 | 4.89 | 610,601 | 3.38 | 2,057,975 | 6.30 |
| 總 歳 入 計 | 37,750,126 | 63.26 | 17,739,052 | 95.36 | 15,748,074 | 61.32 |
| ※繰越金 | 723,441 | 1.30 | 1 | 0.01 | 723,440 | 2.21 |
| ※繰入金 | 16,484,810 | 29.80 | 619,075 | 3.36 | 15,865,735 | 48.62 |
| ※積立金運用金 | 344,620 | 0.62 | 50,000 | 0.27 | 294,620 | 0.90 |
| 總 計 | 55,302,997 | 100.00 | (134,000) 18,408,128 | 100.00 | (4,129,000) 32,631,869 | 100.00 |

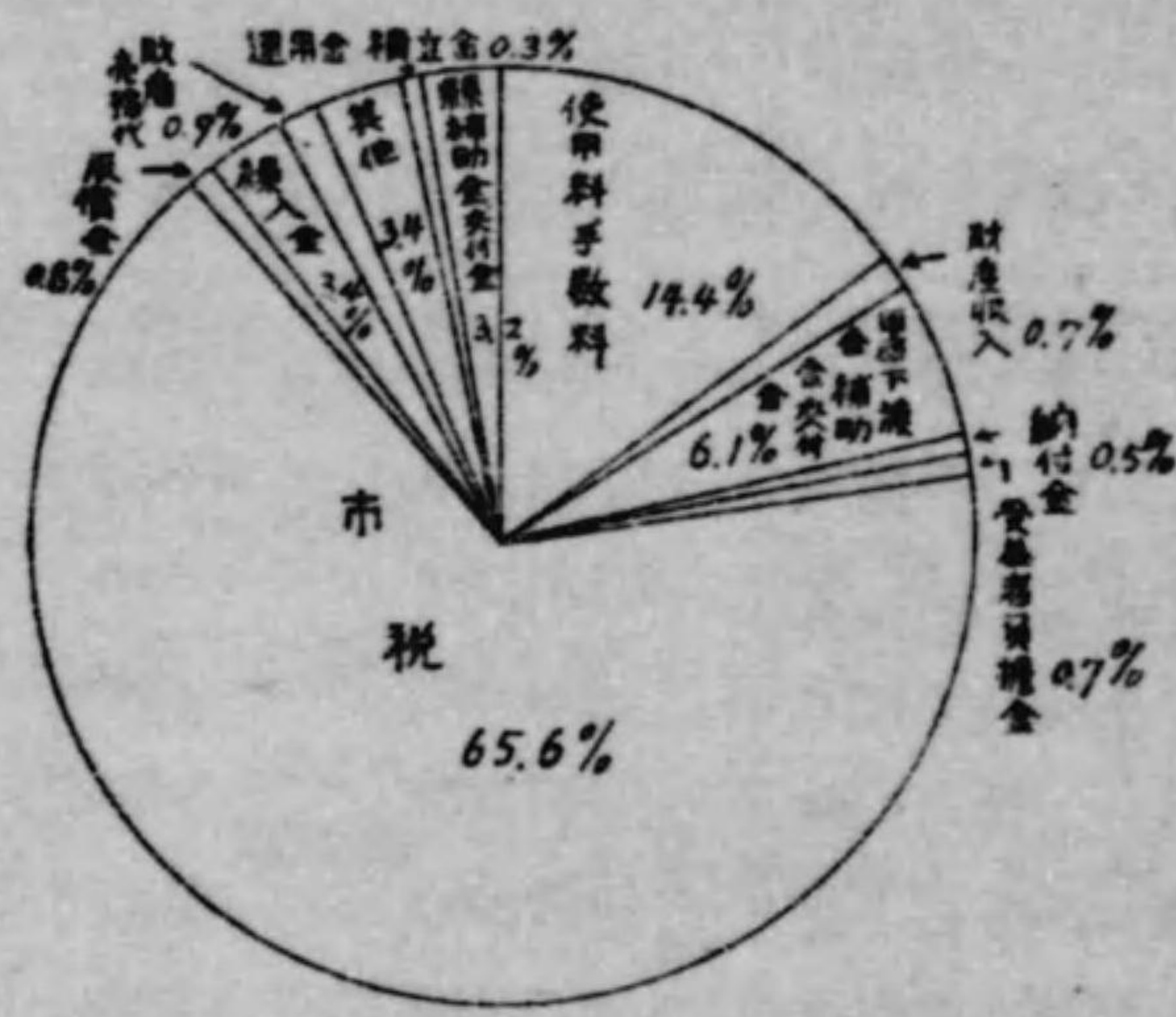
×ハ再掲 ※ハ計算出上控除額ヲ示ス

今上記歳入を税収入と税外収入との二つに大別して其の割合を觀るに、嘗ては税収入がはるかに税外収入を超えてゐたが、市債収入、特に公企業の使用料及手数料収入の増加に伴ひ漸次税外収入が増加し、市税収入は總額の約24%税外収入は76%を占むるに至つた。

昭和十四年度豫算歳入種類別
 總 歳 入 55,302,997圓
 純 歳 入 37,750,126圓



昭和十四年度豫算普通經濟歳入種類別
 總 歳 入 18,408,128圓
 純 歳 入 17,739,052圓



尙昭和十四年度六大都市當初豫算を掲示すれば次の通り。

六大都市歳計比較 (昭和十四年度)

| 都 市 | 歳 入 | 歳 出 | 總 額 | | 普通經濟 | | 特別經濟 | |
|-----|-----|-------------|-------------|-------------|-------------|-------------|-------------|---|
| | | | 圓 | 圓 | 圓 | 圓 | 圓 | 圓 |
| 東 京 | 歳入 | 368,443,278 | 368,443,278 | 133,358,396 | 235,084,882 | 133,358,396 | 235,084,882 | |
| | 歳出 | 361,157,611 | 361,157,611 | 76,397,577 | 284,760,034 | 76,397,577 | 284,760,034 | |
| 大 阪 | 歳入 | 58,655,608 | 56,564,204 | 14,689,832 | 43,965,776 | 14,679,177 | 41,885,027 | |
| | 歳出 | 72,574,068 | 72,574,068 | 23,191,112 | 49,382,956 | 23,191,112 | 49,382,956 | |
| 神 戸 | 歳入 | 55,483,540 | 55,483,540 | 15,755,780 | 39,727,760 | 15,755,780 | 39,727,760 | |
| | 歳出 | 55,483,540 | 55,483,540 | 15,755,780 | 39,727,760 | 15,755,780 | 39,727,760 | |
| 横 濱 | 歳入 | 55,302,997 | 55,302,993 | 18,408,128 | 36,894,869 | 18,408,128 | 36,894,865 | |
| | 歳出 | 55,302,993 | 55,302,993 | 18,408,128 | 36,894,865 | 18,408,128 | 36,894,865 | |

市 税 本市財政の變理にあつては市制の本義に則り
 稅收入の増徴は出來得る限りこれを避け稅外收
 入の増收を計ることゝしてゐるが稅收入は尙市收入の一中心を
 なし、昭和十四年度豫算市稅總額は前記財源別に示す如く 13,6

36,807圓 (過年度分を含む) でこれを明治二十三年度即ち市制
 施行の翌年度の 25,719圓 に比較すれば實に 530倍に達しこれを
 前年度豫算と比較すれば 624,430圓 の増收である。尙市民負擔
 割合は一戸當 53.92圓 一人當 11.14圓 となる。

市稅收入の趨勢 近年に於ける市稅收入の狀況を見るに大正十五
 年の地方稅制の改正(昭和二年度より施行)と歐

洲大戰後の經濟界の不況により從來年と共に増收の傾向にあつ
 たものが昭和二年度よりは急速に減少し昭和六年度の如きは元
 年度に比し 1,372,355圓 純歳入に對する比率に於て 5% を減する
 に至つた。然るに他面經費は年々増加の傾向著しく、爲に昭和六
 年度より特別稅商品切手發行稅を創設するの外、事業計畫の樹
 立に當つては極力經費の増加を抑し財政の均衡を計つて來たの
 である。然るに最近經濟界漸く好調に向ひたるに依り、稅收入は
 漸次増加し 昭和十三年度決算に於ては 10,307,781,880圓 に達し
 豫算額に對し 637,842圓 の増收を見、更に十四年度豫算に於ては
 前年度豫算に比し 572,395千圓 (但決算に比すれば 65,446,880圓
 の減) 昭和元年度に比し 3,290,670圓 の増收を得ることゝなつた。

本市市稅負擔額の累年趨勢を示せば次の通りである。

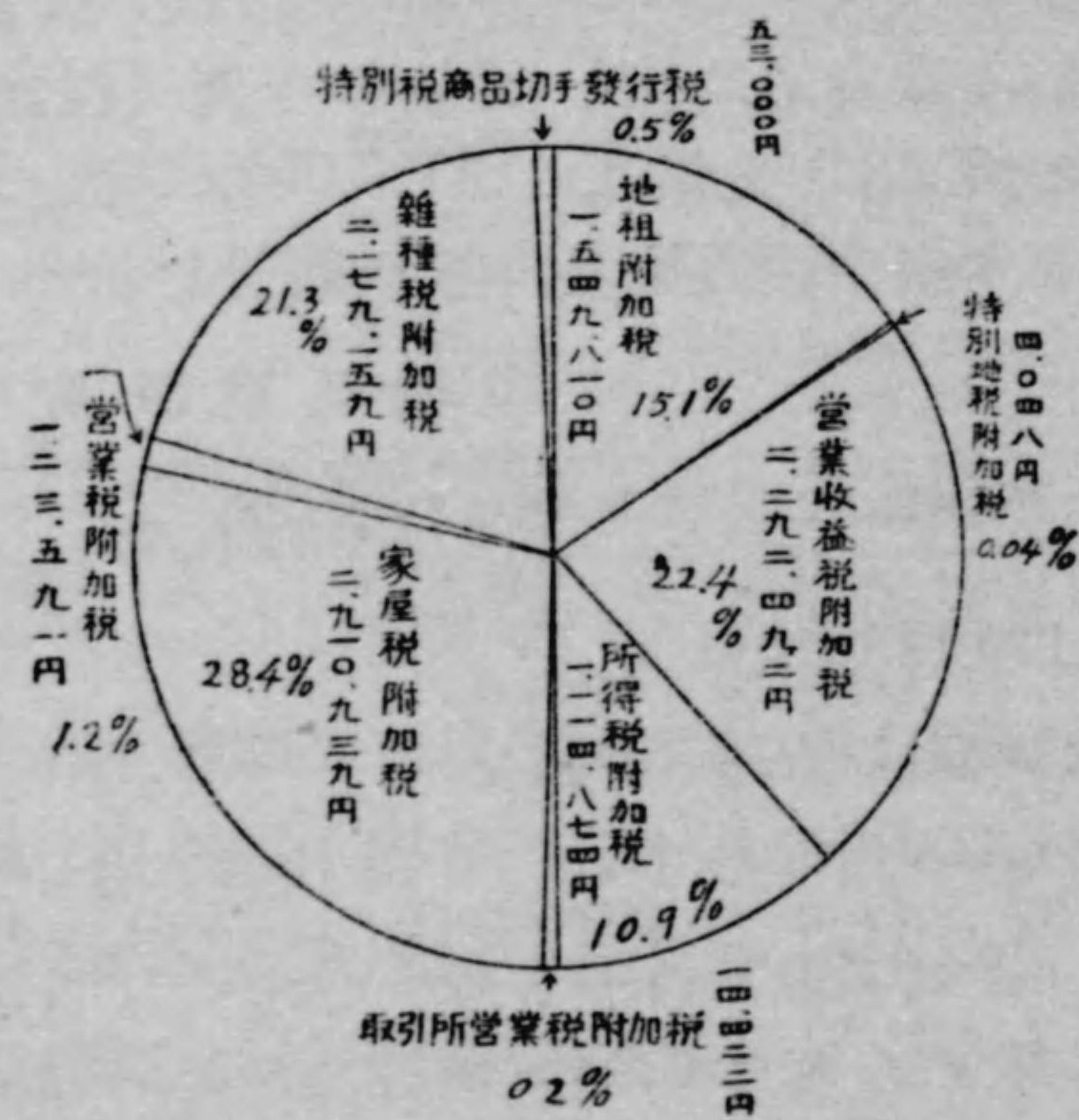
市稅負擔額累年比較

| 年 度 別 | 普通市稅額 | 市區改正又ハ 都市計畫特別稅 | 計 | 指 數 | 一戸當 | 一人當 |
|-----------|---------------|-------------------|---------------|-------|-------|------|
| | 圓 | 圓 | 圓 | | 圓 | 圓 |
| 明 治 2 2 年 | 3,300,349 | — | 3,300,349 | 12 | 0.07 | 0.02 |
| 2 3 年 | 25,719,678 | — | 25,719,678 | 100 | 0.58 | 0.15 |
| 2 8 年 | 65,446,890 | — | 65,446,890 | 254 | 1.24 | 0.30 |
| 3 3 年 | 330,741,867 | — | 330,741,867 | 1,285 | 5.18 | 1.26 |
| 3 8 年 | 431,006,740 | — | 431,006,740 | 1,675 | 6.14 | 1.44 |
| 4 3 年 | 1,447,705,705 | — | 1,447,705,705 | 5,628 | 16.13 | 3.56 |
| 大 正 元 年 | 1,031,379,750 | — | 1,031,379,750 | 4,010 | 10.87 | 2.87 |

| 年 度 別 | 普通市税額 | 市區改正又ハ 都市計畫特別税 | 計 | 指 數 | 一戸當 | 一人當 |
|---------|---------------|-------------------|----------------|--------|-------|------|
| 大 正 3 年 | 972,681,595 | — | 972,681,595 | 3,781 | 9.64 | 2.07 |
| 6 年 | 1,362,022,770 | — | 1,362,022,770 | 5,295 | 14.13 | 3.24 |
| 8 年 | 2,069,450,290 | 61,485,240 | 2,130,935,530 | 8,285 | 22.81 | 4.78 |
| 10 年 | 3,572,827,220 | 203,117,550 | 3,775,944,770 | 14,681 | 28.69 | 5.96 |
| 13 年 | 4,645,266,950 | 183,422,560 | 4,828,689,510 | 18,774 | 31.48 | 6.85 |
| 昭 和 元 年 | 5,874,117,790 | 1,077,547,420 | 6,951,665,210 | 27,028 | 39.22 | 8.40 |
| 3 年 | 5,301,559,280 | 739,414,450 | 6,040,973,730 | 23,487 | 31.96 | 6.82 |
| 6 年 | 4,741,202,920 | 838,107,450 | 5,579,310,370 | 21,692 | 25.12 | 5.35 |
| 8 年 | 5,289,015,040 | 833,211,670 | 6,122,226,710 | 23,803 | 27.09 | 5.73 |
| 10 年 | 6,404,699,380 | 931,648,850 | 7,336,348,230 | 28,524 | 30.40 | 6.54 |
| 11 年 | 7,112,138,170 | 1,029,576,910 | 8,141,715,080 | 31,655 | 35.21 | 7.27 |
| 12 年 | 7,787,301,030 | 1,083,691,250 | 8,870,992,280 | 34,491 | 38.36 | 7.92 |
| 13 年 | 9,079,251,870 | 1,228,530,010 | 10,307,781,880 | 40,077 | 40.76 | 8.42 |
| 14 年 | 9,067,780,000 | 1,174,555,000 | 10,242,335,000 | 39,823 | 40.50 | 8.37 |

昭和十四年度ハ豫算額ヲ示シ一戸當及一人當ハ昭和十三年十月現在ノ推計人口及世帯數ヲ以テ算出ス。

昭和十四年度市税の種類
總 額 10,242,335圓
(過年度分含マズ)



市税の種類 現在市税には普通市税と都市計畫事業費に充當すべき都市計畫特別税がある。

普通市税としては國稅附加税たる地租、營業收益税、所得税、取引所營業税と、縣稅附加税たる特別地稅、家屋稅、營業稅、雜種稅の各稅の外に特別稅た

る商品切手發行稅があり、郡市計畫特別稅としては地租、特別地稅、營業收益稅、家屋稅、營業稅、雜種稅がある。

市稅賦課率 昭和十四年度本市々稅賦課率の主なるものは次表の如くである。

| 稅 目 | 稅 率 | 稅 目 | 稅 率 |
|----------|--------------|---------------|--------------|
| 國稅附加稅 | 本稅一圓ニ付 1.122 | 縣稅附加稅 | 本稅一圓ニ付 1.600 |
| 地租附加稅 | 1.122 | 不動產取得 | 3.660 |
| 營業收益稅附加稅 | 0.140 | 遊 興 | 0.340 |
| 所得稅附加稅 | 0.998 | 藝 妓 | 2/100 |
| 營業稅附加稅 | 5.075 | 特別稅商品切手發行稅 | 發行額ノ 2/100 |
| 家屋稅附加稅 | 2.470 | 都 市 計 畫 特 別 稅 | 地 租 割 0.090 |
| 雜種稅附加稅 | 0.043 | 營業收益稅割 | 0.220 |
| 自動車(三人乘) | 0.093 | 家 屋 稅 割 | 0.400 |
| 自 轉 車 | | 營 業 稅 | 0.400 |
| 犬 | | | |

尙昭和十四年度六大都市の三大國稅課率は次の如くである。

| 稅 目 | 大 阪 | 東 京 | 京 都 | 名 古 屋 | 横 濱 |
|----------|-------|-------|-------|-------|-------|
| 宅地租附加稅 | 0.782 | 0.800 | 1.069 | 1.122 | 1.056 |
| 營業收益稅附加稅 | 0.800 | 0.820 | 0.990 | 1.122 | 0.990 |
| 所得稅附加稅 | 0.110 | 0.210 | 0.113 | 0.140 | 0.170 |

註、神戸市ハ縣費分賦ニツキ除外ス

市稅徵收成績 今昭和十三年度市稅決算額に就いて觀るに豫算額は 8,586,682 圓なりしも、その調定額は 9,119,135 圓にして豫算額に對し 532,453 圓の増加を示し、收入決算額は 9,079,252 圓にして豫算額に對し尙 492,569 圓の増加を示してゐる。

之が不納欠損額は 3,882 圓で收入未済額は 36,000 圓である、今その收入歩合を觀れば 99.5% と言ふ好成绩を示し、前年度の

89.2%を遙かに凌駕してゐる。

昭和十三年度市税決算額調

| 税目 | 豫算額 | 調定額 | 収入額 | 収入歩合 | 欠損額 | 未納額 |
|-----------|--------------|--------------|--------------|-------|----------|-----------|
| | 千圓 | 千圓 | 千圓 | % | 千圓 | 千圓 |
| 地租附加税 | 1,393,743.00 | 1,427,811.89 | 1,426,212.39 | 0.993 | 35.25 | 1,564.25 |
| 特別地租附加税 | 5,303.00 | 3,751.77 | 3,751.77 | 1.000 | — | — |
| 營業收益附加税 | 1,636,240.00 | 1,902,552.23 | 1,887,877.17 | 0.992 | 1,261.08 | 13,413.98 |
| 所得稅附加税 | 859,199.00 | 1,042,089.42 | 1,039,230.49 | 0.997 | 114.06 | 2,744.87 |
| 取引所營業稅附加税 | 12,750.00 | 14,288.05 | 14,288.05 | 1.000 | — | — |
| 家屋稅附加税 | 2,665,391.00 | 2,674,275.72 | 2,666,888.72 | 0.997 | 248.68 | 7,138.32 |
| 營業稅附加税 | 113,291.00 | 103,870.04 | 102,805.63 | 0.989 | 294.90 | 769.51 |
| 雜種稅附加税 | 1,853,765.00 | 1,899,623.59 | 1,887,325.35 | 0.993 | 1,928.63 | 10,369.61 |
| 特別稅 | 45,000.00 | 50,872.30 | 50,872.30 | 1.000 | — | — |
| 商品切手發行稅 | — | — | — | — | — | — |
| 市稅總額 | 8,586,682.00 | 9,119,135.01 | 9,079,251.87 | 0.995 | 3,882.60 | 36,000.54 |

尙市稅收納成績累年表を示せば次の如くである。

市稅決算額調 (昭和13年度)

| 年次 | 豫算額 | 調定額 | 収入額 | 収入歩合 | 欠損額 | 未納額 |
|------|--------------|--------------|--------------|------|-----------|------------|
| | 千圓 | 千圓 | 千圓 | % | 千圓 | 千圓 |
| 昭和4年 | 6,756,398.00 | 6,270,026.79 | 6,222,061.94 | 99.2 | 2,838.85 | 45,126.00 |
| 5年 | 6,539,390.00 | 5,960,670.36 | 5,896,464.51 | 98.9 | 2,879.58 | 61,326.27 |
| 6年 | 6,216,787.00 | 5,689,017.12 | 5,579,310.37 | 93.0 | 2,947.14 | 106,759.61 |
| 7年 | 5,850,593.00 | 5,748,254.24 | 5,665,013.90 | 98.5 | 9,658.27 | 73,582.07 |
| 8年 | 6,059,379.00 | 6,196,708.10 | 6,122,226.71 | 93.7 | 8,450.73 | 66,030.66 |
| 9年 | 6,533,071.00 | 6,853,359.65 | 6,716,703.10 | 93.8 | 6,801.59 | 69,854.96 |
| 10年 | 7,290,132.00 | 7,403,814.62 | 7,336,348.23 | 99.0 | 10,404.67 | 57,061.72 |
| 11年 | 8,073,181.00 | 8,193,261.48 | 8,141,715.08 | 99.3 | 8,044.83 | 43,501.57 |
| 12年 | 8,956,257.00 | 8,943,793.35 | 8,870,992.28 | 99.1 | 5,726.89 | 67,074.18 |
| 13年 | 8,586,682.00 | 9,119,135.01 | 9,079,251.87 | 99.5 | 3,882.60 | 36,000.54 |

尙六大都市昭和十四年度市稅額を觀れば次の如くである。

六大都市々稅比較 (昭和14年度當初豫算) (單位圓)

| 種別 | 名古屋 | 東京 | 大阪 | 京都 | 横濱 | 神戸 |
|------------|------------|------------|------------|------------|-----------|------------|
| 普通市稅 | 12,070,540 | 50,652,181 | 31,931,476 | 7,160,060 | 7,198,522 | 9,877,234 |
| 都市計畫特別稅 | 1,566,267 | 3,812,588 | 4,537,945 | 1,212,171 | 567,980 | 850,708 |
| 區及學區ニ關スル市稅 | — | 9,581,932 | 165,861 | 2,635,599 | — | — |
| 計 | 13,636,807 | 85,334,462 | 36,635,282 | 11,007,830 | 7,766,502 | 10,727,942 |

東京ハ計ニノミ過年度收入ヲ含ム

神戸ハ縣費負擔分ヲ控除セル額ヲ掲グ

市有財產

市有財產は市勢の發展に伴ふ諸事業施設の發展擴大により著しく増加し明治二十八年の市有財產50,346圓人口一人當 24錢に較べ昭和十三年十月末現在に於ては164,396千圓の多額に達し四十四年間に 3,265 倍となり、一人當は134.3圓で564倍に増加してゐる。

昭和十三年十月末市有財產

| | 千圓 | 千圓 | 千圓 |
|------|--------|---------|--------|
| 土地建物 | 92,817 | 預金 | 1,288 |
| 有價證券 | 45 | 其他 | 502 |
| | | 運用金 | 1,149 |
| | | 工作物、船舶等 | 68,595 |
| | | 車輛、機械器具 | |

である。

今之を土地、建物、車輛、軌道等の所謂行政財產と基本財產、特別基本財產及積立金等の收益財產とに分てば、行政財產の總額は 162,488千圓にして、市有財產總額の 99%を占め收益財產は1,908千圓にして1%に過ぎない。尙此他本市には特別財產として名古屋城及猿面茶屋を有するのである。今各種財產別内譯を示せば次の通りである。

| 總額 | 164,396千圓 | 他兵並遺家族慰問 | (225)千圓 |
|-------------|-----------|---------------|-----------|
| 基本財產 | 223 | 積立金 | 315 |
| 特別基本財產 | 1,370 | 小學校教員金 | (9) |
| 慈善事業資金 | (239) | 視察積立金 | (9) |
| 教育基金 | (91) | 名古屋城維持金 | (253) |
| 火災損害填補基金 | (756) | 修理積立金 | |
| 自治新興資金 | (10) | 史傳參考品陳列館建設積立金 | (53) |
| 故加藤伯綱優待維持資金 | (5) | 市經濟 | 102,329 |
| 産業奨励資金 | (12) | 電氣 | 20,773 |
| 公會堂維持資金 | (32) | 水道 | 39,386 |
| | | 特別財產 | 名古屋城及猿面茶屋 |

斯の如くその大部分は收益を齎さない所謂行政財產によつて構成せられてゐるので市費は先づ財產より生ずる收入を以つて支辨さるべき建前とはなつてゐるもその收入は昭和十四年度豫

算に於て總額136,274圓、純歳入の1%に過ぎず昭和十三年十月末現在の市有財産164,396千圓に比し洵に微々たるものである。

市 債 市勢の發展に伴ひ文化的經濟的施設事業の需要は著しく増加し、市は年々巨額の経費を必要とするにも關らず市税その他の經常收入の増加がこれに伴はないので、勢ひこれが財源を市債に求めなければならない状態にある。

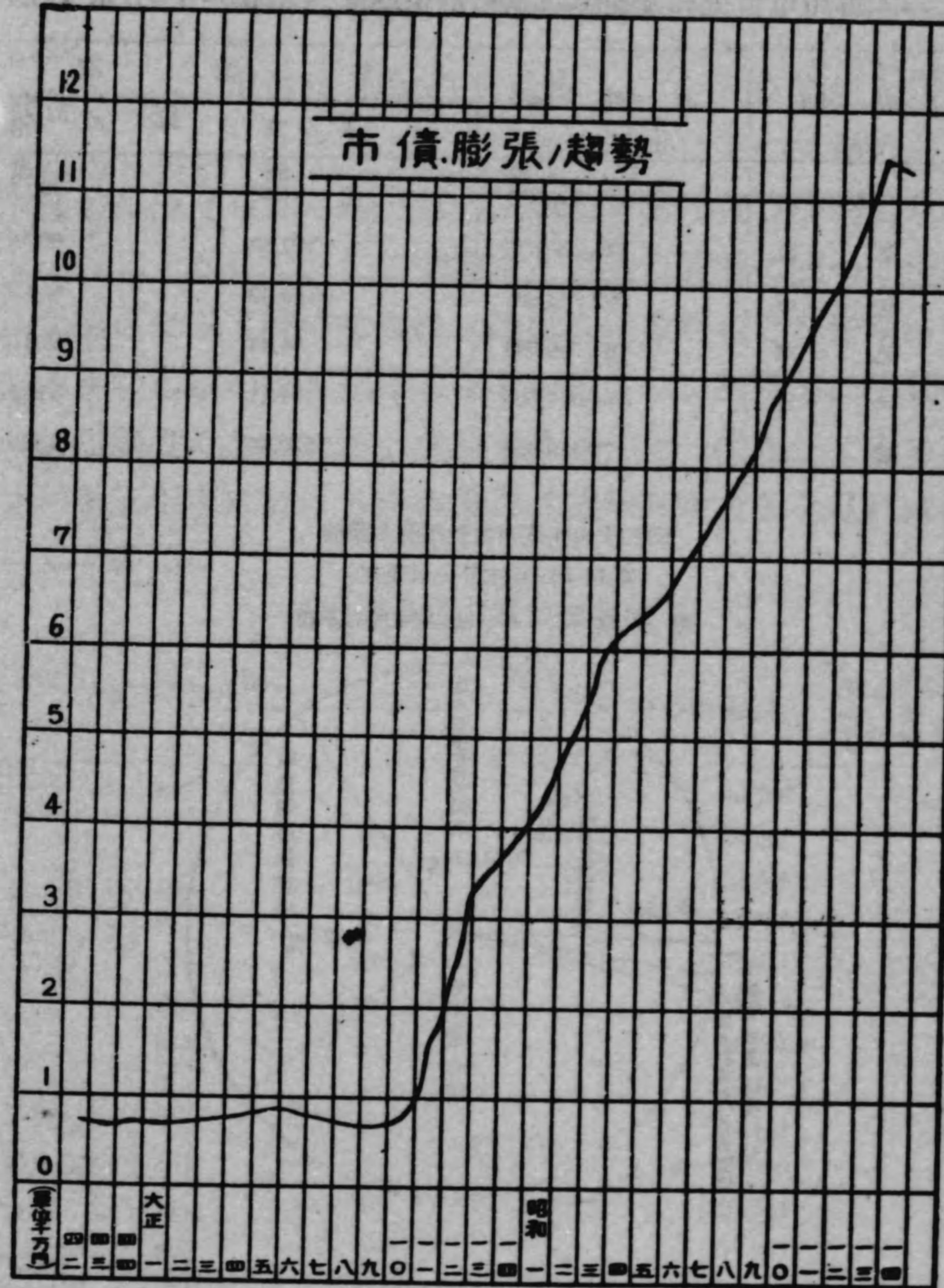
本市の起債は明治四十年上水道布設の爲492千圓を募集したのを以て嚆矢とし次で四十二年上下水道布設、公園新設、新堀川改修工事等の爲に英貨公債80萬磅（手取7,016,200圓）餘の外債を募集爾來小學校建築、都市計畫事業、電氣軌道事業、中川運河開鑿事業その他社會事業、衛生事業等の爲に相次いで巨額の起債をなすに至つたのである。

而して昭和十四年四月現在に於ける本市市債額は次の如くである。

市債經濟別現在額（昭和14年4月）

| 經濟別 | 起債額 | 未償還額 | 償還済額 | 14年度償還額 | 割合 |
|-----------------|----------------|----------------|---------------|--------------|--------|
| | 圓 | 圓 | 圓 | 圓 | % |
| 水道事業費經濟 | 33,033,200.00 | 17,037,739.45 | 15,995,460.55 | 1,958,090.77 | 15.22 |
| 都市計畫費經濟 | 28,141,900.00 | 24,980,500.00 | 3,161,400.00 | 729,300.00 | 22.31 |
| 電氣軌道費經濟 | 30,317,600.00 | 29,418,095.55 | 899,504.45 | 445,020.86 | 26.27 |
| 公益質屋費經濟 | 205,700.00 | 190,000.00 | 15,700.00 | 16,443.27 | 0.17 |
| 都市計畫 土地區畫整理費 | 64,000.00 | 64,000.00 | — | 11,800.00 | 0.06 |
| 一般市費 | 48,575,800.00 | 40,274,522.09 | 8,301,277.91 | 2,387,654.93 | 35.97 |
| 計 | 140,338,200.00 | 111,964,857.09 | 28,373,342.91 | 5,548,309.83 | 100.00 |

1. 英貨公債ハ水道事業費經濟ニ算入ス
2. 外貨ハ1磅17圓ニテ換算ス



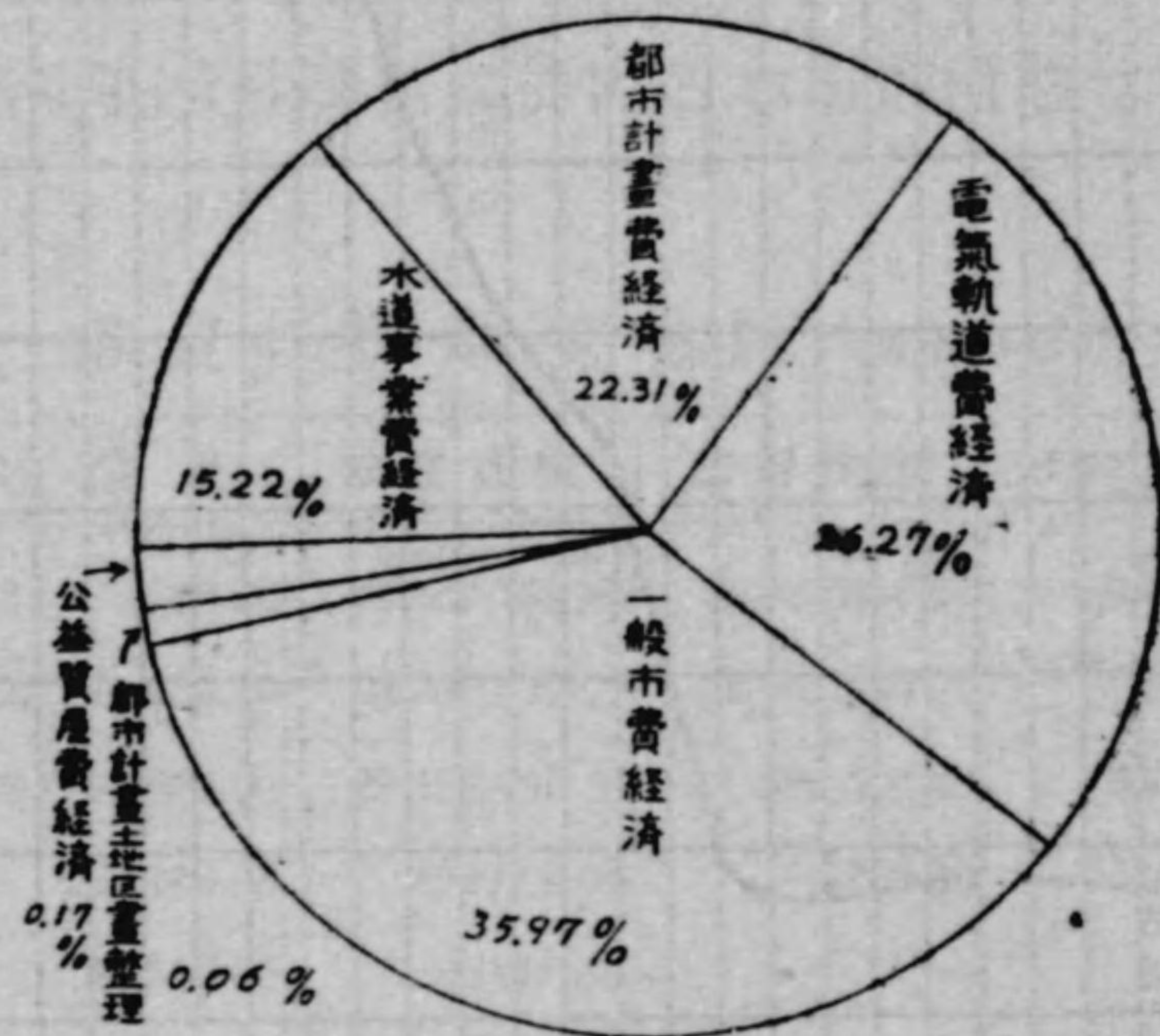
今これを他の五大都市に對比して見ると次の通りである。

六大都市市債現在額並市民負擔割合比較（昭和14年3月末現在）

| 都 市 別 | 市 債 額 | 負 担 額 | |
|-------|-------------|--------|----------|
| | | 一 人 當 | 一 戸 當 |
| 名古屋市 | 111,964,857 | 91.46 | 442.72 |
| 東京市 | 826,559,356 | 127.33 | 629.33 |
| 大阪市 | 599,863,807 | 180.62 | 856.83 |
| 京都市 | 65,708,594 | 56.65 | 272.53 |
| 神戸市 | 169,907,500 | 111.11 | 511.15 |
| 廣 瀨 市 | 179,489,998 | 230.86 | 1,098.60 |

昭和十四年度市債現在額事業別
（昭和十四年四月一日現在）

總 額 111,964,857.09圓



公議會、市區職員

市 會

市會は市民の代議會として市の意思を議決する。そしてこの市會の活動によつて初めて自治の本義が發揮せられるのである。本市々會の創立は明治二十二年十一月二十五日で、この市會は三級制の選舉に依つて選出せられた議員を以て構成せられ、議員の定數39名その任期は明治四十四年の市制の改正迄は六年を一期とし、三年毎に半数改選せられる制度であつたが、現在では四年を一期としてゐる。

昭和十三年末に於ける市會議員及選舉有權者數を見れば次表の如くである。

市會議員及選舉有權者數

| 區 名 | 議 員 | | 選 舉 有 權 者 | 現在人口 100 に 對 して 選 舉 有 權 者 |
|----------|-----|-----|-----------|---------------------------------|
| | 定 員 | 現 員 | | |
| 千 種 | 5 | 5 | 16,746 | 17.7 |
| 東 西 | 11 | 11 | 34,961 | 17.9 |
| 中 村 | 10 | 10 | 32,645 | 17.6 |
| 中 和 | 6 | 5 | 21,535 | 19.1 |
| 昭 和 | 12 | 12 | 34,911 | 18.1 |
| 熱 田 | 9 | 9 | 29,442 | 17.9 |
| 中 川 | 5 | 5 | 16,751 | 18.3 |
| 港 南 | 4 | 4 | 14,647 | 19.4 |
| 港 南 | 2 | 2 | 7,497 | 17.4 |
| 港 南 | 4 | 4 | 12,382 | 17.9 |
| 全 市 | 68 | 67 | 221,517 | 18.1 |
| 昭 和 12 年 | 68 | 68 | 217,261 | 19.2 |
| 11 年 | 64 | 60 | 212,994 | 18.3 |
| 10 年 | 64 | 64 | 198,725 | 19.0 |

選舉有權者は十二月二十五日確定名簿に依る
現在人口は十月一日現在推計人口に依る 以下同じ

尙議員定数は市の膨脹發展に伴ひ明治二十八年には42名であつたが、四十年熱田町合併により48名となり、大正十年には隣接十六ヶ町村合併により64名に、昭和十二年十月には増區に伴ひ68名に増員した。

市會議員

本市市會議員定員は68名なるも、昭和十三年末に於て1名の欠員を生じたる爲現在は67名である。

今其の年齢別に就て見るに。

| | | | | | |
|--------|----|--------|-----|--------|-----|
| 25—34歳 | 1名 | 35—44歳 | 21名 | 45—49歳 | 13名 |
| 50—54歳 | 9名 | 55—59歳 | 11名 | 60歳以上 | 12名 |

で、35—54歳の壯年階級の者最も多く全體の64%を占め、少壯及老年の者は比較的尠くなつてゐる。

更に職業別に觀れば銀行會社員12名(18%)、辯護士、辯理士2名(3%)、醫師、藥劑師9名(13%)、農業、水産業2名(3%)、鑛工業5名(8%)、商業、交通業12名(18%)、公務自由業12名(18%)、其の他の有業者3名(4%)、無業者10名(15%)となつてゐる。

選 舉

昭和十二年十月二十五日施行の市會議員總選舉に於ては定員68名に對し、立候補者171名、即ち立候補者2.5名に付當選者一人の割合であつた。尙現在の市會議員は當日の選舉に依るものであつてその投票成績は次の如くであつた。

市會議員選舉 昭和十二年十月二十五日施行

| 選舉區區名 | 議 員 | | 投票日ニ於ケル選舉有權者 | | | | |
|--------|-----|-----|--------------|-------|---------|---------|---------|
| | 定 員 | 候補者 | 投票セシ者 | | | 投票セザリシ者 | 合計 |
| | | | 有 効 | 無 効 | 計 | | |
| 千種區選舉區 | 5 | 9 | 7,605 | 244 | 7,849 | 6,258 | 14,107 |
| 東 區選舉區 | 11 | 30 | 18,234 | 398 | 18,632 | 13,936 | 32,568 |
| 西 區選舉區 | 10 | 24 | 17,358 | 363 | 17,721 | 11,559 | 29,280 |
| 中村區選舉區 | 6 | 16 | 12,001 | 208 | 12,209 | 6,868 | 19,077 |
| 中 區選舉區 | 12 | 27 | 20,287 | 488 | 20,775 | 12,925 | 33,700 |
| 昭和區選舉區 | 9 | 25 | 15,002 | 480 | 15,482 | 9,968 | 25,450 |
| 熱田區選舉區 | 5 | 13 | 9,267 | 333 | 9,600 | 5,931 | 15,531 |
| 中川區選舉區 | 4 | 8 | 8,349 | 174 | 8,523 | 4,264 | 12,787 |
| 港 區選舉區 | 2 | 8 | 4,697 | 73 | 4,770 | 2,003 | 6,773 |
| 南 區選舉區 | 4 | 11 | 7,213 | 162 | 7,375 | 3,579 | 10,954 |
| 計 | 68 | 171 | 120,013 | 2,923 | 122,936 | 77,291 | 200,227 |

備考 總選舉

市會議員の選舉權及被選舉權は原則として「年齢滿二十五歳以上の男子」で「二年以來其の市の住民」たる總ての市公民に附與されてゐるのであつて市公民の資格については、最初所謂制限選舉制時代には「二年以來其の市町村直接税を納むる外地租又は年額二圓以上の直接國税を納むる」ことを要件としてゐたので、有權者數も甚だ少かつた。然し大正十五年「市制」の改正に依つて納税要件の撤廢を見たる後、次表に示す如く大正十四年の總選舉では本市の有權者數は68,336人となり、又昭和四年の第一回普通選舉に於ては153,372人、即ち大正十四年當時の約二倍に増加した。かゝる制度の改正は要するに公民權の擴張を意味するものであつて、自治運營上一新紀元を劃するものである。

市制施行以來の有権者数投票数並投票率

| 年次 | 公簿人口 人 | 有権者總數 人 | 投票數 票 | 投票率 % | 備 要 |
|-------|-----------|------------|----------|----------|---------------------------|
| 明治22年 | 157,496 | 約 4,000 | 2,794 | 約 70.0 | 三級制任期六年三年半 數改選議員定數39名 |
| 25年 | 182,508 | 5,270 | 3,445 | 65.3 | |
| 28年 | 211,438 | 5,339 | 3,248 | 60.8 | 議員定數42名に増員 |
| 31年 | 240,534 | 5,433 | 3,945 | 72.6 | |
| 34年 | 267,482 | 8,947 | 5,504 | 61.5 | |
| 37年 | 292,548 | 9,489 | 2,273 | 23.9 | |
| 40年 | 354,733 | 10,533 | 7,854 | 74.5 | 市域擴張議員定數48名 に増員 |
| 43年 | 405,646 | 11,764 | 8,321 | 70.7 | |
| 大正 2年 | 447,951 | 13,206 | 4,046 | 30.6 | 任期四年全數改選に改 正 |
| 6年 | 419,749 | 12,123 | 8,895 | 73.3 | |
| 10年 | 633,274 | 52,016 | 44,491 | 85.5 | 二級制 市域擴張 議員定數64名に増員 |
| 14年 | 773,030 | 68,336 | 49,152 | 71.9 | |
| 昭和 4年 | 1,001,838 | 153,372 | 107,534 | 70.2 | 普通選挙制施行 |
| 8年 | 1,114,311 | 173,702 | 113,719 | 65.5 | |
| 12年 | 1,219,550 | 200,227 | 122,936 | 61.4 | |

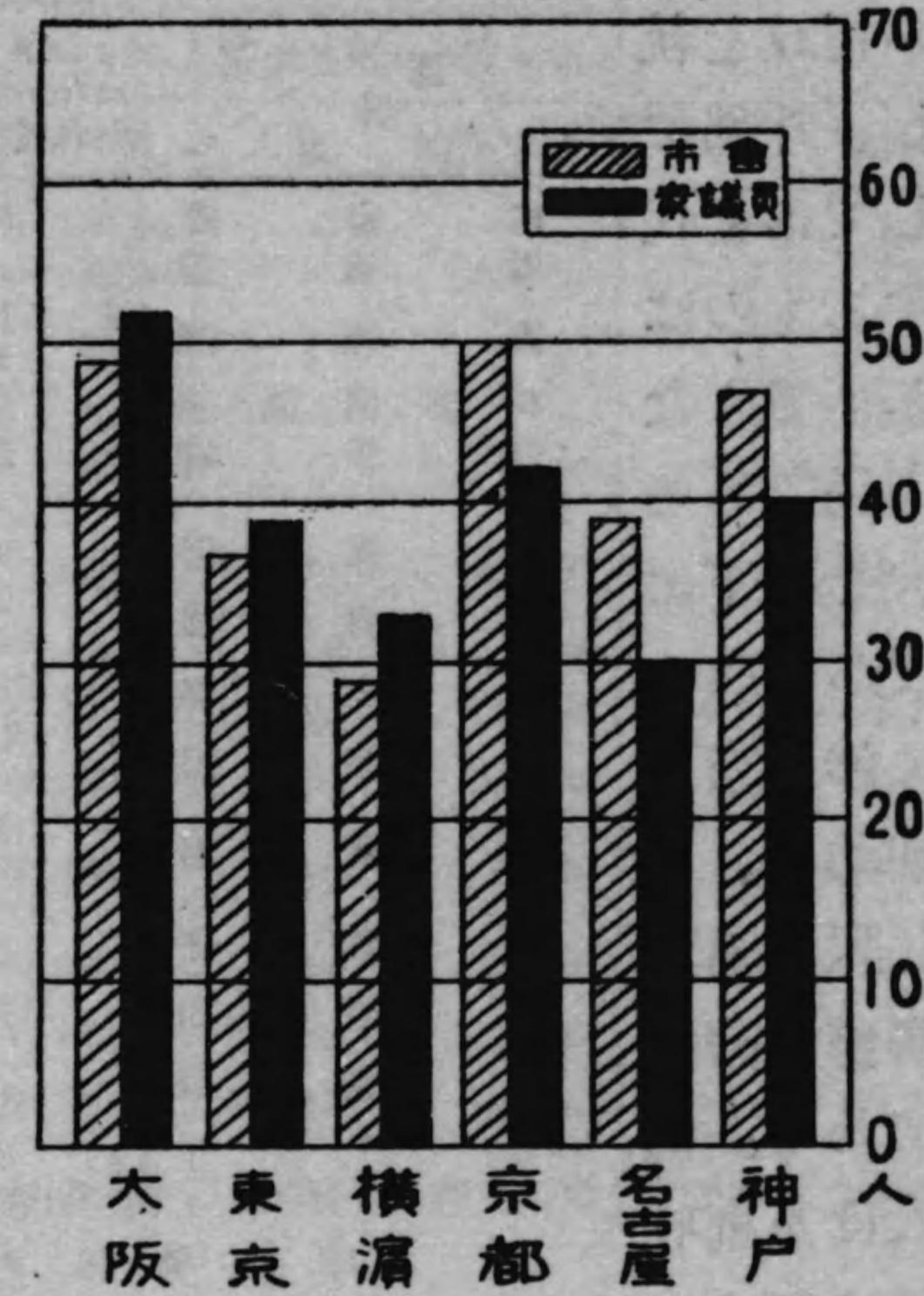
選挙区は市會議員選挙では設けないのが原則であるが、本市は明治四十年熱田町合併に際し、舊名古屋市を第一選挙区、熱田町を第二選挙区とし、次いで大正六年には二選挙区を四選挙区に、十年の市域擴張の際は七選挙区としたるも、昭和四年の普通選挙法に依る總選挙以來選挙区の区域を行政区の区域と一致せしめ、四選挙区とし、次いで昭和十二年十月増区に伴ひ十選挙区と定めたのである。

尙最近執行された六大都市の衆議院及市會兩議員總選挙に於ける投票成績は右圖に示す如く、東京、大阪、横濱は市會の棄

權率の方が低く之に反し京都、名古屋、神戸は衆議院の棄權率の方が低い。

市參事會は市會の副議決機關であつて市會議員の互選する名譽職市參事會員を以て組織され、市長は議長としてこれに加はることになつてゐる。參事會員の定數は原則として十名であるが本市は市條例を以て十五名に定められ、市會議員中より隔年に選挙せられる。尙市會及參事會議事は次の如くである。

六大都市選挙棄權率比較
(有権者百人=付棄權者)



市會及參事會議事

| 年次 | 市 會 | | | 市 參 事 會 | |
|-------|------|---------|---------|---------|------|
| | 會議日數 | 議 事 件 數 | 議 事 件 數 | 會議日數 | 議決件數 |
| | | 決了 | 未了 | | |
| 昭和13年 | 20 | 187 | 3 | 15 | 268 |
| 12年 | 24 | 192 | — | 19 | 278 |
| 11年 | 17 | 149 | — | 15 | 237 |
| 10年 | 14 | 157 | — | 18 | 259 |
| 9年 | 17 | 153 | — | 17 | 227 |
| 8年 | 14 | 136 | — | 18 | 215 |
| 7年 | 14 | 136 | — | 18 | 215 |
| 6年 | 18 | 149 | — | 20 | 182 |

市区職員

市の行政を統轄し、外部に對して市を代表するものは謂ふまでもなく市長であるが、その下に助役が行政全般に涉り市長を補助し、各局部課に屬する事務を分擔してゐる。尙收入役及副收入役は嚴密には市長の補助機關ではないが、市の現金出納その他の會計事務を掌つてゐるのである。右の外市長の事務を補助するもの

各局部課別人員

| 局 部 課 別 | 職 名 | 吏 員 | | | |
|---|-----|-----------|----------|-----------|-----------|
| | | 年 俸 | | 月 俸 | |
| | | 人員 | 給料月額 | 人員 | 給料月額 |
| 秘 書 課 監 査 課 調 査 課 兵 衛 課 會 防 計 課 庶 務 部 教 育 部 土 木 部 産 業 部 保 健 部 社 會 部 水 電 局 計 | 課 | 3 | 1,108,33 | 8 | 650,00 |
| | 課 | — | — | 4 | 283,00 |
| | 課 | ※ 1 | 300,00 | 9 | 679,00 |
| | 課 | 2 | 224,99 | 15 | 997,00 |
| | 課 | 1 | 158,33 | 12 | 842,00 |
| | 部 | 2 | 374,99 | 46 | 3,371,00 |
| | 部 | ※ 2 | 291,66 | ※ 1 | 80,00 |
| | 部 | 15 | 2,974,95 | 27 | 1,932,00 |
| | 部 | 21 | 3,458,30 | 192 | 15,120,00 |
| | 部 | ※ 1 | 133,33 | ※ 9 | 401,00 |
| 部 | 19 | 3,791,60 | 75 | 5,513,00 | |
| 部 | ※ 2 | 316,66 | 235 | 14,881,00 | |
| 部 | 75 | 13,699,74 | ※ 1 | 72,00 | |
| 局 | 9 | 1,508,30 | 39 | 2,682,00 | |
| 局 | 17 | 2,916,64 | 176 | 12,653,00 | |
| 局 | 11 | 2,116,65 | ※ 11 | 940,00 | |
| 計 | ※ 6 | 1,041,65 | ※ 22 | 1,493,00 | |
| | 179 | 33,149,47 | 982 | 71,489,00 | |

印ハ 屬 託 フ 再 掲 ス 市 長 及 助 役

各 區 別 人 員 給 料

| 種 別 | 區 別 | 人員 | 給料月額 | 人員 | 給料月額 |
|-----------------------|-----|-----|-----------|-------|-----------|
| 千 東 西 中 中 昭 熱 中 港 南 總 | 種 | 5 | 724,98 | 22 | 1,475,00 |
| | 種 | 5 | 733,31 | 39 | 2,293,00 |
| | 種 | 5 | 799,99 | 37 | 2,220,00 |
| | 村 | 5 | 708,31 | 25 | 1,614,00 |
| | 種 | 5 | 774,98 | 39 | 2,253,00 |
| | 種 | 5 | 691,64 | 30 | 1,698,00 |
| | 種 | 5 | 691,64 | 24 | 1,491,00 |
| | 種 | 5 | 708,33 | 21 | 1,331,00 |
| | 種 | 4 | 533,32 | 18 | 1,095,00 |
| | 種 | 4 | 541,65 | 19 | 1,159,00 |
| | 計 | 48 | 6,908,15 | 274 | 16,629,00 |
| | 計 | ※ 6 | 1,041,65 | ※ 22 | 1,493,00 |
| | 計 | 227 | 40,057,62 | 1,256 | 88,118,00 |

給 料 月 額 調

(昭和十三年末)

| 職 員 | 備 人 | | | | 計 | | |
|-----|-----------|-------|------------|------|-----------|-------|------------|
| | 聯合ヲ用ヒタルモノ | | 聯合ヲ用ヒザルモノ | | | | |
| | 人員 | 給料月額 | 人員 | 給料月額 | | | |
| 2 | 74,00 | 7 | 135,00 | — | — | 20 | 1,967,33 |
| 1 | 24,00 | 2 | 42,00 | — | — | 7 | 349,00 |
| 7 | 283,00 | 3 | 66,00 | — | — | 22 | 1,552,99 |
| 3 | 117,00 | 3 | 51,00 | — | — | 22 | 1,323,33 |
| 6 | 266,00 | 1 | 30,00 | 1 | 30,00 | 22 | 1,542,99 |
| 30 | 1,349,00 | 102 | 3,038,60 | 15 | 445,50 | 197 | 9,020,75 |
| 18 | 770,00 | 23 | 764,80 | 3 | 81,00 | 89 | 6,894,41 |
| 194 | 10,044,60 | 442 | 18,672,70 | 230 | 7,977,60 | 1,079 | 55,273,20 |
| 33 | 1,495,00 | 71 | 2,980,80 | 19 | 642,09 | 227 | 14,956,82 |
| 119 | 5,784,00 | 581 | 16,868,80 | 110 | 3,949,70 | 1,122 | 55,499,90 |
| 65 | 2,803,00 | 99 | 3,029,20 | 14 | 456,00 | 227 | 10,550,50 |
| 84 | 4,174,20 | 344 | 17,024,60 | 253 | 8,555,87 | 874 | 45,324,31 |
| 81 | 4,408,10 | 3,801 | 151,580,22 | 14 | 429,30 | 4,062 | 171,360,27 |
| 643 | 31,591,90 | 5,479 | 214,283,72 | 659 | 22,567,06 | 7,970 | 375,615,80 |

一 名 缺 員 中

月 額 調

(昭和十三年末)

| 人員 | 給料月額 | 人員 | 給料月額 | 人員 | 給料月額 | 人員 | 給料月額 |
|-----|-----------|-------|------------|-----|-----------|-------|------------|
| 25 | 956,40 | 21 | 605,10 | — | — | 73 | 3,761,48 |
| 45 | 1,506,60 | 35 | 974,90 | — | — | 124 | 5,507,81 |
| 44 | 1,694,00 | 40 | 1,134,60 | — | — | 126 | 5,848,59 |
| 27 | 933,40 | 27 | 642,64 | — | — | 84 | 3,898,35 |
| 46 | 1,748,10 | 44 | 1,220,50 | — | — | 134 | 5,996,58 |
| 40 | 1,487,70 | 33 | 909,20 | — | — | 108 | 4,786,54 |
| 23 | 879,30 | 23 | 630,00 | — | — | 75 | 3,691,94 |
| 24 | 915,60 | 25 | 587,80 | — | — | 75 | 3,542,73 |
| 18 | 600,90 | 19 | 497,00 | — | — | 59 | 2,726,22 |
| 22 | 769,70 | 16 | 402,50 | — | — | 61 | 2,872,85 |
| 314 | 11,491,70 | 283 | 7,604,24 | — | — | 919 | 42,633,09 |
| 957 | 43,083,60 | 5,762 | 221,887,96 | 659 | 22,567,06 | 8,889 | 418,248,89 |

として、區長、局長、部長、主事、技師、視學、書記、技手等の吏員と、その他雇員傭人が市の事務に従事してゐるのである。

昭和十三年末現在に於ける本市、區職員數（傭人を含む）は8,889人、其の給料月額418,249圓である。

市區職員中最も多數を占むるは現業員を擁する電氣局の4,062名、保健部の1,122名、土木部の1,079名、の順である。區役所では中區の134名を筆頭に、以下西區の126名、東區の124名、昭和區の108名、之に次ぐのである。

明治三十年當時の吏員及雇員の數は僅かに133人に過ぎなかつたのに比すれば誠に隔世の感がある。

市職員數及給料額増加趨勢 (雇員以上)

| 年 別 | 人 員 | | 給 料 年 額 | |
|-----------|-------|-------|-----------|-------|
| | 實 數 | 指 數 | 實 數 | 指 數 |
| 明 治 3 3 年 | 133 | 100 | 25,200 | 100 |
| 3 8 年 | 142 | 105 | 31,800 | 126 |
| 4 3 年 | 373 | 280 | 137,268 | 544 |
| 大 正 4 年 | 521 | 391 | 162,404 | 644 |
| 9 年 | 556 | 413 | 503,760 | 1,999 |
| 1 4 年 | 974 | 732 | 968,796 | 3,844 |
| 昭 和 5 年 | 1,160 | 872 | 1,118,796 | 4,439 |
| 1 1 年 | 2,147 | 1,614 | 1,775,273 | 7,044 |
| 1 3 年 | 2,468 | 1,856 | 2,055,111 | 8,155 |

次に本市退職吏員に對する退職料支給額は次表に示す如くであつて、市職員の増加に伴ひ逐年遞増の傾向を辿つてゐる。

市吏員退職料支給人員及金額

| 元 職 名 | 昭 和 1 3 年 | | 昭 和 1 2 年 | | 昭 和 1 1 年 | |
|-------------|-----------|---------|-----------|---------|-----------|---------|
| | 人 員 | 年 額 | 人 員 | 年 額 | 人 員 | 年 額 |
| 區 長 | 8 | 7,895 | 6 | 6,228 | 6 | 6,228 |
| 部 長 | 2 | 2,200 | 2 | 2,200 | 2 | 2,200 |
| 主 事 | 51 | 32,136 | 44 | 27,463 | 37 | 22,318 |
| 區 主 事 | 8 | 5,104 | 8 | 5,104 | 9 | 5,770 |
| 技 師 | 54 | 36,740 | 45 | 30,624 | 38 | 25,316 |
| 醫 員 | 4 | 3,801 | 3 | 2,801 | 3 | 2,801 |
| 藥 劑 員 | 2 | 1,200 | 1 | 800 | 1 | 800 |
| 主 事 補 | 20 | 8,282 | 10 | 4,184 | 7 | 2,948 |
| 區 主 事 補 | 3 | 1,139 | 1 | 388 | 1 | 388 |
| 技 師 補 | 2 | 784 | 1 | 364 | — | — |
| 書 記 | 41 | 17,447 | 40 | 17,027 | 40 | 17,143 |
| 區 書 記 | 138 | 49,720 | 142 | 51,288 | 149 | 54,062 |
| 市 會 書 記 | 1 | 480 | 1 | 480 | 2 | 800 |
| 技 手 | 52 | 22,430 | 40 | 17,738 | 36 | 16,142 |
| 防 疫 技 手 | 1 | 400 | 1 | 400 | 1 | 400 |
| 水 道 檢 査 員 | 3 | 964 | 1 | 308 | 1 | 308 |
| 檢 査 員 | 9 | 3,264 | 9 | 3,264 | 6 | 2,176 |
| 監 督 | 5 | 2,016 | 5 | 2,016 | 6 | 2,380 |
| 看 護 婦 長 | 1 | 360 | 1 | 360 | 1 | 360 |
| 運 轉 士 | 2 | 964 | 2 | 964 | 2 | 964 |
| 掃 除 監 督 | 9 | 3,405 | 9 | 3,405 | 9 | 3,405 |
| 掃 除 巡 視 | 37 | 11,143 | 38 | 11,543 | 39 | 11,843 |
| 清 掃 監 督 | 4 | 1,560 | 4 | 1,560 | 4 | 1,560 |
| 清 掃 巡 視 | 17 | 5,371 | 16 | 4,956 | 15 | 4,644 |
| 傳 染 病 醫 員 | 1 | 450 | 1 | 450 | 1 | 450 |
| 併 合 町 村 吏 員 | 4 | 1,235 | 4 | 1,235 | 2 | 940 |
| 計 | 479 | 220,490 | 435 | 197,150 | 418 | 186,346 |

附 錄

都市要覽

市 域

明治二十二年市制施行當時に於ける全國市町村の数は13,386にして内、市制を施行したるものは僅かに39に過ぎなかつたが、三十年後の大正七年には約倍加して79となり、昭和十三年八月には舞鶴、東舞鶴兩市の實現に依り茲に148を算ふるに至つた。今其の増加數を町村數と共に示せば次の如くである。

市町村數の消長

| | 昭和13年 | 昭和3年 | 大正7年 | 明治41年 | 明治31年 | 明治22年 |
|---|-------|--------|--------|--------|--------|--------|
| 市 | 148 | 103 | 79 | 66 | 52 | 39 |
| 町 | 1,687 | 1,625 | 1,333 | 1,167 | 1,173 | 15,820 |
| 村 | 9,545 | 10,180 | 10,839 | 11,220 | 13,068 | |

市の面積

全國に於ける市の面積は6,792.43方呎にして、全國町村面積375,752.57方呎に比すれば僅かに2%弱に過ぎない。市の面積で最も廣いものは東京市の572.81方呎最も小さいのは首里市の2.45方呎で、平均は45.89方呎である。

六大都市に於ける面積を比較すれば東京市の572.81方呎を第一位とし、京都市の288.65方呎之れに次ぎ、大阪市の185.12方呎、横濱市の168.02方呎、名古屋市の160.13方呎、神戸市の32.04方呎の順序となつてゐる。

人 口

市制施行當時に於ける我國人口は40,105,479人にして、内、市部の人口は3,812,186人で(9.5%)町村の人口は36,293,293人(90.5%)であつたが、三十年後の大正七年には市部18.0%、町村82.0%、五十年後の昭和十三年には

市部 35.2%、町村 64.8%となり、市部は郡部に比し著しき増加となつた。

市部郡部の人口増加比較

| 實 數 | 全 國 市 部 郡 部 | 昭和13年 | 昭和3年 | 大正7年 | 明治41年 | 明治31年 | 明治22年 |
|--------|----------------------------|------------|------------|------------|------------|------------|------------|
| | | 71,252,800 | 64,450,005 | 55,963,053 | 51,741,853 | 45,400,010 | 40,105,479 |
| | 市部 | 25,109,400 | 15,444,300 | 10,096,758 | 7,739,768 | 5,334,463 | 3,812,186 |
| | 郡部 | 46,143,400 | 49,005,705 | 45,866,295 | 44,002,085 | 40,065,547 | 36,293,293 |
| 割 合 | 市部% | 35.2 | 24.0 | 18.0 | 15.0 | 11.6 | 9.5 |
| | 郡部% | 64.8 | 76.0 | 82.0 | 85.0 | 88.4 | 90.5 |

昭和十三年十月一日現在内閣統計局發表に依る全國推計人口は72,305,500人にして、内五十萬以上の都市は6、二十萬以上10、十萬以上23、五萬以上61、五萬以下48である。人口の最も多いのは東京市の6,473,200人、最も少いのは首里市の18,000人である。

六大都市に於ける人口増加の趨勢は次表に之を示すが如く實に驚異的のものがある。即ち明治二十二年の人口を100としたる増加割合は548.1であり、全國の177.6、又郡部の127.1に比し非常な増加振である。六大都市中増加率の最も大なるは名古屋市にして其の増加指數は實に777.2を示し、名古屋市に次で増加率の大なるは神戸市にして734.3、大阪市は703.3、横濱市637.2、東京市は稍低く469.3、京都市は415.4で最も低くなつてゐる。

六大都市に於ける一方軒當の人口密度を見るに、大阪市の17,991人最も高く、神戸市の12,083人、東京市の11,300人之に次ぎ名古屋市は7,664人、横濱市4,638人、京都市は最も低く4,025人となつてゐる。

六大都市人口増加の趨勢

| 實 數 | 東 京 大 阪 京 都 神 戸 横 濱 名 古 屋 | 昭和13年 | 昭和3年 | 大正7年 | 明治41年 | 明治31年 | 明治22年 |
|--------|---|-----------|-----------|-----------|-----------|-----------|-----------|
| | | 6,457,600 | 2,040,440 | 2,331,860 | 1,626,103 | 1,425,366 | 1,375,937 |
| | 大阪 | 3,321,200 | 2,333,800 | 1,633,338 | 1,217,765 | 811,855 | 472,247 |
| | 京都 | 1,159,800 | 736,000 | 668,930 | 411,264 | 351,461 | 279,165 |
| | 神戸 | 989,100 | 666,700 | 591,393 | 347,982 | 214,119 | 134,704 |
| | 横濱 | 777,500 | 536,500 | 446,097 | 392,870 | 191,251 | 121,985 |
| | 名古屋 | 1,224,100 | 869,900 | 433,701 | 374,146 | 240,534 | 157,496 |
| 割 合 | 東京 | 469.2 | 148.2 | 169.4 | 118.1 | 103.5 | 100.0 |
| | 大阪 | 703.3 | 494.2 | 345.8 | 257.8 | 171.9 | 100.0 |
| | 京都 | 415.4 | 263.6 | 259.5 | 147.4 | 125.8 | 100.0 |
| | 神戸 | 734.3 | 494.9 | 439.0 | 258.3 | 159.0 | 100.0 |
| | 横濱 | 637.2 | 439.7 | 365.6 | 321.1 | 156.7 | 100.0 |
| | 名古屋 | 777.2 | 552.3 | 275.3 | 237.5 | 152.7 | 100.0 |

愛知縣人口増加の趨勢

| 實 數 | 愛 知 縣 名 古 屋 市 内 名 古 屋 市 外 | 昭和13年 | 昭和3年 | 大正7年 | 明治41年 | 明治31年 | 明治22年 |
|--------|---|-----------|-----------|-----------|-----------|-----------|-----------|
| | | 3,045,200 | 2,464,700 | 2,126,094 | 1,873,191 | 1,639,611 | 1,456,816 |
| | 名古屋市内 | 1,224,100 | 869,900 | 433,701 | 374,146 | 240,534 | 157,496 |
| | 名古屋市外 | 1,821,100 | 1,594,800 | 1,692,393 | 1,499,045 | 1,399,077 | 1,299,320 |
| 割 合 | 愛知縣 | 269.0 | 169.2 | 145.9 | 128.6 | 112.5 | 100.0 |
| | 名古屋市内 | 777.2 | 552.3 | 275.3 | 237.5 | 152.7 | 100.0 |
| | 名古屋市外 | 140.2 | 122.7 | 130.3 | 115.4 | 107.7 | 100.0 |

都 市 要 覽

| 都 市 | 所在道府縣 | 市制施行日 | 面積 昭和13.6末 (方軒) | 人 口 | |
|---------|-------|-------------------|-----------------------|-----------|-----------|
| | | | | 昭和13年 | 昭和12年 |
| 1 東京市 | 東 京 | 正 月 日 明治22 5 1 | 572.81 | 6,473,200 | 6,278,000 |
| 2 大阪市 | 大 阪 | 22. 4 1 | 185.12 | 3,330,500 | 3,215,300 |
| 3 名古屋市 | 愛 知 | 22.10. 1 | 160.13 | 1,224,100 | 1,187,700 |
| 4 京都市 | 京 都 | 22. 4 1 | 238.65 | 1,162,000 | 1,134,500 |
| 5 神戸市 | 兵 庫 | 22. 4 1 | 82.04 | 991,300 | 964,500 |
| 6 横濱市 | 神 奈 川 | 22. 4 1 | 168.02 | 779,000 | 760,100 |
| 7 廣島市 | 廣 島 | 22. 4 1 | 69.88 | 335,300 | 326,800 |
| 8 福岡市 | 福 岡 | 22. 4 1 | 90.05 | 317,100 | 308,600 |
| 9 吳 市 | 廣 島 | 35.10. 1 | 48.66 | 257,400 | 248,600 |
| 10 八幡市 | 福 岡 | 大正 6 3 1 | 54.79 | 238,600 | 229,800 |
| 11 仙臺市 | 宮 城 | 明治22 4 1 | 69.86 | 234,600 | 229,500 |
| 12 長崎市 | 長 崎 | 22. 4 1 | 90.54 | 229,900 | 214,700 |
| 13 函館市 | 北 海 道 | 32.10. 1 | 18.80 | 214,000 | 211,800 |
| 14 静岡市 | 静 岡 | 22. 4 1 | 147.76 | 217,300 | 211,700 |
| 15 札幌市 | 北 海 道 | 32.10. 1 | 24.17 | 210,700 | 205,900 |
| 16 横須賀市 | 神 奈 川 | 40. 2.15 | 41.80 | 212,600 | 204,000 |
| 17 熊本市 | 熊 本 | 22. 4 1 | 56.26 | 201,700 | 198,300 |
| 18 金澤市 | 石 川 | 22. 4 1 | 89.72 | 178,400 | 177,100 |
| 19 佐世保市 | 長 崎 | 35. 4 1 | 86.35 | 214,100 | 190,100 |
| 20 鹿兒島市 | 鹿 兒 島 | 22. 4 1 | 76.07 | 191,500 | 188,200 |
| 21 和歌山市 | 和 歌 山 | 22. 4 1 | 32.61 | 192,000 | 187,800 |
| 22 川崎市 | 神 奈 川 | 大正13 7 1 | 58.88 | 195,600 | 186,600 |
| 23 岡山市 | 岡 山 | 明治22 6 1 | 47.49 | 177,200 | 173,500 |
| 24 濱松市 | 静 岡 | 44. 7 1 | 34.73 | 164,500 | 158,700 |
| 25 小樽市 | 北 海 道 | 32.10. 1 | 55.59 | 159,100 | 157,200 |
| 26 堺 市 | 大 阪 | 22. 4 1 | 17.40 | 158,700 | 150,100 |
| 27 下關市 | 山 口 | 22. 4 1 | 70.69 | 162,300 | 149,700 |
| 28 豊橋市 | 愛 知 | 39. 8 1 | 115.89 | 142,000 | 141,600 |
| 29 尼崎市 | 兵 庫 | 大正 5 4 1 | 15.86 | 148,000 | 140,400 |
| 30 小倉市 | 福 岡 | 明治33 4 1 | 62.39 | 144,500 | 119,800 |

(續) 都 市 要 覽

| 都 市 | 所在道府縣 | 市制施行日 | 面積 昭和13.6末 (方軒) | 人 口 | |
|---------|-------|-------------------|-----------------------|---------|---------|
| | | | | 昭和13年 | 昭和12年 |
| 31 新潟市 | 新 潟 | 年 月 日 明治22 4 1 | 20.24 | 141,300 | 139,100 |
| 32 岐阜市 | 岐 阜 | 22. 7 1 | 44.51 | 135,900 | 133,500 |
| 33 門司市 | 福 岡 | 32. 4 1 | 41.74 | 130,200 | 127,300 |
| 34 德島市 | 德 島 | 22.10. 1 | 47.53 | 127,900 | 119,400 |
| 35 布施市 | 大 阪 | 昭和12. 4 1 | 20.50 | 116,800 | 109,800 |
| 36 大牟田市 | 福 岡 | 大正 6 3 1 | 18.31 | 109,900 | 108,200 |
| 37 甲府市 | 山 梨 | 明治22 7 1 | 42.43 | 106,500 | 84,000 |
| 38 姫路市 | 兵 庫 | 22. 4 1 | 51.57 | 96,100 | 94,500 |
| 39 高知市 | 高 知 | 22. 4 1 | 47.49 | 105,500 | 104,800 |
| 40 青森市 | 青 森 | 31. 4 1 | 9.62 | 100,600 | 98,200 |
| 41 西宮市 | 兵 庫 | 大正14 4 1 | 27.11 | 101,200 | 97,400 |
| 42 福井市 | 福 井 | 明治22 4 1 | 16.89 | 100,400 | 97,300 |
| 43 久留米市 | 福 岡 | 22. 4 1 | 24.49 | 97,600 | 95,700 |
| 44 旭川市 | 北 海 道 | 大正 3 4 1 | 21.97 | 93,400 | 92,600 |
| 45 桐生市 | 群 馬 | 10. 3 1 | 26.73 | 96,700 | 92,400 |
| 46 富山市 | 富 山 | 明治22 4 1 | 19.10 | 92,600 | 91,400 |
| 47 高松市 | 香 川 | 23. 2.15 | 10.97 | 91,200 | 89,800 |
| 48 千葉市 | 千 葉 | 大正10 1 1 | 68.30 | 91,600 | 89,600 |
| 49 宇都宮市 | 栃 木 | 明治29 4 1 | 16.72 | 90,800 | 89,500 |
| 50 延岡市 | 宮 崎 | 昭和 8 2 11 | 173.97 | 115,600 | 89,200 |
| 51 前橋市 | 群 馬 | 明治25 4 1 | 11.88 | 88,600 | 88,100 |
| 52 岡崎市 | 愛 知 | 大正 5 7 1 | 47.37 | 84,600 | 82,100 |
| 53 松山市 | 愛 媛 | 明治22 12 1 | 17.63 | 81,600 | 81,700 |
| 54 宇部市 | 山 口 | 大正10 11 1 | 38.83 | 83,700 | 81,300 |
| 55 長野市 | 長 野 | 明治30 4 1 | 31.06 | 79,500 | 78,800 |
| 56 若松市 | 福 岡 | 大正 3 4 1 | 56.06 | 78,000 | 76,000 |
| 57 大津市 | 滋 賀 | 明治31 10 1 | 62.37 | 78,500 | 76,000 |
| 58 戸畑市 | 福 岡 | 大正13 9 1 | 9.66 | 78,000 | 74,600 |
| 59 松本市 | 長 野 | 明治40 5 1 | 18.80 | 74,100 | 73,900 |
| 60 盛岡市 | 岩 手 | 22. 4 1 | 49.73 | 73,500 | 69,100 |

(續) 都市要覽

| 都 市 | 所在道府縣 | 市制施行日 年 月 日 | 面積 昭和13.6末 (方軒) | 人 口 | |
|----------|-------|----------------|-----------------------|--------|--------|
| | | | | 昭和13年 | 昭和12年 |
| 61 山形市 | 山形 | 明治22.4.1 | 20.84 | 72,300 | 71,500 |
| 62 津市 | 三重 | 22.4.1 | 18.60 | 71,000 | 69,600 |
| 63 室蘭市 | 北海道 | 大正7.2.1 | 75.90 | 71,000 | 69,000 |
| 64 那覇市 | 沖縄 | 明治29.4.1 | 5.11 | 68,200 | 67,200 |
| 65 宮崎市 | 宮崎 | 大正13.4.1 | 61.69 | 68,400 | 67,200 |
| 66 高崎市 | 群馬 | 明治33.4.1 | 28.02 | 67,000 | 66,100 |
| 67 八戸市 | 青森 | 昭和4.5.1 | 58.49 | 68,100 | 66,100 |
| 68 水戸市 | 茨城 | 明治22.4.1 | 12.79 | 65,700 | 65,100 |
| 69 別府市 | 大分 | 大正13.4.1 | 101.01 | 65,600 | 64,500 |
| 70 長岡市 | 新潟 | 明治39.4.1 | 15.90 | 64,900 | 64,000 |
| 71 大分市 | 大分 | 44.4.1 | 20.17 | 64,600 | 63,600 |
| 72 銚子市 | 千葉 | 昭和8.2.11 | 38.71 | 65,000 | 63,500 |
| 73 清永市 | 靜岡 | 大正13.11.11 | 24.80 | 65,600 | 63,400 |
| 74 八王子市 | 東京 | 6.9.1 | 7.30 | 64,300 | 62,700 |
| 75 秋田市 | 秋田 | 明治22.4.1 | 87.42 | 63,300 | 62,400 |
| 76 都城市 | 宮崎 | 大正13.4.1 | 73.00 | 62,300 | 61,600 |
| 77 四日市市 | 三重 | 明治30.8.1 | 17.26 | 62,700 | 61,300 |
| 78 福山市 | 廣島 | 大正5.7.1 | 31.29 | 60,600 | 59,800 |
| 79 川口市 | 埼玉 | 昭和8.4.1 | 19.43 | 61,600 | 58,900 |
| 80 高岡市 | 富山 | 明治22.4.1 | 23.07 | 58,900 | 58,300 |
| 81 釧路市 | 北海道 | 大正9.7.1 | 46.49 | 59,100 | 58,100 |
| 82 一宮市 | 愛知 | 10.9.1 | 8.30 | 60,500 | 58,160 |
| 83 奈良市 | 奈良 | 明治31.2.1 | 29.80 | 58,000 | 57,300 |
| 84 郡山市 | 福島 | 大正13.9.1 | 19.85 | 56,800 | 56,100 |
| 85 防府市 | 山口 | 昭和11.8.25 | 64.48 | 56,000 | 54,400 |
| 86 大垣市 | 岐阜 | 大正7.4.1 | 20.55 | 56,100 | 54,400 |
| 87 松江市 | 島根 | 明治22.4.1 | 11.21 | 54,100 | 53,100 |
| 88 宇治山田市 | 三重 | 39.9.1 | 61.63 | 53,400 | 53,100 |
| 89 今治市 | 愛媛 | 大正9.2.11 | 13.13 | 53,900 | 53,100 |
| 90 米澤市 | 山形 | 明治22.4.1 | 18.48 | 54,100 | 52,900 |

(續) 都市要覽

| 都 市 | 所在道府縣 | 市制施行日 年 月 日 | 面積 昭和13.6末 (方軒) | 人 口 | |
|----------|-------|----------------|-----------------------|--------|--------|
| | | | | 昭和13年 | 昭和12年 |
| 91 沼津市 | 靜岡 | 大正12.7.1 | 12.51 | 54,500 | 52,300 |
| 92 弘前市 | 青森 | 明治22.4.1 | 12.75 | 62,900 | 52,100 |
| 93 佐賀市 | 佐賀 | 22.4.1 | 9.09 | 52,600 | 51,800 |
| 94 瀬戸市 | 愛知 | 昭和4.10.1 | 24.25 | 54,100 | 51,900 |
| 95 宇和島市 | 愛媛 | 大正10.8.1 | 54.17 | 51,900 | 51,700 |
| 96 足利市 | 栃木 | 10.1.1 | 9.13 | 52,000 | 51,000 |
| 97 市川市 | 千葉 | 昭和9.11.3 | 22.95 | 52,400 | 50,500 |
| 98 鳥取市 | 鳥取 | 明治22.10.1 | 45.12 | 50,500 | 49,800 |
| 99 福島市 | 福島 | 40.4.1 | 8.59 | 50,300 | 49,700 |
| 100 若松市 | 福島 | 32.4.1 | 5.75 | 50,300 | 49,700 |
| 101 尾道市 | 廣島 | 31.4.1 | 19.47 | 49,800 | 49,200 |
| 102 牛田市 | 愛知 | 昭和12.10.1 | 40.84 | 49,900 | 49,200 |
| 103 浦和市 | 埼玉 | 9.2.11 | 18.63 | 49,100 | 47,500 |
| 104 直方市 | 福岡 | 6.1.1 | 56.50 | 46,400 | 45,600 |
| 105 船橋市 | 千葉 | 12.4.1 | 40.29 | 46,900 | 45,600 |
| 106 明石市 | 兵庫 | 大正8.11.1 | 7.79 | 45,000 | 44,200 |
| 107 豊中市 | 大阪 | 昭和11.10.15 | 17.49 | 44,500 | 41,900 |
| 108 三原市 | 廣島 | 11.11.15 | 70.54 | 43,200 | 41,000 |
| 109 岸和田市 | 大阪 | 大正11.11.1 | 4.06 | 41,600 | 40,800 |
| 110 平塚市 | 神奈川 | 昭和7.4.1 | 10.87 | 41,200 | 40,300 |
| 111 飯塚市 | 福岡 | 7.1.20 | 16.16 | 39,400 | 39,500 |
| 112 米子市 | 鳥取 | 2.4.1 | 30.48 | 46,600 | 39,300 |
| 113 帯廣市 | 北海道 | 8.4.1 | 50.71 | 40,500 | 38,900 |
| 114 釜石市 | 岩手 | 12.5.5 | 46.30 | 39,800 | 38,600 |
| 115 熊谷市 | 埼玉 | 18.4.1 | 20.16 | 38,800 | 38,200 |
| 116 鶴岡市 | 山形 | 大正13.10.1 | 16.97 | 39,100 | 38,400 |
| 117 桑名市 | 三重 | 昭和12.4.1 | 18.90 | 38,900 | 38,300 |
| 118 津山市 | 岡山 | 4.12.1 | 47.49 | 36,300 | 36,900 |
| 119 松阪市 | 三重 | 8.2.1 | 17.49 | 37,200 | 36,700 |
| 120 倉敷市 | 岡山 | 3.4.1 | 18.20 | 37,600 | 36,700 |

(續) 都 市 要 覽

| 都 市 | 所在道府縣 | 市制施行日 年 月 日 | 面積 昭和13.6末 (方軒) | 人 口 | |
|----------|-------|----------------|-----------------------|--------|--------|
| | | | | 昭和13年 | 昭和12年 |
| 121 岡谷市 | 長野 | 昭和11.4.1 | 38.41 | 33,400 | 36,100 |
| 122 三條市 | 新潟 | 9.1.1 | 12.58 | 36,800 | 36,100 |
| 123 彦根市 | 滋賀 | 12.2.11 | 25.33 | 36,300 | 36,000 |
| 124 徳山市 | 山口 | 10.10.15 | 23.78 | 38,000 | 39,000 |
| 125 山口市 | 山口 | 4.4.10 | 48.91 | 36,300 | 35,800 |
| 126 川越市 | 埼玉 | 11.12.1 | 13.33 | 35,800 | 35,600 |
| 127 上田市 | 長野 | 大正8.5.1 | 20.73 | 35,500 | 35,500 |
| 128 石巻市 | 宮城 | 昭和8.4.1 | 23.89 | 35,300 | 34,700 |
| 129 新宮市 | 和歌山 | 8.10.1 | 23.20 | 34,000 | 33,400 |
| 130 萩市 | 山口 | 7.7.1 | 79.34 | 32,900 | 32,800 |
| 131 福知山市 | 京都 | 12.4.1 | 61.71 | 32,700 | 32,600 |
| 132 酒田市 | 山形 | 8.4.1 | 13.77 | 32,900 | 32,500 |
| 133 敦賀市 | 福井 | 12.4.1 | 52.25 | 33,000 | 32,300 |
| 134 栃木市 | 栃木 | 12.4.1 | 15.07 | 32,400 | 32,000 |
| 135 唐津市 | 佐賀 | 7.1.1 | 30.08 | 32,300 | 31,300 |
| 136 高田市 | 新潟 | 明治44.9.1 | 7.91 | 31,500 | 31,400 |
| 137 八幡濱市 | 愛媛 | 昭和10.2.11 | 38.70 | 31,500 | 31,000 |
| 138 中津市 | 大分 | 4.4.20 | 15.44 | 31,400 | 31,100 |
| 139 高山市 | 岐阜 | 11.11.1 | 42.88 | 31,300 | 30,500 |
| 140 海南市 | 和歌山 | 9.5.1 | 13.77 | 30,700 | 30,400 |
| 141 丸龜市 | 香川 | 明治32.4.1 | 11.07 | 30,100 | 30,000 |
| 142 平市 | 福島 | 昭和12.6.1 | 18.74 | 29,600 | 29,400 |
| 143 飯田市 | 長野 | 12.4.1 | 96.06 | 29,600 | 29,200 |
| 144 熱海市 | 静岡 | 12.4.10 | 60.09 | 25,400 | 24,200 |
| 145 首里市 | 沖縄 | 明治29.4.1 | 2.45 | 18,800 | 19,000 |
| 146 新居濱市 | 愛媛 | 昭和12.11.3 | 18.39 | 37,600 | — |
| 147 舞鶴市 | 京都 | 13.8.1 | 91.48 | 26,700 | — |
| 148 東舞鶴市 | 京都 | 13.8.1 | 60.05 | 39,500 | — |

列國大都市の人口

世界に於て三十萬以上の人口を有する大都市の数は180で、百萬以上のもの38、二百萬以上のもの11で、人口の最も多いのはニューヨークの737萬人で第一位にあり、東京は昭和七年十月の市域擴張に依り一躍第二位を占め646萬人、ベルリンの430萬人、ロンドンの414萬人、上海の376萬人、モスクーの364萬人、シカゴの361萬人之に次ぎ、大阪は332萬人で第八位である。而して名古屋の122萬人は第二十四位、京都の116萬人は第二十八位、神戸の99萬人は第三十九位、横濱の78萬人は第五十一位に當つてゐる。尙各國の大都市數(30萬以上のもの)を各本國のみに就て見ると、最も多いのは北米合衆國の30で、獨逸の23、中國の17、ソヴィエツト聯邦の15、英吉利の11之に亞ぎ帝國は8で、英領印度と共に第六位に在り、伊太利の7、ブラジルの5、濠洲の4、佛蘭西、西班牙、和蘭、ポーランド及アルゼンチンの各3、滿洲國、エジプト、カナダ及蘭領印度、の各2等之に次いでゐる。

列國大都市人口 (千人)

| 都 市 | 國 名 | 調 査 年 次 | 人 口 |
|----------|--------|---------|-------|
| 1 ニューヨーク | 米 | 昭和11年 | 7,365 |
| 2 東京 | 日 | 13 | 6,458 |
| 3 ベルリン | 獨 | 13 | 4,296 |
| 4 ロンドン | 英 | 11 | 4,141 |
| 5 上海 | 中 | 11 | 3,764 |
| 6 モスクー | ソヴィエツト | 10 | 3,642 |
| 7 シカゴ | 米 | 11 | 3,608 |
| 8 大阪 | 日 | 13 | 3,321 |

(續) 列國大都市人口

| 都 市 | 國 名 | 調 査 年 次 | 人 口 |
|--------------------|--------------|---------|-------|
| 9 バ リ ー | 佛 | 昭和11年 | 2,830 |
| 10 レ ニ ン グ ラ ー ド | ソ ヴ ィ エ ッ ト | 10 | 2,740 |
| 11 ブ エ ノ ス ア イ レ ス | ア ルゼ ン テ イ ン | 11 | 2,389 |
| 12 フ イ ラ デ ル フ イ ア | 米 ● | 11 | 1,995 |
| 13 ウ イ ー ン | 暎 | 9 | 1,875 |
| 14 デ ト ロ イ ト | 米 | 11 | 1,769 |
| 15 リ オ デ ジ ヤ ネ イ ロ | ブ ラ ジ ル | 10 | 1,701 |
| 16 ハ ン ブ ル グ | 獨 | 13 | 1,677 |
| 17 北 京 | 中 | 11 | 1,557 |
| 18 カ ル カ ッ タ | 印 | 6 | 1,486 |
| 19 カ イ ロ | エ ジ プ ト | 12 | 1,307 |
| 20 ロ ス ア ン ゼ ル ス | 米 | 11 | 1,298 |
| 21 シ ド ニ ー | 濠 | 8 | 1,262 |
| 22 天 津 | 中 | 11 | 1,254 |
| 23 ワ ル ソ ウ | ポ ー ラ ン ド | 11 | 1,225 |
| 24 名 古 屋 | 日 | 13 | 1,224 |
| 25 廣 東 | 中 | 11 | 1,207 |
| 26 ロ ー マ | 伊 | 11 | 1,179 |
| 27 ボ ン ベ イ | 印 | 6 | 1,161 |
| 28 京 都 | 日 | 13 | 1,160 |
| 29 サ ン パ ウ ロ | ブ ラ ジ ル | 10 | 1,151 |
| 30 バ ル セ ロ ナ | 西 | 9 | 1,148 |
| 31 グ ラ ス ゴ ー | 英 | 11 | 1,124 |
| 32 ミ ラ ノ | 伊 | 11 | 1,124 |
| 33 ブ タ ペ ス ト | ハ ン ガ リ ー | 11 | 1,052 |
| 34 マ ド リ ッ ド | 西 | 9 | 1,048 |
| 35 メ キ シ コ | メ キ シ コ | 5 | 1,029 |
| 36 南 京 | 中 | 11 | 1,020 |

(續) 列國大都市人口

| 都 市 | 國 名 | 調 査 年 次 | 人 口 |
|--------------------|---------|---------|-------|
| 37 バ ー ミ ン ガ ム | 英 | 昭和11年 | 1,019 |
| 38 メ ル ボ ル ン | 濠 | 10 | 1,008 |
| 39 神 戸 | 日 | 13 | 989 |
| 40 ク リ ー ヴ ラ ン ト | 米 | 11 | 937 |
| 41 マ ル セ イ ユ | 佛 | 11 | 914 |
| 42 ナ ポ リ | 伊 | 11 | 883 |
| 43 プ ラ ー グ | チ エ ッ コ | 5 | 849 |
| 44 バ ル チ モ ア | 米 | 11 | 848 |
| 45 リ ヴ ア プ ー ル | 英 | 11 | 846 |
| 46 セ ン ト ル イ ス | 米 | 11 | 839 |
| 47 モ ン ト リ オ ー ル | カ ナ ダ | 6 | 819 |
| 48 漢 口 | 中 | 11 | 805 |
| 49 ボ ス ト ン | 米 | 11 | 802 |
| 50 ア ム ス テ ル ダ ム | 和 | 11 | 783 |
| 51 横 濱 | 日 | 13 | 778 |
| 52 ケ ル ン | 獨 | 13 | 765 |
| 53 ミ ュ ン ヘ ン | 獨 | 13 | 760 |
| 54 マ ン チ エ ス タ ー | 英 | 11 | 744 |
| 55 イ ス タ ン ブ ー ル | ト ル コ | 10 | 241 |
| 56 サ ン チ ヤ ゴ | チ リ | 8 | 713 |
| 57 ラ イ プ チ ッ ヒ | 獨 | 13 | 699 |
| 58 サ ン フ ラ ン シ ス コ | 米 | 11 | 693 |
| 59 ビ ッ ツ パ ー グ | 米 | 11 | 691 |
| 60 コ ペ ン ハ ー ゲ ン | 丁 | 12 | 686 |
| 61 ア レ キ サ ン ド リ ア | エ ジ プ ト | 12 | 682 |
| 62 バ ン コ ッ ク | シ ヤ ム | 12 | 681 |
| 63 モ ン テ ヴ ァ イ デ オ | ウルグアイ | 11 | 674 |
| 64 エ ッ セ ン | 獨 | 12 | 662 |

(續) 列國大都市人口

| 都 市 | 國 名 | 調 査 年 次 | 人 口 |
|--------------------------------|--------|---------|-----|
| 65 バ ク ー | ソヴェエツト | 昭和10年 | 670 |
| 66 マ ド ラ ス | 印 | 6 | 647 |
| 67 ト リ ノ | 伊 | 11 | 643 |
| 68 ブ カ レ ス ト | ルーマニア | 11 | 641 |
| 69 ロ ツ ヅ | ポーランド | 11 | 639 |
| 70 ド レ ス デ ン | 獨 | 13 | 638 |
| 71 ゼ ノ ア | 伊 | 11 | 637 |
| 72 ト ロ ン ト | カナダ | 6 | 631 |
| 73 キ エ フ | ソヴェエツト | 10 | 625 |
| 74 ル ル コ フ | ソヴェエツト | 10 | 625 |
| 75 ブ レ ス ラ ウ | 獨 | 13 | 623 |
| 76 ワ シ ン ト ン | 米 | 11 | 619 |
| 77 ミ ル ウ オ ー キ ー | 米 | 11 | 610 |
| 78 ロ ツ テ ル ダ ム | 和 | 11 | 599 |
| 79 リ ス ボ ン | ポルトガル | 5 | 594 |
| 80 バ ツ フ ア ロ ー | 米 | 11 | 593 |
| 81 杭 州 | 中 | 11 | 579 |
| 82 青 島 | 中 | 11 | 571 |
| 83 リ ヨ ン | 佛 | 11 | 571 |
| 84 ス ト ツ タ ホ ル ム | 瑞 典 | 12 | 557 |
| 85 フ ラ ン ク フ ル ト ・ ア ム ・ マ イ ン | 獨 | 13 | 551 |
| 86 ハ ヅ ア ナ | キューバ | 10 | 550 |
| 87 奉 天 | 滿 | 11 | 547 |
| 88 ド ル ト ム ン ド | 獨 | 13 | 545 |
| 89 重 慶 | 中 | 11 | 535 |
| 90 タ シ ケ ン ト | ソヴェエツト | 9 | 532 |
| 91 チ リ セ ル ド ル フ | 獨 | 13 | 523 |
| 92 ヨ ハ ネ ス プ ル グ | 南 阿 | 11 | 519 |

(續) 列國大都市人口

| 都 市 | 國 名 | 調 査 年 次 | 人 口 |
|-----------------------|---------|---------|-----|
| 98 シ エ フ イ ー ル ド | 英 | 昭和11年 | 518 |
| 94 ゴ ル キ ー | ソヴェエツト | 10 | 513 |
| 95 オ デ ツ サ | ソヴェエツト | 10 | 509 |
| 96 ニ ュ ー オ ル レ ア ン ス | 米 | 11 | 509 |
| 97 ロ ザ リ オ | アルゼンティン | 11 | 508 |
| 98 ミ ネ ア ポ リ ス | 米 | 11 | 492 |
| 99 シ ン ガ ポ ー ル | 海 植 | 6 | 490 |
| 100 リ ー ヅ | 英 | 11 | 490 |
| 101 ヘ ー グ | 和 | 11 | 489 |
| 102 長 沙 | 中 | 11 | 481 |
| 103 成 都 | 中 | 11 | 480 |
| 104 ロ ス ト フ オ ン ド ン | ソヴェエツト | 10 | 479 |
| 105 レ シ フ エ | ブラジル | 10 | 473 |
| 106 シ ン シ ナ チ | 米 | 11 | 469 |
| 107 ダ ブ リ ン | 愛 蘭 自 由 | 11 | 468 |
| 108 ハ イ ダ ラ バ ー ド | 印 | 6 | 467 |
| 109 哈 爾 濱 | 滿 | 11 | 465 |
| 110 エ チ ン バ ラ | 英 | 11 | 465 |
| 111 ア テ ネ | 希 | 3 | 459 |
| 112 ニ ュ ー ア ー ク | 米 | 11 | 458 |
| 113 シ ュ ツ ト ガ ル ト | 獨 | 13 | 452 |
| 114 ス フ エ ル ド ロ フ ス タ | ソヴェエツト | 10 | 450 |
| 115 デ ー リ ー | 印 | 6 | 447 |
| 116 京 城 | 日 | 10 | 444 |
| 117 濟 南 | 中 | 11 | 444 |
| 118 チ ュ イ ス ボ ル グ | 獨 | 13 | 439 |
| 119 ベ ル フ ア ス ト | 英 | 11 | 438 |
| 120 シ ュ ツ ト ガ ル ト | 獨 | 12 | 437 |

(續) 列國大都市人口

| 都 市 | 國 名 | 調 査 年 次 | 人 口 |
|-----------------------|--------|---------|-----|
| 121 バ タ ヴ イ ア | 蘭 印 | 昭和5年 | 435 |
| 122 ラ ホ ー ル | 印 | 6 | 430 |
| 123 チ フ リ ス | ソヴェエツト | 10 | 426 |
| 124 カ ン サ ス シ チ ー | ミズリー州 | 11 | 424 |
| 125 パ レ ル モ | 伊 | 11 | 422 |
| 126 プ リ ス ト ル | 英 | 11 | 414 |
| 127 ニ ユ ル ン ベ ル ヒ | 獨 | 13 | 413 |
| 128 ヴ イ ク ト リ ア | 香 港 | 6 | 411 |
| 129 ウ ツ ベ ル タ ー ル | 獨 | 13 | 406 |
| 130 蘇 州 | 中 | 11 | 403 |
| 131 ラ ン グ ー ン | 印 | 6 | 400 |
| 132 ス タ ー リ ン グ ラ ー ド | ソヴェエツト | 10 | 390 |
| 133 イ バ ダ ン | ナイジェリア | 6 | 387 |
| 134 リ ガ | ラトヴィア | 10 | 385 |
| 135 ドニエプロペトロフスタ | ソヴェエツト | 10 | 385 |
| 136 イ ン デ ア ナ ポ リ ス | 米 | 11 | 380 |
| 137 穴 連 | 關 東 州 | 10 | 377 |
| 138 シ ア ト ル | 米 | 11 | 375 |
| 139 福 州 | 中 | 11 | 368 |
| 140 サ ン サ ル ヴ ア ド ル | ブラジル | 10 | 364 |
| 141 テ ヘ ラ ン | イ ラ ン | 8 | 360 |
| 142 マ ニ ラ | 比 律 賓 | 10 | 353 |
| 143 ヴ ア レ ン シ ア | 西 | 9 | 353 |
| 144 ボ コ ダ | コロンビア | 11 | 350 |
| 145 フ ウ ー ス ト ン | 米 | 11 | 343 |
| 146 ス ラ バ ヤ | 蘭 印 | 5 | 342 |
| 147 ル イ ス ヴ ァ イ ル | 米 | 11 | 341 |
| 148 ブ レ ー メ ン | 獨 | 13 | 341 |
| 149 サ ラ ト フ | ソヴェエツト | 10 | 340 |
| 150 ケ ー ニ ヒ ベ ル ヒ | 獨 | 13 | 339 |

(續) 列國大都市人口

| 都 市 | 國 名 | 調 査 年 次 | 人 口 |
|---------------------------|-----------|---------|-----|
| 151 ロ チ エ ス タ ー | 米 | 昭和11年 | 357 |
| 152 ケ ム ニ ツ ツ | 獨 | 13 | 336 |
| 153 フ ロ レ ン ス | 伊 | 11 | 335 |
| 154 廣 島 | 日 | 13 | 336 |
| 155 ケ ー プ タ ウ ン | 南 阿 | 11 | 335 |
| 156 ボ ル ト レ ア グ レ | ブラジル | 10 | 328 |
| 157 ジ ャ ー ジ ー シ チ ー | 米 | 11 | 328 |
| 158 マ グ デ ブ ル グ | 獨 | 13 | 324 |
| 159 ゲ ル ゼ ン キ ル ヘ ン | 獨 | 13 | 324 |
| 160 コ ロ ン バ ス | 米 | 11 | 323 |
| 161 キ ン グ ス ト ン ア ポ ン ハ ル | 英 中 | 11 | 322 |
| 162 武 昌 | 中 | 11 | 320 |
| 163 チ ュ ー リ ツ ヒ | 瑞 西 | 11 | 320 |
| 164 ル ボ オ ウ | ポ ー ラ ン ド | 11 | 316 |
| 165 福 岡 | 日 | 13 | 316 |
| 166 ア デ レ イ ド | 濠 | 10 | 315 |
| 167 ポ ー ト ラ ン ド | 米 | 11 | 315 |
| 168 ボ フ ム | 獨 | 13 | 314 |
| 169 ア ー マ ダ バ ー ド | 印 | 6 | 314 |
| 170 ベ レ ン | ブラジル | 10 | 311 |
| 171 ダ ラ ス | 米 | 11 | 311 |
| 172 コ ル ド バ | アルゼンティン | 11 | 310 |
| 173 ノ ボ オ シ ビ ル ス タ | ソヴェエツト | 10 | 310 |
| 174 開 封 | 中 | 11 | 307 |
| 175 ト レ ド | 米 | 11 | 307 |
| 176 バ ン ガ ロ ア | 印 | 6 | 306 |
| 177 プ リ ス ベ ー ン | 濠 | 10 | 306 |
| 178 セ ン ト ボ ー ル | 米 | 11 | 306 |
| 179 オ ン ク ラ ー ド | 米 | 11 | 306 |
| 180 南 昌 | 中 | 11 | 301 |

内地在留外國人 (昭和11年末)

| 國名 | 人口 | 國名 | 人口 |
|-----------|--------|----------|----|
| 總數 | 30,838 | エストニア | 21 |
| 中國 | 15,526 | ユーゴスラヴィア | 20 |
| 滿州 | 2,420 | アルゼンティン | 20 |
| 英吉利 | 2,360 | メキシコ | 19 |
| 北米合衆 | 2,347 | リビア | 19 |
| 獨逸 | 1,959 | ラトヴィア | 18 |
| ソヴェット聯邦 | 1,590 | 蘭領印度 | 18 |
| 英領印度 | 1,008 | アフガニスタン | 18 |
| 佛蘭西 | 583 | フィンランド | 17 |
| カナダ | 342 | 海峽植民地 | 14 |
| 和蘭 | 297 | 希臘 | 12 |
| 瑞西 | 273 | イラク | 11 |
| シヤム | 261 | ルーマニア | 10 |
| 伊太利 | 241 | パナマ | 10 |
| ポルマール | 224 | チリ | 9 |
| 西班牙 | 116 | ルクセンブルグ | 9 |
| 瑞典 | 111 | キエフ | 9 |
| 比律賓 | 104 | 新西蘭 | 7 |
| 丁加奴 | 94 | グアテマラ | 7 |
| 布隆迪 | 94 | コロムビア | 5 |
| ポランド | 76 | コロンビア | 4 |
| チェコスロヴァキヤ | 64 | ニカラガ | 4 |
| 白耳義 | 53 | イラン | 3 |
| 諾威 | 46 | ヴェネズエラ | 3 |
| 濠洲 | 43 | ウルグアイ | 3 |
| トコ | 40 | アラビア | 3 |
| ペル | 39 | 南アフリカ | 3 |
| ハンガリー | 37 | ボリビア | 2 |
| ラジブ | 29 | マドニ | 2 |
| エルト | 29 | ドミニカ | 1 |
| アルメニア | 26 | エクアドル | 1 |
| | 22 | 具 | 8 |

昭和十四年九月二十五日印刷
昭和十四年十月一日發行

名古屋市役所

名古屋市中區千種町五反田五二

印刷者 小池清彦

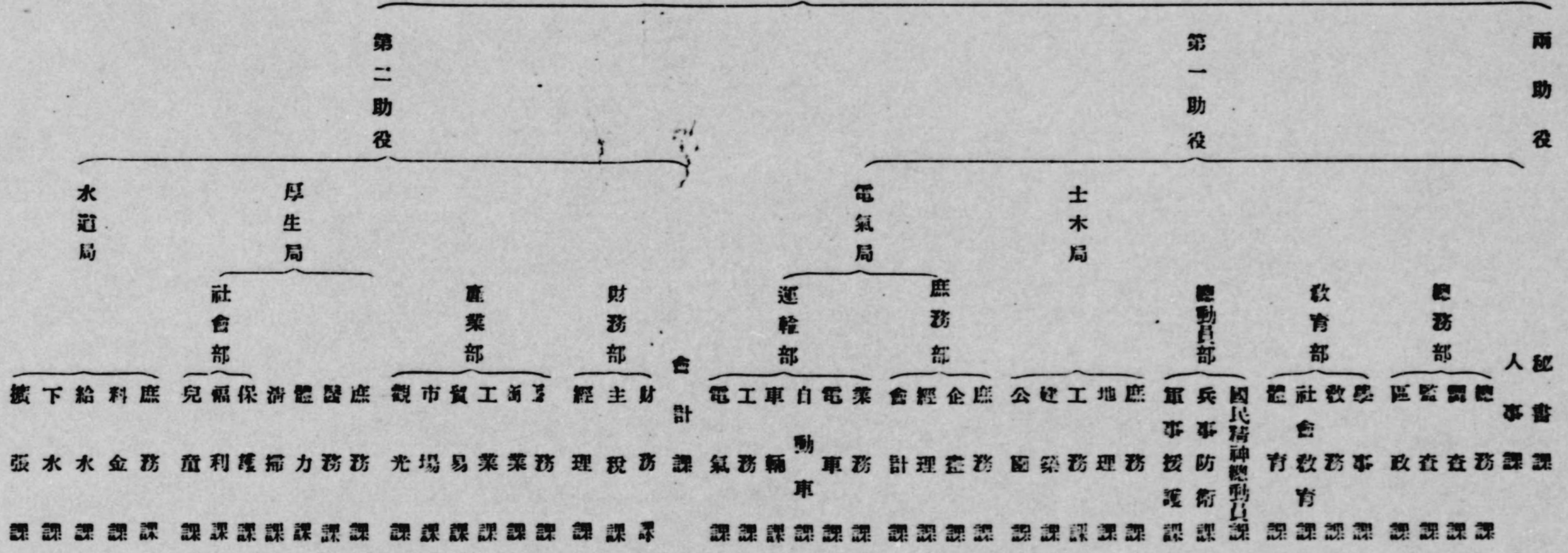
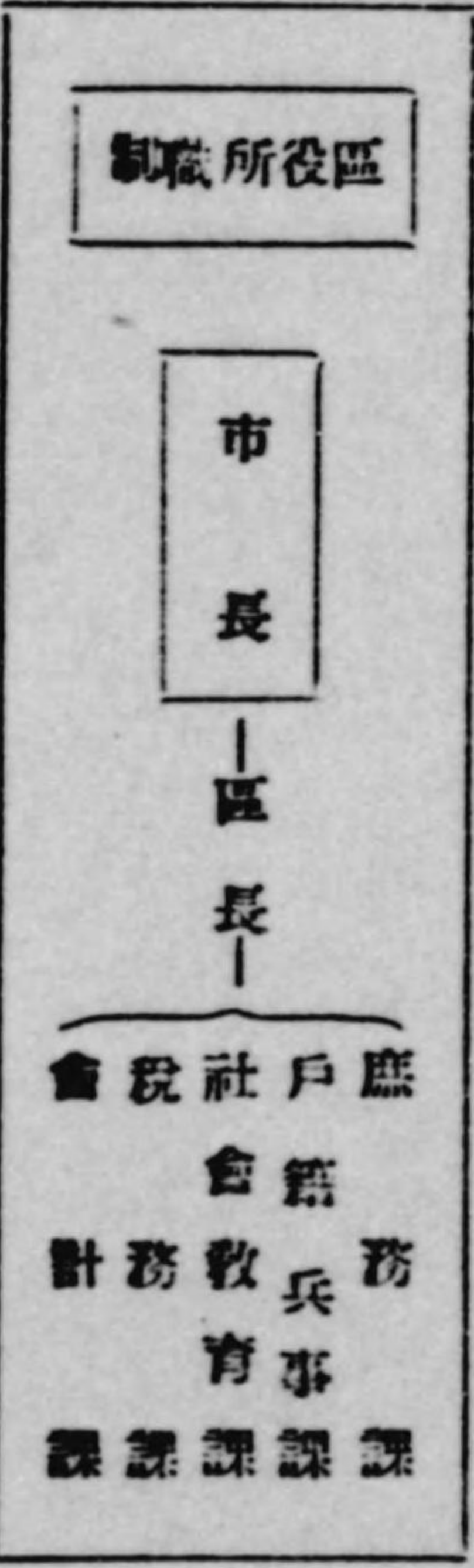
名古屋市中區千種町五反田五二

印刷所 合資會社 三益社



制職所役市屋古名

長市



780
328

780
328

